

---

# ONE PIECE ~ 海賊王への導き手 ~

グリム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE ～海賊王への導き手～

### 【Nコード】

N4684M

### 【作者名】

グリム

### 【あらすじ】

気の合う海賊と高みを目指したい。

それが過去に闇を抱え”死神”と呼ばれた男の願望だった。

いくつもの海賊団を見てきたが運命を感じるような船長に会うことはなかった。

もう海賊はあきらめようと考えていた男の前に海賊船が現れる。

3日食事をとっていないかった男が食料を分けてもらおうと乗り込んだ海賊船で海賊王を目指し村を出た麦わらの少年に出会う。

オリジナル組織が出てきます。

原作介入しています。ご注意ください。

新世界編も書く予定です。

原作とのちょっとした違いをわかっていただければと思います。

## 〜プロローグ〜（前書き）

書きたいことを書く。

それが俺のやり方です………というところで

この小説では麦わらの一味に仲間を増やしました。

彼がこの物語の主人公です。

## 「プロローグ」

俺には、夢がある。

自分が認めた男とともに世界一の海賊、海賊王になる。

正確には海賊王の船員になる。これが、俺の夢。

夢の実現の為にいくつもの海賊船に乗り色々な船長と出会ったけどいつもパツとしないというよりも、俺が好きになれないというのが一番かもしれない……

「運命って奴を信じてただけだなあ……」

強い人間を見つければいいだけならばイーストブルーなどには来る必要はないだろう。

けどたぶん俺は人間としての温かみを求めているのかもしれない。

いくら強くても狂気と権力で支配する海賊じゃダメだ。

大きな音が俺の腹から鳴り響く……小船でもう3日も海を彷徨っている……。3日間水ばかりで水っぱらになつてしまっそうだ。

さすがに目も霞んできた。このままじゃ……。餓死!?

「クソ。どっかに食いもの乗せた船はないのか……。あれは?」

船だ……。しかも海賊船!

あの海賊旗は……。確か……

男は手配書の束を確認する。

金棒のアルビダ……。500万ベリー……。

「……500万か。小物だな」

飯だけ頂いて、とつとサヨナラするか。  
俺は、アルビダの船に忍び込むことにした。

## 「プロローグ」(後書き)

勢いで始めてしまいました。

本編好きな方、尾田先生、マジですいません。

ワンピースの物語を主人公視点でなおかつオリジナル要素を多少含んで

書いていく予定です。

## 第一話 出会い（前書き）

アルビダの船に乗りこんだ男は甲板を覗き込む。

食料目当てで忍び込んだのはいいが見張りが多い。

彼は……どんな手段を使って食料を頂くのか……



## 第一話 出会い

俺は、船の物陰に隠れ、船を見回す。  
なにやらどの船員もこき使われているようだ。

船員達に命令している大柄の女性がいる。

あの女性がアルビダか。

金額は、小物なのに。体は、大物だな……あいさつでもしておくか。

「レデイ・アルビダ。ご機嫌いかがですか？」

「誰だい！勝手に人の船に忍び込んで！」

「申し訳ありません。いい船だったもので見学させて頂こうと思ひまして。お詫びと言ってはなんです……」

男は背中のギターを取り、足を組み樽の上に座る。

「一曲いかがでしょうか？」

「ふん！ヘタクソだったら承知しないよ！」

彼は微笑み歌を音楽を奏でる。彼の奏でる旋律は船にいる全ての人の心を引きつけ、夢中にさせる。

船員達から「おおおお！」と感嘆の声が聞こえた。

瞑っていた目を開きアルビダを見るとどうやらアルビダも聞き入っているようだ。

掴みは完璧だ……あとは食料交渉のタイミングだけか……

『よく寝たー！ー！ー！ー！ー！ー！』

《な、なんだ？どっから聞こえた？》

アルビダが声のした方角へ持っていた金棒を投げその方角（声のした方角）へ歩いていってしまった。

「あ、あのアルビダさん。おゝい……」

何も反応がない……完全に食料交渉のタイミングを見誤ったか……

「仕方がない……勝手に色々頂こうか……」

食料庫に潜り込みリンゴを一齧りする。

リンゴの酸味と甘味が口いっぱいに広がる。3日ぶりの食事……  
たままないな……

「おいてめえ！何してやがる！」

「ん？船員が残ってたのか」

「てめえ、とつとと食料から離れろ！」

サーベルを出して威嚇してくる。

「やめとけ。死人が出るぞ……」

「う、うるせえ！」

大きく振りかぶり勢い良く切りかかって来る。

「一応注意はしたからな」

ギターでサーベルを受け止めサーベルを弾き飛ばす……。相手の背後に回りこみ首の骨をへし折った。

ゴキツと鈍い音が響き渡ると力なく船員は崩れていく……

さて……。ん？外が騒がしいな。外に出てみるとアルビダが倒れている。

「誰がやった？」

「俺」

声のする方に目をやると麦わら帽子を被った男が立っていた。見たことないな……。ルーキーか？

「へえ……。君がねえ……」

あの麦わら帽子……。どこかで……。まあ、いいか……。

「なあ、お前もこいつらの仲間か？」

「ん？俺？全然違う。残念ながら彼女に従う気にはなれないな」

「麦わら。名前は？」

「モンキー・D・ルフィだ」

D……。しばらくブツブツと呟く。

「なあ、何ブツブツ言ってんだ？お前？」

「ルフィ。お前について行ってもいいかな？」

この発言にルフィは驚くこともなく頷く。

「うん、いいぞ」

「ル、ルフィさん！いいんですか！」

隣にいた眼鏡の少年が喚いている。

彼もルフィの仲間だろうか……頼りないな……

「いいんだ。あいつ、いい奴そうだし」

「ど、どこがですか！？いきなり付いて来るなんて怪しいですよ！」  
「まあまあ。固いこと言うな。仲良くしよう」

ルフィたちは、アルビダの船に積んでいた小船で次の目的地へ向かう。

「君。名前は？」

「コ、コビーです」

「コビーと言う少年は背丈も小さく大きな眼鏡を掛けている。  
とても海賊には見えないが……」

「よろしくなコビー。俺は、ユダ……じゃなかったキラだ。よろしく」

「キラさんですかよろしくおねがいします」

次の目的地は、海軍基地らしい……。

正確にはシエルスタウン。一度行った事があるが……目的はなんだ？

「ルフィ……捕まりにいくのか？」

「違う！ゾロを仲間にする」

「海賊狩りを海賊がねえ。おもしろいな」

ルフィはキラの背中の中のギターを指差し

「なあ、キラ。楽器弾けるのか？」

「ん？ギターか？聞くか？」

ギターを弾く。

次の目的地が見えてくるまでの間、ギターの音がやむことはなかった。

## 第一話 出会い（後書き）

なるべく原作の内容が見えにくいように書いていくことは

思ってるんですが……難しいですね。

なんか、疑問点とか感想とか書いていただけるとうれしいです。

## 第二話 新たな仲間と友との別れ（前書き）

ルフィと行動を共にすることにしたキラ。

船の針路はシエルズタウン。

海賊狩りのコロノア・ゾロとはどんな男なのか？

## 第二話 新たな仲間と友との別れ

くシエルズタウンく

あれが海軍基地か……キラは基地を見つめた。

《あそこに新しい仲間がいる訳か……》

コビーが基地を指差し口を開く

「あそこにロロノア・ゾロがいるはずです」

キラはルフィの方を見て声を掛ける。

「どうする？」

「そうだな！腹減ったしまずは、飯にしよう！」

ルフィたちは飲食店に入り食事をしながらしばしの休憩。  
食事の合間ルフィがキラに質問をする。

「なあ。キラは、どこで楽器覚えたんだ？」

「確かに、すごく上手でしたね」

しばらく唸りながら考え……キラは口を開く。

なぜすぐに答えを言わなかったのか……それは後々……

「ああ……親父に教えてもらったんだよ」

「そっか。キラの親父は、すごいんだな！」

キラはルフィから視線を逸らし深く溜息を吐く。



「ただの音楽しか出来ないダメ親父だよ」

話題を変えるためキラはルフィに質問をする。

「ところでルフィ。本当にロロノアを仲間にするのか？」

「うん。する！」

ルフィは大きく首を縦に振る。

「そうか、頑張れよ」

席を立ち店の出口へと向かう。

「キラは、一緒に行かないのか？」

「ん？俺は、船の見張りでもしてるさ」

「おう！まかせた！」

店から出て一人小船をとめた場所へ向かう。小船へとたどり着き近くの木箱に腰を掛ける。

見られてるな……人数は3人いや4人くらいか……海軍ではなさそうだ。

地面を強く蹴り一瞬で隠れていた男の背後へと回りこむ。

「き、消えた！？」

「後ろだ。後ろ」

1人の男の背後を取り威圧する。

「な!？」

「お前その腕のタトウー……」

男の腕にはタトウーが見えた。それは過去に何度も見たことのある文字。

「” R U I N ”か」

R U I N  
ルイン

崩壊を意味する裏組織

彼らの目的は、大海賊時代の終焉。

世界政府の破滅。

ルインの為の世界作ることを目的としている。  
すべてがベールに包まれている。

---

「俺がその問いに答えると思っているのか？」

「嫌でも答えたくなるさ」

目を離れた隙を付き男が逃げた。

「逃がすか!」

逃げた男の胸倉を掴み地面に叩きつける。

「言え!目的は何だ!」

「ククツ。さあ?なんだろうな?」

「力づくで聞かせてもらおうか……」

拳を振り上げた瞬間、そいつは口から何かを吐き出した。ビシヤと地面に何かが落ちる。

吐き出したものに目をやると舌が地面に落ちている……。

この男は話ができないよう自分の舌を噛み千切ったようだ。

「ちっ！残りの奴らは！？」

周りに気配がない。

逃げたのか……いや……狙いが他にもあるのか？

とにかくルフィと合流しなければ……急いでルフィの元へと向かう。

居たルフィ！ となりがロロノア・ゾロか？

ドンと銃声が響くと銃弾がルフィの体に突き刺さった。

「ルフィ！貴様！」

キラは狙撃した男との距離を一瞬でつめる。

「う、うわあああああああ……！！！」

グシャという何かが潰れる音と共に男の頭が握りつぶされた。

鮮血が当たり一面に飛び散る。

周りに隠れていた。RUINの奴らが驚いて逃げ去ろうとしたそのとき

『ゴムゴムの銃……！！』

『鬼斬り……！！』

『ぎゃあああああ!!!』

ルインの残りがルフィとゾロに蹴散らされる。

「やるな。ロロノア!」

「てめえは?ルフィの仲間か?」

ルフィが目をキラキラさせながらこちらを見ている。

『キラ!お前、強えな!』

「俺も驚いたよ。まさか悪魔の実の能力者だったとはな」

「おい、確かキラだったか?」

「ああ。よろしくロロノア」

ゾロは、倒れている奴を突付きながら

「こいつらは、なんなんだ?」

「さあ、俺は知らねえぞ」

「お前には、聞いてねえ。キラに聞いてんだ」

こいつらに話してわかるのか?

偉大なる航路の人間ならわかるかもしれないが……

「お前ら、RUIINって知ってるか?」

『いや、全然!』

「じゃあいい……。簡単に説明しようか?」

『おう!頼む!』

「敵」

『『……………』』

二人は、「なるほど」って言う顔をしながら頷いている。  
ルフィは、アホだと思ってたがロロノアもか……。  
目的を果たした俺たちは、船に乗り込む。

「あ、あれ？コビーは？」

「ん？いいんだ。行こう」

3人となった麦わら一味は船を出す。コビーがルフィ達を見送りに港まで来ていた。

コビーは町に残り海軍見習いとして頑張っていくらしい……。がんばれよ……。コビー。

「あいつ、いずれ俺らと戦うかもな」

「シシシシ！だったらおもしれえな！」

次なる町に向けて帆を進める。

ギターを弾く。

コビーに聞こえるように精一杯友情の歌を歌った。

第二話 新たな仲間と友との別れ（後書き）

感想をお願いします

### 第三話 元副船長（前書き）

ゾロを仲間にして先を進む一行。

航海士がいない中、まともには先へ進めるのか？

### 第三話 元副船長

「コビーと別れて数時間。」

「おい、これどこに向かってんだ？」

「ん？俺は、知らねえぞ。キラがわかってるんだろ？」

「ある程度の航海術はあるけど……ちゃんとした航海士仲間にしたほうがいいんじゃないか？」

2人と話しながらキラはカバンをあさり海図を探すが……

「……あ、あれ？」

「ん、どうした？」

「海図なくしたかも……」

『おい！！！！どうすんだ！！！！』

二人がキラの耳元で怒鳴る。

「まあ、無くしちまったもんは仕方ないじゃねえか」

グウとルフィの腹の虫が鳴る。

「腹減ったな……。キラ、なんかないのか？」

「食料なんてつんでないよ」

グウとキラの腹の虫も鳴る。

「はあ……。あれ？ロロノア。ルフィは？」



「あ？そこにいる……いねえ!？」

ゾロとキラは辺りを見回すが当たり一面海である。  
悪魔の実の能力者であるルフィが泳いでいるはずもない。

「おーい!」

「ルフィ。どこだ！いるなら返事しろ!」

「キラ!上だ!」

ルフィが大きな鳥に捕まっている。

大方「食料だ!」とか言って捕まえようとして捕まったとかそんなことだろう。

「あのバカ。どうする?」

「どうするって、追うしかねえ!」

ゾロが必死に船を漕ぐ。

キラは、とりあえず寝転がり対策を考える。

「お前も漕げ!」

「え？俺も？俺って作戦参謀でしょ?」

溺れてるやつらがいる……。

船でも盗まれたか?

「た、助け……てぐで……」

「ロロノア、人が溺れてるぞ!」

「あ!？知るか!急ぐぞ」

「ほっとくわけには、いかないだろ」

キラは、そいつらを引き上げた。  
引き上げた途端、態度が急変する。

「おい！俺たちは、道化のバギーの……キ、キラ副船長！？」

しばらくそいつらの顔を見るが思い出せない……  
バギーのところにこんな奴等いたっけ……？

「え？あ、バギーのこの奴ら？」

「副船長！あんたが裏切つてから大変なんですから！」  
「ああ、そう。あの赤鼻また大暴れしてるんだ」

「おい、キラ。知り合いか？」  
「ん？ああ、昔の仲間さ」

「道化のバギーってのは、誰だ？」  
「バラバラの実を食った、海賊だよ」

「なあ、お前達なんで海水浴なんかしてたんだ？」  
「それが聞いてくださいよ！副船長！」

こいつらが海水浴を楽しむことになった経緯を聞くとある女に騙  
されたらしいのだが……

小船でぐつたりしてた所を発見し金をやるから食料を分けてくれ  
と言われ女の宝箱を確認をしているうちに船を奪われさらに宝箱は  
空。スコールに見舞われ転覆ということらしいが……

海賊のくせにマヌケすぎる……ただその女……天候の読みはすばらしいな……

「ああ、そう。大変だったな」

「おい、キラ。急がねえとルフィを見失っちまう！」

ルフィの姿がどんどん遠ざかっていく

「おまえら元副船長命令だ！漕げ！」

「イエッサー！」

「副船長だったのか？」

「まあな」

「あ、ロロノア！ルフィが見えなくなった」

「とりあえず。そのバギーってのに会ってみるか……」

キラたちは、とりあえずバギーの所に向かうことにした。

**第三話 元副船長（後書き）**

連続投稿です。

ちよつと疲れてきたぞ・・・。

## 第四話 久しぶりの再開（前書き）

バギー海賊団、副船長だった過去を持つキラ

キラは、バギーと久しぶりの再開を果たす。

#### 第四話 久しぶりの再開

バギー一味のところに付いたのはいいが……ルフィの奴……あのま  
まじゃ……。

「ロロノア。ルフィが吹っ飛びそうだぞ！」

「あ？……言ってる場合か！！！」

ゾロがすごい速度でルフィのところへ向かった。

「ん？あの女……どっかで……」

俺の見知った顔の奴がルフィと一緒にいる。

確か……そう、ナミだ！

「さて、昔の仲間に会いに行こうか」

「逃げるー！」

「ん？ルフィの声？」

ドンッすごい音とともにバギーのいた場所が吹き飛んだ。

「せっかく元副船長が会いに来たってのに」

キラが、その場に行くくとバギーが横たわっていた。

「クソ！どこ行きやがった！」

バギーが勢いよく立ち上がる。

「バギー！生きてたか！」

「あん！？おおおおお！キラア！キラじゃねえか！」

「また、悪さしてんのか？バギー」

「海賊なんだ！あたりまえじゃねえか！また、一緒にやるか！キラ  
！」

「悪いな。今、新しい奴らとやってんだ」

「そうか！おめえが一緒にいるってことは、見込みのある奴ってこ  
とかあ？」

「バギー船長！麦わらの奴らは、よろしいので？」

「はっ！そうだった！キラ！悪いがお前にかまってる暇はねえ！」

どうやらルフィ達を探してるらしいな。

「じゃあ、お手並み拝見といきますか」

「おう！見てるキラ！また、俺たちの元に戻りたくなるぞ！」

お前に言ったんじゃないよ……。

スツと人影が見えた気がした。

「ん？今なにか……」

「オイ！キラ！手え貸してくんねえか！」

「えっ、いや。ちょっと用事を思い出した。じゃ！」

「お、おい！キラア！……！」

さつき感じた気配に嫌な感じを受けていた。まさか”ルイン”か？

「ふう……気のせいか？」

「気のせいじゃないよ」

声のする方を振り向くと少年がいる。

「子供？」

キラの顔の横をブーメランが通り過ぎていく。

「おもちゃで俺のことを殺すのか？」

「ただのおもちゃかな」

後ろの木が真っ二つに切れる。

「おもちゃにしては、よく切れるみたいだな」

投げたブーメランが勢いよく戻ってくる。紙一重のところをそれ  
をかわし拳を振り下ろす。少年が避け地面が砕けた。

「な！お兄さん、化物かよ！」

「ふふつ。おしおきだ！」

回し蹴りを放つがこれもかわされる。

「こいつ……ちょこまかと……！」

「こつちの番だよ！」

少年の爪が伸び腹部を抉られる。



「どう？痛い？……な！？」  
「どうした？なに驚いている」

キラの体には、傷一つ付いていなかった……少年の爪が折れている。

「な、なんで？どうして？」

「一ノ形……剛」

一ノ形 剛

体の一部分を岩よりも硬くする。  
攻撃として使えば、破壊力。  
防御として使えば、刃も通用しない。

「さて……。遊びは終わりだ」  
「……ッ！」

ブーメランを投げってくる。  
キラは、ブーメランを受け止め握りつぶした。

「じゃあな！来世で会おう！」

少年の後ろに回りこみ、拳骨をかます。

ズボンと音を立て地面にめり込んでいった。

そういえばこいつ”ルイン”だったのか？  
腕を見てみると”ルイン”のタトゥーがある。

”ルイン”では子供でも兵士として使われる……それが”ルイン”  
に拾われた者の宿命。

「悲しいな……少年」

キラは、たぶん少年が落としたであろうガムを一枚口に含んで歩き出した。

#### 第四話 久しぶりの再開（後書き）

さ、さすがに疲れてきました。

だが、体力の続く限り書き続けます。

仲間が揃い始めたら、日常なども書くつもりです。

## 第五話 旋律の男（前書き）

”ルイン”との戦闘が決着し、ルフィを探すキラ。

ルフィと再開は、果たせるのか？

## 第五話 旋律の男

うわあ〜ハデにやったなあいつら……まったく、街の人のことを考えるよな……

キラが周りを見渡すと建物の倒壊が激しい。

「ルフィ！」

ルフィが街の方角から走ってくる。後ろにはゾロとナミもいるようだ。

なぜか町の人々に追われている……助けたのではなかったのだらうか……？

「キラ！逃げるぞ！」

「あ、ああ」

船着場に到着すると”あの時”助けたバギー一味の奴らが小船の前に立ち塞がる。

「待ってたぜ！どろぼ」

「お前ら元副船長命令だ！船から降りろ！」

小船の前へと陣取り行く手を阻む。キラは舌打ちをして眼光が鋭さを増す。

「う、うるせえ！元だろうが！」

「……何？」

キラの表情が変わる。

それを察知したのか男達は急ぎ海に飛び込み船をあけた。

「よし！いくぞ！ルフィ！」

ルフィたちは、船に乗り込み出発した。隣を進むバギーの小船にはナミが乗る。

「キラどこ行つてたんだよ」

「昼寝だよ。昼寝」

ナミは、見覚えがあつた。金色の長髪を後ろで束ねアーミー帽を被っているこの男。

イーストブルー最強の男、旋律のキラ……物腰が柔らかいため中々気づかれないが……

「よろしく。ナミちゃん」

「えー？う、うん。よろしく……」

ナミの声が震える……”旋律のキラ”とはそれほどの男……

「どうしたんだ？声が震えてんぞ？」

「な、なんでもないわよ」

キラがナミの耳元でささやく。

「大丈夫。君が魚人海賊団つてことは黙つといてあげるよ」

「私を脅すの……？何が目的……？」

疑惑の目でキラを見つめる。

相手はイーストブルーの強者……一体何を考えているのかわからない。

「俺は、ルフィを海賊王にする。その手助けをしてくれればいい」「えっ……？私が……？」

この男は何を言っているのか……何故自分に？

しばらく困惑の表情でキラを見つめるが……柔らかい表情に段々と警戒心が解かれていく

「君の航海術が必要なんだ。いいだろ？」

微笑みながらナミに問いかける。

「考えといてあげる」

キラはナミの答えを聞くとギターをもって立ち上がる。

「さあ！新しい仲間が出来たお祝いだ！一曲プレゼントしよう！」「よっ！待ってました！」

祝いの歌を歌う。新たな仲間の誕生を。

ナミは、手配書を確認する。

旋律のキラ

懸賞金：5000万ベリ

---



## 第五話 旋律の男（後書き）

まず先に、すいません。

ルフィより懸賞金が高いだけじゃなく勝手に

イーストブルー最強にしちゃってます。

まあ、俺が好きに書いているだけなんで。

気にしないでください。

キャラ設定教えて！ってのがないようなのでこのまま突き進む予定です。

## 第六話 黒猫（前書き）

旅を続けるルフィー一行。

まず目標は、新たな仲間そして船

## 第六話 黒猫

「おもしろい人だったな。ガイモンさん」

「ええ、そうね」

「おっさんが生きてればまた会うこともあるかもな！」

「あ？何の話だ？」

ゾロが目を覚ましキラの方を見る。

「こつちの話さ。さて、これからの話でもしよつか」

とりあえずゾロは放っておいてナミとこれから先の話を始める。

「このままグランドラインに行くのは、無謀だな」

「ええ、いくらあんたらが強いといっても船員も足りないし……」

「船もないとね」

「ええ、そうなのよ」

「船！俺たちの海賊船だな！ワクワクすんな！」

「ルフィ！手に入るって決まったわけじゃないのよ！」

「まあまあ。いずれは、手に入れなきゃいけないんだし。怒るなよ」

「俺が船長だから、キラが副船長な！」

「俺？ロロノアじゃなくて？」

「お前のほうが経験があるんだ。当然だろ」

「ロロノアが賛成するなら仕方ないな」

「副船長なんだからたまには戦闘に参加しろよ」

「ハハツ。考えとくよ」

「あのなあ……」

「おい！キラ！ゾロ！大陸が見えたぞ！」

ルフィたちは、とりあえず上陸する。

「この奥に村がある訳か。……見られてるな。ロロノア」  
「ああ、あれだろ」

『うわああああああ！！！！』

すごい勢いで逃げていく少年達。

「あつ、おい俺を置いていくな！」

崖のほうから長い鼻の奴が下りてきた。

珍しい鼻だな……

「お、俺は！キャプテン・ウソップ！」

「ああ、こりゃ親切にどうも」

「いえいえ、どういたしまして……ってオイ！」

「お前ら！俺には、8000万の部下が……」

「それ、ウソだろ」

「ウソでしょ」

「な、なぜバレた！」

「今、自分で自白したじゃないか。「バレた」って」

「し、しまった！お、お前、女みたいな顔してやるな」

「ナミちゃんは女だ」

「お前に言っただい！」

「ああ、俺か。俺は、キラって言うんだ。よろしくキャプテン」

「ああ、よろしくお願いします。……ってオイ！」

「はっはっはっは！お前、おもしれえな！」

「笑うな！」

「このバカは、放っておいて。キャプテン、村に案内してくんないかな？」

「お、おう。付いて来い」

（シロップ村）

飯屋で食事をとりながらウソップに事情を話すことにした。

ルフィは、バカみたいに食いまくり、ゾロは、昼間から酒を飲む。

「仲間と船！？」

「ああ、これからの旅に必要なでね」

「船か、この村にある大富豪の屋敷なら持ってるかもしれないな。」

「そうか。じゃあ、話つけといてくれ。」

キラは、席を立つ。

「お、おいは、まだ終わってねエぞ!？」

「後のことは、航海士さん頼むな。」

「ちょ、ちょっと!キラ!あんた副船長でしょ!？」

バタンッ!

キラは、飯屋を出て歩き出す。

さて、どこに行こうか。

とりあえず、静かな所でギターでも弾くか。

木陰へと移動し座り込む。

ギターを弾きながら空を眺めていると……

すう〜すう〜

気付かないうちに深い眠りへと落ちていく。

『わぁーーーーー!』

『クソーーーーー!』

『北にまっすぐーーーーー!』

「うるせえなあ……」

キラが目を覚ますと海岸に海賊船が停泊している。

これは、確か、キャプテン・クロの海賊船だ。

とりあえず海賊船のあるところまで移動し、状況を確認する。

ナミとウソップがクロの海賊達と戦っている。

「何でこんなことに？」

「キラ！あんた、何やってたのよ！」

「ギター弾いてて気づいたら寝てた」

「もう！いいから助けて！」

「仰せのとおり」

海賊達の前に躍り出る。

「お、おい！あれ！キラさんだ！」

「お前ら！久しぶりだな！」

「キラ！キラじゃねえか！久しぶりだな！元気か！」

顔見知りか声を掛けてくる。

「おお、ジャンゴ！」

「キラ。お前、今どこにいるんだ？」

「俺か、麦わら海賊団さ」

「そうか、じゃあ俺らの敵な訳だ」

ジャンゴが身構える。

「そうなるな。やるか？」

キラが睨むと船員達は、後退りする。

「ジャンゴ船長！無理だ！俺らに勝てるわけねえ！」

「バカヤロウ！やらないと、俺らがクロに殺されちまうぞ！」

船員達の目つきが変わる。

あれは、死を覚悟した男達の目だ。

「よし！行けお前達！」

ジャンゴの一声で一斉にキラへと向かっていった。

「お前ら……手加減はしないぞ」

キラも迎撃体制に入る。

『キラさん！覚悟！！！！！』

『二ノ形……旋！』

高速で回転蹴りを放ちまとめて船員を吹き飛ばす。

『ぎゃあああああああああ！！！！！！』

船員達は吹き飛ばされ、意識を失う。

「お、おい。あいつ強エな……」

「え、ええ、私もあいつが戦ってるのはじめてみた」

「ジャンゴ。まだ、やるのか？」

落ちたアーミー帽を拾い上げる。



「お、おい。てめえら生きてんのか？」  
『お、おう。ま、まだまだ……』

何人かの船員は、また立ち上がりこちらを睨みつけた。

「ジャンゴ……次は、お前か？」

「ク、クソ……」

『つ、ついたあああああ……！』

「あんたたち！遅いのよ！」

ナミの方を振り返るとゾロとルフィがいる。

「何してたんだよ！俺が戦わなくちゃならなくなってるだろ！」

『『テメエ副船長だろうが……！』』

「なんだと！俺は、副船長だとしても事務専門だろ！」

「あんたのどこが事務なのよ！」

ルフィたちが味方内で大騒ぎしていると

『ワン・ツー・ジャンゴ！』

『うおおおおおおお……！』

ジャンゴの催眠で船員たちがパワーアップする。

「めんどくせえ……」

『うおおおおおおお……！』

なぜかルフィもパワーアップしている……あいつ単純だからな……

『ゴムゴムの銃乱打！！！！』

「お、おいルフィ！キラにも当たっちゃまうぞ！」

「あのバカ！あとで説教だ！」

「うっ！……！」

キラの腹部に何発かのパンチが当たる。

ドサッ！

ルフィ……絶対クロス……

「ぬあああああ……！！！！」ルフィが走り出す。

ドゴン！

クロネコ海賊船の船首をもぎ取るうとしている。

「ワン・ツー・ジャンゴ！」

ズズンツという音とともに船首とルフィが倒れる。

「ル、ルフィ！」

キラがルフィに駆け寄ると、どうやら眠っているようだった。

ルフィの頭を小突きながらキラはクスクスと笑う。

「キラ！ゾロが！」

ゾロの前に敵が二人……

「ニヤーニヤーブラザーズ！」

『ちがう！ニヤーバンブラザーズ！』

ブチとシャムがこちらに叫ぶ。

「キラ！すまねえが刀を取ってくれ！」

ジャンゴの足元に刀が転がっている。

「待ってな！」

「おい、キラ！俺が渡すと思ってんのか？」

ジャンゴが俺の前に立ちはだかる。

「どけ」

ドゴンツ！「グハッ！」

ジャンゴを地面に叩きつける。

「ロロノア！受け取れ！」

キラは、全力でゾロに刀を投げる。

「な！？取れるか！」

MAX150キロは、あるであろう刀投げをゾロは、かわす。

「お、おい！お前が拾ってくれて言ったんだろ！」

「加減しろ！このバカ力が！」

刀は、ブチとシャムの顔面にめり込む。

『ガハツ！！』二人は力なく崩れ落ちていく。

「あ、あれ？」

「や、やばい……」

ジャンゴが立ち上がりガタガタ震えている。

「どうしたジャンゴ。俺が恐いのか？」

「お、お前じゃねえ……」

ジャンゴの視線の先には……

「久しぶりだな。クロ」

「キラ。てめえが絡んでやがったのか。まあいい。おい、ジャンゴ」

「なんだ？このザマは」

「あんただってキラの実力は、知ってるはずだ！仕方がねえじゃねえか！」

「仕方がねえ……だと……」

クロがすごい殺気を放つ。キラは、クロに声を掛ける。

「なあ、クロ」

「キラ……てめえは、すっこんでろ」



「ルフィも起きたみたいだな。じゃあ、俺の出番は終了だな」  
「キラ、俺の相手は、お前じゃないのか？」

「クロちゃんか……お前の相手は、ウチの船長だよ」ルフィを指差す。

「何！？あんなガキが船長だと！？」

「ああ、お前より強いぞ」

「おもしろい……やってやるぞ」

「ルフィ！この執事まかせるぞ！」

「おう！まかせとけ！」

「キラ！ジャンゴを頼む！」

「人使いあいぞ！お前等！」

キラは、ジャンゴを追った。

第六話 黒猫（後書き）

今日も書きます。書き続けます。

感想頂けたら幸いです。

**第七話 決着・決意（前書き）**

ルフィとクロとの戦いが続く中

キラは、ジャンゴを追う。



## 第七話 決着・決意

ジャンゴの野郎、どこ行きやがった。

森を走り回りジャンゴを探す。こつちでもない……どこだ？

「キラ！」

「ロロノア！」

「どこ探してやがる！こつちだ！」

「え？そつちは、戻つちまうぞ」

「あ！？こ、こつちか！」

「はあ……おまえなあ……」

「おい二人ともあつちだ！」

「ん？キャプテン！今行く！ロロノア！」

「おっ！」

「きゃあああああ！」

「カヤの声だ！キラ！あそこだ！」

「任せろ！くらえジャンゴ……！」

「キ、キラ！お、落ち着け！俺らの中じゃ……」

キラは、ジャンゴの腹部に強烈な掌底を放つ。

『剛砲！』

木をへし折りながらジャンゴが吹っ飛んでいった。

「無事か？お嬢さん」

「は、はい……怖かった……」

カヤが俺に抱きつくので頭をやさしくなでる。

「そうか、もう大丈夫だ」

視線が痛い……

ウソップがキラを睨んでいた。

「キャプテンから何か話があるみたいだな」

カヤを自分から引き離し

「ルフィのところに戻るぞ」

ゾロをつれてルフィのところに戻る。

「ルフィ！生きてるか！」

「おお！キラ！終わったのか？」

「当然」

拳を突き出す。

「シシシシ！さすが！」

キラと拳をコツンと合わせる。

「みんな！ありがとう！礼をいう！」

ウソップが大声を出す。

「お前の勇気の勝利だよ。キャプテン」

「へへッ。俺は、これを気に決めた！俺は、海賊になる！」

ルフィ達は、ウソップの決意表明を聞き食事に向かった。

## 第七話 決着・決意（後書き）

評価してくれた方ありがとうございます。

まだまだ、がんばります！

第八話 船と新たな仲間（前書き）

黒猫海賊団との戦闘も終わった。

次なる冒険へ！

## 第八話 船と新たな仲間

「本当にこの船もらっていいの？」

「はい。みなさんは、恩人ですから」

「キラ！こつちきてみる！この船すげえぞ！」

「へいへい」と船に乗ろうとしたときナミに襟首を掴まれる。

「ぐふっ……！」

「船の説明なら私とキラが聞きますね」

「お、おれも？」

「あのねえ、ルフィとゾロじゃ当てにならないんだから仕方ないでしょー！」

メリーという執事から船の説明を聞く。

「キャプテン」

「キラ、世話になったな。じゃあ、また海で会おうな！」

「何言ってるんだ？乗りなよ。キャプテン」

「えっ……」

「俺達、もう仲間だろ？」

「……キャ、キャプテンは、俺だろうな！」

「何言ってるんだ！船長は俺だ！」

「よし！ゴーイングメリー号、出発するぞ！」

『『『おーーーーー！』『』』』

麦わら一味は、カヤに手を振りシロップ村を後にした。

「まずは！新しい船！そして新たな仲間ウソップに！カンパニー！」  
『カンパニーーイ！！！！』

「改めてよろしくな。ウソップ」

「おう！よろしく！そういえばキラは、クロとは知り合いだったのか？」

「そうよ。久しぶりって言ってたわよね？」

「前にあいつの船にいたことがあってな」

「へえ！あんたさ船下りたいつて言った時、殺されなかったの？」  
「確かに。クロなら言いかねえエ」

「今生きてるのが答えだろ？今日は、宴だ！飲め飲め！」  
「飲みましよう！」

ルフィが叫ぶ

「キラーーー！歌えーーー！」  
「祝いの歌といこうか！」

その夜、宴は朝まで続いた。

「うっっん……二日酔いか……？」

キラは、あまりの頭痛に目が覚める。外から大声が聞こえた。また朝から大騒ぎしてるのだろうか……

「おはよう……。朝から元気だな……。お前らは……」  
「キラ！見てくれこの旗！」

ウソップが海賊旗を掲げる。

「おお。いいね」

「だろ！俺って芸術の才能あるな」

ドウン！大砲の音がする。

「うまくいかねえなあ」

ルフィが岩に向かい大砲の試し撃ちを始めていた。

「ルフィ、貸してみる」

ウソップが撃った砲弾は見事に岩を砕く。

「おお〜ウソップすげえ！」

あいつらは、なにやってんだか……。とりあえず今後の話でもするか……

「おい、お前らちょっと集まってくれ」

キラの掛け声で全員がキッチンに集まる。集めたのは、役割分担と今後の話をするため。

「まず、それぞれの役割」



「ウソップは、狙撃手だな！」  
「ウソップが狙撃手……」

持っている手帳に役割を書いていく。

「私は、航海士」

「まあ、それは確定」

「ロロノアは、戦闘員」

「ああ、わかった」

「俺が船長！」

「わかってる」

「で、最後に俺が副船長」

「じゃあ、足りないポジションはなんだ？」

「必要なポジションは、あれだろ！」

「そうね、せっかくキッチンがあるんだし」

「栄養面とか大切だもんな」

「長旅には、必要不可欠だしな」

「音楽家だ！」とルフィ。

「それは、キラがいるだろうが！」

「俺、副船長ですけど？」

「そうよ！キラには、他にも舵とってもらったりマッサージしてもらったり……」

『『そんなことさせてたのかよ！』』ピシッ！

「そうか、じゃあ音楽家は、探さなきゃダメだな！」  
『『『違つ違つ』』』 みんなで首を振る。

『海賊ども！出て来い！』

船室から甲板を覗き込むとサングラスを掛けた男が叫んでいた。

「ん？なんだ？ルフィ！見て来てくれ」

「船長をアゴで使ってるぞ。この副船長……」

ルフィが外を見に行く。

「だ、大丈夫よね。あいつなら」

「ああ、問題ねえだろ」

シーーン……。

「よし、ロロノア！見て来い！」

「お前、ほんと動かねえな……」

……。

「ウソップ。どうなった？」

「なんか、ゾロの知り合いだったっばいぞ」

「そうか、じゃあ行ってみるか」

外に出ると変な二人組みがいる。なぜか片方の男は倒れている……

「こいつ、どうしたんだ」

キラは、倒れている男を指差す。

「そ、それが聞いてくれよ……」

話を聞かず症状を確認する。

「これは……ナミちゃん。壊血病みたいだぞ」

「へ？壊血病？」

「キラ、ライム持ってきたわよ」

「ああ、ありがとう。ルフィ、ウソップ。絞って飲ませてやってくれ」

『『了解！！！！』』

「こ、これでよくなるのかい！？」

「ん？すぐすぐは、よくなるかもしれないが大丈夫だ」

「キラ、すげえ！」

「医者みてえだな！」

『船旅をする上では常識よ！これくらい知ってなさいよ！！！！』

ナミの怒声が船上に響く。

「ひゃっほー！治ったぜ！」

「やったな相棒！」

『『そんなに早く治るか！』』

2人の男はヨサクとジヨニー。サングラスの男がジヨニーで倒れ

ていたほうがヨサク。賞金稼ぎらしいが……強いのか……？

「まあ、こいつらは、これでいいだろ。話が戻るんだが」

「ルフィ！必要なのは音楽家じゃなくコックよ」

「コックか！いいな！うまいモンがいっぱい食えるってことだろ！」

「コックを探すんならいい場所がありますよ！」

ジヨニーが割って入ってくる。

『海上レストラン！？』

「ここから2〜3日進んだところにありますぜ」

「よし！いざ！海上レストラン！」

麦わら一味は、海上レストランへ帆を進める。

第八話 船と新たな仲間（後書き）

やっとここまでできました。

次は、サンジ君登場予定です。

お楽しみに。

## 第九話 海上レストラン（前書き）

海上レストランを目指し帆を進めるルフィー一行。

これからなにが待っているのか・・・

## 第九話 海上レストラン

「キラの兄貴！海上レストランにつきやした！」

「ああ、ありがとう。ジヨニー」

キラは、優しく微笑む。

「キラの兄貴……」

キラは、気持ち悪い視線を浴びながら船の外に出る。

これが、海上レストラン……レストランに穴があいてるぞ……メリー号のデッキを見渡してもルフィの姿がない。

「ロロノア。ルフィは？」

「さあな。レストランで雑用でもさせられてんじゃねえのか？」

雑用……？キラは、髪を縛りながら何故ルフィがレストランでこき使われなければいけないのかを考えるが 思い浮かばない……

「実は……あのレストランの穴……ルフィが……」

ウソップがルフィのいなくなった経緯を話しはじめる……

海軍大尉”鉄拳のフルボディ”とやらに遭遇しメリー号に向かい大砲を撃たれたがルフィが『ゴムゴムの風船』で弾き飛ばした砲弾が海上レストランへ ということらしいが……

「あのバカ……説教が必要みたいだな」

「かわいそうにルフィ……。キラの説教長いんだよなあ」

大きく溜息を吐きウソップがキラを見つめた。ナミが首を傾げウソップに尋ねる。

「え、そうなの？私、受けたことないからわかんないんだけど」

「ひどいもんだぞ。一時間は、正座だな。ゾロは、うけたことないのか？」

「ガキじゃねえんだ。あるわけないだろ」

手をパンと叩きキラは思いついたように3人を見つめ

「よし、飯食いがてらルフィを見にいこうか。」

不敵な笑みを浮かべキラは海上レストランへと向かっていった。

〈海上レストラン〉

店内を見渡しキラは、感嘆の声を上げた。

「あそこの席あいてるぞ」

「俺は、サンマの料理がいいな！」

「キラ。何食べる？」

「え、ああ。パスタかな」

各々食べたいものを注文し、料理が席に運ばれてくる。豪華な料理がテーブルへと並べられる。

「これは、うめえな」

「ロロノア。口に物が入ってるのに、しゃべるな」

「ホント！おいしい！」



「うめえ！うめえ！」ウソップは、がつつく。

空腹も満たし席でくつろいでいると

「お前ら！俺がないのにうまいもん食いやがって！」

エプロンを付けたルフィが姿を現した。キラの眼光が鋭くなりルフィを睨みつける。

「ルフィ。お前、話は聞いたぞ……」

「ゲツ！キラ！違うんだ！海軍の奴が撃ってくるから！」

ルフィを睨みつけているキラのところにクルクル眉毛がよってくる。

《な、なんだ！？回転しながらこっちくるぞ……》

そいつは、キラとナミの間に入り「美人姉妹だね？」と一言。

さらに「君がお姉さんかな？」とキラの方を見る。

『『『『ギヤツハツハツハハ！！』』』』 4人が一斉に笑う。

「キラお姉さま。ご気分は、どうですか？」

笑いながらウソップが言い、ゾロがそれに続く。

「キラ。お前いつから女になったんだ？」

「女に間違われるって……お前！男か！」

「ああ、そつだ。ちょっと待っててくれるか」

キラは、ゾロとウソップをレストランの外に連れ出し 鈍い音が聞こえゾロとウソップが顔を腫らして戻ってくる。

ウソップが頬を擦りながら謝罪し、ゾロは何かブツブツと文句を言っているようだ。

「許しましょう。女に間違われる俺も悪い」

ナミの元にサンジがデザートを運んでくる。

「ありがとう!」

「どういたしまして?」

このコック典型的な女好きだな。

「ん?あれは……」

『首領クリークの海賊船だ!!!』

扉が開くとフラフラのクリークとクリーク海賊艦隊戦闘総隊長、鬼人のギンの姿があった。

クリークは一人では歩けないのがギンに肩を貸し支えてもらっている。

全員目がクリークに集中しているうちにナミがコソコソとレストランを出て行く。キラは、ナミの動きに気付き後を追う。

「ナミちゃん。どこにいく気だ?」

「キ、キラ……あなたならわかるでしょ？」

「アーロンの所か……。……俺も行く。俺なら君の村を救える」  
「そうね。あんたなら勝てるわ。でも来ちゃダメ……」

「なぜ!？」

「あいつらには、あなたが必要だからよ！」

「君だって大切な仲間だ！」

「……!?!?……いいから放っておいて！」

ナミに乗せたゴーイングメリー号は、出航してしまった。キラは、ナミの事情を知っておきながら……。止めることの出来なかった自分に腹を立てた。

「キラの兄貴、助けてえ。オボツ……。ヴェル……」

「ヨサク! ジョニー!」

「おい! キラ!」

ルフィ達がナミがないのに気付き来てくれたようだが……。もう遅い……

「お前ら……。とりあえずアイツら上げるの手伝ってくれ……」

ヨサクとジョニーを海から引き上げる「ブハッ! し、死ぬかと思  
った」

「キラ! ナミは!?!?」

「実は」

キラは、ナミがどこへ向かったのかを説明しようとするウソップが海を指差し口を開く。

「まだ、船が見えるぞ！」

「ロロノア！ウソップ！追ってくれ！」

ルフィもキラに続き2人に追うよう指示をする。

「ウチの航海士は、あいつなんだ！連れ戻してくれ！」

「わかったよ。船長」

「キラは、いかないのか？」

「ルフィ一人じゃ不安だからな。ナミは、お前らに任せる」

小船が一隻……キラの視界に入った……その船には……最強の剣士が乗っていた。

『あ、あいつは……！……！』

なぜ……あいつが……鷹の目のミホーク……！？

キラはミホークと目が合う。

「強きもの……生きていたか……」

ゾロがまるでミホークの到着を待っていたかのように子供のような笑顔を見せ　ミホークの前に立つ。

戦う気だ……ゾロが目指すは大剣豪。そしてゾロの目指す大剣豪が今……目の前にいる！

《あのバカ……いつの間に！挑戦するにはまだ早い……！止めなければロロノアは……！》

キラがミホークの所に行こうとするとルフィが腕を掴む。

「離せ！ロロノアが死ぬ！」

「キラ！ゾロは負けねえ！信じろ！」

捕まれた腕を振り解きルフィに背中を向ける。

「クッ……見てられるか……」

キラはレストランの奥へと消えていく……

レストランの一番奥の席にキラの姿はあった……どれほど時間が経っただろうか……ゾロはどうなった……生きているのか？

扉の開く音に気付き声を上げる。

「……誰だ！？」

「もう、終わったぞ。女男」

海上レストランオーナーのゼフが姿を現す。

「料理長さん……ロロノアは……生きてますか？」

「てめえの目で確かめな。」

キラは、恐る恐る店の外に出る。高く剣を上げゾロが自分は生き  
ているとキラに伝えていた。

「強きもの……」

小船から鷹の目がキラに話しかける。

「いい仲間を持ったな……」

キラはミホークに笑顔で答えた

「ああ、初めて信用できる奴らを見つけたよ」

「フツ……また、会おう」

ミホークは水飛沫の中に消えていった黙って海を見つめているキ  
ラにルフィが声をかける。

「キラ。泣いてる場合じゃないぞ」

「バーカ。これは、水飛沫」

「大丈夫なのか？お嬢さん」

サンジがキラをからかうが 「うるさいぞ。ラブコック。お前  
こそ大丈夫か？」

「ヘッ、それだけ言い返せりゃ大丈夫だな。」

クリーク海賊団が海上レストランへと向かってくる。

「よし！やるぞ！キラ！サンジ！」

「誰に向かって言ってるんだ。レストランは俺が守る」

「待て！」

飛び出そうしている二人をキラが止める。

「二人ともこれだけは、守ってくれ」

二人の目がキラに集中する。

『絶対に死ぬな』

ルフィとサンジがニヤツと笑って、『お前もな！』と叫び。ク  
リーク海賊団に突っ込んでいく。

「さて、俺も行きますか」

遅れてキラもクリーク海賊団に突っ込んで行った。

## 第九話 海上レストラン（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。

だんだんとキラに仲間意識が芽生えてきました。

なんか、質問とかあれば書いていただきたいと思います。

たとえば、キラの身長？とか体重？とかはたまたスリーサイズとか

まあ、スリーサイズは、冗談です。

感想・質問待ってます。



## 第十話 再会を誓ったの別れ（前書き）

ルフィ、サンジとともにクリーク海賊団と戦うことになったキラ。

キラの背後にRUIINの魔の手が忍び寄る。

## 第十話 再会を誓っての別れ

「さて、だれが相手してくれるんだ？」

「お嬢さん、下がってな！ここは、戦うコックさんに任せとけ！」

キラを押しつけ、いかついコック二人が海賊達に突っ込んでいく。

『どりゃあああああああ！！！！』

『ぎゃああああああ！！！なんなんだこいつら！？』

やるじゃないか……戦うコックさん。

2人のコックに関心してキラは完全に気を抜いていた……流れ弾が飛んでくる。

『あぶねえ！』

ギリギリのところではキラはサンジに助けられた。

「何してんだキラ！ ポーっとすんな！」

「わ、悪い……。ありがとう」

笑顔でキラはサンジにお礼を言う。サンジはキラの顔を見つめ頬を赤らめる……

《か、かわいい……ハッ！いかんいかん！こいつは男だ！》

サンジは、近くにいる海賊達を蹴り飛ばす……どつやらキラの出番はなさそうだ。それほど海のコック達は強かった。

「お前、旋律のキラだな……」

気付かないうちにクリーク海賊団の一人がキラの背後に立っている。

「いつの間に……お前、クリークの手下じゃないな。お前からは気配を感じなかった」

男の手を見ると”ルイン”のタワーが彫ってある。

「紛れてたってわけか……」

「貴様には、死んでもらうぞ……我等の野望の為に……」

思い切り背中をサーベルで切りつけられる。

「ふん……俺の実力を知っているなら……サーベルじゃ無理だ」

振り向き様男の顔に拳を叩き込む……鼻血を出しフラフラしている。

「な、なぜだ……貴様、悪魔の実の能力者か……ならば!」

腹部を棍棒の様な物で殴られる。

「痛いか?これは、海楼石で作った武器だ!悪魔の実の能力者では、力すらで……」

「何か、言ったか?」

「バカな……貴様……の、能力者ではないのか……?」

「さて、こちらの番だ」

「ま、待て！」

「覚悟しな……」

男の腹部にそつと手を添える。

『剛砲！』

強烈な掌底を見舞うと男は泡を吹きながら膝から崩れ落ちる……アバラが何本か折れたようだ。背中からは、アバラらしきものが肉を突き抜けていた。

「……ごめんな」

「キラ！これつける！」

ルフィがキラにガスマスクを投げる。

「え？これは？」

「いいからつける！」サンジが叫ぶ。

訳もわからないままマスクを付ける。あたり一面にガスが立ち込める。

「ふう。何だつたんだ？」

「キラ！あのバカ！無茶する気だ！」

ルフィがクリークの攻撃を受けながら突っ込んでいく。キラは、サンジの隣に立ち声を掛ける。

「ウチの船長は無茶するだろ？」

「ああ、お前らも大変だな。助けにいかないのか？」

「こんなところで負けるような男なら……それまでさ」

『ゴムゴムの大槌！！！！』

ルフィがクリークを破り、海に落ちていった。キラは、笑顔でサンジの方を見る。

「うれしそうだな。キラ」

「サンジ。悪魔の実の能力者ってカナズチなんだ」  
「な！？お前、助けにいかなくていいのか！？」

キラは、サンジを指差し。

「行け」

「俺が！？クソツ！なんでだよ！」

サンジが海に飛び込んでルフィを助け出す。

「まったく！世話の焼ける奴らだ！」

「奴らって……俺、迷惑掛けたっけ？」

『てめえのどこの船長だろうが！』

キラは、微笑み「お前の船長にもなる男だ。サンジ」

「……チツ……俺の部屋に運ぶぞ」

「よし！運んでくれ」

『少しは手伝えよ！！！！』

キラ達は、サンジの部屋でルフィの目覚めを待つ。

「なあ、キラ」

「何だ？」

「なんでこいつに付いて行こうと思ったんだ？」

「いい奴そうだったから」

「それだけ？」

「そう。いままでいろんな海賊を見てきたがルフィは、違ったんだ」

サンジと話しているとルフィが目覚める。

「おはよう。サンジが仲間になってくれるって」

「ホントか！サンジ！」

『言っただけよ！！！！』

「サンジ、オールブルー見たくないのか？」

「キラ！知ってるのか！オールブルー！」

「ああ、もちろん。コックたちの憧れ。オールブルー」

「オールブルー？」

「ルフィは、知らねえのか。オールブルーってのはな……」

サンジが楽しそうにオールブルーについて語る。行ってみたいんだろっな偉大なる航路。

『メシだぞお!』

ルフィ達が食堂に下りるとみんな食事を始めている。

「おお。キレイな兄ちゃん。ここ座りな」

「あ、ああ。でも、あの二人は？」

ルフィとサンジの席がない。

「あいつらは、床でいい床で食べ。」

しょうがなく床で食事を始める。

『おい、なんだ!このクソマズいスープ!』

「それは、俺の作ったスープだ。まずい訳が……」サンジが立ち上がる。

次々にスープを捨てだすコック達。

「そういうことか……」

キラは、察して部屋を出る。

「あいつを連れて行ってくんねえか。お譲ちゃん」

オーナーゼフがキラに声を掛ける。

「いきなり、あのやり方は、きついんじゃないですか?オーナー」

「あれぐらいしないと行こうとしゃがらねえからな」

「そうですか。まあ、彼の本音を聞いて決定します」

「そうか。あいつの口からは、聞けるかどうかわかんねえぞ」

「その時は、そのときです」

外に出て体を伸ばす。

「う~~~~ん！いい天気だ！」

「キラ……」

「ん？サンジ、どうした？」

「俺もお前らと行くことにした」

「そっか。よろしくな」

「驚かないのか？」

「こっなる気がしてたからな」

「そっか」

「ヨサクってやつとルフィが船出の準備してるぞ」

「ああ、わかった。サンジも準備できたら来いよ」

「おっ……」

ルフィとヨサクのところへと向かう。

「ヨサク、壊血病よくなったか？」

「へい！兄貴のおかげです。ありがとっございやすー！」



「どづいたしまして」

サンジがこちらに歩いてくる。

「行こう」

「カゼひくなよ」

オーナーゼフがサンジに声を掛ける。

トント……キラは、サンジの背中を押す。

「ちゃんとあいさつして来い」

サンジとコック達は、別れをそして感謝を告げる。一生の別れではなく、次の再会への別れ。

感謝は、今までお世話になったことへの感謝。サンジとゼフの別れは、まるで親と子の別れのようなだった。

ゼフは、サンジが過ぎ去った後も海を見つめ息子の旅立ちを祝っていた。

**第十話 再会を誓ったの別れ（後書き）**

サンジが仲間になりました。

今回は、アールン編です。

お楽しみに。

## 第十一話 アーロンパーク(前書き)

サンジを仲間にして。いざ、アーロンパーク。

## 第十一話 アーロンパーク

「ヨサク、俺達が向かってるのはアーロンパークだろ。」

「キラの兄貴・・・なんで、それを!？」

「アーロンパーク？」

「ああ、魚人のアーロンが支配している土地なんだ。」

「ナミさんと魚人に何の関係があるんだよ。」

「信じないと思うが、ナミちゃんはアーロン一味の幹部だ。」

『『『な、なにに!』』』』

3人共大声を上げる。

「信じねえ。ナミは、俺達の仲間だ!」

「そうだ!ナミさんに限ってそれはねえ!」

「そう言っと思ってたよ。自分の目で確かめな。」

『モオオオオオオ!!!』

『!?!?』

ルフィ達の前にデカイ牛?が現れた。

「えつと・・・。牛?」

首をかしげキラは海牛を見つめる。

「ああ、牛だな。」

「牛だ。」

「な、何でそんなに冷静なんすか！？海牛つすよ！偉大なる航路の生物です！」

「へえ〜かわいいな。これ。」

海牛をなでると・・・うわ・・・モフモフ？

『モオオオオ。』

「おい、キラになついてるぞ。」

「キラ、すげええええええ！」

「ありえないっす。キラの兄貴・・・。」

「じゃあ、アロンパークまで頼むな。」

『モオオ。』

海牛に縄をつけアロンパークまで引つ張ってもらおう。

「こいつ、おせえなあ。」

「ああ、違いねえ。鞭でもいれるか？」

「かわいそうだろ。」

『ゴムゴムの鞭！！！！』

ルフィが海牛に蹴りを入れるとスピードが上がる。

『モオオオオオオ！！！！！！』

「おお！はええええええええええ！！！！！！」

「ルフィ。お前なあ・・・。」

「お、おい。キラ。」

「なんだ？サンジ？」

「こ、このままだと岸にぶつかる！」

「え、ええええええええええ！」

海牛が岸にぶつかり縄が切れて船が上空を舞う。

「お、おい！キラ！どうにかしろ！」

「いちいち、俺に言うな！どうしようもない！」

『ギヤアアアアアアアアアア！！！！！』

バフンツ！

無事に砂浜に着地した。

「みんな・・・い、生きてるか？」

「あ、ああ。なんとかな。」

「アツハツハツハツハ！楽しかったな。もう一回やるっ！」

『『やるか！』』』

ゾロがこちらに向かってくる。

「ロロノア！無事だったか！」

「キラ！大変だぞ。ウソップがアーロン一味に捕まった。」

「ウソップの兄貴は、ナミの姉貴に殺されました！」

『！？』

シヨニーが信じられない一言を告げた。

ルフィが鬼の形相になる。

「ナミが仲間を殺すわけねえだろ！」

「でも、俺はこの目で見たんだ！」

「お前!!」

ルフィがジョニーを殴ろうとするがキラがルフィの腕を掴む。

「キラ！離せ！」

「落ち着け。ジョニーにあたるのは、筋違いだぞ。」

「だってよ！」

ナミがルフィ達の前に現れる。

「……ナミちゃん。」

「何しに来たのあんた達。」

「何って。迎えに来たんだ！」

「迷惑よ。早く帰ってくれない？」

「帰るのは、かまわないんだが。」

「おい！何いってんだよ！キラ！俺は、帰らないぞ！」

「黙ってる！」

キラが怒鳴るとルフィが察して次の言葉を待つ。

「俺がここに来た目的を果たしてないんだ。」

「目的って何よ。」

「ココヤシ村をアーロンの手から開放する。」

「えっ。あんた何でそれを……。」

「もういいだろ……。一体何を隠してるんだナミちゃん。」

「う、うるさい！もう、勝手にして！」

ナミは、去って行ってしまった。

ナミがなぜアーロンと一緒にいるのか、おおよそ検討がついていた。なぜなら、一度ココヤシ村を訪れたことがあるからだ。

俺が初めてここを訪れたときからアーロンの支配が続いていた。

あの時、俺はなぜアーロンを倒さなかったのか……。今、とても後悔している。

もし、あのとき俺があいつを倒していればナミは……。

「悪い……。俺、行ってくるわ……。」

「あ？どこいくんだよ？」

「ナミさんのところか？」

「アーロンのところだ。」

『……？』

「俺も行くぞ。」

ルフィが立ち上がる。



「いや、俺一人で行くよ。」

「おい、どうしたんだよ!?!」

「いいから、付いてくんなよ。」

キラは、一人アーンパークへ向かう。

ここがアーンパーク……。

ドゴオン!?!門を破壊する。

「アーン……。」

「テメエ……旋律のキラ……。何のようだ?」

ヒュン!

キラは、一瞬でアーンの前へ移動し

「な!?!」

「これは……仲間の怒りだ!?!」

バゴンツ!「ゲツ……。」

アーンの顔面を思い切り殴りつける。

「テメエ……。覚悟は、出来てんだろっな?」

「キラ!」

キラが入り口を見るとルフィが歩いてくる。

「アーンは、俺がやる!」

「シャハハハハハ！願ってもねえ！旋律のキラに比べればお前のほうがマシだ！」

「ルフィ……。ついてないなアーロン！海賊王と戦うなんて！」

笑いながらアーロンに声を掛ける。

「海賊王？こいつが？シャハハハハ！笑わせるな！」

ドツゴオン！ルフィがアーロンの顔を殴りつけた！

ズシャアアアアア！！！勢いよく吹き飛んでいく。

「さすが、海賊王になる男。」

キラは、アーロンが座っていたイスに座る。

一斉に魚人がルフィ達のところに向かってくる。

『鬼切り！！！！』

『首肉シユート！！！！』

『火薬星！！！！』

魚人達が吹っ飛んでいく。

「お前らだけで戦うつもりだったのか？」

「いや、来るって信じてたよ。」

キラは、三人に笑顔を向ける。

「さて、残るは……。大将格だけかな？」

椅子に座りながらアロンに尋ねる。

「みたいだな。」

麦わら一味対アロン一味の本当の戦いが始まる。

第十一話 アーロンパーク（後書き）

時間がなく文章を練っていません。

申し訳ないです。

第十二話 賞金稼ぎ（前書き）

アローン一味との戦闘が始まった。

キラの相手は？

## 第十二話 賞金稼ぎ

アロンvsルフィ

ハチvsゾロ

クロオビvsサンジ

チュウvsウソップ

「あれ？このままだと俺の相手がいないぞ。みんな、どうしよう？」

ルフィたちは、もう戦いを始めていてまるで話を聞いてくれる様子がない。

仕方なくナミが乗ってきたであろう船を捜しに行くことにした。

「じゃあ、俺。船探してくるからな。」

「……………」

「……………聞いてないか。」

船は、出来るだけ見つかりにくいように停めてあった。

ナミちゃん、隠しといてくれたのか……………」

キラが船に乗り込み荷物などを確認していると、人の気配が……………」

「誰だ!？」

「まさか気づくとはな。」

死角となっている場所から人が出てくる。

「お前……。何者だ？」

「俺は、スパイダー。賞金稼ぎだ。」

スパイダー

賞金稼ぎ

サングラスに赤いフード付きパーカーを着ている。

通り名：赤蜘蛛

「賞金稼ぎ……。ということは、俺が狙いか？」

「そうだ。貴様を殺してほしいと依頼を受けていてな。」

「依頼……。」ルイン”か？」

「まあ、そんなところだ。おしゃべりは、ここまでだ。死んでもらう。」

スパイダーが手から糸のようなもの出す。

キラは、ギリギリのところまで糸をかわす。

「なんだ？悪魔の実の能力者か？」

「俺は、蜘蛛人間だ。」

「パラミシアか？」

「クク……。違う。インセクトだ。」

「インセクト？そんなもの存在しないはずだ！」

「そう、存在しない。この能力は、悪魔の実ではない。」

「どういうことだ？」

「貴様に話す必要はない！」

スパイダーの体から4本手が生えてくる。

「気持ちワル！」

6本の手から糸が放たれる。

キラが、後方に飛び去り回避しようとするが……。

「足が!？」

最初にスパイダーが放った糸が足に絡み付いて動けなくなっていた。

「クソツ！」糸がキラの体中にまとわり付く。

「さて、このまま絞め殺してやろうか。それとも……。」

スパイダーは、懐からナイフを出す。

「コイツで一突きにしてやろうか。」

糸から逃れようと体を動かそうとするがビクともしない。  
むしろ、逃れようとするほど糸がきつく絡み付いてくる。

「クツ……ハア……。」

「どうした？旋律のキラともあるうものが死を覚悟したか？」



「貴様を殺した後は、仲間だ。すぐに後を追わせてやる。」

「俺を殺してから言うんだな……。」

「そんなに死にたいなら殺してやる。」

スパイダーがキラの近くに寄っていく。

「さあ、死んでもらおうか。」

キラの首にナイフを向ける。

ガシッ！「なに!？」

キラは、スパイダーの手首を掴み  
ブチンッ！腕を引きちぎる。

「ギャアアアアア!!!」

スパイダーは、あまりの激痛に床を転げまわっている。  
傷口から血が噴出し、あたり一面に血が飛び散る。

キラは、引きちぎったスパイダーの腕のナイフを使い糸を切った。

「ふーん……。切ることは、できるのか……。」

「き、貴様！絶対にコロ……。」

スパイダーの頭を掴み手に力を入れる。

メキメキッ！

頭蓋骨が悲鳴を上げる。

「ゆ、許してくれ！俺は、頼まれただけなんだよ！」

スパイダーの頭から手を離す。

「失せる。」

「うわああああ！」叫びながら一目散に逃げていく。

キラは、船のデッキを見回す。

いたるところにスパイダーの血が飛び散っている。

「めんどくせえ……。掃除しなきゃだめじゃねえか……。」

キラは、ルフィ達が帰ってくるまで掃除をすることにした。

## 第十二話 賞金稼ぎ（後書き）

感想書いてくれた方、ありがとうございました！

キラの容姿についての質問がありましたので

近いうちにキャラ設定を書こうと思います。

ほかにも要望があればお待ちしております。

第十三話 3000万と6000万(前書き)

スパイダーとの戦闘も終わり、船の掃除をするキラ。

ルフィの勝敗は？

第十三話 3000万と6000万

キラは、掃除も終わり船首でくつろいでいた。

「おーい！キラー！」

ルフィがキラを呼んでいる。

船首から飛び降りルフィのもとへ行く。

「終わったみたいだな。」

「うん！勝ったぞ！」

コッソソ！

キラとルフィは、お互いの拳を合わせる。

「シシシシ！」

「フフツ……。強くなったもんだな。」

「おーい！キラ！宴やるって、来いよー！」ウソップが俺を呼ぶ。

「ああ！今、行く！」

ルフィ達は、宴の席へと急ぐ。

〜その夜〜

盛大な宴が行われる。

「盛り上がってるねえ。」

村人たちは、喜びを爆発させ大騒ぎをしている。

「今まで、辛かったんだろうな……。」

彼らは、ついさっきまでアーンに虐げられていた。そんな彼らが心のそこから笑っている。

キラの口から自然と言葉が出た。

「本当におめでとう……。」

感傷に浸っているキラにゾロが声を掛ける。

「おい、飲まねえのか？」

「ん？俺は、嗜む程度だから。」

「キラ！歌ってくれー！」「ウソツプが呼んでいる。

「OK。」キラは、ギターを持って人々の中央に移動する。

ギターを掻き鳴らし、歌を歌う。

人々が一瞬静まり返り一気に歓声が爆発する。

踊りだす人、一緒に歌う人、涙する人。

キラは、この日ほど音楽をやっていてよかったと思う日はなかった。歌が聞こえなくなったのは、次の日の朝だった。

〈出発の朝〉

船着場でナミを待つ。

「ナミちゃん来ないな。」

「来ないんじゃないかねのか？」

「何！？ナミさんは、来ねえのか！？」

『船を出して！』

ナミが船に向かって走ってくる。

「な、なんだ？走り出したぞ。あいつ。」

「ウソツプ。ウチの航海士が言ってるんだ。船を出そう。ロロノ

ア。」

ゾロが船のイカリを上げる。

「おい、いいのか？こんな別れ方で？」

「いいんじゃない？ナミちゃんらしいさ。」

ナミが船に飛び乗る。

「じゃあね。みんな？」

ナミが村人全員の財布を持っている。

『待て！この泥棒ネコがあ！！！！』

「フフツ。みんな！いつてきます！！！！」

『元気だな！いつでも帰って来いよ！！』

「みんな……。バイバイ……。」

船が進行し村が見えなくなる。

ナミは、村が見えなくなっても村の方角を見ている。  
キラは、ナミに声を掛ける。

「おかえり。」

「ただいま。」

「ナミちゃん。海賊になったこと後悔してない？」

「してないわよ。自分で決めたことだもん。」

「そっか……。」

「ナミさーん！特製ドリンクできたよ。」

サンジの気持ち悪い声が聞こえる。

「クー。」

「ん？ナミちゃん。新聞。」

「受け取っというて。」

「でも、お金は？」

「いくら？」

「100ベリー。」

「はっ！？高いんじゃない！」

「俺に言われてもな……。」

「はい、これ！」



キラは、お金を渡され新聞を買う。

「高いつてさ。次は、安くしてな。」

「クー。」

配達カモメ？は、お金を渡すと飛び去っていった。

「はい。新聞。」

「ありがとう。キラ。」

ナミは、新聞に目を通す。

パラッ……。

新聞から手配書が落ちた。

「ん？マジかよ……。」

「キラ！俺、3000万ベリーだってよ！なっはっはっはっは！」

モンキー・D・ルフィ

懸賞金：3000万ベリー

---

「俺の後頭部も写ってるぞ！」

「俺……。写ってねえ……。」

「ルフィ！喜んでる場合じゃないわよ！それだけ命を狙われるってことなのよ！」



る。  
「

「どつする？上陸するか？」

「うん。する！」

ルフィ達は、ローグタウンに上陸した。

第十三話 3000万と6000万(後書き)

船長より副船長の方が懸賞金が上という不思議な構造になっております。

## 第十四話 ローグタウン出港（前書き）

ローグタウンについた俺たち。

各々の目的は？

## 第十四話 ローグタウン出港

（ローグタウン（始まりと終わりの街））

「ここが海賊王が死んだ街か。俺は、処刑台を見てくるぞ！」

「俺は、食材だな。」

「俺は、装備と新たな武器の材料集めだな。」

各々が目的を果たすためバラバラに行動することにした。

さて俺は、ルフィと一緒に処刑台でも……。と思っていたのだが……。

「キラは、私の買い物に付き合ってくれるわよね？」

「えっ！？俺は、処刑台に……。」

ナミがすごい目で俺を見る。

「姫、御一緒させていただきます。」

「ウフ。ありがとう？」

キラは、自分達の船で誰が一番えらいのかを確認することができた気がした。

ナミは、服を買っらしい。

「キラ、これどお？似合う？」

「ああ、似合う似合う。」

キラが空返事をするとうそい顔をしてこちらを見る。

コワツ……。

「いや……。すげえお似合いですよ姫。」

「そお？あつ、これなんかキラに似合うわよ！」

「ここってレディースの服しかないんだが……。え？」

ナミは、フリルのついた衣装を持って微笑んでいる……。

「それ……レディース……。」

「あんたカワイイ顔してるから大丈夫！着てみなさいよ？」

「だ・か・ら。俺は、メンズ。それレディース。お分かり？」

「いいから着てみなさい！」

『ぎゃああああああ！！！』

キラは、すごい勢いで店を飛び出す。

「あつ、キラ！待ちなさい！」

ナミがすごい勢いで追ってくる。

とりあえず近くにある店に入ってやり過ごす。

「あぶなかつた……。なんで俺が女装しなきゃいけないんだ……。

「キラ。女装がなんだって？」

後ろにゾロが突っ立っている。

「うわ！・・・ロロノアか。驚かせんなよ。何してるんだ？」  
「見ればわかるだろ。」

キラが逃げ込んだ場所は、武器屋だった。

「武器屋か・・・。」

「新しいのを買おうと思ってな。」

ゾロは、刀を選び出す。

「そつか。鷹の目に折られたんだったな。」

「ああ。」

キラも色々と武器を見回っていると店主が声を掛けて来る。

「綺麗なお嬢さん。何をお探しい？」

ピクツ・・・。「お嬢さん・・・？」

沸きあがってくる殺意を抑えながら話す。

「あいつの付き添いみたいなものかな。」

ロロノアを指さす。

「ああ、あの文なしのツレか。」

「文なしって・・・。」

「まあ、見るだけならタダだからゆっくり見てきな。」



それだけ言ってカウンターへ戻っていく。  
金なしにはキツイわけか……。あからさまだな……。

……つまん。

「ロロノア、俺。処刑台に行ってるから。」

「わかった。」

武器を見ててもおもしろくないのでルフィの所に向かうことにした。

えっと処刑台への道は……。

キラは、あたりを見回しながら進む。

「よお、旋律じゃねえか。」

「スパイダー！」

「俺の懸賞金……。上がったんだが、どういうことだ？」

「えっ？なんのことだ？」

「お前以外に誰がいるんだよ！密告しやがったな！」

「してねえ！俺だって海軍のお尋ね者なんだ！するわけないだろ

「！」

疑いの目でスパイダーを見ながら

「おい、処刑台ってどこだ？」

「あ？こっからまっすぐいって左に曲がったところだ。」

「そっか。ありがとよ。」

スパイダーの行ったとおりに路地を進んでいく。

（処刑台（ロジャーが処刑された場所））

キラが処刑台につくと、なぜか、処刑されそうになっている奴がいる。

あいつは………!!?

「ル、ルフィ!?それにバギー?」

ゾロとサンジが処刑台へと向かっている。  
バギーが剣を振り上げ処刑の準備をする。

「クソツ!わけわかんねえ!」

キラも急いで処刑台へと向かう。

「キラ!」

ルフィがキラに向かって叫ぶ。

「わりい!俺死んだ!シシシシ!」

「バカヤロー!?!?!」

「ハデに死ねエ!?!?!」

剣がルフィ目掛けて振り下ろされる。

ガシッ!

バギーの腕を掴む。

「なんだと！？キラ！？おめえいつの間になんか？」  
「バギー……。お前……！」

キラは、手に力を込める。

メキメキツ……。

ゴキツ……骨の折れる音がする。

「キ、キラ！俺とオメエの仲じゃねえか！？」

『ルフィは、俺が海賊王にする！！！それまで死なせない！！！』

「こんな方法で、ルフィを殺そうとするお前を俺は許さない！」

「許さないって。俺達海賊だろ！？どんな手を使っても……」

「俺とお前じゃ考え方が違うんだよ……。バギー……。」

そう、俺がバギー海賊団を抜けた理由は、そこにあった。

こいつと俺とじゃ考え方が違う。

キラは、拳に力を込め、殴ろうとしたその時……。

バリバリバリ……。

バギーの持っている剣が電気を帯びだした。

空を見上げると上空には、雷が……。

「これは、やべえ……。」

ドドオオオオン……！！

雷が剣に向かって降り注ぐ。

ズウン……。

処刑台が崩れる。

「なはははは！キラ、俺生きてるぞ。」

「クスツ。当たり前だ。海賊王になる男なんだろ。」

『海賊どもを囲め！』

「海軍のお出ました。逃げるぞ海賊王！」

「おう！」

「ゾロ！サンジ！道をこじ開けろ！」

『わかってるよ！副船長！』

ゾロとサンジが海兵を蹴散らす。

「さすが！海賊王の船員！」

『おめえも戦え！！！！』

「俺、事務方だしな……」

『事務方なんかウチにはねえ！！』

「シシシシ！」

『ロロノア・ゾロ！！！！』

女性の海軍が立ち塞がる。

『たしぎ曹長！！！！』 兵が叫ぶ。

「ん？あいつか。」

「おめえら先行ってる。」

「おう。」

ルフィ達は、ゾロに任せて船へと向かう。

また、誰かが行く手に立ち塞がる。

「あれは……。白猫のスモーカー……。。」

「キラ、知り合いか？」

「お前らを海には、行かせねえ。」

「久しぶりだな。スモーカー。」

「お前……。旋律のキラか。最近また暴れ始めたみたいだな。」

「おもしろい奴を見つけたもんでな。手助けしたくなった。」

「そうか。相変わらず変わり者だなお前は。」

「それじゃ、始めようか。スモーカー。急いでるんだ。」

「ふん。おしゃべりするつもりは、なかったんだがな。」

お互いに一定の距離を保つ。

『ホワイトブロー！！！！』

『剛！！！！』

『ゴムゴムの銃！！！！』

「お、おい！ルフィ！逃げろって！」

「嫌だ！キラも行くぞ！」

「はあ？サンジどうにかしてくれ。」  
「俺もお前が逃げなきゃ逃げない。」

「何故！？早く！足止めしとくから！」  
「お前自分を犠牲に俺らを逃がすつもりだろ。」

「……！？な、何言ってる！？」  
「キラ！俺を海賊王にするんだろ！」

確かにこいつらの言うとおり俺は、自分を犠牲にして逃がすつもりだった。

それだけこのスモーカーと言う男は、手ごわい相手だ。  
ただどまさか、こいつらに心の内を読まれるとは……。

「わかったよ。絶対行く。約束する。」  
「わかった。行くぞルフィ。」  
「おう。」

ルフィとサンジは、船に向かっていく。

「さて、スモーカー。俺は、行かなきゃいけない。ケリ付けさせてもらおうよ。」

「ふん。俺に攻撃を当てることすらままならないお前が……。」

ドゴンッ！  
キラは、スモーカーを殴り飛ばす。

「な、なにっ！？お前……覇気を……。」  
「覇気か……。違うな守るものがある者の拳は、どんなものに

も通用する。」

キラは、ニヤツつと笑いスモーカーを見下ろす。

「次は、本気で殴らせてもらおうぞ。」

「……………!?ド、ドラゴン!?!」

「えっ……………あ……………」

気づくとキラの後ろに人が立っている。

「ここは、俺にまかせて逃げる。」

「ドラゴン……………」

「キラ!」

ゾロがこちらに走ってくる。

「急げ!島に閉じ込められちまう!」

「お、おう!」

くゴーイングメリー号く

「キラとゾロが来ないぞ!ル、ルフィどうする!?!」

「待つ!キラは、絶対に来るって言うてた!」

「ねえ!あれじゃない!?!」

キラとゾロは、船へとたどり着く。

「すまない!遅れた!」

「いいから乗れ！急げ急げ！」

船は、ローグタウンを出港した。

「ふう〜危機一髪ってところか。」

「キラ！信じてたぞ。シシシシシ！」

「フツ……。まあ、俺は有言実行だからな。」

コッソソ！

キラとルフィは、拳を突き合わせる。

これも、もうお決まりになってきた。

ピンチを脱した後、強敵との戦闘後。ルフィとお互いを讃え合っていた。

「見えてきたな。ルフィ。」

「ん？何が？」

「偉大なる航路への道標さ。」

キラが指をさす先に光が見える。

「サンジ！進水式でもやるか！」俺は、サンジに声を掛ける。

「そう言い出すと思って持ってきてるよ。」

サンジが運んできた樽をみんなで囲む。

「俺は、オールブルーを。」



樽に足を置く。

「俺は、海賊王！」

「俺は、大剣豪に。」

「私は、世界地図を書くため。」

「俺は、勇敢なる海の戦士になる！」

みんながキラを見る。

「俺は……。海賊の高みに！」

最後に樽に足を置く。

『いくぞ！偉大なる航路！！！！』

## 第十四話 ローグタウン出港（後書き）

昨日は、書けなくて申し訳ないです。

疲労と言っちゃつでしようか。

三連休投稿できる限りする予定です。

それでは。

くキャラ設定(これから先変更有)く(前書き)

キラの容姿についての質問がありましたので

書いておきます。

くキャラ設定(これから先変更有)く

【名前・異名・所属】

キラ

旋律のキラ

麦わら海賊団副船長

【容姿・身体的特徴】

身長：175cm

体重：60kg

年齢：20歳

容姿：女性に間違われることが多く中性というよりは女性のような容姿をしている。

本人としては、女性に間違われることを嫌う。

サンジ曰く「騙されちまった!」

ナミ曰く「女装させたら世界一ね!」

ルフィ曰く「キラ、すげえええ!!!」

特徴：金色の背中まである長い髪を束ねている。

紫色の瞳が特徴

服装：アーミー帽、青いデニムがほぼ固定。

他には、比較的戦いやすい格好をしている。

【過去】

バギー海賊団の副船長  
クロネコ海賊団戦闘員

くキャラ設定（これから先変更有）く（後書き）

設定を書きました。

足りないところ、こんなことも知りたい！という場合は

感想のほどよろしくお願いします。

## 第十五話 偉大なる航路（前書き）

ローゲタウン出港後、目指すは偉大なる航路。

## 第十五話 偉大なる航路

「ナミちゃんの言ったとおり。偉大なる航路の入り口は、山だ。」

『山!?!』

ナミとキラ以外が驚きの声を上げる。

「そう山よ。キラとも海図を見て話し合ったんだけど。間違いないわ。」

「どうやら、このリヴァースマウンテンに運河があるようなんだ。」

「運河があるって言ったって、船が山を登れるわけねえ！」

「だけど海図には、そう描いてあるのよ。」

「そうだ！ナミさんの言ってることが間違いなわけがねえ！」

「それ、バギーから奪った海図だろ？当てになるのかよ？」

「船で山登りか。おもしろそうだな！」

キラは、ほかにも入る方法がわかっているがそれは危険が大きすぎるため

口には、出さないようにしていた。

だが……。

「南へ下ればどつからでも入れんじゃねえのか？」

「ロロノア、それは出来ない。」

「そうだ！それは、違うぞゾロ！」



ルフィが南から入れない理由をわかってるなんて成長したな。

．．．．．と思っていたが。

「入り口から入ったほうが気持ちいいだろ！」

「はあく。期待した俺がバカだった．．．．．」

「おい嵐が止まったぞ！」

「え、そんなまさか．．．．．キラ、これって．．．．．」

「ああ、凧の帯に入っちまった．．．．．」

「キラ、カームベルトってなんだ？」

「無風の海域．．．．．。そして．．．．．。」

ザパアアアアン！ 『デケエエエエエ！！！』

大型海王類が姿を現す。

言葉を続ける。

「大型海王類の巣なんだ。」

「お前．．．．．冷静すぎるだろ．．．．．」

「いいか、お前達。こいつらが潜った瞬間全力で船を漕げ！」

『わ、わかった．．．．．』

ザブウウウウウウン！！！！

海王類が沈んだその瞬間。

『漕げえええええええ！！！！！！！』

ルフィたちは、何とか嵐の帯を脱出。

「はぁ・・・疲れた・・・。」

「やっぱり山から行くしかないわね。」

「最初からその選択肢しかないからね。」

「向かいましょう。」

「よし、赤い土の大陸に進路を取るぞ！」

く赤い土の大陸く

「吸い込まれてる・・・海流だ！舵を取れ！」

「キラ！これ大丈夫なのか！？」

「ダメだったら全員海の藻屑だな。」

「運河の入口だ！ずれてるぞ！もつと右！」

ウソップとサンジが面舵を切る。

ボキッ！「なっ・・・！？」

舵が壊れた・・・！

このままだとぶつかる・・・！

「クソッ！・・・ルフィ！」

「任せろ！！！」

ルフィが船と障害物の間に飛び込む。

『ゴムゴムの風船!!!!』

バイイーーン!

ルフィが風船で進路を元に戻す。

「よくやった! 掴まれ!」キラは、手を出す。

ガシッ! ルフィをデッキへと戻す。

「ぬ、抜けた……?」

「つてことは……。」

「偉大なる航路に!!!!」

『入ったあああああ!!!!』

「ふう……。ナミちゃんご苦労様。」

「ええ。あとでマッサージお願いね?」

「フフッ。喜んで……。」

「ナミさん前方に山が見える。」

「え? そんなわけないわ。この先の岬を抜けたら海だらけのはずよ。」

ブオオオオオオ!!!

声が聞こえる……。これは……。

「ナミさん、山じゃない! クジラだ!」

「やばいぞ! このままじゃぶつかる! キラ! どっつする!?!」

「左だ！左へ抜けるぞ！とり舵だ！」  
「舵折れてるんだよ！」

「ロロノア！ウソップとサンジに手を貸してやってくれ！」  
「わかった！」

「これは……。曲がらん……。ぶつかるぞ……！」

ドゥーン！！大砲……？  
ルフィがクジラに向けて大砲を撃っていた。

「これで止まるだろ。」

「止まるかバカ！」

「何！？キラ！バカとはなんだ！」

バキッ！

船首が折れてデッキを転がる。

「俺の特等席が……！」

「そんなこと言ってる場合か！逃げるぞ！」

ブオオオオオ……！！

すげえ迫力だ……。ちよつとでも挑発するとヤバイな……。

「俺の特等席に何すんだ……！」

ドゴン！『な、何してんだ！？』

クジラの目を殴りつけるルフィ。

「あいつが俺の特等席を壊すからだ！」

「特等席・・・？船首か。」

クジラが大口を空けている。

「ヤバイ！飲み込まれるぞ！！！！」

『うわあああああ！！！！』

キラたちは、クジラに飲み込まれてしまった。  
そうルフィ以外の全員が船とともに。

第十五話 偉大なる航路（後書き）

感想待ってます。

第十六話 誓いの歌（前書き）

クジラに飲み込まれた俺たち。

これから一体どうなる？

## 第十六話 誓いの歌

「キラ……。こんなの見たことあるか……？」

「あるわけないだろ……。クジラに飲み込まれたことないし……。」

「だよな……。」

キラたちの視線の先には、家がある。  
なぜクジラの胃の中に家が……？

「おい、人が出てきたぞ。」

爺さん……。なんでこんなところに……？

「俺が話してみる。お前らだとややこしくなりそうだ。」

キラは、爺さんに声を掛けてみる。

「すみません。」

「何だ……？」

中々の威圧感だ。

「あのあなたは、ここで何を？」

「質問する場合は、まずは自分が名乗るものではないのか？」

「ああ、すみません。私は……。」

「私の名は、クロツカス。双子岬の灯台守だ。」



「えっ、ああご丁寧にどうも。」

あれ？さっき、名乗れって言ってなかったっけ？

まあ、いい。他にも聞くことがある……。出口だな。

「クロツカスさん。出口とかってあったりしないですか？」

「オイ。キラ、ここはクジラの腹の中だぞ。出口なんて……。」

「出口ならあそこだ。」

『出られんのかよ！！！』

ドオン！

船が揺れている。

「赤い土の大陸に頭をぶつけ始めたんだ。」

「どういう……！？」

ザブン！

クロツカスが胃酸の中に飛び込む。

「溶けちまうぞ！」

「出口へ向かってるみたいだな。」

「クジラが暴れだす前に、俺たちも早く出よう。」

『うわあああああ！！！』

「ん？ルフィだ。」

「おう！みんな！」

ザブン！

ルフィと変な二人組みが胃酸の海に落ちる。

「ロロノア。」

「わかってる。」

ゾロがルフィを引き上げる。

「ルフィは、いいが……。こいつらは？」

「私の目が黒いうちは、ラブーンには指一本ふれさせん！」

「ん？クロツカスさん。何いってんだ？」

「さあ？」

ドオン！

先ほど一緒に拾った2人組がバズーカをクジラの胃に向かって撃つ。

「させるか！」

ドゴオン！

クロツカスさんが自分の身を盾にして砲弾にぶつかる。

「なんとという無茶を……………」

「守りたければ守れ！こいつは、我らの食料にするのだ！」

2人組の男の方が叫ぶ。

ガツン！

ルフィが二人組みを殴る。

「……………ナイス。」

キラは親指を立てる。

とりあえずクロツカスの家に上陸する。

キラは、ラブーンについて質問をすることにした。

「このクジラについて教えてもらってもいいですか？」

「うむ、このクジラは……。」

ルフィたちは、ラブーンの過去、クロツカスさんの過去。そして彼らに纏わる海賊の話などを聞かせてもらった。

出口からラブーンの外へ出る。

「ふう。ちよつと、俺船内で休んでるわ。」

「どうしたキラ？体調でも悪いのか？」

「ちよつと疲れただけだ。じゃあ、休むから。」

キラは、部屋に閉じこもる。

実際は、疲れてなどいなかった。

ただキラは、あの変な2人組に見覚えがあった。

「バロックワークスか……。」

いずれ争う組織の名前を口にする。

しばらく目を瞑って考えごとをしようと思っていたのだが眠りに落ちてしまう。

スー……。

コンコンッ。

「キラ、入るわよ。あれ？寝てる……。」

ナミがキラの顔を覗き込む。

「ホントム力つくくらい綺麗な顔してるわね。」

「ちよつとキラ。航海の計画立てるわよ。」

ナミがキラを揺する。

スー……。

「全然起きないわね。起きないとキスするわよ。」

ガバツ！

すごい勢いで起き上がる。

「何それ……。どういふことよキラ。」

「え？ん？どうした？」

「うるさい！」

ゴンッ！

なぜかゲンコツをくらう。

「え？ええ？なんで？」

「航海の計画たてるわよ！来なさい！」

襟首を掴んで引っ張られる。

船室から出るとウソップが……。

「キラ！誰も修理手伝わってくれねえんだよ！助けてくれ！」  
「おお、後でな。」

ナミに引つ張られ椅子に無理矢理座らされる。

「それじゃあ、まずは……え！？」

「どうしたのナミさん！食事なら出来たよ！」

「見てよ！コンパスが！」

コンパスの針がグルグル回っている。

「ああ、知らないのか。コンパスは、偉大なる航路では通用しないよ。」

「え！？」

「島々が鉱物をおおく含んでいるから航路全域に磁気異常をきたしているんだ。」

「他には！？」

「海流や風には、恒常性がないってところかな。」

「なるほどね……。ってなんで知ってるのに教えてくれなかったのよ！」

ゴツン！

ナミにまたゲンコツをくらう。

「痛つて〜知らないとは、思わなかったんだよ。」

「というか何でキラが知ってるの！？」

「えっ……。まあ、本とか……。」

「ふん。見せてよその本。」

「え、ええ〜つと……。そうだログポース持つてるかい？」

「ログポース？」

「磁気を記録できるコンパスで偉大なる航路を旅するには、絶対に必要なものなんだ。」

「へえ〜。」

「それって、こんなヤツか？」

「そうだ。ルファイ持つてるのか。すごいな。」

「さっきの二人組みが落としていったぞ。」

「そっか。ナミちゃん。はい、これ。」

ログポースをナミに渡す。

「クロツカスさん。」

「何だ？」

「ナミちゃんにログポースの使い方とか説明よろしく。」

キラは、船に戻りギターを弾く。

するとラブーンがキラの方に寄ってくる。

「おっ、音楽好きなのか？」

「ブオオオオオ。」

「そつか。聞きたいだけ聞かせてやる。」

ギターを掻き鳴らす。

ラブーンがそれに合わせて吠える。

「ハハハハ！カワイイ奴だな。」

「ブオオオオ。」

「ん？俺にも歌えってか？」

「ブオ。」

「OK。デュエットだ。」

ギターを掻き鳴らし歌を歌う。

音楽は、動物とでも通じ合える。

しばらくラブーンと戯れていたが楽しい時間には終わりがある。

出発の時間がやってきたようだ。

「キラ！出発するぞ！」

「ああ！出てくれ！」

ラブーンがキラの方を見つめている。

「次来たときは、また新しい”旋律”を奏でてやるよ。」

「ブオオオオオ！！！」

「フフツ。じゃあな！楽しみに待っておけよ！」

「ブオオオオオ！！！」

麦わら一味は、双子岬を後にした。

「ラブーン……。元気でな……。」  
「キラ。」

「ナミちゃん。」

「まだ届くかもよ。あんたの音。」

「ああ、そうだな。」

ラブーンに聞こえるようにギターを掻き鳴らす。

「ブオオオオオ!!!」

「ラブーン……。」

「よし!!」

大声で歌う。

再会を誓う歌がラブーンに届くように。



第十六話 誓いの歌（後書き）

感想をお願いします

**第十七話 ウィスキーピークでの戦い（前書き）**

ラブーンと別れログを頼りに進む一行。

次の場所は？

## 第十七話 ウィスキーピークでの戦い

ラブーンとの別れも済み。

船はログポースの示す航路を進んでいた。

「ちょっと、キラ。」

「ん？何？」

ナミがキラのところに寄っていく。

「偉大なる航路についての本があるんでしょ？見せて。」

「えっと……。すいません。嘘つきました。」

「まったく。じゃあ、なんでそんなに詳しいの？」

「実は、偉大なる航路……。昔、来たことあるんだよ。」

「そうだったの。言ってくればよかったじゃない。」

俺は、言えなかった。

来たことがあるではなく出身なのだ。

なぜならば黒い過去が偉大なる航路にはある。

だから……。言えない。言ったらこいつらは、なんと言うだろう。

「キラ？どうしたの？」

「ん？なんでもないよ。」

「それよりもほら。雪だ。」

「本当だ……。」

「方角……。確認したほうがいいよ。」

ナミは、ログポースに目をやる。

「うそ！？逆走してる！？」

「じゃあ、がんばってね。」

「ちょっと！？キラ！ああもう！」

キラは、めんどくさいことになりそうなので船室へ戻る。

「ウイスキーピークか……。」

椅子に腰を掛けギターを弾く。

船がかなり揺れている。

苦戦してるなナミちゃん……。でもここで助けるとこの先が大変だ。

しばらくすると揺れが収まっている。

どうやら、航海が終わったようだ。

「キラ！着いたぞ！」

ルフィがキラを呼ぶ。

「ああ、わかってる。」

返事をしてデッキへ出る。

「ナミちゃん、ご苦労様。」  
「あんたね……。」

笑顔でナミに労いの言葉をかける。

「ふ〜。ずるいわね。その笑顔。」

「これで色々乗り切ってきたからね。」

「おーい！キラ！ナミ！宴だぞ！」

ここは、歓迎の街ウイスキーピーク。  
海賊を歓迎する街……。

そんなもの存在するわけがない。  
海賊を歓迎？ありえないな。

キラは、警戒心を強める。

俺がこれだけ警戒しているのにこいつらときたら……。

「はあ〜。まったく……。」

全員が酔いつぶれまたは食いつぶれている。  
何故、キラは平気なのか。

キラは、飲むフリをしてナミやゾロのジョッキに移したりしていた。

コッソリと外へ出る。

そこには、Mr9とミス・ウェンズデーがいる。

あいつらは、確かウイスキーピークの近くで海に飛び込んで逃走し

たんだっけ。

あとは、さつきナミと飲んでたシスターと町長のイガラツポイだったかな。

「見る奴らの懸賞金だ。」

イガラツポイが手配書を出す。

『3000万!?!』

「それだけではない。」

もう一枚手配書を出す。

『ろ!?!6000万!?!』

「きつと何かの間違いだ!」

「そうだ!あんな弱そうな奴らが・・・。」

キラが出て行こうとすると建物の上にゾロがいる。

「ロ、ロロノア!起きてたのか!」

大声を出したので敵に気づかれてしまう。

「き、貴様等!眠っていなかったのか!」

「剣士たるもの酒に吞まれるようなバカは、しないもんさ。」

「俺は、海賊を歓迎する街つてのがおかしいと思ってね。飲まないようにしてたのさ。」

「クツ……。」

イガラツポイたちは、身構えている。

「ロロノア。気をつける……。こいつらは賞金稼ぎ……。」  
「バロツクワークスだろ？」

「知ってたのか。」  
「ああ、一度スカウトされたことがある。」

「そうか。よし、戦うぞ。」  
「おう。お前と一緒に戦うのは、初めてかもな。」

ゾロたちは、敵の中心へと一瞬で移動する。

「は、は、はい!?!」  
「キラいくぞ。合わせろ!」  
「OK。」

『鷹波!?!!』  
『二ノ形……旋!?!!』

『鷹波旋風!?!!』

ギヤアアアア!?!!  
何十人もの賞金稼ぎが吹っ飛んでいく。

「やるな!ロロノア!」  
「お前もな!《クソ!キラの野郎なんてパワーだ!?!化物か!?!》  
「《

「ロロノア！あつちを頼む！」

キラは右側に。ロロノアは左側に走っていく。

何十人も賞金稼ぎが付いてくる。

立ち止まり相手の方を振り向く。

「お前等・・・バロックワークスじゃないな。」

「よくわかったな・・・。」

腕をまくりルインのタトウーをキラに見せる。

「つたく・・・。しつこいよ。」

「なぜ俺等がお前を追うのか。わかってるだろ？」

「ルフィは革命家ドラゴンの息子だ。お前等の狙いは、革命軍だ。海賊じゃない。ドラゴンの息子を人質に取れば。戦局が変わるかもしれない。だからルフィが必要。そしてDを守ろうとする俺が邪魔。だろ？」

「お前は、やはり危険だな・・・。」

RUIINの奴等が身構える。

キラが間合いを詰めようとしたその時・・・。

「やめなさい。お前達。」

暗闇の中から銀髪の男が現れ間に割って入る。



「キリク様。」

「キリク……。」

「久しぶりですね。ユダ。いや今は、キラでしたか。」

「ルイン大将のお前が出てきたか……。」

キリク

R U I N 大将

長身と銀髪、切れ長の目が特徴。

---

「キラ。単刀直入に申しませう。R U I Nに戻ってきなさい。」

「……!？」

「あなたの力は、私が一番わかっている。だからこそ争いたくない。」

「フフツ……。一度は、抜けた俺に戻って来いだと？断る！」

そう俺は、元はR U I N側の人間だった。

しかも、三人しかいない大将の一人。

「そうですね……。では、死んでもらう！」

突風がキラの顔の横を通る。

スパツ・・・。  
頬から血が滴る。

「覚えてますか？この白刀の切れ味。」

白刀（長刀）

RUINが黒刀の対を成すものとして造り上げた刀。

世界には出回っておらずRUINの者だけが持っている。

刀身には、海楼石も使われている。

---

「チツ・・・。こっちの番だ！」

一瞬にして間合いを詰め拳を突き出す。

白刀は、懐に飛び込めば振り切れない！いける！

地面から植物が飛び出してくる。

「クツ・・・！」寸前のところで植物をかわす。

「忘れたんですか・・・。果実により特殊な体になってるんですよ。」

そっぴいなながら、自分の腕を切り落とす。

「なっ・・・！？」

切り落とした部分から植物が飛び出してくる。

「クソ！」

植物を右に受け流し。

再び間合いを詰めようとする。

「馬鹿め！」

切り落とした腕から生えた植物が腕の形を形成し腕が再生する。

「な、なんだと!?!」

キリクは、すばやく逆手に刀を持ち変える。

『燕返し!?!!』

「なっ!?!?.....剛!?!!」

剛を掛けたが勢いよく後ろに吹き飛ばされる。

ドゴン!?!!」「かはっ.....」

背中を強打する。

「ハハハハハハ!鈍ったな!ユダ!ああ今は、弱いキラ君だったか。」

「クソッ.....ホントに鈍ったのかな.....」

「さあて、トドメを刺してやるつか。」

「へへッ.....ここまでかよ.....」

ドドンッ・・・!

街のほうから大きな音がする。

「ロ、ロロノア・・・?」

ドサッ。

なんだか見たこともない奴等が飛んできた。

「だれだ?こいつら?」

「バロックワークスのMr5とミス・バレンタインですね。」

「キリク。お前よく知ってるな。」

「これでも裏組織ですからね。」

2人組が立ち上がるうとしている。

「ふむ。見られては、まずい。引き上げましょう。」

「で、ですがキリク様!」

「私の言うことが聞けないと・・・。」

キリクの表情が変わる。

「す、すいません!すぐに!」

RUINの兵が闇に消えていく。

「キラ。今回は、見逃してあげます。次は、覚悟しておいてくださいね。」

「ああ、次までに思い出しておくよ。俺に与えられた能力を。」

「フフツ。楽しみにしておきますよ。”我が友”。」

キリクは、闇に消えていった。

「あの野郎……。手を抜いてやがった……。」

キラには、わかっていた。キリクの全力がこんなものではないことを。

そして、自分の力が確実に落ちていることも。

「思い出さなきゃな。俺の創造の力。」

倒れている2人組を放っておいてキラは、街に向かっていった。

**第十七話 ウィスキーピークでの戦い（後書き）**

ついにRUIINの幹部が出てきました。

感想・評価お願いします。

第十八話 ウィスキーピーク出港（前書き）

キリクとの戦闘が終わり。

みんなのもとへと戻るキラ。

## 第十八話 ウィスキーピーク出港

ハアハア……。クソ……。

俺は、傷口を押さえながらみんなの所へ急ぐ。

キリクの燕返しは、俺の剛をもつてしても防げなかった。

だがもし剛を掛けていなければ……。真っ二つに切られていただろう。

「おい！キラ！急げ！」

「ロロノアか。わかってる！」

俺は、急いでゾロの後を追う。

「あ、あれ？なんでみんな船に？」

「話は、後だ！乗れ！」

無理矢理船に押し込まれる。

キリクにやられた傷口が傷む。

「クツ……。」

「キラ、どうした？」

「な、なんでもないさ。ちょっと休む。」

俺は、船室に籠もる。

何か、最近引きこもってばかりな気がする。

傷口を見てみると抉られたような後がついている。



消毒液を取り出し傷口を消毒する。

「うぐ……!!」

あまりの激痛に顔が歪む。

「次は、負けない……。」

俺は、自分に固く誓う。

RUIINの相手は、俺がしなければ……。

そうしなければ、アイツを海賊王まで導けない……。

コンコンッ

ドアをノックする音が聞こえる。

「どうぞ。」

「キラ。朝飯できたぞ。」

「サンジか。わかった。今行く。」

くデッキ

「キラ!お前の分も食っちゃまうぞ!」ルフィが叫んでいる。

「ああ、かまわない食え。」

「じゃあ、遠慮なく!」

ドスンッ!

サンジがルフィを蹴り飛ばす。

『テメエは、食いすぎだ!』

「だって、キラがいつて言ったじゃねえか!」

「キラ。食つとけつて!」

「さ、サンジ……。顔が近い。わかったわかったよ。」

俺は、席に座り食事をする。

「あ、あれ?アラバスタのお姫様じゃないですか?」

俺は、目の前にいる女性に声を掛ける。

「初めまして。」

「ああ、どうもご丁寧。」

「おい、誰が誘拐してきたんだ。そんなこと俺は、許さんぞ。」

「キラ、これには事情があるのよ。」

「事情?」

俺は、ナミからウィスキーピークでの一件を聞く。

「そうか、そんなことが……。」

「ええ……。」

「姫、この船に入れば安全ですよ。」

俺は、ビビに笑いかける。

「ありがとう。でも、あなたたちに危険が。」

「今更、何を言ってるんです。顔割れちゃってるんでしょ？俺たち。」

「えつと、ナミさんとルフィさんとゾロさんですね。」

「ああ、あいつらだけか。」

「じゃあ、俺戦う必要ない訳か！やった！」

『戦えよ！！！！！！』

「えつ……。顔割れてないのに戦うのかよ……。はあ……。。」

『テメエ、副船長だろうが！！！！』

「クスツ……。。」

「やっと笑いましたね。姫様。」

「えつ……。。」

「楽しんでください。ずっと緊張したままじゃ見えるものも見えなくなりますよ。」

「見えるもの……。？」

「ええ、何が真実で、何が偽りなのかがね。」

「……。わかりました??？」

俺は、食事を続ける。

「キラ。そういえば、お前どこ行ってたんだ？」  
「えっ……。ね、寝てたんだ。」

「ふーんそうか。」

ゾロが疑いの目でこちらを見ている。  
絶対バレてるな……。

「次の島は、リトルガーデンかな。」

俺は、ナミに尋ねる。

「あんたのほう詳しいでしょ。」  
「確かに。」

「で、リトルガーデンってどんなところ？」  
「ああ、覚えてない。」

ゴンツッ！

なぜかゲンコツをくらった。

「マジで覚えてないんだって！」  
「あんたすぐ嘘つくからね。」

「本当なのに……。」

俺たちがこんなやり取りをしている間に次の島が見えてきた。

く麦わら一味休憩中く(前書き)

ちよつと一休みしませんか？

く麦わら一味休憩中く

「キラってモテるの？」

「は？いきなりなんだ？ナミちゃん。」

「いや、不意に気になっちゃって。」

「さあ？気にしたことないな。」

「男には、モテるんだろ（笑）？」

サンジが笑いながら話に入ってくる。

「まあ、あなたが間違っではないかもな……。」

「そうね。サンジ君も騙されたもんね（笑）」

「いや、ナミさん！あれは、違うんだ！俺は、女にしか興味はない！」

「キラは、モテるぞ。」

ウソップが口を挟む。

「なんとって……カヤが……顔を赤らめて……。」

すごい顔をして俺を見る。

「ウソップ〜。すごい顔してるぞ〜。お〜い。」

「お前と言う奴は〜！」

ウソップが襲いかかって来る。

「離せつて。おい、くすぐりたいから。ハハハハハ！！！」

「お前なんぞくすぐりの刑だ。ホレホレ！」

「やめろつて……ハハハハハ！！！！！」

「何してるんだ……こいつら。」

「おもしろそうだな！俺もませろ！」

ルフィもウソップと一緒になつてくすぐりだす。

「そういえば、ノジコもキラのことイイって言ったかも。」

「ナミさんのお姉さんも！？キラ……！！！！！」

サンジも一緒になつてくすぐる。

「お、お前等！いい加減に……アハハハハ！！！！！」

「まったく……。フフツ……。バカばかりね。」

めずらしくみんなと話せた気がした。

……ああ、ロロノア忘れてた。

く麦わら一味休憩中く（後書き）

質問でキラの女性への評価は、いかほど？っていうのがありましたので

休憩がてら書きました。

総合した評価は、モテる！であろうでした。



〽祝十万PV!〜!〜!〽 (前書き)

十万PV記念です。

「祝十万PV!!!」

「キラです！十万PV！ありがとうございます！」

「ちよつと、キラ！誰に言ってるのよ？」

「ナミちゃん。そんなの閲覧者の皆様に決まってるじゃないか。」

「え？なに？なんなの？」

「ああもう！わかんないならいいんだよ！」

「もう、なんなのよ！わけわかんない！」

俺は、ロロノアの所に移動する。

「ほらロロノア！十万PVだぞ！」

「ん？ああ、おめでとう。」

「人事だな……。おつ、サンジ！十万PVだぞ！」

「まあ、きつと俺目当てのレディが閲覧してくれてるんだろ？」

「ないない。」

「テメエ、ウソップ！なんかいいやがったな！」

「ゲツ！おいラブコックが怒ったぞ！逃げる！」

「待ちやがれ！このクソ長っ鼻！」

あいかわらず元気だね。二人とも。

まあ、ウチの連中は、みんな元気か。

「キラ。何やってんだ？」

「おっ、船長！十万PVだぞ！」

「ふん……。」

「感動薄っ！喜んでるのは俺だけか？」

皆様PVありがとうございました！

今後ともキラ達をよろしく願います。

く祝十万PV!!!く（後書き）

まさか、十万PVまでいけると思っていました。

自己満足で初めたこの作品もグランドラインまで来ました。

今後ともよろしく願います。

## 第十九話 目覚めた能力（前書き）

キリクにやられた傷を隠しビビを歓迎するキラ。

リトルガーデンへ到着、これから何が待っているのか？

## 第十九話 目覚めた能力

「リトルガーデン」

「ここがリトルガーデン。」

「完全なるジャングルだな。ロロノア迷子になるなよ。」

「あ？いつ俺が迷子になったって言うんだよ。」

「お前……しょっちゅうだろ……。」

グルルル……！

大型の虎が茂みから現れる。

「おお？あの虎怪我してるな。」

ドサッ。

虎が力なく倒れてしまった。

「普通の鳥じゃないわね。船の上でログが溜まるのを待ちましょ。」

「俺は、いくぞ！冒険だ！サンジ、弁当！」

「私も一緒に行つていい？」

ビビガルフイに尋ねる。

「おう！いいぞ！」

「ちょ！？姫？何言ってるかわかってます？」

「大丈夫！いざとなったらカルーがいるから。」

「かわいいそうに。いざとなったら困るんだな君は。」

俺は、カルーをなでながら話しかける。

「ク、クエー……。」「ブンブンと首を横に振るカルー！

「行きたくないっていつてるけど……。」「

「行くわよね……。カルー。」

ひ、姫がすごく恐い顔を……。。

「ク、クエツ！！！」首を縦に振っている。

「ありがとう。カルー。」

「姫……。中々強引ですね……。」「

「じゃあ、ビビちゃんに愛情弁当をつくるね？」

サンジが気持ち悪い声を出す。

「カルーにドリンクもお願い。」

「わかった。まかせといて？」

二人は森の入り口へ移動する。

「よし、行ってくる！」

「おおよそで戻ってくるから！」

ルフィとビビが森の中に消えていく。

「キラは、いかなえのか？」

「ん？ちよつと体調がね。」

「大丈夫か？顔色悪いぞ？暖かいスープでも作るか？」

ゾロとサンジは、俺の異変に気づいているようだ。

奴にやられた傷が万全なら急いでビビを追いかけていたいところだが・・。

「キラ、あんた・・・。何この汗の量・・・。」

「えっ・・・。あ、汗・・・？」

ドサツ・・・。

俺は、前のめりになり倒れこむ。

「お、おい！キラ？どうしたんだ？おい！？」

みんなの声が遠くなっていく・・・。

そうか・・・キラクの野郎・・・毒か・・・。

俺は、気を失ってしまった。

く キリク サイド く

キラとの戦闘の後、私はRUIIN本拠地へと戻った。

「キリク様！総帥がお呼びです。」

「ええ、わかりました。」

どうやらキラを始末しなかったことで総帥がお怒りのようだ。

「総帥。お呼びでしょうか？」



総帥のお顔をは、誰も見たことがなかった。  
顔は、鉄仮面で隠され体は鎧で固められている。

微動だにしないことから兵の間では

「中には誰も入ってはいないのではないか？」との意見もあるほどだ。

「キリク。」

「はい。」

「何故キラを始末しなかった。」

「邪魔が入ってしまいました。」

「フン……。まあいい。キラの力は、目覚めていないだろうな？」

「はい。どうやらキラは、力の使い方を忘れてしまったようです。」

「イーストブルー如きでは、力を使う必要もなかっただろうからな。」

「はい。ただ、注意が必要なのは……。」

「目覚めなくても強い、というところか。」

「おっしゃるとおりでございます。」

「お前のことだ。奴に痛手を与えているのだろうか？」

「はい。神経毒を刀に。」

「フフツ。そうか。」

く キラ サイド く

「この傷は？」

「わかんねえ……。こいつ、いつも誰と戦ってるんだろつな。」

ナミとウソップの声が聞こえる。

「クツ……。」「

「キラ!?!」「

「おい!寝てろつて!」「

俺が起き上がろうとすると二人に静止される。

「大丈夫……。かすり傷だから……。」「

「あんた、この汗の量は何よ?」「

「それは……。」「

「無理すんなよキラ!勇敢なる海の戦士の俺が……。」「

ズズウウウウン!

ものすごい音が外から聞こえる。

「何?今の音?」「

「近い気がするな……。」「

「マジかよ……。キラ、どっつする?」「

「ウソップ!キラは、この状態なのよ。あたしたちが守らなきゃ。」

「

「……ロノアとサンジは？」

「キラに栄養のあるものを食わせるんだとよ。」

「あいつら……。」

「いくわよ。ウソップ。」

「お、おう！キラは、安心して寝てる。」

「お、おいお前達！無理すんな！」

バタンツ！

「あいつら、大丈夫かな……。」

『ガバババババ！！！！』

「ん？何だ？」

シーーン……。

やけに外が静かになっている。

「見に行くか……。」

俺は、立ち上がって外を見に行く。

「あ、あれ？誰もいない……。クツ……。」

目の前が歪む。

「クソッ……。ダメだ……。」

俺は、その場に座り込む。

もうこのまま死ぬのだろうなと思っ……。

「ユダ様。」

「その名前は、捨てた……。今は、旋律のキラだって……。えっ？」

聞き覚えのある声に思わず振り返る。

そこには、全身ボロボロの少年が立っている。

「ジル……。お前……。どうして……。？」

ジル

R U I N 部隊長

キラがR U I N所属だったところの部下

キラに心酔している。

---

「こ、これを……。」

「これは、血清……。」

「私は、あなたに死んでほしくない！」

「ジル……。ありがとう。」

俺は、腕をまくり血清を打つ。  
体が少し軽くなったような気がする。

「ジル……。お前大丈夫なのか？」

「何がです？」

「俺に手を貸したってことは、命を狙われるぞ。」

「何をいまさら……。死線を潜り抜けてここまで来たんです。」

「死線って……。お前……。その体……。」

ジルは、体のいたるところから血が滴っていた。

「平気です……。覚悟していましたから……。」

「ジル……。すまない……。」

「私は、あなたの為ならどんなことも……。」

ドンッ！！！

銃声が聞こえる。

「な、なんだ!？」

俺の目の前で血飛沫が飛び散る。

……。ジルが腹部を押さえ倒れる。

「ジ、ジル……?」

「キ、キラ様……。」

『ハハハハハハ！裏切り者は、こつなるんだよ！』

船首から声がする。

「よお。ユダ様！元気かい？」

「ケイ……。」

ケイ

R U I N 部隊長補佐

キラがR U I N所属だったころの部下  
ジルの部下でもある。

武器：銃（R U I N仕様）

---

「まったくウチの隊長は、困ったもんだな。裏切り者に手を貸すとは。」

「ケイ！貴様！心は、ないのか！」

俺は、怒りに唇が震える。

「心？心なんかもってたらあんたみたいになっちまっただろ？ユダ様？」

俺がケイに掴みかかろうとするとジルが俺の腕を掴む。

「いいんです……。悪いのは、俺です……。」

「何言ってるんだジル！？」

「裏切ったのは事実ですから……。それに俺、後悔してないですから……。」

ジルは、俺に微笑む。

「ジル……！」

俺は、ジルを抱き寄せる。

「死ぬな！ジル！死んじやだめだぞ！」

「ケツ！気持ち悪いんだよお前等！」

ドンツ！！！！「なつ……！？」

ケイは、ジルにもう一発弾丸を打ち込む。

「ゲフツ……。」

ジルは、口から血を噴出し動かなくなる。

「ジル！おい！起きろ！」

『ハハハハハ！これで俺が隊長だ！アハハハハハ！！！！』

ケイが俺の後ろで大笑いしている……。

俺は、いままでにない怒りを覚えていた……。

コイツを殺す……。絶対にコイツは、俺が裁く……。

俺は、自分の指の皮を噛み切る。

「お、おい……。まさか……。思い出したのかよ……。」

指から滴り落ちる血が形状を変えていく。

「報告だ……。報告しなければ!!!!」

ケイがすごい勢いで逃げていく。

「これは……。マズイぞ……。目覚めた目覚めちまった……。殺される！」

ケイの首に一瞬光が走る。

「死にたくない!せつかく隊長に……。」

なぜかケイの目に自分の体が映る。  
首のない体が前方を走っていき倒れる。

「キラの野郎……。断罪の鎌を……。」

## 断罪の鎌

キラの血液により造られた大鎌

すべての罪を裁く……?



血液で造られているのでキラの血液が  
続く限り伸縮可能。

---

ドシヤ！

ケイの頭が地面に落ちる。

俺は、自分の手に持つ大鎌を見つめる。

そつだ……。思い出した……。

俺は、自分の血液を武器とすることができんだ。

なぜ、急に思い出せたのか……。怒り？悲しみ？憎しみ？

俺は、ジルの元に歩み寄る。

「お前のおかげで思い出したよ……。俺の力……。」

ジルの死体を抱き上げ森の中に入る。

彼を埋めてやるために。

俺は、思い出していた。

何故、俺が自分の能力を忘れていたのかを……。

〈記憶〉

RUINから逃げ出すとき俺は海に飛び込んでしばらく漂流していた。

漂流してる間に衰弱し・・・拾われたときには、過去の記憶のほとんどが消えていた。

時間とともに記憶は、戻ってきていたが肝心な能力の部分は、まったく

思い出せなかった。

なぜならこの能力は、恨みの能力。

恨みの心がなければこの能力は、目覚めない。

RUIINを抜けてから自由奔放に生きてきたから恨みの心など持ったことがなかった。

そしてこの能力は、悪魔の実だが悪魔の実ではない。

RUIINは、早くから悪魔の実の研究に着手していた。

悪魔の実の成分を研究し、実験し、何万もの人間を犠牲にして完成したのが

『禁断の果实』とよばれる悪魔の実の類似品。

## 禁断の果实

禁断の果实特徴：能力者の弱点の水、海楼石が弱点ではない。

弱点：防御面

超人・自然系の一部は、打撃・斬撃が通じないなど利点がある

あるが。

禁断の果実の能力者は、それらの攻撃が通じる。

禁断の果実を食べることを許されているのは、R U I Nの人間のみ。

（隊長クラスより上の人間）

R U I Nの科学力を知っている人間は、ほんの一握りの人間だけ。

禁断の果実の存在を知っているものはいないに等しい。

---

「はあ、思い出して良かったものか悪かったものか……。」

俺は、ジルを埋める穴を掘りながら大きいため息をついた。

第十九話 目覚めた能力（後書き）

え、きっとたくさん突っ込まれるだろうなと思いつつながら

キラの能力を書きました。残虐で申し訳ない。

質問・感想・一言待ってます。

**第二十話 一難去つてまた一難（前書き）**

能力が目覚め圧倒的な力でケイを倒したキラ。

能力の代償として自分を慕う者を失った。

別れをすませルフィ達のもとへと急ぐ。

## 第二十話 一難去つてまた一難

「あばよ、ジル。」俺は、ジルの墓を立てその場を後にする。

さて、あいつらは……。

俺は、みんなを探して森を巡る。

「おーい！誰がいるか？」

「クエー！」

「ん？カルーの声……？」

俺は、声がした方向へ急ぐ。

そこには、なぜかデカイ骨の下敷きになっているルフィと。それを必死に助けようとするカルー。地面に埋まってるウソップがいた。

「お前等……どうやったらそうなる？」

「キ、キラ動いて大丈夫なのか……？」

ポロポロのウソップが俺に尋ねる。

「俺は、大丈夫だけど……。お前のほうが大丈夫か？」

「そうか、大丈夫なのか。よかった……。」

「お、おい。死ぬなよ？」

「クエー。」グイグイと俺の服を引っ張る。

「ルフィを助けるのを手伝えって？」



移動しながらウソップに事情を聞く。

「なるほど・・・決闘の邪魔を。」

「そうなんだよ！許せねエ！」

「あ！あいつらか？」

『あいつらだあああああ！！！！』

2人と一匹は木をへし折りながら飛び出していく！

「元気だなあ。ん？あれは？」

俺は、後からゆっくりとその場に出て行き自分の目の前にある  
なんだか、わけのわからない塔？のようなものを見つめる。

「なんだ？これ？」

「キラ！あんた、動いて大丈夫！？」

「ああ、ナミちゃん！心配ない！」

「じゃあ、お願いがあるの！これを壊して！」

「OK。」

俺は、指の皮を噛み切る。

「君は、麦わらの仲間カネ。」

「ん？・・・Mr3か。」

「な、なぜわかったガネ！？」

「いや、頭が3だから。」





ルフィがMr3を追っていく。

「Mr5とミス・バレンタインだったか？」

『は、はい……。』

「死んでもらうぞ。」2人を睨みつける。

『ひ、ひい！！！！！！』

「キラ待て、俺にやらせてくれ。」

「ロロノア。OK任せる。」

『鬼斬り！！！！』

ズバツ！「ガハツ……。」

Mr5とミス・バレンタインが吹き飛んでいく。

一通りかたずいたようだ……。

あとは、ルフィが戻ってくるのを待つだけか。

「おーい！終わったぞ！」

「ルフィ！お疲れ。」

コッソリ！

いつもどおりお互いを称える。

「キラ。あれ、なんなんだ？」

「ん？あれ？って大鎌か？」

「それ。」

「うん。説明すると長いから暇があるときな。」

俺が座って休んでいるとナミが飛びついてくる。

「キラ！さすが！助かったわ？」

「うお！？ああ、無事でなによりだよ。」

笑顔でナミの頭を撫でる。

『ウオオオオオオオオオ！！！！』

「うわ！？な、なんだ？」

ブロギーが大声で泣いている。

そうか、戦友を失ったんだっけ……。  
気持ちわかるな……。ジル……。

むくつ。

ドリーが起き上がる。

「無事だったみたいだな。」

「100年も戦ってれば武器にもガタがくるだろ。」

「確かに。」

「ナミちゃん。ログ溜まった？」

「それがこの島ログが溜まるのに一年掛かるらしいのよ。」

「い、一年！？それも気が遠くなる話だな。」

サンジがこちらに走ってくる。

「おーい！ナミさん、ビビちゃん？」

「サンジ！お前どこ行ってたんだ？」

「どこってキラに栄養のつくものをつて……キラ!？」

「心配かけたな。」

「あ、これなんだけだよ。」

「エ、エターナルポース？」

「アラバスタへのエターナルポースなんだが……。」

『おおおお!!!!!!』

「なんで!?!なんでサンジが!?!」

「ああ、実は……。」

サンジから手に入れた経緯を聞く。

「これで追っ手から追われる心配もないってわけだ！」

「よくやったぞ！サンジ！」

「よし！ルフィ出航しよう！」

「おう！じゃあな巨人のおっさん達！」

俺たちは船へと戻り出航する。

「ん？見送りに来てくれたのか？」

ドリーとブロギーが海岸で待っている。

「お前達なにが起ころうとも俺たちを信じてまっすぐ進め。」  
「わかった。まっすぐ進む。」  
「何か・・・あるみたいだな。」

俺は、指を噛み血を滴らせる。  
本当にいちいちめんどくさい能力だと自分で思う。

ザパアアアン!!!  
でかい金魚が姿を現す。

俺は、断罪の鎌を造り出す。

「よし、斬る・・・。」  
「待てキラ！」

ルフィに呼び止められる。

「おっさん達にまかせよう。」  
「わかったよ。船長。」

鎌を血液に戻しマストによしかかる。

「まっすぐだ！まっすぐ！」  
「キ、キラ！何とかしてよ！」  
「ナミちゃん。諦めよう。てかもっ金魚の中だしさ。」

「うう・・・。もういや・・・。」

『覇国!!!』

ドンッ!

一気に周りが明るくなる。

「うまく抜けたみたいだな。」

ナミが座り込む。

「私、さっきので疲れちゃった。キラ、あとよろしく。」

ナミからエターナルポースを渡される。

「ああ、どうしたんだ？顔色わるいぞ？」

「大丈夫。あんたの時みたいにすぐよくなるわよ。」

「いや、あれは血清があつたからであつて……。」

「ビビ、やっとアラバスタへ帰れるわね。」

「ええ、でもキラさんの言うとおり顔色悪いみたいだけど。」

「ちょっと休めば大丈夫だから……キラ部屋まで運んでもらうていい？」

「ナミちゃん……。すごい熱だ。」

「……みんな！集合！」

「ん？どうした？キラ。」

「ナミちゃんがどうやらたちの悪い病気にかかったらしい。」

「な、何い！？ナミさんは、大丈夫なのか！？」

「診てみないとなんとも言えない……。」

「部屋に運ぶぞ！あと、毛布とかあるだけ持ってこい！」

「キラ！ナミさんは、大丈夫なのか！？」

「だあ！今から診るんだろうが！しつこいぞ！どけサンジ！」

俺は、ナミを部屋へと運ぶ。

ナミの症状を診断する。

「……これはただの風邪とかじゃないな。」

「ええ、おそらく異常気候による発病。」

「いや、それも違う。」

「えっ？」

「俺は、治療はできないが診断はできる。」

「でもよ！キラ、アラバスタまで行けば医者はいらるだろ？」

「姫、アラバスタまでどれくらいかかる？」

「一週間以上はかかるわ……。」

「そうか。俺がとりあえず言える事は、一週間ももたないってことだ。」

『……！！！？？』

「そ、そんな……。」

「キラ！どうにかできないのか！？お前なら出来るんだろ！？」

「悪いが、診断だけだ。俺は、治療は出来ない。」

「じゃあ、診断結果は!？」

「ケスチア。有毒のダニだ。」

「ケ、ケスチア?」

「ああ、この虫にやられたら5日だ。」

「5日たてば治るのか!？」

「違う。5日の命だと言ってんだよ。」  
『なっ……!?!?』

「いいから……。アラバスタに向かって……。」

「ナミちゃん……。」

「キラは、医者じゃないんだから信用できないわ……。」  
「……。」

「キラ、デスクの新聞取ってきてくれる?」

「ナミちゃん、あの記事を姫に見せるのか?」

ナミは、コクリとうなずく。

俺は、ビビに新聞を手渡す。

「悪い、姫。なるべく知らせないほうがいいと思って……。」

「そ、そんな……。」

それは、アラバスタの凶報を知らせる新聞だった……。

「そういうことでまっすぐアラバスタに向かって頂戴。」

ナミは船室から外に出る。



俺は、黙って後を付いていく。

「ちよっと……この船……。」

「ああ、ロロノア……。エターナルポース貸してくれ。」

「あ？ほらよ。」

「ロロノア。これ、変な方向進んでるぞ。」

「何言ってるんだよ。俺は、雲を目印にまっすぐ進んでるぞ。」

「はぁ……。みんな。仕事だぞ。」

俺の掛け声で一齐に部屋から出てくる。

「とりあえず、俺の言ったとおりに船を動かしてくれ。」

船の進路を修正する。

「姫……。どうする？アラバスタへまっすぐ行くか？」

俺は、ビビに質問する。

「ええ、行きましょう！ナミさんの病気を治してからアラバスタ

へ！」

「姫……。」

「この船の最高速度は、それでしょ？キラさん。」

「そのとおり。俺の航海術じゃ最高速度はでないんだよ。」

ナミに笑顔を向ける。

「君の航海術じゃなきゃ。」  
「バカ……。」

それだけ俺に言い倒れそうになる。

「おっと。無理するからだよ。」

船室へとナミを運びベットに寝かせる。

「みんなが医者探してくれるってさ。」

「キラ……。」

「ん？なんだ？」

「さっきの本当……。わ、私……。死んじゃうの……。？」

涙目になりながら俺に尋ねる。

「残念ながら本当だ。」

「そう……。」

「でも安心して。」

「絶対に医者見つけてやる。死なせたりなんかしない……！」

俺が強い口調でそういうと安心したのか眠りに落ちていった。

第二十話 一難去ってまた一難（後書き）

キラは、すべてにおいて完璧ではありません。

航海術も多少。医術は、診断だけ。

こういう器用貧乏仲間にもいいんじゃないかな？

## 第二十一話 フリキのワポル（前書き）

リトルガーデン出航後。

ナミが倒れてしまう。

キラは、診断は出来るが治療はできない。

ナミの治療をするため医者を探すことに・・・。

## 第二十一話 フリキのワポル

ナミが寝込み医者を探して海を放浪する麦わら一味。

晴れから一転、天候が変わり雪。それも吹雪だ。

まったくついてねえ……。俺は、心の中で文句を言う。

「キラ。」

「どうした、ロロノア？島でも見えたか？」

「いや、そうじゃない。海の上に人が立ってるんだ。」

「は？ついに寒さで幻覚でも見たか？」

「いや、あれ見てみる。」

海の上に人が立っている……。 「えっ!？」

俺は、目をこすり再び見てみる。

「た、立ってるな……。」

「だろ……。」

海の上にいる男が声を掛けてくる。

「今日は、冷えるな。」

「それって……。足ちよつと海に浸かっているからじゃないか？」

「……………」

ザバアアアアン!!!  
水中から海賊船が現れ、何十人も船員がメリー号に乗り込んでくる。

ガチャツ!!!

銃を構え俺たちを取り囲む。

「お前等ドラム王国へのログポースかエターナルポースは、持っていないか？」

ガタイのデカイおっさん（ワポル）が剣を食べながら尋ねてくる。

「ロロノア、あいつ剣食ってる。」

「ああ、変な奴だな。」

「とりあえず、残念だが持っていないよ。」

「そうか、じゃあこの船と宝を頂こうか。」

「は？何を言っている？」

「その前にちよつとまで小腹が空いてな。」

それだけ言つと船を食べ始める。

バキバキ!

ボキメキツ!

「あいつ……。俺等の船を……。おい!やめろ!」

無視して船を食べ続ける。

「野郎……。」

俺は、ワポルの肩を掴む。

「やめろと……。言ってるだろ!!!」

ボゴン!!!

ワポルの腹部に拳を叩き込む。

「グフツウウウウ!!!」

食べた船の材料を吐き出し悶絶する。

「貴様!ワポル様に何をする!」

「ん?ワポル……。ドラム王国……。そうか、無能王か。」

「な、ワポル様を愚弄するのか!？」

「愚弄?ハツ!真実を言っているつもりだが?」

「ルファイ!あのバケモノ。吹き飛ばすぞ。」

「おう!」

『ゴムゴムのバズーカ!!!』

『双・剛砲!!!』

『吹き飛ばえええええ!!!』

『うおおおおお!!!』

ズドゴオオオオオン!!!「オブツ!!!!!!!」  
二人の攻撃がワポルの腹部に入り吹き飛んでいく。

ワポルが吹き飛んでいき、完全に見えなくなる。

「星になったようだな。」

「俺たちの船を食うからだ!」

『ワ、ワポル様—————!!!』

俺は、残った奴等に微笑みながら質問する。

「まだ、やるか?」

『た、退却—————!!!』

残党は、急いで船に戻り逃げていく。

「おい、ドラム王国に行くぞ。」

俺は、唐突に話を切り出す。

「ドラム王国?そこには医者がいるのか?」

「ああ、俺の知り合いがいる。」

「へえ、名前は?」



「Dr・くれは。腕は確かだ。保証するよ。」

船は、一路ドラム王国を目指す。

## 第二十一話 フリキのワポル（後書き）

次は、いよいよチョッパーが出てくる？と思います。

あまり長文書けなくて申し訳ないです。

第二十二話 チョッパー登場（前書き）

ナミを治療するためドラム王国を目指す麦わら一味。

## 第二十二話 チョッパー登場

一路ドラム王国を目指し進み続ける麦わら一行。

航海を続けるも辺りが暗くなり進むのが困難な状態になってくる。

ナミの指示なしで進むのは危険だと考えた俺は、停泊を決断する。

「さすがにナミちゃんなしで夜の航海は、きびしいか……。」

「でも、キラもある程度の航海術は持ってるんだろ？」

ゾロが俺に尋ねる。

「まあな。だけど看病もしながらじゃさすがにな。」

「そうか。お前に何もかも任せっぱなしだな。」

「ロロノアに看病は、怖くてさせられないよ。」

「ちげえねえな。」

俺とゾロは、顔を見合わせ二人でクスクス笑う。

「錨、下ろしてくれるか？ロロノア。」

「了解。副船長。」

停泊し、海上で夜をすごす。

俺は、ナミの看病を続ける。

看病といっても出来ることは、濡れたタオルを取り替える。少しでも体を暖かくするように毛布を掛けなおすなどしか出来なかった。

苦しむナミを見て何も出来ない自分を悔いていた。

「・・・・・・・・タオル変えるか。」

俺が立ち上がり水を替えに行こうとすると腕を掴まれる。

「ナミちゃん……。水でも飲むか？」

ナミは首を横に振る。

「キラ、寝てないんでしょ？」

「ん？ああ、気にしないでいいよ。」

ナミの言うとおり。俺は、この2日ほとんど寝ていなかった。

明るい内は、航海と看病。夜になると看病。

誰かに看病を任せればいいのかもわからないが、

ウチの他の男供には怖くて任せられない。

なんといっても病気になるたことがない奴等だ、どんな看病をするのか。

女性にやってもらえばいいのでは？とは思ったが  
姫にやってもらわうわけにもいかない。

そうになると……。

俺しかないのであった。

「まあ、気にしないで寝てなよ。」

「うん。ごめんね。」

俺は「気にするなって。」とだけ言って水を替えに行った。

〜朝〜

「ふう……。2日寝てないと太陽がまぶしいもんだな……。」

「お疲れ様。」

ビビが俺に声を掛ける。

「あ、姫。起こしてちゃったかな？」

「ううん。目が覚めただけ。」

「キラさんは、すごいわ。」

「どうしたの唐突に。」

「だって、何でもできるじゃない？」  
「そうでもないよ。器用貧乏ってやつかな。」

俺は、笑顔でビビに答える。

「フッフ。ナミさん、早く治るといいわね。」

「ああ、俺もそろそろゆっくり寝たいし治ってもらわなきゃな。」

「キラ！島が見えたぞ！」

「そうか！お前等、入港の準備をするぞ！」

俺は、みんなに入港の準備をさせる。

島に上陸しようと船をつけるが

「待て！海賊供。」

「ん……？あれは確か……。」

「俺たちは、医者を探しに来たんだ。」

「その手には、のらねえぞ！海賊め！」

どうやらルフィの言うことは信用してもらえないようだ。

「仕方ない……俺は、ルフィの前に出る。」

「久しぶりですね。ドルトンさん。」

「き、君は……あのときの……!？」

「ええ、そうです。」

「いいだろう。村に案内する。」

『ド、ドルトンさん!?!』

「忘れたのかみんな。一度村が海賊に襲われたとき助けてくれた少女だ。」

「あ、あのとときの娘か……。」

「うん。男だけどね。……ま、まあ、いいや。」

俺は、みんなの方を振り返り

「村に入れそうだな。ナミちゃんを連れてきてくれ。」

『キラー……!』

みんなが俺に抱きついてくる。

「お、おい。暑苦しいって。」

「ったく、何やってんだか……。」

ゾロが呆れた顔でこちらを見ていた。

く雪の降る村ビッグホーンく

村に着くと「とりあえず、私の家へ。」

俺たちは、ドルトンの家へとお邪魔する。

「早速だがドルトンさん。Drくれはに会いたいんだ。」

「病気の仲間がいるんだっただな。」



「彼女なんです。熱は、42度くらいだったかな？」  
「42!?!これ以上上がると死んでしまうぞ!」

「それは、百も承知です。だからこそDrに治療をお願いしたいんです。」

「今は、ドラムロッキーの城にいる。」

ドラムロッキー……中央に高くそびえ立つ山。

「そうか……。よし、いつてくる。」

俺は、ナミを背負い家から出ようとする。

「な!?あそこまで病人を背負っていくのか!?!」  
「それ以外に手段はない。違いますか?」

「た、確かにそうだが。」  
「一刻を争うんだ。俺は行く。」

俺が、ドラムロッキーへ向かおうと歩き始めたとき。

『キラ!』

「ルフィ……サンジ……。」

『俺たちも行くぞ!!--!』

「フフッ。いいぞ。行こう!」

『おう!』

俺たちは、急な斜面を駆け上がる。

「キラ、なんかフラフラしてるぞ。」

「寝てないからな……。気にするな問題ない。」

「無理すんなよ。ナミさん落としたら洒落にならねえぞ。」

「わかってる。」

ガルルルル！

凶暴ウサギのラバーンか……。

俺たちは、無視して進む。

ガウ！ガウ！

ラバーンが周りを飛び回っている。

「サンジ……。」

「ああ、鬱陶しいんだよ……！！」

ドゴン！

ラバーンを蹴り飛ばす。

「よし、進むぞ。」

俺たちは、再び進み始める。

グオオオオ！

唸り声とともに目の前に巨大なラバーンが何頭も現れる。

「さ、さっきのは、子供だったわけか……。」「  
「キラ！お前は、手を出すな！ナミさん落としたら洒落に……。」「

「わかってるから遠慮せず戦え！」

『お前戦う気無かっただろ！！！！』

「よし！やるぞルフィ！」

「おう！」

ルフィとサンジ戦い、道を空けてくれる。  
どンドン先へ進むがあきらめずに追ってくるラバーン。

「あいつらもしつこいね。」

「ん？キラ、あれなにやってんだ？」

ポフンポフン！

ラバーン達は、雪の上で何度もジャンプを繰り返している。

「やべえな。あれ、きつと雪崩起きるわ。」

『なんでテメエは、そんな冷静なんだよ！！！！』

ゴゴゴゴゴゴ！

雪崩が起き、こちらに向かってくる。

「逃げるぞ！」

俺たちは、一目散に雪崩から逃げる。

「チツ！ルフィ！」

俺は、ナミをルフィに預ける。

「とりあえず逃げろ！途中で拾ってやる！」

「えええ？ああ、わかった。」

ルフィとサンジは、雪崩を避けるようにして逃げていく。

自分の指を噛み血を滴らせる。

雪崩が俺に迫ってくる。

「つたく……。こんなのは、どうかな？」

血液が板の形になって行き、俺はその血の板へと飛び乗る。

「うまく行くのか……？」

血の板で雪上を滑走する。

「よし！行ける！行けるぞ！……ルフィ！！！！」

「ん？キラ！」

「手を伸ばせ！」

ルフィが俺の手を掴み板に乗る。

「おおおお！おもしれえ！！！！！！」

「そんなこと言ってる場合か！サンジは！？」

「わかんねえ！途中ではぐれた！」

「チツ！とりあえず安全な場所まで行くぞ！」

俺たちは、安全な場所まで移動する。

「ふう……。」

『いきました！ワポル様！』

後ろから声がする。

「ルフィ……。先行ってる……。」

「おう。わかった。」

俺は、声の主達を待つ。

「この前は、よくもやってくれたなあ。」

「よお、駄目王ワポルじゃないか。」

「貴様！ワポル様に向かって！」

「黙れよ……。」

俺は、血で大鎌を造り上げる。

「俺は、寝不足でイラついてんだ……。手加減できないぞ……。」

鎌を一振りして風圧で周りの木を吹き飛ばす。

「なっ！？わ、ワポル様……。どうしましょう……。。」

「よ、よーし。お前は、許してやるぞ。」  
「は？」

「お、お前は見逃してやるといったんだ。」  
「はあ…………。そうですか…………。」

「で、では！また会おう！」  
「え…………。また会うんだ…………。」

ワポルは、急いで逃げていく。

「さて…………。」

俺は、ドラムロッキーを見上げる。

「登るのか…………俺…………。」

「行くしかないよな…………。」

ドゴン！

ドラムロッキーの岩に拳を突き刺す。

「よし、これで登っていくか。」

ドゴン！ドゴン！

次々に拳を突き刺し、山を登っていく。

途中で眠気が襲ってくる。

や、ヤバイ…………。このままじゃ、落ちる…………。

眠気を我慢して、なんとか頂上の城にたどり着く。

ふう……………ここか……………。

「ヒツヒツヒツヒ。久しぶりだね。キラ。」

「Dr。俺の仲間来てるかい？」

「ああ、あの麦わらの小僧だね。」

「そう、そいつら。」

「おいで。中にいるよ。」

俺は、Drに連れられ城の中に入る。

ササッ！

ん……………？何かいたような……………。

「チョッパ―出てきな！」

「チョッパ―？Drついに助手とつたんですか？」

「ドクトリーヌ……………俺……………。」

「大丈夫だよ。こいつも化物さ。」

「ひどいな。相変わらず。」

「化物って……………女だろ？」

鹿のような生き物が顔を出す。

「女じゃねえよ。ちゃんとした男だよ。君がチョッパ―？」

「お、おう。」

「フツツ……。俺は、キラ。よろしくな。」

「う、うん。よろしく。」

俺が握手を求めると出てきて俺の手を掴む。

「ドクトリーヌ、キラのどこが化物なんだ？」

「こいつはね、普通の人間なら1年はかかる怪我を1週間で治したのさ。」

「あれは、Drの治療がよかったですよ。」

「何言ってるんだい。あたしが治療して完治まで1年ということだよ。」

「へえ、キラの回復力は、すごいんだな。」

「チョッパ、誉めてもなにも出ないぞ。」

「そうだ、女の子いなかった？」

「ああ、あの娘かい？」

「そう。やっぱケスチアだったでしょ？」

「さすが目だけは、確かだね。」

「キラは、医者なのか！？」

「チョッパーほどすごいことはないよ。」

「う、うるせえ。すごくなんかねえよバカヤロウ。」

「ハハッ。おもしろい奴だな。仲間にもなるか？」

「えっ？仲間ってことは海賊……？」



「そう、海賊。」

「で、でも俺……。バケモノだし……。」

「俺だってバケモノさ。」笑顔をチヨッパ―に向ける。

「まあ、考えといてくれよ。チヨッパ―。」

俺は、ナミの部屋へと向かった。

## 第二十二話 チョッパー登場（後書き）

チョッパー登場です。

結構長文になってしまいました。

今回は、あんまり見せ場がなくてすいません。

↳ R U I N ・ 禁断の果実の説明↳ (前書き)

R U I Nと禁断の果実についての説明が足りなかったようなので

設定説明をしていききたいと思います。

〈RUIIN・禁断の果実の説明〉

〈RUIINについて〉

RUIINとは、日本語役にすると崩壊（第二話から登場）

その名が示すように、世界を崩壊させることが目的です。

世界崩壊後、自分達の楽園を造るがモットー。

世界の崩壊が目的なので海賊・政府・革命軍を敵視しています。

立場的に世界政府・革命軍とは、また違った組織または軍となっています。

彼等の武器は、科学力。

悪魔の実の能力者対策の為、武器という武器に海楼石が使われている。

代表例として：キリク使用の白刀（第十七話で登場）

〈禁断の果実〉

RUIINの科学力を証明するものとして禁断の果実がある。

禁断の果実は、悪魔の実を研究し造られたもの（第十九話で登場）

悪魔の実と違い、泳げなくなる・海楼石などの弱点が存在しない。

弱点：防御面の不安がある（打撃・斬撃が通用する。）

禁断の果実を食べられるのは、RUIINでも部隊長より上の階級の  
み。

く R U I N ・ 禁断の果実の説明 く (後書き)

説明を書いてみたんですが・・・。

わかりにくいでしょうか・・・。

うーん・・・どうだろうか・・・。

何か疑問点があったらお待ちしております。

ネタばれにならない程度ならば書きたいと思います。

質問・感想お待ちしております。

第二十三話 キラ離脱？（前書き）

ナミの治療にドラム王国を訪れた麦わら一味。

キラは、チョッパーに会い仲間にならないかと誘う。

## 第二十三話 キラ離脱？

「ここか……？」

俺が部屋のドアを開けるとナミが眠っていた。

熱は……。

俺は、ナミの額を触る。

「どうやらだいぶ熱も下がったようだ。さすがDr。腕は、衰えてないな。」

「キラ、起こしちゃダメだぞ。」

チヨッパーが俺に声を掛ける。

「大丈夫。寝てる子を無理矢理起こすような男に見えるか？」

「全然見えないな。」

「だろ？とりあえずここで様子でも見てるさ。」

俺は、近くにあった椅子に腰をかける。

「じゃあ、俺。水汲んでくる。」

「ああ、俺が見てるから行ってきな。」

チヨッパーが水を汲みに部屋をでる。

しばらく手近にあった医学書などに目を通す。



「ほう、なるほど……。全然わからん。」

俺は、本を合った場所に戻し体を伸ばす。

「んーーーー。」

2日寝ていなかった俺は、椅子に座り眠ってしまつ。

すーーーー。。。。。

1時間ほどたつただろうか。。。

「ん。。。。。あれ。。。？」

目を覚ますと毛布が掛けられていた。

「これは。。。。。」

「キラ、起きた？」

ナミが俺に声を掛ける。

「ナミちゃん。。。。起きて大丈夫か？」

「ええ、もうだいぶ楽になった。」

「そうか。よかった。」

「心配した？」

「当たり前だろ。」

「。。。。ほんとに!？」

「ん？ああ、みんな心配してるけど……。」  
「……そうじゃなくて。もう、いいわ。毛布返して！」

「え、あ、ああ掛けてくれたんだな。ありがとう。」

ナミに差し出すと毛布を俺の手から全力で奪い取り。  
反対側を向いて寝てしまう。

「な、なんなんだよ……。」

ボタン！

いきなり部屋のドアが開く。ドアのほうを見ると……。

「ゲツ！お、おまえは……！？」

「あれ？元国王ワポル様じゃないですか？」

ワポルが俺の顔を見て血の気が引いているようだ。

「ぶ、武器庫に用があるだけだ！貴様に用はない！」

「は？それを俺に言っただろう……。」

「だ、だから貴様は、見逃してやる。」

「言ってることがよくわからないんだが……。」

俺を無視してナミに目をやる。

「む！その女！貴様、麦わらの仲間だな！」

「だったら何よ……！」

ナミが鬼の形相になっている。

「ナ、ナミちゃん……。かわいい顔が台無しだぞ……………」

「え！？今なんて!？」

「貴様！俺を無視するな！」

「ちよつと黙ってて！」

「な、なに！？貴様！無視するな！」

ワポルがナミに飛び掛る。

「きゃああああ！」

「ワポル……………」

ガシッ！ドツゴン！

俺は、ワポルの脚を掴んで地面に叩きつける。

「うぶっ！き、貴様は見逃すと言っただろう！」

「うるせえ……。ちよつと来い！」

ワポルの脚をつかんだまま部屋の外に出る。

その間ワポルが色々な所に頭をぶつける。

「お、おい持つならせめて首か手に……………」

「ルフィ！いるのか！」

ルフィが階段を上がって向かってくる。

「おお！邪魔口ここにいやがったのか！」

俺は、ルフィの頬をつねり……。

「ルフィ……。こいつとつとと片付ける!」

「ふぁい、なんで怒ってるんですか?」ルフィがつねられたまま話す。

「こいつ、病人にナミちゃんに手を出そうとしゃがった。」

「な、なんだって……。邪魔口……。お前!」

「お前がすぐに倒さないからだろ……。」

ワポルの脚を離し。

「おい、ルフィと戦え。」

「へ?」

「へ?じゃねえだろ……。」

俺が口調を強めると一目散に上層に走っていく。

それを見届けるとルフィの方を見る。

「ぶっ飛ばしてやれ!」ニツと俺は笑う。

「おう!まかせろ!」

ルフィもワポルの後を追って上層へと向かっていった。

俺は、ルフィを見送り部屋に戻るがナミがいない。

「つたく・・・病人のくせに・・・。」

とりあえず椅子に座り仮眠の続きを取ることにした。

すーすー・・・。

しばらく経つと・・・。

「キラ、あんたが変わりに助手でもやんのかい。」

Drの声が聞こえる・・・。

「ん・・・。ああ、Dr・・・。おは・・・あれ？あいつらは・・・。」

「ああ、うちのトナカイを連れて出て行ったよ。」

「そうか。チョッパー・・・。決心してくれたか・・・。あ、あれ？」

「あんたが昔、あたしの所に来たときボロボロだったねえ。」

「あ、ああ。そうなんだが・・・。置いてかれてるよな・・・。俺・・・。」

「ん？助手やるんじゃないのかい？」

「やべえ・・・。というか、ありえないだろ！」

俺は、急いで城を飛び出す。

「・・・あ。そうだ！」

Drの方を向き直る。

「何故、あるとき俺を助けたんです？」

「ふん、きまぐれさ。」

「言うと思ったよ……。また会おう！Dr！」

俺は、手の平に剛を掛けロープウェイのロープを掴み山を降りていく。

「バカ息子を頼むよ、キラ……。」

あいつら……。ゆるさん……。

俺は、船着場へと走る。

くゴーイングメリー号く

「キラの奴……。遅いな。」

「ドクトリー又と色々話があるんじゃない？」

「久しぶりの再会らしいしな。」

「おい、来たんじゃないか。」

俺は、船を発見すると……。

「てめえら！！！！起こしやがれ！！」

大声で叫ぶ。



「エッ……どうした……」

「あんたが話したいことあると思ったから出航遅らせたのよ！」

「ううっ……。こうしてる間にもアラバスタが……」

「そ、それ！俺のせいじゃないだろ！お前等の勘違いじゃねえか

！」

「昔、言えなかった感謝の言葉とかあるだろ？」

「それは、昔に済ませてるよ！」

「あゝあ……。時間の無駄だったな……」

「そうね。」

「……。いや、なんか気を遣わせて申し訳なかったです。」

ジロツ！

みんなの視線が痛い……。俺が、悪いのか……？

はぁ……。俺は、地面に座り込む。

ポムポム。

誰かが俺の肩を叩く。

柔らかい小さい手……。

「チョッパー……。慰めてくれるのか……。」

チョッパーが俺の肩を叩いていた。

「キラ、元気だせ。俺は、怒ってないぞ。」



「ありがとう。チョッパー。お前は、いい奴だ。」

モフッ!

チョッパーを抱きしめる。

なんだこれ……。すげえフカフカだ……。  
高級ベットみたいだ。

「キラ。くすぐったいぞ。」

「ああ、悪い悪い。」

「キラ。元気になったか？」

「おう。ありがとう。」

チョッパーが去ろうとしたとき声を掛ける。

「そうだ、チョッパー。」

「ん？なんだ？キラ。」

「これからよろしくな。」

「おう、よろしく。」

さて……。俺は、コートを脱ぎナミの元へ行く。

「ナミちゃん、進路は……。アラバスタでOKだな。」

「ええ、体調もバッチリ。行くわよ。アラバスタ。」

俺は、全員に声を掛ける。

「よし。お前ら！アラバスタ行く準備は、出来てるな！」

『おうー!』

船は一路アラバスタへ向かう。

第二十三話 キラ離脱？（後書き）

チョッパ―仲間になりました。

キラ寝てばかりです。まあ、2日寝ないってきついですよ。

正直1日でもつらいです。

感想・一言お願いします。

## 第二十四話 祝いの歌（前書き）

チョッパーを仲間にし、アラバスタへ向かう。

その前に仲間が増えたということは……？

## 第二十四話 祝いの歌

アラバスタを目指し帆をすすめる中……。

船上では……。

「ええ〜新たな仲間トニー・トニー・チョッパーに……」

『カンパーーーーーーイ!!!!!!』

宴が行われていた。

ルフィは、鼻に棒を突っ込み大騒ぎしている。

「チョッパーお前も飲め飲め!」

ウソップがチョッパーに声を掛ける。

そんな中……。

俺は、一人船首に立ち空を見上げる。

「こんな所で桜が見れるとはな……。」

Drがチョッパーの旅立ちの饞に雪に咲かせた桜……。

「すげえ……。」

ただただ空を見上げていた……。

「なあなあ、キラ。」

俺が感傷に浸っていると誰かが声を掛けてくる。

「まったく、なんなんだよ。」振り向くと……。

チョッパーがルフィのマネをして鼻に棒を突っ込んでいる。

「トニー……。何をしている……。」

「えっ、キラが元気ないから。元気付けようと思って。」

「ふふっ、ありがとな。」

俺は、チョッパーの頭を撫でる。

「さて、お前の為に歌わせてもらおうよ。」

ギターを持ちみんなの輪に入っていく。

「おっ！キラ！歌え歌え！」

「よっ、待ってました！」

「クエエエエー！！！」

「カルーもキラさんの歌好きなの？」

「クエッ。」

「”好き”だつてさ。」

「そうなの。キラさん歌って。」

俺は、みんなに急かされてギターを弾き始める。

「じゃあ、まずは！新たな仲間！祝いの歌を！」

祝いの歌を歌う。海上に響くように……………。

「じゃあ！それでは、もう一度！新たな仲間チョッパに……………」

『カンパー……………イ！！！！』

本日2度目の乾杯の時には……………日が昇り始めていた……………。

第二十四話 祝いの歌（後書き）

すぐすぐアラバスタへ入ろうか悩んでいます。

だが・・・ネタが・・・。



第二十五話 BW（前書き）

チョッパー歓迎の宴も終わりアラバスタへと急ぐ。

## 第二十五話 BW

船で事件が起きた。

8人分の食料が夜中の内に消えてしまったのだ。

犯人は……

「ルフィ……。口のまわりに何かついてないか？」

「しまった！食べ残し！」

「……サンジ。犯人いたぞ。」

「さすがキラ。どいてろ。」

サンジとルフィから離れる。

『てめえかあああああ！！！！』

ドゴオオオオオオン！「ぐえっ！」

サンジがルフィを蹴り飛ばす。

「ったく。……ん？」

ウソップ、チョッパー、カリーの口がモゴモゴしている。

「ナミちゃん。あれ。」俺は、3人？を指差す。

「ええ、わかってるわ。」

ゴスツ！『ぐえ！』  
床に転がる3人。

「よし、とりあえず事件解決だな。」

「そうね。じゃあビビ、改めてBWについて教えて。」

「ええ、まずは……。」

俺たちは、ビビからBWについての情報を聞く。

「トップは、クロコダイルか。」

「クロコダイルは、俺がぶっ飛ばす！」

ルフィが意気込む。

「期待してるぜ。 船長。」

「おう！まかせろ！」

「さて……。」

立ち上がり船室へと向かう。

「キラ。今回RUINは、絡んでないのか？」

船室に入ろうとした俺にゾロが声を掛ける。

「絡んでるだろうな。」

「そうか。」

ビビが話に入ってくる。

「キラさん、RUINを知ってるの？」

「ああ、元はその幹部だった。」

「お、お前幹部だったのかよ!？」

ゾロが驚きの声を上げる。

「そういえばみんなにその話はしてなかったな。」

「キラさん、クロコダイルにはミス・オールサンデーの他にパー

トナーがいるの。」

「それがRUINの人間だと？」

「イガラムが調べてくれたわ。」

ビビが俺に資料を渡す。

「ああ。旧友だよ。」

「そう……。」

「ルフィ。コイツは、俺が倒す。」

俺は、ルフィに資料を見せる。

「ん？わかった。」

「キラさん、この男は……。」

「ああ。豪腕のロベルトだ。」

ロベルト

R U I N 中尉

豪腕のロベルト

身長：250cm

特徴：筋肉隆々、角刈り

懸賞金：7800万ベリ

---

「まさか、あいつがクロコダイルとね・・・。」  
「おい、キラ。」

「なんだ？ロロノア。」  
「コイツR U I Nの人間なんだろう？だったらなんで懸賞金ついてんだ？」

「R U I Nは、政府じゃない。テロリストだ。懸賞金がついてて普通なのさ。」

「確かルインの存在を知ってる奴は少ないんだろ？」

「ああ、ここがイーストブルーならな。」

「グランドラインでは、有名なのか？」

「名前だけならな。ただ、組織体系を知ってる奴は一握りだろうな。」

「そうか。」

「イガラムさん、よくこいつがルインだとわかったな。」

「ロベルトが自分で教えてくれたそうよ。」

「なに！？バカ……。殺されるぞ……。」

「ええ、イガラムよく無事だったわね。」

「イガラムがじゃない。ロベルトがだ。」  
「え？」

「自分がルインだと公言した時点で殺される。」  
「でも、彼はいまだに生きてるわよ？」

「なぜだ……？」

俺は、ブツブツ言いながら船室に入る。

椅子に腰を掛け天井を見上げる。

「ロベルト……。」

「ロベルトがどうしたんですか？」

俺の目の前にビビの顔が現れる。

「うおっ！ど、どうした姫!？」

「なにか、キラさんが思いつめてるなと思って。」

「別にそんなことはないよ。」

「そうですか？」

シーーン……。

謎の沈黙が続く……。

そういえば姫とちゃんと話したことはないな……。

「キラさんは、恐いとかないんですか？」

「えっ？」

「これから行くのは戦場ですよ。」

「何言ってるんだよ。戦場じゃない君の国だろ？」

「もう、私の知ってるアラバスタじゃないわ。」

「戦争、止めるよ。俺たちが。」

「キラさん……。」

「元通りになるよ。こんなに姫様が頑張ってるんだから。」

「ありがとう。」

俺は、笑顔でビビの肩をポンポンと2回ほど叩き船室から出て行く。

ナミがすれ違い様船室へと入っていく。

「ビビっ？どうしたの？」

ビビは船室に立ち尽くしていた。

「キラさん……。素敵ですね……。」

「な！？そ、そんなことないんじゃない！？」

「そう？仲間思いだし歌ってる姿も……。」

「いや、でも！貧乏よ、キラって！」

「そうなんだ。」

「そ、そうよ！キラがお金持ってるの見たこと無いもの。」

・・・クシユン！

「キラ、風邪か。」

「ん？大丈夫だよチョッパ！心配すんな。」

船は、着々とアラバスタへ向かっている。



第二十五話 BW（後書き）

はい。ハーレムっぽくなってきたかな？

RUIINについてなんですが以前説明書いたんですが、

理解できましたでしょうか？

第二十六話 Mr 2 (前書き)

いざ、アラバスタ!

第二十六話 Mr 2

俺は船室で紅茶を飲みくつろいでいた。

「た、大変だ！キラ！キラーーー！」

ルフィが俺を呼んでいる。

「なんだよ。どうした？」

飲みかけの紅茶を置いて船室から出る。

「オカマが釣れた！」

「はい？」

食料が底を付いた為、釣りをしていたルフィの竿にオカマが掛かっている。

「ふう〜。よくあることさ。」

『あるか！！！』

オカマが突っ込みながら海に落ちていく。

「俺、船室にいるから。誰か、助けてやって。」

船室へと戻り冷めた紅茶を飲む。

「………終わったかな？」

「キ、キラ！あいつMr2だったんだ！」

チヨッパーが船室に駆け込んでくる。

「そうか。で、どんな能力だ？」

「マネマネの実だつてさ！俺たちの顔になれるんだ！」

「OK。対策は、練つとくよ。」

「おう、わかった。」

チヨッパーがみんなの所に戻る。

「マネマネ……。」

「キラ、ちよつといいか。」

「ロロノア、どうした？」

「Mr2の対策なんだが……。」

しばらくゾロと話合つ……。

「それいいな。それで行こう。」

「じゃあ、やるか。」

俺とゾロは、船室から出てみんなに声を掛ける。

「お前等、左腕にこれを巻け。」

「いいか、左腕のこれが……。」

『仲間の印だ!!!』

「よし、上陸だ！」

俺たちは、アラバスタへの上陸準備を進める。

第二十七話 火拳のエース(前書き)

Mr2対策もバツチリでアラバスタへ上陸。

## 第二十七話 火拳のエース

アラバスタへ上陸した途端ルフィは、メシ屋を探して走って行ってしまった。

まったく……。統率の取れない奴だ……。

ルフィ以外の一行は、港町ナノハナのはずれにいた。

「素敵！こついうの好きよ！私！」

「サンジさん……。これ踊り子の衣装なんだけど。」

ナミとビビの二人は、サンジに服のお遣いを頼んだようだが……。

頼む相手を間違えたな……。あれは、露出多すぎだ。

「いいじゃないか？王女と海賊だつてばれなきゃいいんだろ？」

頭を抱え呆れた顔でサンジを見る。

「なんだよキラ。その目は。お前も踊り子の衣装がよかつたのか？」

ゴソツ！「いてええええ！！」

サンジに拳骨を落とす。

「バカなこといつてんじゃねえ。」

「何も殴ることねえじゃねえかよ。」

「ロロノア……。それは、どういうことだ？」

「言われても仕方ないけども、いいいたいのか？おお？」

「いや、そういうつもりで言ったんじゃない……。」

「問答無用！！！」

ドゴン！」「うぐー！」

ゾロにも拳骨を落とす。

「でも、キラ似合うんじゃない？」

「そうよ。キラさんなら何着ても似合うわ。」

「俺にも羞恥心があるんで。無理。」

「そう？」

「でもよ……。」

「なんだよ。サンジ。」

「お前等と来たら美女2人と比べて盗賊みただな。」

「おめえも似たようなもんだろうが。」ゾロが答える。

「ああ、サンジも変わらんぞ。」

「そろそろ、進むか。姫どうすればいい？」

「まずは反乱軍を止めるためにユバと言うオアシスに行きましょう。」

「OK。お前ら、ユバに向けて出発するぞ。」

「待て！隠れる！」

ゾロが俺を制止する。





「ルフィ。火拳のエースと知り合いなのか？」

「ああ。エースは、俺の兄ちゃんだ。」

「兄ちゃん!？」

「なんでその兄貴が偉大なる航路にいるんだよ。」

「ロロノア。おまえな。火拳のエースって言ったらそれはもう有名だろ。」

「そうなのか？」

「ああ。あの白髭の2番隊長だからな。」

「まさか、親父を知ってるとはな。」

「ん？エース！」

「よお、ルフィ。どうもウチの弟がお世話になってます。」

「ルフィお前、白髭海賊団に来ねえか。仲間も一緒にな。」

「ダメだ。」

「キラ!？」

「ルフィは、海賊王になる。俺が上まで押し上げる。」

エースをまっすぐに見つめる。

「へへっ……。いい目してんなアンタ。」

「……………」

「まあ、用事はこれだ。」

「なんだ？この紙切れ。」

「ビブルカードか。」

「ビブルカード？」

「ああ、その紙がお前とエースを引き合わせる。」

「ルフィ、お前いい相棒見つけたみたいだな。」

「エース……。おう！」

「コイツには、手を焼くと思うがよろしく頼むよ。」

エースは、自分のボート、ストライカーに飛び乗る。

「もう、行くのか？」

「ああ。俺は今、重罪人を探しててな。俺が始末をつけなきゃならねえ。」

「そうか、気をつけて。」俺は、エースに声を掛ける。

「キラ、だっ たっ け？」

「ん？ああ。」

「もう少し早く会いたかったな。」

「え？」

「初めてルフィがうらやましいと思ったよ。」

「フツツ、じゃあ2番隊副隊長の席でも空けといてくれよ。」

俺は、笑顔でエースにそう告げる。

「ああ、空けとくよ。じゃあな！」

「また会おう！エース！」

エースは、走り去っていった。

みんなが俺の顔を覗き込んでいる。

「な、なんだよ……。」

『キラ！行くなー！』

「へっ？」

「行かないでくれよ！この船にいてくれるよな？」

「そうよ！キラがいないと困ることがたくさんあるのよ！」

「あ、ああ。ジョークに決まってるだろ？俺が白髭に入れるわけがないよ。」

「本当？」

ナミがなぜか涙目で聞いてくる。

「あ、ああ。俺が好きなのは、お前等とこの船だよ。」

笑顔でみんなにそう告げる。

『キラーーーーー！！！！』

一斉に抱きついてくる。

「こ、こいつら……こんなキャラだったっけ？」

「まあ、いいか。大事にされるってうれしいことだよ……。」

俺はクスツと笑い、みんなに離れるように言う。

「さあ、反乱軍を止めるぞ。」

『おうー！』

反乱軍の暴動を絶対に止めてみせる。無駄な血を流させないために。

## 第二十七話 火拳のエース（後書き）

すみません。キラのせいでみんなのキャラが変化してます。

でも麦わら一味に大事にされてみたい！っていう願望を果たせた気がします。

第二十八話 仲間（前書き）

エースとの出会い、別れ。

反乱軍を止める為いざ、ユバへ

## 第二十八話 仲間

船で緑の街エルマルへ上陸し、そこからユバまで歩くルフィー一行。

サンサンと照りつける太陽の中、砂漠を渡る。

「クソツ……。あついな……。」

俺は、汗を拭う。

チョッパーは、完全に暑さにやられゾロに引っ張ってもらっている。ルフィーも、うめき声を上げている。

「キラさん、大丈夫？」

「姫……。心配には……及ばないさ……。」

「ルフィー、水もらえるか？」

「俺に先に飲ませてくで。」

「一口よ、ルフィー。口に含む程度。大切な水なんだから。」

「含む程度……。」

グビッ！

口がパンパンになるほど含む。

「含みすぎだ！」バシン！ウソップが突っ込む。

「ウブツ！はきだしちまったじゃねえか！」

ギヤアギヤア！



なんだかわからんがケンカになっている。

「と、とりあえず、水くれ……。」「

俺は、フラフラしながら水に手を伸ばす。

「ん？おい、キラ大丈夫か？」

「あ、ああ。水飲めばダイジョウブ……。」「

ドサツ！

「お、おい！キラ！」

「キラさん！？トニー君！」

「すごい熱……。熱中症だ！」

「とりあえず日陰で休みましょう！」

「よし！キラ！日陰で弁当だ！弁当食べば治るぞ！待ってる！」

ルフィが一足先に荷物を持って岩陰へ移動する。

ゴアーーーー……。。

何羽もの鳥が倒れている。

ルフィが岩陰から出てチョッパーを呼ぶ。

「チョッパー大変だ！死にそうな鳥がいっぱいいるんだ！

助けてやってくれ！」

「う、うん。わかった。」

「鳥！？まさか！？ルフィさん、その鳥って！」

「荷物が全部なくなってる……。」

「その鳥は、人を騙して荷物を盗む。砂漠の盗賊よ。」

サンジがルフィに掴みかかる。

「おまえ！鳥なんか騙されやがって！」

「仕方ないだろ！騙されたんだから！」

「てめえの脳は、鳥以下か！」

ギヤアギヤア！！！！

ルフィとサンジが騒いでる声が聞こえた……。

俺は、ゆっくりと目を開ける。

「俺は……？どうしてた？」

「気を失ってた。熱中症だ。」

「チョッパ……。」

「キラ、全然水飲まないからだぞ。」

「ウチの連中は、計画性ないからさ……。」

誰かが飲まなければ少しは、水も持つだろ……。」

「キラさん……。少しは……。」

「バカ！」

ナミが怒鳴り声を上げる。

「少しは、自分の心配もしなさいよ！」

ナミは瞳を潤ませながら俺の服の裾を掴む。

「心配したんだから……。」

「な、ナミちゃん……。ごめん……。」

「あ、あなたは、しばらく寝てなさい。」

「何いってんだよ……。お荷物になるわけには……。」

「キラ、少しは甘えるよ。」

「サンジ……。」

「お前の力が必要になったときには、叩き起こしてやるから今は休んでろって。」

「ウソップ……。」

「悪いな……。少し休むよ……。」

俺は、すこしの間だけこいつらに甘えて休むことにした。

俺が眠ってからどれほどたっただろう……。

なんだか周りが騒々しい……。

「ここは……。どこだ……?」

「キラ！まだ起きちゃダメだ。」

チヨッパーにまたベットに戻される。

「ここは？」

「ユバだ。」

「そうか……。ずっと寝てたのか……。」

「仕方が無いわよ。熱40度あったらしいわよ。」

「ごめんな、結局ユバまで休んじゃって……。」

「何言ってるのよ。私もドラム王国ではキラに面倒みてもらっ  
ちやったし。」

お互い様よ。「ニコッ。」

「ふふっ、ありがとう。」

「キラ、水飲んだら。もう少し休むんだぞ。」

「はいはい。ウチの船医は、おおげさだな……。」

〈翌朝〉

「どうも、昨晩はウチの連中共々お世話になりました。」

俺は、トトおじさんに頭を下げる。

「体は、もう大丈夫かい？」

「ええ、おかげさまで。」

「それでは、先を急ぐのでまた。」

「待ちなさいルフィ君。」

「ん？なんだ、おっさん？」

「これをもつていきなさい。」

「おお！水じゃん！」

「おい、ルフィ。水の何がめずらしいんだ？」

俺は、みんなから睨まれる。

「えっ……。はい、黙ってます。」

「真正銘ユバの水だよ。もつて行きなさい。」

「ありがとう！おっさん！」

反乱軍を止めるために俺たちは、進み始める。

「やめた。」

「ルフィ……。？」

「ルフィさん、反乱軍を止めなきゃ……」

「俺は、クロコダイルをぶつとばしてえんだ！」

「……………」

「反乱軍止めたらクロコダイルは、止まんのか？」

「ビビは、この戦いで誰も死ななきゃいいと思ってるんだろ？」

「それは……………」

「甘いんじゃないか？」

「人が死ななければいいと思って何が悪いの！？」

「人は死ぬぞ。」

「な……！」

「さてと……。」

俺は、その場から離れる。

「ちょっとキラ！どこ行くの！？」

「ん？クロコダイルのことさ。」

ルフィとビビがもみ合いになっている。

『俺たちの命くらい一緒に賭けてみる！仲間だろ！』

ルフィの叫びがこだまする。

ビビが顔をくしゃくしゃにして座り込んで泣いている。

俺は、ビビの近くにしゃがみ込んで話しかける。

「姫……。俺たちの絆……忘れてないだろ。」

左腕をめくりビビに仲間の印を見せる。

「俺たちは仲間だ。君の背負ってるもの俺たちも背負っよ。」

「キラさん……。うっう……。。」

ヒシッ……。

ビビが俺にしがみ付き再び泣き始める。

俺は、ビビの頭を撫でながら強い視線をルフィに向ける。

「ルフィ……。絶対に勝つぞ……。」

「おう！ビビ教える！クロコダイルの居場所！」

クロコダイル……。首洗って待ってるよ……。

第二十八話 仲間（後書き）

感想お待ちしております。



第二十九話 砂漠の歌（前書き）

ユバを出発し、クロコダイルを探す。

## 第二十九話 砂漠の歌

ククロコダイルの居場所は、現在のユバから

北へまっすぐ上った”レインベース”と判明した。

レインベースまでは、丸一日砂漠を歩かなくてはいけないらしい。

「キラ、またぶつ倒れるんじゃないか？」

「バカヤロウ。毎度毎度めんどろつかけられるか！」

俺は、自分に気合を入れて歩き続ける。

「俺も今日がんばるぞ！」

チヨツパーも意気込んでいる。

（2時間後）

「めんどろだけは……かけられねえ……。」

俺は、大粒の汗を流しながら歩き続ける……。

「キラ……あんた大丈夫？」

「心配には、及ばないよ……。」

「でも、キラさん。その汗の量。」

「べっぴんやら暑さに弱いみたいだな。」

「どっぴやらって、自分のことでしょ！」

「キラさん、これだけの暑さは、初めてなんじゃない？」

「そうかも……。」

あまりの暑さに立ちくらみをする。

「おおっと……。」

よろけてサンジにぶつかってしまっ。

「キラ、大丈夫か？」

「き、キツイかもな……。」

サンジに精一杯の笑顔を見せる。

ドキユン！

か、かわいい……。ハッ！

『くっ……。何でキラは女じゃねえんだあああ！……！』

サンジが急に叫び出した。

「どうした……？」

「わ、わりい。なんでもない。」

「サンジ君？どうしたの？」

「ナ、ナミさん！違うんだ！」

「は？何が？」

「エッ……。いや、なんでもない。」

「そう。みんな、ちよつと休みましょう。」

「ぜ、全力で賛成……。」

俺たちは、日陰で休むことにする。

「ふう〜。少しは、涼しいかな。」

「そうね。でも、まだ先は長いわよ。」

「おで、もうダメだ……。」

「チョッパー、頑張れ。今日は、荷物になるわけにはいかないぞ。」

「お、おう。頑張ろうキラ。」

しばらく日陰で休憩し再び歩き始める。

「ふんふふーん」

「キラ、急に元気になったな。」

「お、ウソップ。楽曲を考えながら歩くことにしたんだよ。」

「へえ〜。どんな曲だ？」

「砂漠の歌さ。」

「砂漠の歌ねえ〜歌ってみてくれよ。」

「未完成なんだが……いいぞ。」

未完成の歌を歌いながら砂漠を歩き続ける。

「いいじゃねえか！キラ！」

「うん。ギターも上手だけど、やっぱり声ね。」

「何言ってるんだ。キラの歌は、歌詞だろ。」

勝手に人の歌でギヤアギヤア騒いでいる。

「フフツ……。これならレインベースもすぐだな。」

俺は、こいつらがあきるまで歌い続けた。

第二十九話 砂漠の歌（後書き）

感想・質問お待ちしております。

**第三十話 豪腕のロベルト（前書き）**

レインベースを目指し砂漠を進む一行。

眼前にレインベースが……。

### 第三十話 豪腕のロベルト

く夢の町レインベースく

「やっとついたな。」

『水ーーーーー!!!!』

ルフィとウソップは勢いよく食事処へ走っていく。

「元気だな。あいつら。」

「おい俺達の分の水も頼むぞー!」

『まかせとけー!』

「本当に大丈夫か?あいつらに任せて。」

「大丈夫よ。お遣いくらい。」

「ん?キラ、どこにいくんだ?」

「ちよっと、散歩がてら探検してくるわ。」

俺は、町の中を歩き回る。

へえく……。広いなあ…………。

『いたぞー!麦わらの仲間だ!』

「海軍!?!」

『せ、旋律の…………。』



「ん？躊躇してる。逃げる。」

俺は、一目散に逃げる。

『お、追えー！！！』

一斉に追ってくる。

「クソ……。散歩のつもりが……。」

逃げている俺の前に誰がいる……。

「あぶない！ぶつかるぞ！」

「……。」

そいつは、拳を振り上げている……。あいつは……。

「ロベルト……。」

「師匠……。お久しぶりです……。」

「避けてください。」

「なに！？」

俺は、上空に飛び上がる。

ゴオオオオン！！！！

ロベルトが目にも留まらぬ速度で拳を振る。

ぐわあああああ!!!

轟音とともに海兵が吹き飛んでいく。

「くっ、豪腕のロベルト……。引けーーーー!!」

海兵が逃げていく。

「ふう、助かったぜ。ロベルト。」

「師匠……。あれぐらいあなたなら楽勝でしょう……。」

「無駄な戦闘は、極力避けてるだけさ。」

「……。そうですか。では。」

ロベルトは、俺に一礼してどこかに行こうとする。

あいかわらず律儀な奴……。

昔から上の人間に対してバカ丁寧だった。

「ちよつと待て……。お前、BWの一員なんだって?」

去ろうとしているロベルトに声を掛ける。

「なぜそれを……。!?」

寡黙な男が驚きの表情を見せる。

「あるスジの情報さ。実は俺クロコダイルに会いたいんだが  
会わせてくれないか?」

「それは……。師匠とはいえ出来ません。」

「いいじゃないか。お前に武を教えたのは誰だ？」

「師匠です……。」

「そうだろ。俺の頼み聞いてくれないのか？」

「その頼みは、聞けません……。」

「ロベルト……。力づくでも案内させるぞ？」

俺は、ロベルトを一睨みする。

「いいですよ……。俺に勝てればですが……。」

ロベルトが腕に力を入れると太い腕がより一層太くなる。

「ロベルト……。お前本気でやる気か？」

「ええ。」

「いいだろう。弟子がどれだけ強くなったのか見せてもらおうじゃないか！」

「RUINを抜けブランクのある貴方が中尉である俺に勝てるんですか？」

俺とロベルトは、お互いに距離を取り戦闘態勢をとった。

**第三十話 豪腕のロベルト（後書き）**

ロベルト登場です。

感想・質問お待ちしております。

### 第三十一話 弟子の成長（前書き）

元部下であるロベルトと接触したキラ。

ロベルト対キラの戦闘が始まる。

### 第三十一話 弟子の成長

「場所……。移動しましょう。ここじゃ人目に付き過ぎる。」  
「OK。そうしよう。俺らの戦闘だと死人がでるかもしれないしな。」

ロベルトが町のはずれへと俺を案内する。

「ここならいいな。」

「そうですね……。では……。」

ロベルトが構える。

破壊力はロベルトの方が上のはず……。

だがスピードなら……。

俺は一瞬でロベルトの背後を取る。

フォン！

回し蹴りをロベルトの横っ面目掛けて放つ。

「見えますよ……。師匠。」

ゴオオオ！

俺の足目掛けて拳を振り切る。

バゴン！「ぐっ！」

回し蹴りを拳で叩き落す。

距離を取ろうとするがバランスが崩れている。

一瞬の間を見逃さずロベルトが間合いを一気に詰める。

「チツ！剛！」俺はガードを固める。

ロベルトはガードなどお構い無しに殴りつける。

ドオン！！！！「がはっ……。」

俺は、10mほど吹き飛ばされる。

「クソ……。」

あのバカ……なんてパワーだ……。

「今度はこっちの……！あ、あれ？」

目の前からロベルトの姿が消えている。

「「こつちですよ……。」

背後にロベルトが立っている。

スピードが……あの頃より格段に上がっている……。

「師匠……いや、ユダ。あの頃の俺とは違うんですよ……。」

「ふふっ、確かに……。甘かったな俺……。」

「防御固めたほうがいいですよ……。」

「敵の指図は、受けねえよ……。」

「そうですね……。」

ロベルトが腕に力を込める。

メキメキッ……。

腕が赤く太くなっている。

まさか……ロベルトがここまでになってるとは……。

悪いな……。ルフィ……。海賊王までの道記してやれなさそうだ……。

「さよづなら……。尊敬するユダ……。」

「やめろよ……。照れるだろ。」

ロベルトの拳が振り下ろされる。

『豪撃……!』



ドゴオオオオン!!!

拳が俺の顔の横を通り地面にめり込んでいる。

「……………あ、あれ？生きてる……………」

「……………ユダは死んだ。」

「何？」

「次は、旋律のキラの挑戦待ってますよ……………」

それだけ言い残しレインベースへと戻っていく。

どうやら俺は、生かされたようだ……………。

「野郎……………生意気に……………」弟子の成長に思わず笑みがこぼれる。

「ロベルト中尉……………次は、アクセル全開で行かせてもらおうよ……………」

俺は、クロコダイルの経営するカジノ、レインディナーズへと向かった。

### 第三十一話 弟子の成長（後書き）

質問・感想待ってます。

出張で3日ほど更新できなさそうです。

申し訳ないです。では、いってきます。

## 第三十二話 死神のユダ（前書き）

ロベルトとの戦闘が終わりレインディナーズへ。

キラ対クロコダイル？

## 第三十二話 死神のユダ

「レインディナーズ」

「ここがレインディナーズ。」

「俺は、カジノの中へと入っていく。」

「クロコダイルはどこだ？」

「大きな扉を開ける。」

「そこにはビビとクロコダイル、ミス・オールサンデー。」

「そして・・・」

「キラ！助けに来てくれたのか！」

「お前ら・・・！？無事か！？」

「そこには檻に入れられているルフィ達と・・・」

「旋律のキラか・・・」

「スモーカー・・・」

「海軍大佐スモーカーの姿があった。」

「こいつらを檻から出せ。」俺はクロコダイルを睨む。

「その目……。お前、死神のユダだな。」

「は？何いってんだ、お前？」

「麦わら……。お前、知らねえのか？」

「こいつが偉大なる航路でなんと呼ばれていたのか。」

「……………」

「こいつは、死神と呼ばれていた。死神が乗った海賊船はことごとく沈む。」

「なぜだかわかるか？」

「わかるわけねえだろ！バカかお前！それよりこつから出せ！」

「まあ、聞け。沈む理由は簡単だ。こいつが仲間殺しだからさ。」

「お前！ウソつくな！キラがそんなことするか！」

「確かさ。かならずこいつだけ生き残りやがるんだからな。」

「そうだろ？ユダ。ああ、今はキラだったか？」

「キラ！何か言っつてやれ！」

「お前の言うとおりで。クロコダイル。」

『！！？』

「俺がR U I Nにいた時の任務は、海賊船に潜入し中から壊滅させること。」

そしてユダの名前の由来は・・・裏切りを主とした任務を得意とするからだ。」

「ハハハハ！麦わら！お前の船には死神が乗ってたのさ！傑作だ！お前はここで死のうが死ぬまいがどちらにせよ死神に殺された訳だ！」

『黙れ！お前！！！！』

「何？てめえ・・・小物の分際で俺に黙れ・・・だと？」

「キラは、キラだ！ユダなんて奴は知らねえ！」

「そうよ！キラが昔何をやってたかなんて関係ないわ！」「ルフィ、ナミちゃん・・・。」

「勝手にしろ。ユダ、行き場がなくなったら俺が拾ってやるよ。」「ユダ？誰だそれ？」

「何？」

「俺は、旋律のキラ。死神のユダなんかじゃない！」

ドゴオン！

クロコダイルの顔を殴り飛ばす。

「な、何？なぜだ・・・自然の俺が・・・！？」

「何故、砂のお前を殴れるのか教えてやるつか・・・。」

「守るものがある男の拳だからだ。」

「つまらねえ男になったもんだな……。ユダ……。」

「俺は、こいつらといるとおもしろいけどな。」

「キラ……。。」

「キラ〜！俺は、お前を信じてたぞ！」

ルフィがナミがウソップが涙を流して叫んでいる……。

あいつらの為にも……。

「クロコダイル！」

俺は、おもいきり拳を握り血を滴らせる。

血は、形を変え刃となる。

「この鎌は、血液で出来ている……。砂のお前には、効果的だ  
る？」

「チツ……。！ロベルト！」

クロコダイルが呼ぶとロベルトが部屋の隅から現れる。

「何か……。」

「てめえの元上司を殺れ。」

「了解……。」

クロコダイルとミス・オールサンデーは、部屋を出て行く。

「ロベルト……。」

「キラ……。また、やるのか？」

「ああ。お前が引かないなら……。やるしかない。」  
「そうか……。では……。」

ロベルトが俺との距離を一瞬で詰めてくる。

「覚悟……。」

『豪撃!!!』

「いきなり全力か……。OK。」

『剛砲!!!』

ドオン!!!!

お互いに体が後方に吹き飛ばす。

「くっ……。！」

ロベルトが腕を押さえて膝をつく。

「どうした？きつそうだな。」

俺は、ロベルトの後方に一瞬で移動する。

「なっ!?!？」



「お前の成長。うれしかったよ。」

「あの時は、本気じゃなかったんですね……。」  
「まあ……。ん？これは……!？」

ザバア！

床から水が漏れてきている。

「な、なんだ？」

「クロコダイル……。俺ではキラに勝てないと……?」

「ロベルト……。」

「この勝負また……。」

ロベルトは、部屋から出て行く。

「ちっ……。」

「キ、キラさん！バナナワニが檻の鍵を食っちゃったの！」

「ん？ああ、そうなんだ。」

「か、軽い!？」

「どのワニ?」

「わからないわ。」

ゴオオ!!!

バナナワニがどんどん部屋へと入ってくる。

「キラさん!ど、どうしよう!はやくしないとみんなが!」

「OK。落ち着こう。まずは……。」

「檻壊すか。」  
「はい？」

俺は大鎌を造り出し……。

「お前等、ちょっとしゃがんでろ。」  
「へ？お、おお。」

スパツ……。

大鎌で檻の上半分を斬り飛ばす。

「おおお！！！！キラ！！！！」  
「わかったからとつとと出る！」

「スモーカーも早くしろって。」  
「何？」

「なんだ？溺れ死にしたいのか？」  
「……。」

全員で部屋を出て通路を走る。

「待て！橋は、壊しちまったんだ！」  
「さ、サンジ！どこいった！？」  
「助けようと思ったたらお前等が出てきたんだよ！」

「そうか！……って何故橋を壊した！？」  
「うるせえ！俺なりに考えがあつたんだよ！」

「橋がないならどうやって逃げる!？」  
「泳ぐしかねえな。」

「仕方ないか……。じゃあ、ルフィとスモーカーを頼むな!」  
「キラ!?どこに行く!？」

「客にまぎれて安全に逃げるのさ!」  
「てめえ!」

「濡れるのは、嫌だからな。じゃ!」

俺だけ正面からカジノを後にする。

「さて……。」「  
「キラーー!」

チヨッパーがデカイカニに乗ってこちらに向かってくる。

カニに飛び乗り人数を確認する。

「お、おい。ルフィは?」  
「それが……。」

ビビから事情を聞く。

「あのバカ……。大丈夫か?」  
「信じようぜ、ウチの船長を。」

「ロロノア……。そうだな。」

俺は、なぜか胸騒ぎがしていた。

第三十二話 死神のユダ（後書き）

出張から帰ってきました。

今回のお話、わかりにくい部分があるかもしれないです

感想お待ちしてます。

**第三十三話 アルバーナへ（前書き）**

アルバーナへ向かう、キラ一行。

ルフィは、クロコダイルと戦闘中。

キラは、ルフィが心配に……。

### 第三十三話 アルバーナへ

「アルバーナへ移動中」

「うゝむ……。」

俺は、一人考え込んでいた。

いくらルフィが強くなったとはいえ相手は七武海。

俺は戻って助太刀するべきなのか？

だがルフィが自分で乗り越えなければここから先の偉大なる航路を生き抜くことは出来ない。

今までの経験上、これから先の航路にはバケモノが腐るほどいる。

「はあ……。」 頭を抱えて下を向く。

「なあ、キラ。」

「なんだ？」

「お前が行けば勝てるんじゃないのか？」

ウソップが俺の考えていたことを口にする。

「それは……。」

「ウソップ、ウチの船長を信じる。」

「ゾロ……。でもよ！」

「平気よ！約束したじゃない！アルバーナで待つて！」

「そうだぞウソップ！あいつが負けるわけないさ。」

「キラ、ビビ……。そうだよな！」

前方に川が見えてくる。

「このカニは、河が渡れない！？」

「ええ、ヒツコシクラブは砂漠の生き物だから水は苦手なの。」

「はあ……。カニとしてどうよって感じたな……。」

「そうだ！ハサミは、踊り子が好きなんだ！」

「ハサミ？ハサミって？」

「このカニの名前よ。」

「ナミちゃん。センスないな……。」

ナミが踊り子の衣装になり、カニとラクダそしてバカコックが大騒ぎしている。

「こいつらに緊張感ってないのか？」

「キラ、それをこいつらに期待するな。」

俺とゾロは、あきれてため息をつく。

踊り子ナミの姿を見たカニが加速する。

「おお！？これならもしかして！」



ザブン！ブクブク……。沈んでいくカニと俺達。

「仕方ねえ。泳ぐぞお前等！」

「キラさん！待って！」

「ん？どうした？」

ざばっ……。。

デカいなますが姿を現す。

「おお！これはこれは……。。」

「何見とれてんだ！逃げるぞ！」

「お、OK！逃げよう！」

必死にナマズから離れようとするが……。

「やばい！食われちまうぞ！」

「キラ！なんとかしろ！」

「なんで！俺だ！口口ノア斬れ！！！」

ドカカッ！！

ナマズがのびている……。。

「おお？アザラシ？が助けてくれたぞ！」

「キラ、あれはクンフージュゴンよ。」

「ジュゴンなのか。カワイいなあれ。」

「クオツクオツ！」

「兄弟弟子は、放っておけない。」って。」

「俺等ルフィの弟子じゃないが、まあいいか。」

クンフージュゴン達に助けてもらい河を無事に渡りきる。

く反乱軍衝突まであと3時間く

「姫！間に合いそうか？」

「難しいわ……。」

「クソツ！ここまで来て！」俺は岩を蹴り砕く。

「……！？キラ！あそこ！」

「ん？あれは、カルー？」

「アラバスタ最速超カルガモ部隊だわ！迎えに来たのよ！」

「よし！これなら間に合うのか！？」

「ええ、間に合うはず！」

「全員集合！」

俺はみんなを集める。

「よし、いいか作戦を話す。」

「キラさん！あまり時間が！」

「わかってる！いいか！一回しか言わない！よく聞け！」

「全員、姫と同じマントを被れ。そして先に俺達が敵を引き付ける。」

姫は俺達が敵を足止めしてるうちに南ゲートに行け！」

「これが今回の作戦だ。いいな。」

全員が俺のほうを見てうなづく。

「よし！健闘を祈る！」

それぞれがカルガモに乗る。

なぜか俺のカルガモがない……。

「あ、あれ？俺のカルガモは？」

「ヴオ」

……ラクダがカルガモに乗っている。

「なんでお前が乗るんだよ！」

「ヴオ」

「俺も手助けするぜ。」だつてさ。」

チョッパーが通訳する。

「あのなあ……。」

「キラ、お前はビビと一緒に行け！」

「ロロノア……。わかった。お前等頼むぞ！」

『おう!!!!』

カルガモ達が走っていく。

「姫……。俺達も行こう。」

「ええ。そうだ、キラさん。こんなときにあれなんだけど……。」

「ん?どうした?」

「仲間って認めてくれるなら、その姫って呼び方やめない?」

「ああ、わかった。ビビ、行くぞ。」

「うん!」

俺とビビは、南ゲートへと向かった。

第三十三話 アルバーナへ（後書き）

読んでいただけるとうれしいです。

感想・一言お待ちしております。

第三十四話 戦争の始まり(前書き)

ビビと共に南ゲートへ

反乱軍を止められるのか？

### 第三十四話 戦争の始まり

（南ゲート）

「ビビ、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫。」

ドドドドド

反乱軍がこちらに向かってくる。

「来たぞ。」

「うん！」

『止まりなさい！反乱軍！』ビビが叫ぶ。

俺も前に出てビビと共に叫ぶ。

『止まれーーーー！！！！』

ポウン！

砲撃により視界が砂埃にさえぎられる。

『止まって！』

ビビが叫び続けるが

かまわず反乱軍が突っ込んでくる。

「ビビ！……クソ！」

俺はビビを抱えて伏せる。

ドドドドドドドドドドドド。

反乱軍に俺達の静止の声は届かず南ゲートへと向かっていった。

ビキビキッ……。

「クッ……アバラ何本かいったかな。」

「キラさん。私をかばって……。」

「立ち止まるな。ビビ……。」

「うん……。諦めの悪さ船で学んだから……諦めない。」

「そう、それでいい。」

『ビビー』

ウソップが俺達の前に現れる。

「こっちに乗れ！」

「ウソップさん！」

「……ビビ行け。」

「キラさん？」

「キラ！俺を疑うのか！」

「Mr2、その顔をやめろ！」

ドゴゴン……！

思い切りウソップの顔を殴り飛ばす。



「うぐっ！何すんだ！」

「うるせえ……。ウチの連中は俺にビビを任せただ……。俺達の信頼をバカにするな！！！」

ゴオオオ！！！！

「うっ……。。」

Mr2が俺の気迫におされ、たじろいでいる。

「ビビ！行け！」

「う、うん！」

ビビがカルーに乗り南ゲートへと向かう。

「逃がすわけないじゃない。」

Mr2がウソツプの顔から元の素顔へと戻りビビを追いかけようとしている。

Mr2の正面にまわり首を掴み持ち上げる。

「うぐう……。く、ぐるしい……。。」

「俺が逃がすんでも？」

メキメキツ……。。

掴む手にどんとどんと力を込めていく。

「う……。これならどう？」

Mr2の顔がナミの顔へと変わる。

「キ、キラやめて……。」

「てめえ……大概にしとけよ……。」

腕にさらに力が入る。

『ウソツプー……!!』

チヨツパーの声が聞こえる。

「チ、チヨツパー……!!どうした!!」

「隙ありねーい。」

「しまっ……。」

『白鳥アラベスク……!!』

負傷したアバラへMr2の蹴りが入る。

「がはっ……。」

俺は、よろけながら後ろに下がる。

「じゃあねーい……!!」

南ゲートへとビビを追い走っていく。

「クソ……。待て……。」

ビキビキッ……。

「くっ。行かなきゃ……。ビビは、俺が守らなければ……。」

南ゲートを通過し、ビビの元へと走る。

「オカマ野郎……追いついたぞ。」

「あちしの技をくらってよく立ってられるわねい。」

「殺す……。」「

大鎌を造り上げる。

「げっ！」

「行くぞ。」

ガシッ。

サンジに肩を掴まれる。

「キラ、このオカマは俺に任せろ。お前はビビちゃんを。」

「サンジ……。OK。任せろ。」

サンジとハイタッチしてビビを追う。

「あら。あちしは、あんたが相手でラッキーよっ。」

「ふん。お前如きキラが戦う必要がねえってことだよ。」

サンジとMr2が睨み合う。

「任せたぜ……。キラ。」

『羊肉シヨット!!!』

『白鳥アラベスク!!!』

くアラバスタ宮殿く

「ハハハハ！お前に国は救えない。」

クロコダイルが笑い、ビビが泣きながら必死に抵抗している。

「私は、約束したの……。国を救うって……。」

「それがこの状況なんだよ。お姫様。ハハハハ！」

ガシッ！

ビビの首をしめながら城壁を上る。

「お前の好きなこの大地で死ぬといい。」

「うっう……。」

『双・剛砲!!!』

ドッゴーンッ！

クロコダイルがすごい勢いで吹っ飛んでいく。

「て、てめえ……。」

「き、キラさん……。」

「無事か……ビビ。」

「キラさん……。私……。」

泣いてるビビを抱き寄せ……。

「君は、精一杯やった。後は……。ルフィ！」

「おう！俺達の番だ！」

『ゴムゴムの銃！！！！』

ドゴン！

クロコダイルを殴り飛ばす。

「麦わらてめえ……。」

「お前、水に弱いんだろ。」

「ルフィ……。正解だ。」

『螺旋脚！！！！』

ズン！！！！「がはっ！」

クロコダイルの腹部へ俺の蹴りが入り壁を貫通して吹っ飛ばす。

「キラ、こいつは俺に任せてくれ。」

「わかった。俺は……。ロベルト！出て来い！」

スツ……。

ロベルトが陰から現れる。

「決着つけなきゃな。」

「そうですね……。付いて来てください。」

俺はロベルトに連れられ人気のないところへ移動する。

「ロベルト。教えてくれ、これは任務なのか？」

「ずっと聞きたかった。」

「まじめなこいつがなぜこんなことをしているのか？」

「任務にしてもおかしい。」

「ロベルトは、潜入任務とは無縁だったからだ。」

「任務ではありません。これは、好きでやってる事です。」

「もう一つ。なぜ自分の正体をイガラムにばらした。」

「それは、自分でもわかりません。」

「何？」

「たぶん、死にたかったのかもしれない。」

「ロベルト……。」

「ルインという組織が嫌になってしまったんです。あなたと同じです。」

「俺は弱い人間です。自分で死ぬことはできない。だから……。」

「自分で正体をばらし組織に始末してもらおうと思ったわけか……。」

「おしゃべりは、ここまでです。行きます。」

「ああ、お前の為にも今一度死神へと戻らせてもらつよ。」

「はい。あなたに殺されるなら俺も本望です。」

俺は、髪を縛る髪留めを外し大鎌を造り上げる。

「……これが。美しき死神ユダ……。」

「ロベルト……。俺があの子に導いてやる……。」

「はい……。ただ、全力であなたにぶつかって死にたい……。」

「わかった。全部受け止めてやる……。来い！」

うおおおおお!!!

ロベルトが全力を込めた拳を俺に放つ。

その拳を避けず体で受け止める。

体が後方へと吹き飛びそうになるが堪える。

「ユダ……。」

「ロベルト、いいパンチだ。」

大鎌を構えなぎ払う。

ゴオ!!!

ロベルトは手甲で防御するが5mほど吹き飛ばされ岩にぶつかる。

「くっ……重い……。」

「逃げたほうがいいんじゃないのか？」

「嫌だ……。あなたと全力で戦ってみたかったんだ！」

ブオン!

がむしゃらに拳を振り回す。

「バカ野郎！」

ドゴン！

ロベルトを蹴りつける。

「!？」

「冷静になれ！俺は、そんな戦い方教えたりはしない！」

「ユダ……。はい！」

ロベルトが冷静さを取り戻し俺に向かってくる。

俺は、この男を殺さなければならぬのか……？



第三十四話 戦争の始まり(後書き)

感想・一言・質問待ってます！

く祝二十万記念 キラの料理 く(前書き)

祝二十万PV記念です。

く祝二十万記念 キラの料理 く

「祝二十万PVです！みんな拍手！」

チョッパーとビビだけが拍手している。

「二十万PVを祝って……俺がご馳走を作ります！」

「な、なにiiiiiiiiiiii！！！！！」

サンジが絶句する。

「キラの料理か久しぶりだな。」

「そうね。サンジ君が仲間になってからはキラに作ってもらうことなかったわね。」

「シシシシ！俺は、キラの飯好きだぞ！」

「キラの料理は、大味だけど美味いよな。」

「ナミさん、キラさんの料理っておいしいの？」

「ビビとチョッパーは知らなくて当然ね。サンジ君が仲間になる前は  
キラが料理作ってくれたりしてたのよ。」

「へえ〜キラは、なんでも出来るんだな！」

チョッパーが尊敬の眼差しで俺を見る。

「じゃあ、準備にとりかかるわ！」

「あ、おい俺も手伝うぞ！」

「サンジ、たまにはゆっくりしてなさい。」

キラは、厨房に消えていく。

「大丈夫か？あいつ……。」

「そういえばサンジ君もキラの料理食べたことないのよね？」

「ああ、ないけど……。大丈夫なのかい？」

「大丈夫よ。」

「楽しみだな〜ビビ。」

「トニー君。そうね楽しみ。」

「クエー。」

「あら、カレーも楽しみなの？」

「クエー。」

みんなは、談笑しながら料理の出来上がりを待つ。

〜キラside〜

さて、冷蔵庫には……。おお、色々あるじゃん。

さすがサンジ食材へのこだわりが違っねえ〜。

食材を眺めながら料理構想を練る。

俺の得意料理は・・・辛めの料理。

「辛いピラフっておもしろいかな？」

「一品目は、辛めのピラフに。」

「あとは・・・まあ肉食わしとけばルフィは文句言わないな。」

サンジがいなかったころも色々考えながら料理したなあ・・・。

懐かしみながら料理を進めていく。

くデッキ

「待たせたなお前等！」

俺は、料理をテーブルへと並べていく。

「お、おい本当にこれキラが作ったのか？」

「もちろん。」

「なんか、キラさんのイメージとちがうわね・・・。」

テーブルの上にはまさに男の料理と言わんばかりにガッツリと皿いっぱい盛られる料理の数々。

盛り付け・色合い一切無視の海賊飯。

「さあ、食べ！」

「取り皿とかないの？」

「ビビ・・・何を甘えたことを！」  
「えっ!?!」

「いいか！海賊は、同じ釜の飯を食ってこそその家族！」  
「家族・・・。」

「そう！家族！全員直接大皿から食べ。じゃあ、飯を食う前は！」

『いただきまーす!!--!』  
「よろしい！」

全員が食べ始める。

「キラさんの料理って前からこうなの？」

ビビがルフィに尋ねる。

「ん？そうだぞ。うまいだろ。」

「いや、そうじゃなくて・・・。」

「そうなのよ。ああ見えて意外と豪快なところがあるのよね。」

「そうなんだ・・・。」

「見た目どおり王子様だと思った？」

「うん。見た目は悪くても・・・おいしい!」

「だろ？どんどん食べて。」

「おう。わかった。」

「ルフィ、お前は食いすぎ。」

みんなで楽しく食事をし会話をする。

ルインにいた頃には、想像もできなかった。

『ごちそうさま!!』

「はい、お粗末様でした。」

俺は、後片付けを始める。

「なあ、キラ。」

「ん？なんだサンジ？」

「あのピラフ教えてくれよ。」

「ふふっ、OK。後でな。」

「キラ、料理うまかったぞ！」

「おお、チョッパ！。気に入ったか？」

「海賊飯うまかったし楽しかったな。」

「そっか。また、何かの時に作るよ。」

後片付けをしているとナミとビビが手伝いに来てくれた。

「まさか、ナミちゃんがタダで手伝ってくれるとはね。」

俺はニコニコしながら意地悪く言う。

「ふふっ、ちゃんと後で払ってもらっわよ。」

「ナミさん！もう……。」

「俺、お金ないけど?」

「そう?じゃあ、体で払ってもらおうかしら。」

ガシャーン!

皿を落として割ってしまった。

「ほら、ナミさんが変なこと言うからキラさんが動揺してるじゃない。」

「ふふっ、キラって年上なのにカワイイところあるのよね。」

「えっ、キラさんっていくつ?」

「20歳だけど……。」

「そうなの!?もっと年上だと思ってた。」

「え、それって老けてるってこと?」

「違うわよ。あんた落ち着きがありすぎるから。」

「じゃあ、キャピキャピしてればいいのか?」

「それはそれで……おもしろいかも。」

くだらない話をしながら一日は過ぎていく……。



く祝二十万記念 キラの料理 く（後書き）

はい。二十万PVを記念して書いてみました。

次は、三十万PVの時に書こうかな？

質問・感想お願いします。

あとちなみにキラは、体で払ったりとかはしませんからね（笑）

第三十五話 6000万vs7800万(前書き)

キラ対ロベルト  
ルファイ対クロコダイル

第三十五話 6000万vs7800万

「ルフィvsクロコダイル」

「また、お前の負けだったな・・・麦わらのルフィ。」

「キラvsロベルト」

「うおおおお!!!」

ロベルトの豪腕が顔を掠める。

「そんな大振りじゃ、俺には当たらない。」  
「!?!」

俺はロベルトの頭を掴み・・・。  
地面に思い切り叩きつける。

ロベルトは、頭から血を流しながら立ち上がる。

「クソ・・・。フン!!!」

回し蹴りを俺の顔目掛けて放つが  
当たる直前にスウェーバックで蹴りをかわしロベルトの残った軸足を蹴り上げる。

「!?!」 バランスを崩し倒れたロベルトの顔付近にカカトを落とす。

ロベルトの顔の横に轟音と共に大穴が出来る。

「わざと・・・外したんですね・・・。」

「もうやめよう。」

「死神は、やさしくなっただんですね・・・。」

「・・・お前も俺もルインとは手を切った。お互いに自由に生きよう。」

ククロコダイルとは手を切るんだな・・・。」

「師匠・・・。」

「じゃあ、船長が心配なんで戻るわ。」

俺がルフィの元へ行こうとしたときロベルトが声を掛ける。

「俺は、これからどうすれば・・・。」

立ち止まりロベルトの方を振り返る。

「もしも・・・お前が今まで奪ってきた命の償いをしたいというなら・・・。」

ドラム王国のDrくれはを尋ねる。」

「ドラム王国のDrくれは・・・ですか・・・。」

「俺の知り合いでな。助手がいないんだ。手伝ってやってくれな  
いか？」

「医者を目指せと・・・？」

「強制はしないよ。お前に償いの気持ちがあるならだ。」

「行きます……。かならず……。」  
「Drによるしくな。」

ロベルトと別れ城へと走る。

くアラバスタ城く

「い、いない!?!どこ行きやがった!」

町中を駆け巡りルフィを探す。

「クソツ!どこだ!」

「おい!麦わらの一味だ!やっちまえ!」

ピリオンズが襲いかかって来る。

「死にたいらしいな……。」

血液から鎌を造り上げる 『断罪の大鎌』

『やべえ!死神のユダ!?!』

「安心しろ。首を持っていくのはやめてやる。」

3メートルはあるであろう大鎌を片手で一振りする。

『お、おおお?』ピリオンズの何人かの下半身が吹き飛んでいく。

『ひ、ひひひひひひ!?!』蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「旋律のキラか。」  
「スモーカー君。」

「ずいぶんと派手にやったな……。」  
「なあ〜に、昔に比べれば優しいもんさ。」

スツ……。

スモーカーは時計塔を指さす。

「なんだ？」

「お前の仲間なら向こうだ。」

「そうか……。ありがとう。」

「フン。気が変わらないうちに行け。」

「ああ。そうだ、スモーカー君。」

「なんだ？」

「豪腕のロボルトの手配書処分しといてくれ。」

「なに？」

「俺が殺しておいたから。」

「ちつ、昔の同僚でも容赦なしか。やっぱり死神だな。」

「フフツ、かもな。じゃー！」

時計塔へと向かう。とりあえずロボルトの手配書は始末できそうだ。

（ロボルト……。これで追われることはないぞ……。やり直せ・  
）

みんなが時計塔の下に集まっている。

「何を……ん？」

時計塔の時計が開きおかしな格好をした2人組がいる。

「な、なんだ？」

時計塔の上をめざしているビビに銃を向けている。

「状況がよくわかんねえが……。」

俺は血液でライフルを造り上げる。

「銃は、苦手なんだよなあ。」

照準を合わせ……。

『断罪の小銃……。』

銃口から放たれた2発の弾丸が2人の銃を弾き飛ばす。

『なっ……!?!?』

「さあ、飛べ。ビビ！」

「キラ！」

「ナミちゃん。生きてるか？」

「ええ。ちよつとキラ……あんだ無傷じゃない！」

「ん？ああ、ほら。俺、事務方じゃん。」

「戦えよ！」バシッ！ウソップに突っ込まれる。

『大変！みんな！』ビビが叫んでいる。

『砲弾が時限式なの！』

「ん？なあなあ、何があつたんだ？」

『お前は黙つてろ！！！！』

全員に怒鳴られる。

俺を無視して話がすすんでいく。

「じゃ、じゃあ、俺ルフィ探してくるわ。」

居た堪れなくなりその場を後にする。

ルフィ……無事でいろよ……。



第三十五話 6000万vs7800万(後書き)

感想・一言お待ちしております。

第三十六話 雨のアラバスタ（前書き）

ロベルトに勝利したキラ。

ルフィを探し町を走り回る。

### 第三十六話 雨のアラバスタ

ルフィを探している途中アラバスタに雨が降り始めた。

「雨か……。」

俺は、空を見上げ目を閉じる。

「君は確か……。」

声が出た方向を振り向くとコブラ王がいた。  
背中にルフィを背負っている。

「コブラ王。ウチの船長が迷惑かけたみたいですね。」  
「いや、彼にこの国は救われたよ。」

「そうですか。」  
「うれしそうだね。」

「何がですか？」  
「君だよ。」

「うれしい？ふふっ、そうかもしれない。」  
「？」

思わず笑顔になっていた。

ルフィが七武海の一人を倒したのだからうれしくないわけがない。

俺とコブラ王と一緒に城までの道を歩く。

「キラ！」

「サンジ。」

「おい、なんでルフィを知らねえ人に背負わせてんだよ！」

「えっ？俺、非力だからさ。」

『どこがだ！』

「みんな！！」

「ビビ。無事だったか。」

「キラさんも怪我がなくて何よりだわ。」

「俺は、平気だけど・・・お前等大丈夫か？」

「たいしたことねえよ。」

「ああ、かすり傷だ。」

「コブラ王、ビビ広場に行ったほうがいい。」

「でも、みんなの手当てを。」

「聞いてなかったのか？こいつらなら大丈夫だ。」

「そうよ。勝手に宮殿に行つて休むから行つてきなさいよ。」

「うん。じゃあ、みんな宮殿でね。」

ビビとコブラ王が広場へと向かつていった。

「つたく、お前等やせ我慢しやがつて。」

「うるせえ・・・。キラ、後任せるぞ・・・。」

「はいはい。俺が見張つてるからゆっくり休みな。」

みんなが力尽きてその場に倒れこむ。

「お前等、風邪引くなよ……。」

壁によしかかり一息つく。

「ふう〜……。。」

「キラ。」

「ナミちゃん。疲れてるだろ？休んでろよ。」

「あんたも疲れてるでしょ？」

「俺はいいんだよ。」

「無理しないでね。」

「ああ、ありがとう。」

雨が強くなってきたな……。

「旋律のキラ!？」

「海軍か……。今ウチの連中は休憩中だ。」

戦るなら俺が相手になるぞ。」

「くっ……。。」

「麦わらの一味に手を出すことは許しません!」

「たしぎ曹長!ですが!」

「ありがとう。たしぎさん。」

俺は、たしぎに笑顔を向ける。

「なっ!?!?み、みなさん!引きますよ!」

たしぎが顔を赤くしながら兵を連れて引いていく。

こいつらいつ起きるんだ?

何もすることがないのでギターの調律を始める。

こんなに濡れちまって……。音大丈夫か?

ギターを指で弾く。

高音が雨空に鳴り響く。

いいね弾いてみようか……。

曲名は『アルハンブラ宮殿の思い出』

少しでも癒しの音楽が傷を癒すように

こいつらが起きるまで雨音と共に奏で続けた……。

第三十六話 雨のアラバスタ（後書き）

アラバスタ編もここまでできました。

悪魔の実を色々と考えてるんですが・・・

難しいですよ。

感想・一言お願いします！

第三十七話 戦後のアラバスタ（前書き）

バロックワークスとの戦闘が終わり宮殿で休息を取る麦わら一味。

キラは……。



### 第三十七話 戦後のアラバスタ

（アラバスタ宮殿（夜））

俺達は、宮殿の一室で夜を迎えていた。

みんな疲れきって眠っている。

目が完全に覚めてしまった俺は窓から外の景色を眺めていた。

「よく降るな……。」

部屋のドアをノックする音がする。

「どござ。」

「もう寝てるかとおもった。」

「ビビ。寝なくていいのか？ 疲れてるんだろ？」

「キラさんこそ。休まなくていいの？」

「目が覚めちゃってね。ビビは？」

「もう少しこの雨を見ていたくて……。」

「そっか……。」

しばらくの沈黙の後ビビが口を開く。

「キラさんは、これからどござするの？」

「え？ 海賊を続けるけど？」

「そうよね……。変なこと聞いてごめんなさい。  
わ、私もう寝ますね。お休みなさい。」

「あ、ああ。お休み。」

ビビが急ぎ足で部屋から出て行った。

あの質問は、一体なんだったんだ？

俺は、質問の真意を考えながら眠りに落ちていった。

（次の日）

誰かに見られている気が……。

俺は、ゆっくりと目を開ける。

ビビとナミが俺の顔を覗き込んでいた。

「もしかして寝すぎた？」

「全然。」

「そうか。で、何？」

「あんた、ホント綺麗な顔してるわね。」

「本当。肌が真っ白。」

「それで俺の顔見てた訳？」

「そうよ。あと、ルフィの看病。」

ナミが指さす方向を見るとルフィが眠っている。

ルフィは体中傷だらけだ。無理もない七武海と戦ったのだ。

「一回でも起きた？」

「いいえ。ずっと眠ったまま。」

「そうか。」

俺は、起き上がり体を伸ばす。

「ちょっと散歩してくるわ。」

「だめよ！町には、海軍がいるんだから。」

「そっか。じゃあ、宮殿の見学してくるよ。」

部屋から出てとりあえず歩き回ってみる。

広い宮殿なので何度か迷子になりかけた。

「この部屋は何かな？」

「そこは、私の部屋です。」

「イガラムさん！生きてたのか！」

「どうも。昨晚はよく眠れましたか？」

「ええ。久しぶりにゆつくりと休めました。」

「そうですか。それは、よかった。」

「じゃあ、もう少し見学させてもらいますので。これで。」

俺が立ち去ろうとするとイガラムが呼び止める。

「ビビ様は、どうやらあなたに好意を持ってるようです。」

「はい？」

思わず声が裏返ってしまふ。

「昨日の夜もあなたのことばかり話していましたよ。」

「そうですね……。」

イガラムに一礼しその場を後にした。

歩きながら昨日の夜のことを考える。

あのとときのビビの真意はそういうことだったのか？

好意は、うれしいのだが……。

俺とあの子では住む世界が違いすぎる。

キョロキョロしながら歩いているとコブラ王に呼び止められた。

「キラ君。君に話がある。」

「はあ。なんでしょうか？」

「単刀直入に言おう。キラ君。この国に残らないか？」

「……それはちよつと。」

「むっ！やはりダメか！」

「それはそうですね。俺、海賊ですよ?」

「そうか……。」

「大体なんで俺なんですか?クロコダイルを倒したのはルフィですよ?」

「美しき守護神。」

「はい?」

「クロコダイルがいなくなった今。この国の守護神が必要だ。そこで君に美しき守護神に……。」

「はあゝ。お断りします。では……。」

「き、キラ君!」

俺はコブラ王を無視して通路を歩く。

部屋に戻りベットに座る。

「キラ、なんだかうれしそうね。」

「えっ?そうかな?」

うれしくないわけがなかった。

ルインにいた頃、人に必要とされることなどなかった。

むしろ恐れられ……嫌われ……。

だがそんな俺が今、必要とされている。好かれている。

俺は、ギターを手に取り弾く。

うれしさのあまり楽しい音色が鳴り響く。

だが、この国に残るといふことは……。あいつら……。

決断は、もう少し先送りすることにした。

### 第三十七話 戦後のアラバスタ（後書き）

ワンピース59巻発売になりましたね。

今回のコミックスには、どこまで収録してるんでしょうね。

買って見て見たいとおもいます。

本編もいいけど導きもね！なんちゃって・・・。

長い後書きになりましたが感想・一言お願いします。

第三十八話 砂漠の薔薇（前書き）

決断を迫られるキラ。

さあ、どうする！？



### 第三十八話 砂漠の薔薇

「よく寝たー！ー！ー！！！」

ルフィが起き上がり大声を出す。

「おはよう。」

「おおキラ！おはよう！」

「お前3日寝てたんだぞ。」

「3日！？15食食い損ねてるじゃねえか！」

「一日5食計算かよ……。」

俺が呆れているとイガラムの奥さんのテラコッタさんがルフィの為に果物を運んできてくれる。

テラコッタさんは、何でも宮殿の給仕長らしい。

ルフィは、テラコッタさんが運んできてくれた果物を一瞬で食べ終わってしまった。

「お前な……味わうって言葉知ってるか？」

「キラ、ルフィにそれを言うだけ無駄だ。」

「だよな……。」

「おばちゃん！俺は3日分食うぞ！」

「ルフィ。無茶を言うんじゃない。作るほうだって楽じゃ……。」

「望むところだよ！」

「なぜ、張り合う・・・女イガラム・・・」

俺は、思わず失笑してしまう。

（大食堂）

「・・・コブラ王、本当に申し訳ない。」

「いやいや、キラ君。気にすることはないよ。」

「ですが・・・。」

ルフィの方をチラリと見る。

「モゴ！モゴゴ！」

口いっぱい食べ物が入った状態で何か話している。  
王族の食卓でこれは下品すぎるだろ・・・

「ルフィ、口に物が入ってるのにしゃべるんじゃない。」

「モゴ？モゴゴゴ！」

「・・・話は食後な。」

「モゴ！」

ご馳走に向き直りまた一心不乱に食べ始めた。  
みんなギャアギャアと大騒ぎしている。

「ホント、うるさくて申し訳ない。」

「気にすることはないよ。食事は、これぐらいのほづが楽しい。」

「そうですか……。そうだ、王一曲いかがです？」

「ほづ。楽器が弾けるのかね？」

「ええ、旋律のキラですから。」

ギターを持ち立ち上がる。

「おっ！キラ歌え！歌え！」

「待ってました！」

「キラー！！」

この旅で完成した曲、砂漠の薔薇を歌う。

砂漠の薔薇を作るときイメージしたのは、砂漠に咲く一輪の薔薇。  
気高く、力強く、砂漠に咲く。

みんな盛り上がっている……。

もっと盛り上がる歌。

俺は、曲を変える。

海賊らしく海賊の歌を曲は、カリブの海賊の歌。

みんなで歌い、食べ、飲み、楽しい夜を過ごした。

食事が終わると王から

「宮殿自慢の大浴場があるんだがみんなで入らないか？」

とのお誘いがあった。

「キラ、入らないのか？」

「ん？ああ、俺は後でな。」

「ふうん。じゃあ、先いつてるぞ。」

「ああ、OK。」

みんなが風呂に行き、一人部屋でベットに横になる。

「風呂っていったってなあ……。」

鏡の前で上着を脱ぐ。

「この傷……いつ消えるんだよ……。」

腹部には、キリクにやられた傷（第十七話参照）が残っていた。

抉られたような刀傷。

「毒は、消えたんだけどな……。」

「一度チヨッパーに見てもらおうかな。」

俺があいつらと一緒に風呂に入らなかったのはこの傷をみたらあいつらのことだ大騒ぎするだろう。

それに……心配させたくない。

みんなが上がってくるのを見計らい大浴場へと入る。

「これは・・・すげえな！」

一人なのでゆっくりと湯に浸かり、疲れを癒す。

・・・今晚ここを出るらしい。

俺は、決断をしなければならぬ。

コブラ王の誘いを受けるのか・・・

海賊を続けるのか・・・

答えはもう決まっていた。

第三十八話 砂漠の薔薇（後書き）

暑い日が続きますね。

暑さに負けず書いていこうと思います。

感想・一言おねがいします。

**第三十九話 さらばアラバスタ（前書き）**

キラは、アラバスタに残るのか・・・

海賊を続けるのか・・・

### 第三十九話 さらばアラバスタ

くアラバスタ宮殿く

「キラさん！？もうみんな行っちゃったわよ!？」

「ああ、わかってるよ」

ルフィたちは、先に船へと向かっている。だがキラは……まだ宮殿にいた……

「もしかして……残るのアラバスタに……」

「それがさ……長湯しすぎたらしい」

「はい？」

キラが大浴場に入ってから3時間は経っていた。

実は、あのあともしばらく湯に浸かっていたのだがどうやら寝てしまっていたらしいのだ。

「ふふっ、大丈夫？顔真っ赤よ」

「えっ？あ、本当だ」

鏡で顔を見てみたのだがタコのように真っ赤になっていた。肌が白いせいかより赤く見える。

「……今から向かうよ」

「そう……」



気になっていたことを口に出す。

「ビビは、どうするんだ？」

「行きたい……けど……」

「そうだな。一国のお姫様が海賊なんてな」

「キラさん……」

「じゃあ、行くよ。一匹カルガモ借りるわ」

キラが部屋から出ようとするとビビが服の裾を掴む。

「行くの……？」

潤んだ瞳でキラを見つめるビビ。

「行くよ。海賊だからな」

「私が王女じゃなかったらあなたに付いて行くのにな……」

ビビの方を向き直り尋ねる。

「どうする？俺は海賊だ。さうじいともできるぞ」

笑顔でビビにそう告げた。

「さうじいのはダメ。……明日自分で答えを出すわ」

「了解。じゃあ……」

ビビのおでこに軽くキスをする。

「じゃあ回答待ってるよ」

驚いた表情を見せるビビを置いて俺は宮殿を飛び出し船へと向かう。

キラは移動中後悔していた……

恥ずかしい……何故あんなことしたんだ……

湯が冷めず顔が赤いのか、それとも自分で恥ずかしくなって顔が赤いのか。よくわからなかった。

船までカルガモをとばしていると……なにやら海軍に砲撃されている船がある……

「あれって、メリー号だよな……」

メリー号は、砲撃されボロボロになっている。

「あの旗……黒檻のヒナ……」

キラは、カルガモから降り近くの崖から海軍船に飛び移る。

無事に着地し拳を振り上げる。

「き、貴様！旋律のキラ！……な、何をする気だ!？」

「この船を沈める」

『剛拳！！！！』

デッキを思い切り殴りつけると船が真ん中から真っ二つに割れる。

『ぎゃあああああ！！！滅茶苦茶だああああ！！！！』

次々と海軍船に飛び移り沈めていく。

く黒檻のヒナ海軍船く

「何！？どうしたというの！？」

「旋律のキラが現れたようです！すでに10隻が……」

「麦わら一味の副船長……ここまでとは……」

くメリー号く

「おお！キラ！」

「もう、遅いじゃないの！」

「悪い悪い」

キラは、メリー号に飛び移りみんなに謝罪する。

「キラ！なんでビビ連れて来てないんだ？」

「自分で決断したいってさ」

「そっか」

とりあえずマストによしかかり一息つく。……メリー号になぜかオカマがいる。

「アラあ、キラちゃん久しぶりねい。」

「みんな……こいつ仲間になったの?」

ナミが首を横に振る。

「じゃあ……何故こいつが……?」

「まあ、こんなことがあったのよ」

ナミから一通りの話を聞く。

「へえ〜。盆暮れ、ご苦労さま」

「もう、盆暮れじゃなくてボン・クレーよ。ボンちゃんでもいいわ  
よう」

「気持ちワル……」

黒檻のヒナの船がこちらに向かってきた。

「はやく逃げるのよう!」

「まだ、ビビが来てないんだよ」

「まさか仲間の為に……」

「まあ、そうなるな」

「わかったわ。アチシの話を聞きなさい」

「?」

ボンクレーからの作戦を聞くところによれば自らが身代わりになってヒナの気をそらし、その間に俺等を逃がす。ここまでしてくれる理由は……

「ありがとう」

「いいのよ。あちし達ダチでしょ」

ルフィ達はボンクレーのおかげでビビとの約束の場所までたどりついた。ビビとの約束だとこの場所に12時までにくるらしいが……

時間は、12時を回った。だが、ビビの姿は見えない……

「おい、船だすぞ。海軍の追っ手が来た」

「キラ!? まだビビが来てねえんだ!」

「ルフィ。来ないってことはそういうことだ。あきらめろ」

「キラ! お前さびしく……」

「さびしいさ……でも仕方がないだろ?」

「……そうだな」

ルフィは、キラの顔を見てさびしいのは自分だけではないと気づいたのだろう……それ以上何かをキラに言うことはなかった。

ビビと話す機会はありませんでした……でもなんだろう……この気持ち……仲間がいなくなるのはこんなに悲しいことだったのか……

たぶんルインにいた頃は、仲間を仲間だと思っていなかったからだろう。それに俺はこいつらと一緒に旅をしてきて変わった。

仲間はすばらしいものだ、絆は大切なものだと感じかされた。

『みんな!!!』

「ビビ!?!」

「キラほら見ろ!来ただろ!」

「はやく船を戻せ!」

『私!一緒にいけません!今までありがとう!』

「ビビ……」

『私、国を愛してるから!だから一緒には行けません!私はここに残るけど……けど……またいつか出会ったら、もう一度仲間と呼んでくれますか!?!』

ルフィがビビに何か叫ぼうとするがナミが止める。

「海軍がビビに気づいてるわ」

「ああ、俺たちと関わっていたとなってはビビは罪人になる」

「……そっか」

「お前等左腕出せ……」

「左腕?……そっか……左腕ね」

ルフィたちは左腕の仲間の印をできるだけ高く挙げる。

「みんな……」

ビビとカルーも左腕の仲間の印をできるだけ高く挙げる。

「よし、お前等………出航だ!」

「おう! ってキラ。それ船長である俺の仕事だろ」

「悪い悪い」

キラは、ギターを手に取る。

「聞こえるかな?」

別れの曲を奏でる。ビビに届くように力強くギターを弾く。

「カルー………聞こえる?」

「クエエ。」

「うん。キラさんのギターの音………」

「クエエ………」

「また会えるよね………みんな………」

ビビは、自分の左腕を見てクスツツと笑った。

第三十九話 さらばアラバスタ（後書き）

ついにアラバスタ編が終わりました。

この話は、漫画でみると感動しますよね。

今回の内容を見て感動を思い出していただけたらいいなと。

次は、いよいよロビン姉さんです。

次回もお楽しみに。



第四十話 新たな仲間（前書き）

アラバスタを後にし帆を進める。

次なる冒険は・・・？

## 第四十話 新たな仲間

無事にアラバスタを出航し一息つく。

ルフィ達は、ビビがいないのがよっぽどさびしいのか完全にだれている。

「おまえらなあ、いつまでも引きずっててもしょうがないだろ。」  
「キラの言うとおりだ。いつまでもメソメソすんな。そんなに別れたくなきゃ

カづくで連れてくればよかつたろ。」

「ロロノア、それは何か違う気が……。」

「やっと島を出たみたいね。」

「ああ。もう海軍も追っては……。」

『!?!?』

船室から姿を現したのは、バロックワークス副社長ミスオールサンデー。

なぜこの船に？

話を聞くとどうやらアラバスタでルフィに助けられたらしく

その責任を取ってほしいとのことだ。

こいつ死にたかったのか……色々背負ってるんだなきつと……。

俺は、ついこの女に同情してしまう。

「で、俺たちにどうしろと?」

『私を仲間に入れて。』

「キラ。こいつ仲間に入れてもいいだろ?」

「……ルフィお前が決めることだ。」

「よし、キラがいつて言うならいいぞ。」

『ルフィ!キラ!』

「心配すんなってこいつ悪い奴じゃねえから!」

「船長がこう言ってるんだから従おうな。」

「キラ!ルフィの暴走は、あんたが止めなきゃだめでしょ!」

「ナミちゃん。俺は、仲間にしてもいいと思うよ。」

「ちよつと!キラ!」

「ありがとう。ユダ。」

「ユダはやめろ。俺はキラだ。」

「ええ、ありがとう。キラ。」

「どういたしまして。ロビン。」

マストによしかかり海を眺める。

みんなはまだ大騒ぎしている。

今日は、随分と波が穏やかだ。

天候も崩れそうにない。

・・・!?

何かが空から落ちてくる。

あれは・・・そんなバカな・・・

「ガレオン船!?!」

「な、なんだ!?!」

「お前等とりあえず船にしがみつけ!?!」

「このままじゃぶつかるぞ!?!」

「ああクソ!」

「おいキラ!何するつもりだ!」

俺はガレオン船の落ちてきそうな場所まで移動する。

『断罪の鎌!』

大鎌を振り上げ・・・鎌への血液量を増やす。

「あ、あいつ・・・船を斬るつもりか・・・?」

「そ、そんなことできるわけないだろ。」

血液量を増やし続け鎌の大きさは6mほどに達する。

これなら……

ガレオン船に向かって大鎌を振り切った。

綺麗に半分になり船の両脇へと沈んでいく。

「ふう……。」

「……す、すげえ。」

「た、助かったの……？」

あのままガレオン船が落ちてきていたらこの船に直撃し間違いなく沈んでいた。

「ログポースが……上を向いてる……。」

ナミが俺にログポースを見せる。

「……壊れた？」

「空島にログを奪われたのよ。」

「ロビン。それ本気で言ってる？」

「もちろん。」

しばらくロビンと見つめ合い……

「本当に本気で言ってる？」

「ええ。」

どうやら本気で言っているようだ。

「じゃあ、サルベージでもして手がかりを調べるか。」

「そうね。ルフィ、ゾロ、サンジ君。行って来て。」

ウソップの作った探索用スーツ？を着て海に潜る3人。

「あなたは、いかないの？」

「ん？こういう泥臭い仕事はあいつらの担当なんだよ。」

俺は笑顔でロビンに答えた。

ロビンは顔を背けて海の方を見る。

何か悪いことでもしたのだろうか？

ルフィ達が上がってくるのを待ちながら自分のしたことを思い返していた。

## 第四十話 新たな仲間（後書き）

空島に入ります。

このままでは原作に追いつくかもしれないので

ちよこちよこオリジナルストーリーも入れていければなと

思ってます。

そして今回最後にでましたキラスマイル。

ロビンは、どう感じたんでしょうか？

次回もよろしくお願いします。

く祝三十万記念 キラとロビン く(前書き)

30万PVを記念して書きます。

キラがルインを抜けた理由などなど



く祝三十万記念 キラとロビン く

ギターを弾きながら海を眺めているとロビンは声を掛けてくる。

「キラ。聞いていいかしら？」

「ん？どうぞ。」

「ルインを抜けた理由って何？」

「長いぞ。うーんと・・・」

ロビンにルインを抜けた理由を話し始める。

俺がルインにいた頃主な仕事は潜入。

海賊や海軍の奴等に仲間と信じ込ませ中から潰していく。

いきなり襲って沈めることもあったのだが

任務はおもに中からの破壊。簡単に言うと裏切り。

死神のユダとして手配書も出回っていたが、

俺の顔を知るものはほとんどいなかった。

なぜなら俺の顔写真がまったく出回っていなかったからだ。

だからこそ潜入しやすかった。

女に扮して潜入することもあったがそれはツライ思い出だ。

で、なぜ組織を抜けたのか。

それは裏切るということが嫌になったからだ。

俺を信じて仲間だと思ってくれた連中が目の前で死んでいく。

殺される寸前の「裏切り者……」の言葉……眼……。

あれが夢にまで出てくるようになったとき俺はルインを抜けることを決意したんだ。

「という経緯だな。……うぶ!？」

ロビンが急に俺を抱きしめる。

俺はロビンよりも身長が低いので顔が胸に……。

「そう。つらい経験をしてきたのね……。」

「く、苦しい……。」

「あら。ごめんなさい。」

「死ぬかと思った……。」

俺もロビンに聞きたいことがあるのを思い出し聞いてみた。

「ロベルトは、いつごろバロックワークスに？」

「確か、3年ほど前だったかしら。」

「3年前・・・俺がルインを抜け出したときだ・・・」  
「彼は言ってたわ。あなたがいなくなっからルインのすべてがおかしく見え始めたって。あなたが心の支えだったのかもしれないわね。」

「ロベルト・・・。」

「この船に乗る前、ロベルトに会ったわ。」

「本当か！？これからどうするって!？」

「ドラム王国に行って医者になる。償いをするって。」

「ロベルト。がんばれ・・・。」

目頭に熱いものを感じ、空を見上げる。

「泣いてるの?」

「違う!目がゴミに入ったんだよ!」

「クスッ。それどういうこと(笑)?」

「うるせえ・・・。うれし泣きするからどっか行け・・・。」

「嫌よ。あなたの泣いてる姿カワイイもの。」

「クソ・・・。バカにしゃがって・・・。」

俺は泣いた。

この船に乗ってからすごく涙もろくなった気がする。

俺が泣いてる間ロビンは、俺の頭を撫でていた。

「ガキ扱いしやがって・・・。」

「ふふっ。」

「でも、ちょっとすっきりしたよ。ありがとう。」  
「そう。よかったわね。」

ロビンと少し仲良くなれた気がした。

く祝三十万記念 キラとロビン く(後書き)

キラとロビンのコンビを書かせていただきました。

一味のなかでどちらかというとな大人側だったキラがロビンの前では子供ですね。

こんなキラいかがでしょうか？

第四十一話 サルベージ（前書き）

船のサルベージにルフィ達は海底へ

俺は船上で報告を待つ

## 第四十一話 サルベージ

ルフィたちからの報告を待っているとおかしな歌？が聞こえてくる。

『サ〜〜ルベ〜〜ジ！！！！』

「うわぁ・・・センスないなこの歌・・・」

「キラ、あれ海賊船だ！」

「いや、あれはサルだろ。」

「おいお前等ここは俺のナワバリだ！何をしている！」

「別に〜。あんたは、これから何するんだよ。」

「俺はここでサルベージをするんだ。」

「ほう、見学していいか？」

「む、いいだろう見学していくがいい！」

後はルフィ達が気づかれなければいいが。

「ボス！海底にゆりかごを仕掛けにいった船員が何者かにやられて  
います！」

「何だと！？オイお前等！！」

「やべ・・・ばれたか・・・。」

「海底に誰がいる！気をつけるよ！」

「お、おう。わかった。」

よし、こいつバカだぞ。

「ボ、ボス！」

「今度は何だ！」

「引き上げる船が真つ二つになっています……。」

「そうか……。じゃあ片方ずつ引き上げるしかないな。」

どうやら俺のせいで変に手間がかかるようだ。

しばらくサルベージ王マシラとやらのサルベージを眺める。

へえ〜そんな風に引き上げるんだ……。などとのんびり見つめていると

デカイ亀？に引き上げた船ごとルフィ達が食べられてしまった。

「あらら、困ったな。」

「落ち着きすぎだろお前！」ウソップに突っ込まれる。

海からなにかがデッキに向かってとんでくる。

あれは……。

「ルフィ！」

「船出せ！早くここから離れるぞ。」

「まで、何があった？」

「猿だよ猿！俺らが船から引き上げた荷物を見て暴れだしやがった。」



「ああ、マシラか。」

「待て！お前等！！！！」

「俺の縄張りで財宝盗んで逃げられると思ったのか！！！！」

「まあ、落ち着け話をしよ……！！！！？」

俺が話をつけようとするあたりが急に暗くなり

大きな影が現れた……これは巨人族？いやもっとデカイ！

「に、逃げろ！！！！！！船出せ！！！！！！」

急ぎその場を後にする。

「ふう……疲れた。」

「ありえないだろ……あのデカさ……。」

逃げ切った疲労で全員が座り込む。

「おい、なんでお前がいる。」

「えっ？」

マシラがとぼけた表情で俺を見る。

「ルフィ、ロロノア、サンジ。やれ。」

三人がうなずいてマシラを思い切り蹴り飛ばす。

『出ていけ……！！！！！！』

『あああああ……!!!!』

マシラは、どこかへとんでいった。

「とりあえずご苦労さん。」

「ホント大変だったぞ。」

「まあ、ゆっくり休め。財宝は、俺が確認しとくよ。」

「何!?!お前!おいしいところばかり!」

「そう怒るなサンジ君。俺は肉体労働は向かんのだよ。」

俺は、財宝の袋を開ける。

## 第四十一話 サルページ(後書き)

今回は、そんなに捻りがなくて申し訳ないです。

一言・感想お願いします。

第四十二話 勧誘（前書き）

海底で見つけた物は？

これからの航路は？

## 第四十二話 勧誘

俺が袋の中身をのぞいていると後ろからナミも袋を覗く。

「なあ、ナミちゃん。これって・・・」

「ガラクタばかりじゃない！何のために海底に潜ったのよ！」

「仕方ねえだろ何もなかったんだから！」

「ああ。それが本当なんだよナミさん。」

「キラ見てくれ！かつこいいだろ！」

ルフィがガラクタの中にあつたであろう鎧を着て俺に見せる。

「ふふっ、お前はまったく・・・。」

俺がクスクス笑っているとナミがルフィに近づいていく。

あれは、怒ってるな・・・。

予想していた通りナミに鎧を破壊される。

「ほんと、バカばかり！これからどうすんのよ！副船長！」

「えっ・・・いや〜どうしようか？」

「まったくしっかりしてよ！」

「ご、ごめんなさい・・・。」

ご機嫌斜めだな。

「はい。これ。」

「え……これって……。」

「永久指針。さっきのお猿さんの船から盗つといたわ。」

「ロビン！私の味方はあなただけよ。」

「どれ……見せて。」

俺は、ナミの手からヒョイと永久指針を取る。

「ジャヤか……。」

「知ってるの？キラ。」

「黄金郷……。」

「えっ！黄金\$！」

「いや、なんでもない。気にするな。」

「そう？」

「ルフィ！ジャヤに向かうぞ！」

「おう！わかった！ジャヤ舵だな！」

船はジャヤを目指し帆を進める。

（嘲りの町モックタウン）

ルフィとゾロの2人は町のほうへと向かっていく。

なぜみんなで行かないのかって？

そりゃ、町に到着してすぐに「殺しだー！」「なんて聞こえてきたら

普通なら行くわけがない。

だけどなぜだかあの2人は、やる気マンマンだ。

「とりあえず、俺は船で……のんびり……」

「キラ！行くわよ！あの2人のことだから絶対問題を起こすわ。」

「やっぱり俺も行くんだ……。」

俺とナミは2人の後を追う。

「ワタクシはこの町では決してケンカしないと誓います。」

ルフィがナミに非暴力を宣言させられる。

「よし！いい！あんた達が暴れるとこの町にいられないんだからね！」

「まあまあ、ナミちゃん。こいつらだってそこまでバカじゃないさ。なあ？」

『あー！もちろんー！』

「うわぁ……ダメそうだ……。」

しばらく町を見てまわる。

空島のヒントになりそうなものは……なさそうだな。

くトロピカルホテルく

「ここはキレイだな。」

「そうね綺麗。リゾートって感じね。」

俺たちが敷地内を見てまわっているとホテルマンらしき男が近寄ってきた。

「勝手に入っていただいては困ります！只今ベラミー御一行様の貸切となっておりますので……。」

「貸切でしたか……。」

ベラミーって……誰？

「オイ、どうしたんだ？」

派手な服を着た男と女が現れる。

「サーキース様！お帰りなさいませ！」

「何そいつら？私達の貸切のはずでしょ！？」

「そんな小汚ねえやつらとつとと追い出せ。」

「は、はい！ただいま！」

ルフィがサーキースを指さし

「こいつぶつ飛ばしていいか？」

「ダメに決まってるでしょ！」



「俺をぶつ飛ばす？おもしれえ奴等だ。」

「さあ、戻ろう。貸切らしいしさ。」

俺は出口に向かって歩き出す。

「おい、お前待て。」

サーキースが俺に声を掛ける。

「何か？」

「お前、いいツラしてるな。仲間に入れてやるつか？」

「は？」

「ダメだ！キラは、俺たちの仲間だ！」

「そうかじゃあ、いくら払えばウチに売ってくれるんだ？」

こいつ人を何だと思ってやがる……！？

「キラは、商品じゃねえぞ！」

「ルフィ……。」

「行くわよ！不愉快だわ！」

ナミがすごい勢いで歩いていく。

俺たちが立ち去ったその後……。

「サーキース！これ見てくれ……。」

「ん？手配書？な、なんだと……！？」

「さっきの金髪の男・・・あんたやベラミーより懸賞金が上なんだ。」

「旋律のキラ・・・6000万!？」

「もう一人の麦わらの奴も3000万だよ。」

「麦わらの方は、あんたやベラミーに比べればゴミだけど・・・」

「ふふっ、ますます欲しくなったぜ・・・旋律のキラ・・・。」

「よし、ベラミーに見せてみるか。」

（酒場）

「ホント、むかつく!」

「まあまあ、落ち着いて。」

「あんた！自分があんな風に言われて許せるの!」

「ルフィとナミちゃんが怒ってくれたからそれで十分だよ。」

俺はニコツツと笑ってナミの顔を見る。

「あ、あんたがそれでいいならいいんだけど!」

ナミは顔を赤くしてそっぽを向く。

「本当にありがとう。二人とも。」

「それにしてもお前が死神つてのが想像できないな。」

ゾロが俺の顔を見て、つぶやく。

「まあ、顔で死神と呼ばれてたわけじゃないしな。」  
「でも、あんなこと言われたら死神なら殺すだろ？」

「いや、昔から仕事以外の殺しはしなかったから。」  
「そうなのか。」

『オイ！おっさん！』

『このチェリーパイは死ぬほどマズいな！』

『このチェリーパイは死ぬほどうめえな！』

「……………」

『このドリンクは格別にうめえな！』

『このドリンクは格別にマズいな！』

ルフィが大男とにらみ合っている。

味覚なんて人それぞれなんだからケンカすることないだろ……。

「2人とも店の中でケンカは、迷惑だろ？」

俺が間に入り仲裁する。

「店の中で乱闘騒ぎは困るんだよ。とっととこれもって出ていきな。」

大男は注文したチェリーパイを持って出て行く。

「ルフィ……くだらないことでケンカするなよ。」

「だってよキラ！あいつ頭おかしいんだ！これがうまいって言うんだぞ！」

ルフィはそう言ってチェリーパイを指差す。

「そんなの人それぞれなんだから……。」

「麦わら被った海賊ここにいるか？」

声が聞こえた方を振り返ると

『べ、ベラミーだ！』

周りがザワめく。

あれが……ベラミーか……。

「てめえが旋律のキラか？」

「ああ。そつだ。」

「こんな船長の下についてないで俺のところに来ないか？」

ルフィを見下しながら俺を勧誘する。

「ふふっ……断る。」

笑顔で軽くあしらう。

「この俺にビビらねえとは、ますます気に入ったぜ。」

「俺が欲しいなら船長と交渉してくれよ。」

「おう。わかった。すぐに話しつけてやるよ。」

ベラミーはルフィの横に座り

「この店で一番高い酒を出せ。あとこのチビにも好きなものを。」

「おお、いいのか!? お前、いい奴だな!」

2人の前に酒が運ばれてくる。

これが争いの合図だった。

第四十二話 勧誘（後書き）

感想をお願いします。

第四十三話 夢(前書き)

グラミー対ルフィ？

## 第四十三話 夢

ルフィがドリンクを飲み干したその瞬間・・・

ベラミーがルフィの頭を掴みカウンターに叩き付けた。

「!?!」

「ルフィ!!!」

「ハハハハ!ベラミーの奴どうかしてるぜ!」

サーキースがその光景を見て大笑いしている。

俺がベラミーに掴みかかるより早くゾロがベラミーへ刀を向ける。

「何のマネだ?」

「それはこっちのセリフだろ。」

ゾロとベラミーが睨みあう。

「ゾロ!まだこの町で何も聞き出してないのよ!」

「売られたケンカを買っただけだ。」

「ちょっとキラ!止めてよ!」

「いや、俺も殴ってやりたいくらいだ。」

「もう!何言ってるのよ!」

ルフィがゆっくりと立ち上がる。



「よし。覚悟できてんだなお前・・・！」  
「ルフィ待って！」

「私達、空島へ行きたいの！何か知ってることはない！？」

店が静まり返る・・・。

『ぎやはははは！！！！！』

今度は一転して店中の人々が笑い出す。

人をバカにしたような笑い・・・。

「俺、船戻るよ。それじゃ。」

「ちよつと！キラ！」

「おい！本当にこんな奴等と一緒にいいのか？旋律のキラ！」

サーキースが店から出ようとしている俺に尋ねる。

俺は無視してメリー号へと向かう。

「クソ・・・バカにしゃがって・・・海賊が夢を見て何が悪い・・・

」。。

「おお、キラ！どうだった！？」

「どうだったって？」

「空島の情報だよ。」

「ああ・・・まあ、ナミちゃんに聞いてくれ。」

「え？ああ、わかった。」

「疲れたからちよつと休むよ。」

船室に閉じこもりギターを弾く。

激しくギターを鳴らす。

怒りの音？いや、ただただガムシヤラに弾く。

「キラ、次の行き先が決まったわ。」

ロビンが船室に入ってくる。

「モンブラン・クリケットに会いに町はずれに行くわ。」

「そう。了解。」

「いじけてるの？」

「何で俺がいじけるんだよ。」

「そう見えただけ。」

しばらくの沈黙が続く……

「夢って……誰にでもあるよな……。」

「え？ええ、そうね。」

「そうだよな……人の夢をバカにするのは……。」

「最低ね。」

「だよな・・・よし、ちょっと行ってくる。」  
「？」

船室から飛び出してもう一度町に行くつもりだと・・・

「キラ、行くな。」

「ルフィ・・・何がだ？」

「ベラミーのどこに行くんだろ？」

「・・・ああ。」

「キラ・・・あなたが怒るなんてめずらしいわね。」

「いいたい奴には言わせとけばいい。」

「ロロノア・・・悔しくないのか？」

「もう、済んだことだ。」

「そうか・・・。」

俺は立ち止まりしばらく考える。

「お前等が我慢したなら俺が手を出すわけにはいかないな。」

「シシシシ！」

「じゃあ、クリケットのどこに行くぞ！」

『おっ！・・・！』

俺たちはモンブラン・クリケットに会うため出航する。

第四十三話 夢（後書き）

感想をお願いします。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道～（前書き）

ロベルトのその後を書いてみました。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道～

（小船上）

「ドラム王国とは．．．どこにある．．．？」

師匠キラにドラム王国のドクトリーヌという人物を  
紹介してもらったのはいいが．．．。

場所が全然わからん．．．。

漂流してるうちにあたりも闇に包まれていく．．．。

師匠は、すべてのことを起用にこなせる方だからいいが．．．。

俺に航海術など．．．

アラバスタへたどり着くのは簡単だった。

近くの商船がアラバスタへ行くというので乗せてもらえたからだ．．．。

だが．．．今回はかりは．．．。3日も飲まず食わず．．．。

「まずい．．．気が遠く．．．。」

気を失い海流に流されるがままに小船は進む。

〔商船〕

「旦那！小船が浮かんでます。」

「ん？誰か乗っていないか？」

「そうですね？霧でよく見えませんが……。」

「いるよ！ホラ！おつきいおじちゃんか！」

「こらリリ！船室に戻ってなさい！」

「はい、パパ。」

リリと呼ばれる少女はしぶしぶ船室へと戻っていく。

「よし、あの小船を回収しなさい。」

「ですがどんな奴が乗っているか……。」

「いいから回収しなさい！」

「はっ！了解しました。」

〔船室〕

「パパこの人起きないね。」

「リリ、部屋に戻ってなさい。」

「ちえっ……じゃあ、起きたら教えてね！」

少女はスキップしながら部屋を出て行った。

「ここは……。」

「目が覚めましたか？」

声の主を確認すると40代くらいの痩せ型の男性だ。

「俺は……」

「気を失った所を見つけてね。」

「そうですか……。」

「私は、キーン。名前は？」

「ロベルト……。」

「ロベルト君か。どこに行こうとしてたんだい？」

「ドラム王国に……。」

「ドラム王国……ああ、サクラ王国だね。」

「サクラ王国？」

「なんでも国王が変わって国の名前も変わったみたいだよ。」

「そうなんですか……。」

しばらくの沈黙……。

「パパ！おじさん起きた！？」

茶色い髪で瞳の大きな女の子が部屋に入ってくる。

「リリ！静かにしなさい！」

「リリ……？」



「うん。あたしリリ！よろしくおじさん！」  
「おじさん……。」

俺は、これでも23なんだが……。

「おじさんじゃない。この人はロベルトさんだよ。」

「よろしくな……。」

「うん！ロベルトさん、なんか暗いね！」

「暗い……。」

なんでもズバズバと言う子だ……。

昔、師匠にも「お前は暗い！」って言われたっけ……。

クスツツと思わず笑顔になる。

「ロベルトさん！笑えるじゃん！」

「えっ……ああ。」

「笑顔でいるとね。イイことがいっぱいあるんだよ！」

「そうなのか……？」

「うん！だからねリリいつも笑顔なんだ！」

「そうか……。」

「ロベルトさん！こっち見せたいものがあるの！」

グイグイと俺の腕を引っ張るリリ。

「コラーリリ！」

「いいですよ……別に……。」

「ロベルトさん……ではお願いします。」

「はい……。行こうかりり……。」

「うん！こっち！」

リリに腕を引つ張られ部屋を出る。

〈操舵室〉

「旦那。あの男おきました？」

「ああ。起きたよ。」

「放っておいていいんで？」

「いい人そうだし、リリもなついているようだ。問題ないだろ。」

「そうですね。何かあったら俺が。」

「ああ、頼りにしているよ。マッシュ。」

〈リリの部屋〉

「俺に見せたい物ってこれか……？」

「うん！」

見せたかったものは写真……。

そこにはキレイな女性が写っている。

リリにそっくりだ……。じゃあ、これは……。

「キレイでしょ！リリのお母さん！」

「ああ。キレイな人だな……。」

お母さんを誉められてリリもとてもうれしそうだ。

そんなリリの姿を見て俺も思わず笑顔になる。

……。こんな自然に笑えるなんてな。

ルインにいた頃は……。笑ったことがあっただろうか……。

俺が過去を思い出し険しい顔をしていると心配になったのかリリが顔を覗き込む。

「大丈夫？頭痛いの？」

「いや……。大丈夫だ……。」

リリに笑顔を向ける。

「えへへ！ロベルトさんが笑ってる！」

「俺だって人間だからな……。」

「そうだ……。お母さんは今どこに……？」

「うんとね……。死んじゃったの……。」

いままでずっと笑顔だったリリの顔が暗くなる。

「そうか・・・病気が・・・？」

「うん・・・あたしの町にはお医者さんがいなくて・・・。」

「そうか・・・。」

泣きそうになっているリリの頭を撫でる。

医者がない町もあるのか・・・

俺は決意する。医者になって世界中の人を治してまわろう・・・。

リリのように悲しむ人々を少しでも減らせるように・・・。

師匠・・・俺にも夢ができました・・・。

「お、おい！」

屈強な男が部屋のドアを開けて入ってくる。

「誰だ・・・。」

「船員のマツシュだよ。いつもお父さんの仕事のお手伝いをしてくれるの！」

「お嬢さん大変なんだ！」

「どうした・・・？」

「おお、あんた腕は立つのか？」

「・・・いや全然。」

もう、豪腕のロベルトの名は捨てたんだ・・・。

戦う必要もないだろう……。

「そうか……実は、デッキに海賊が！」

「何……!?!」

「お、お父さんは!?!」

「海賊に捕まっちゃった……。」

「そんな!?!お父さん！」

リリは、急いでデッキへと向かう。

「リリ待て……!危険だ……!」

俺は、リリを追う。

待て……何故あの男は……平気なんだ……!?!

まさか……!?!

デッキへ出ると数十人の海賊がリリを人質に取っている。

「ちっ……。」

「ロベルトさん！」

「こいつか?漂流者ってのは？」

「ああ、こいつだ。」

後ろからマツシュが現れ海賊の輪に入っていく。

「おかしいと思ったんだ……。」

「ハハツ！今更気づいても遅いんだよ！」

「えっ？どういふことなの？マッシュ、お父さんはー!?」

「ああ、旦那ですか？ほらあそこ。」

マッシュが指差す先には、血だらけで倒れているキーンの姿があった。

「お、お父さん？」

リリは、海賊の腕を振り解きキーンに近寄る。

「ねえ・・・お父さん・・・目を開けて・・・このままじゃあたしひとりぼっちになっちゃうよ・・・。お父さん・・・。」

泣きながらキーンを揺さぶるリリ・・・

「お父さん・・・お父さんってば!!!」

俺の中に怒りの火が点り始める・・・。

マッシュがリリに近ずき腕を引っ張る。

「お嬢さん。俺らが面倒見てあげますよ。」

「嫌！離してー！」

「こっちにこいって言うてんだ！」

リリを張り飛ばす。

「痛いよ・・・お父さん・・・。」

「おら、こっちに来いよ!・・・!？」

マツシユの腕を掴む。

「何だよ・・・殺されてえのか!」

「この子をどうするつもりだ・・・？」

「あ!？売り飛ばすに決まってるだろ!こっいつ小さいガキが好きな

変態もいるんでな!」

ゲラゲラと海賊供が汚い笑い声を響かせる。

「そうか・・・救う価値なしだな・・・。」

「てめえ何言ってる・・・ギャアアア!!!」

掴んでいたマツシユの腕を握りつぶす。

「腕・・・腕がああああ!!!」

「すまん・・・粉碎骨折といったところか？」

周りにいた海賊達がザワめく・・・。

「てめえ・・・何者だ・・・？」

「俺か・・・？俺は・・・医者の卵だ・・・!」

腕が赤く腫れ上がりより一層太くなっていく。

「な、なんだ……その腕……？」  
「豪力の果実……。」

「悪魔の実の能力者かよ！ついてねえ！」  
「いや……違うんだが……まあいい……。」

俺は腕を振り上げる。

『豪撃！！！！』

豪腕を思い切り振り切ると数人の海賊が風圧で吹き飛んでいく。

「なっ！？」

「生きて帰れると思うな……。」

「ひひひひひひひひひひ！！！！！」

（商船・朝）

海賊供は、海の藻屑にした……。後は……。

「リリ……。」

まだ、父親の遺体に泣きついている……。

「お父さん……あたしこれからどうすれば……。」

俺は思わず口に出す……。



「俺と一緒に……行くか……？」  
「えっ……？」

リリは俺を見つめる。

そしてゆっくりと首を縦に振る。

「よろしく……リリ……。」  
「うん……。よろしくね。ロベルト……。」

今はまだこの子に満足のいく生活をさせてあげられないかもしれない  
でも俺はこの子と一緒に生きていくことを決めた。

俺とリリはお互いに見つめあいクスツツと笑った。

師匠……俺にも守るものができました……。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道～（後書き）

どうでしょうか？

おもしろい！という感想があればこれから

ちよこちよこロベルトのその後を書くことと思うんですが

どうですかね？

この先も見てみたい！と思ったら感想・一言お願いします。

第四十四話 モンブランクリケット（前書き）

モンブランクリケットに会うため帆を進める。

## 第四十四話 モンブランクリケット

（ジャヤ東海岸）

この場所にくるまでにマシラの兄弟とやらにあったのだが・・・

こいつも人類とは思えない顔をしていた。

どう考えてもあいつら霊長類だよな。などとぼんやりと考えていると

「見えてきたぞ。あれが・・・夢を語る男の家・・・。」

「すげえ！豪邸じゃねえか！」

「バカよく見てみる。」

ゾロが言うつようによく見ると家自体は半分ほどで

城の絵が描かれたベニヤ板がはられているだけだった。

「とんでもない見栄っ張りなのかそれともただのアホなのか・・・」

「とりあえず、中に入ってみよう。おじゃまします。」

「ルフィ・・・それは不法侵入だぞって・・・もう入っちゃったか。」

俺はとりあえずそこら辺の丸太に座る。

「誰もいねえぞ。」

「そうか。じゃあ、留守なんだろ。」

「ちえ、つまんねえ。ん？なんだ？」

ルフィが海岸に歩いていく

「ルフィ、海に近ずきすぎて落ちるんじゃないぞ。」

言っているそばからルフィが海に落ちる。

「・・・言わんこつちゃない。」

「てめえら誰だ！」

海から爺さんが上がってきた。

まさか、ルフィこの爺さんに海に引きずり込まれたのか？

「人の家でくつろぐとはいい度胸だ！ここらは俺のナワバリだ！」

この爺さん・・・ナワバリってまるであの猿兄弟みたいなこというな。

「狙いは金か。」

「金？金があるんですか？」

「うるさい！死ね！」

爺さんが蹴りを繰り返す。

俺は、それを手で叩き落とし静止をかける。

「落ち着いてください！俺たちはただ・・・」  
「問答無用！」

爺さんは銃を俺に向けて発砲した。

銃口から放たれた弾丸を手で掴む。

「やめましょう。」  
「何！？う、うぐ・・・。」

爺さんが急に地面にうずくまる。

「お爺さん！？チョッパー！」  
「お、おう！とりあえず家に運ぼう！」

俺とチョッパーで診断した結果・・・

「潜水病だな。違うか？」  
「いや、キラの言うとおり潜水病だ。」  
「潜水病？」

「ダイバーがたまにかかる病気だ。だけど・・・」  
「うん。持病になったりするものではないんだけど。」  
「おい、お前等2人で納得するなよ。」

「ああ、とりあえずよく聞け。」

俺は、みんなにわかるように説明を始める。

『おやつさん！大丈夫か！』

猿兄弟が家の扉を開けて顔を出す。

「てめえらここでなにを！」

「事情は、俺が説明するよ。」

「ええ、キラお願いね。」

猿兄弟に事情を説明する……。

『おめえら……いい奴だなあ……』

「あ、ありがとう。」

2人揃うと迫力倍増だな……。

空島への情報を聞くため

俺たちは爺さんが目覚めるのを待つことにした。

第四十四話 モンブランクリケット（後書き）

今回は短いです。

言い訳としては、時間がなかったんです・・・。

ロベルトの今後を描いて欲しいとの要望を

頂いたのでこれからも隙間隙間に挟んでいきたいと

思います。



## 第四十五話 空島へ行く方法（前書き）

モンブランチケットが目覚めた。

空島へ行く方法は？

## 第四十五話 空島へ行く方法

（船上）

俺は爺さんが起きるまで船室でくつろいでいた。

・・・気になっていることがある。

モックタウンであつたあの大男・・・確か・・・

俺が考え事をしているとドアをノックする音がする。

「キラ、ちよつといい？」

「ナミちゃん？どうぞ。」

「空島に行く方法がわかったわ。」

「えつ。おじさん起きたのか、教えてくれればよかったのに。」

「呼んだじゃないの！」

「呼んでたのか・・・悪い気づかなかった。」

「もう！それでね。行く方法としては・・・」

「突き上げる海流かな？」

ナミが驚いた顔で俺を見ていた。

どつやら当たつたらしいが・・・それはかなり危険だな。

「うまくいかなければ海の藻屑か。」

「そういって……私どうすればいいの？」

「へっ？」

思いがけない一言に裏声が出てしまう。

「航海士の私が判断しなければいけないと思うんだけど……」  
「だけど……？」

「自信がないのよ。うまくいかなかったらどうしようとか  
色々考えちゃって……それでキラに相談しようと思って……」  
「。」

「そうなんだ……」  
「相談しちゃダメ？」

顔を赤らめながら小首をかしげる。

「いや、構わないよ。俺で良ければいくらでも聞くさ。」  
「ふふっ、ありがとう。」

「いいかい。うまくいかないなんて考えるな。俺らが迷ってたら  
あいつらだって不安になるだろ？」

「そうよね……」  
「だから俺たちは自信を持って言おう。大丈夫！ってさ。」

「うん。そうね！ありがとうキラー！」  
「どういたしまして。」

俺は笑顔で船室から出て行くナミを見送った。

しばらくするとルフィが俺を呼びにくる。

爺さんや猿兄弟と食事をするらしい。

俺が見ない間に随分と仲良くなったもんだ。

くクリケットの家く

「おお！姉ちゃん！ここ座れ！」

「姉ちゃんつて・・・俺？」

クリケットさんは、自分の隣に座るよう俺を呼んでいる。

「こんな美人の姉ちゃんもいるのか！お前等の船はいいなあ！」

この爺さん・・・だいぶ飲んでるな・・・。

というか・・・。

「俺は男だ！」

「な、なにいいい！？」

「どこをどう見れば女に見えるんだよ！」

「顔だ。」

「顔だろ。」

なぜかサンジまで答える。

「お前には聞いてない。」

「でもキラのその顔は女であるべきだろ！・・・グエ！」

サンジの頭に拳骨を落とす。

「つたく・・・。そうだ、クリケットさん。」

「お、なんだ姉ちゃん。」

この爺・・・まあ、いいか・・・。

「突き上げる海流の発生場所って簡単にわかるものなんですか？」

「おう、よく聞け。この岬からまっすぐ南に・・・しまった！！

！！！」

「ど、どうしたんです？」

「南の森でサウスバードを捕まえて来い！」

「サウスバード・・・そうか！鳥の習性を利用して。」

「そうだ。わかったら早く行け！」

「リミットは？」

「夜明けだ！」

「了解！みんないくぞ。」

俺たちは南の森へ向かいサウスバードの搜索を開始した。

第四十五話 空島へ行く方法（後書き）

感想・一言お願いします。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第二話」(前書き)

続きが見たいとの声がありましたので

続きを書きました。

## サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第二話」～

俺とリリは、キーンの亡骸を埋めるため大陸を探すことにした。

自分の故郷でなくてもいいのかとリリに尋ねたが

「いい・・・もう家には戻りたくない・・・思い出しちゃうから・・・」

と言うことだった。

思い出したくもないはずだ。

父親のあんな姿を見てしまったんだから・・・

俺が彼女を哀れんでいると・・・

「ロベルト・・・方角ってあつてるのかな？」

「ん・・・すまない・・・航海術は苦手だな・・・」

「これ見てもダメ？」

リリがログポースをポケットから出す。

「リリ・・・どこでこれを・・・？」

「マッシュユが落としたやつを拾ったの。」

「そうか・・・貸してくれ・・・。」

俺は、リリからログポースを受け取り方角を確認する。



「どれ・・・たぶん・・・正しいんじゃないか・・・？」  
「たぶん？」リリが首を傾げる。

「すまない・・・おおよそでしかわからん・・・。」  
「そつかくじゃあ、しょうがないよね。」

リリが俺に微笑む。

父親が死んだばかりなのに・・・  
俺は、気丈に振舞う彼女を見つめる。

「もう！ロベルト！笑顔笑顔！」  
「ふふっ・・・そうだな・・・。」

つられて俺も笑顔になった。

「そうだ・・・リリ達は・・・どこに向かっていたんだ・・・？」  
「アラバスタだよ。」

「アラバスタ・・・」

アラバスタか・・・ログポースどおり進んではダメだ・・・

俺は咄嗟にそう判断する。

アラバスタは復興中とはいえ、まだバロックワークスの  
残党が残ってるかもしれん。

リリを危険にあわせる訳にはいかない・・・

「ロベルト……大丈夫？」

考え込む俺を見て心配したりリが声を掛けてくれる。

「大丈夫だ……リリ……アラバスタへ行くのはやめよう……」

「なんで？」

「最近戦争が行われたばかりで何かあるかわからないんだ……」

「そうなんだ……じゃあ、しょうがないよね。」

「ああ……航路を変更しよう……」

「でも、どこへ行くの？」

「サクラ王国に……」

「サクラ王国？」

「ああ……会いたい人がいる……」

俺たちはサクラ王国へと帆を進めた……はずだった……

（2週間後）

サクラ王国にはいつになったら着くんか……

もう、2週間も海の上を彷徨っている。

食料も底を付いた……これからどうすれば……。

「ねえ、ロベルト……あのね……。」

「どうした……？」

「パパが……。」

そう俺たちは2週間キーンの亡骸を乗せたまま進んでいた。

もちろん2週間も元の姿でいるはずがない。

キーンの亡骸は腐り始め船上には悪臭が漂っていた。

「すまない……俺が大陸を見つけれなかったせいで……。」

「ううん……大丈夫だよ……大丈夫……。」

リリが突然倒れる。

「お、おい！リリ！」

「なんかね……ボーツとする……。」

「……！？すごい熱だ……！」

クソッ……こういうときは……どうすればいい！？

俺は生まれてから一度も病気というものにかかったことがない。

対処法がまったくわからない……

途方にくれて立ち尽くすしかなかった俺の前に……

大きな一匹の鳥が現れる。

「な、なんだ・・・？」

「困っているようだな。青年。」

「と、鳥が・・・しゃべった・・・」

「おお、このままじゃダメか。」

大きな鳥から壮年の男へと姿を変える。

「悪魔の実・・・？」

「そう！トリトリの実、幻獣種サンダーバード！ビビッた？」

「まあ・・・驚いた・・・」

幻獣種が見られるとは・・・ってそんなこと考えてる場合ではない。

「助けてくれ・・・リリが・・・。」

「リリ？誰だそりゃ？」

「この子だ・・・。」

「おやおやカワイコちゃん。どうした？」

リリの額に手を当てる。

「うん 38 つてどこか風邪かな？」

「38・・・？それは、高いのか・・・？えつと・・・」

「俺は、ロバーツ。フランシス・ロバーツだ。」

「ロバーツ……で、どうなんだ……？大丈夫なのか……？」

「おう。俺の船で休ませればすぐよくなるぞ！」

「俺の船……？」

俺たちの船の隣に海賊船が現れた。

現れた船には見覚えがある……

「ロバーツって……まさか……雷のロバーツ……!？」

「ほう。よくご存知で。」

「さあ、乗りな。俺のサンダーソニック号に！」

「……かつこ悪いな。」

「かつこいいだろ！サンダーソニックだぞ！」

「いや……いい歳して……。」

「この野郎……まあ、いい。乗りな。」

たぶんリリが起きていたら嫌がっていただろう。

父親を殺した奴等と同じ海賊……

俺はリリを抱えソニック号へと乗る。

「ロバーツ……お願いがある……。」

「ん？なんだ？」

「俺たちの乗っていた船を燃やしてくれ……。」

「あ、ああ、お安い御用だが・・・わざわざ・・・なんでだ？」

「あの船にはこの子の死んだ父親が乗っている・・・。」

「なるほど・・・火葬ね・・・わかった。待ってな。」

ロバーツは大きな鷲へと姿を変え、たいまつを啜えて飛んでいく。

たいまつを船へと落としキーンを火葬する。

すまないキーン・・・ちゃんと弔ってやりたかったんだが・・・

俺は、燃えていく船を見つめていた。

リリは、薄目を開けて何かつぶやいている。

「大好きなパパ、ありがとう。さようなら・・・。」

そんな彼女を俺は強く抱きしめることしか出来なかった。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第二話」～（後書き）

はい。オリジナルの悪魔の実が登場です。

サンダーバードは、一応幻獣です。

鳥の種類としては驚ですね。

感想・質問待ってます。

これからも続きは書いていきますが

メインはキラなのでそのところよろしくお願いします。

第四十六話 サウスバード（前書き）

サウスバードを探し森へ



## 第四十六話 サウスバード

サウスバードの探索を始めて20分後

一向に捕まえられない・・・いや、発見することもできない。

「仕方ない・・・手分けしようか。」

俺はみんなに提案する。

「そうね。それがいいわ。じゃあ、キラは私と一緒にね。」

「ナミちゃん。いいかい、誰かがここで連絡係をしなきゃ困るだろうか？」

「まあ、キラの言うとおりだな。誰がやるんだよ連絡係。」

「サンジ君。決まってるじゃないか。俺だ！」

「いやいや、キラお前は強いんだから行けよ。」ウソップに突っ込まれる。

「ウソップ！強い強くないじゃない！めんどくさいから行きたくない！」

『もつとダメだろうが！！！！』

「そ、そんな全員で突っ込まなくても・・・。」

「キラ、あんたね。そのめんどくさがるのやめなさいよ。」

「だってさ・・・お、おい・・・あれじゃないか？」

サウスバードが木に止まってこちらを見ていた。

「あ、あれだ！」

「よし捕まえる！お前等！」

『お前も行けよ！！！！』

「バカ！突っ込んでる場合か！リミットは近いぞ！」

「私が捕まえてあげる。」

「おお、ロビン。頼む。」

ロビンはハナハナの実の能力で木の上のサウスバードを捕まえる。

「ロビン！ありがとう！」

俺はロビンに抱きつく。

「ちょ、ちょっとキラ・・・離れて・・・」

ロビンが顔を真っ赤にして慌てている。

俺が抱きついたせいか、ロビンが捕まえていたサウスバードから手を離す。

「あ！」

「キラ！てめえがロビンちゃんに抱きつくからだ！」

「喜びを分かち合っただけだろ！」

「いいから捕まえなきゃ！」

ギヤアギヤアと騒いでるうちにサウスバードが飛び去っていく。

「クソ！くらえ！」

『断罪の小銃！』

俺は血の弾丸をサウスバードに向かって放つ。

『お前は何やってんだ！』全員から同時に突っ込まれる。

「大丈夫だ！見てろ。」

サウスバードは弾丸が当たり地面に落ちる。

「あゝあ、キラが殺したぞ。」

「いいから見てみるよ。」

サウスバードは眠っていた。なぜなら、俺が撃つたのは麻酔弾。

だからこそ躊躇もなく撃つたのだ。

「さあ、戻ろう。時間がない。」

くモンブランクリケットの家く

「クリケットさん何があった！？」

「すまねえ……」

「キラ！船がやられてる！」

「金塊もなくなってるわ！」

これは一体……

「キラ。見てみる。」

「どうしたロロノア……!? ベラミーか……」

家の壁にはベラミー海賊団のマークが描かれていた。

「ルフィ……行くぞ……」

「おう。」

俺とルフィは、町の方に向かって歩き出す。

「ちょっと! あんたたち!」

「ナミちゃん。朝までには戻るよ。」

「ルフィ……お前どっち相手にしたい?」

「ベラミー。」

「OK……俺は、サーキースな……」

〈モックタウン酒場〉

「べ、ベラミー! 大変だ! 逃げたほうがいい!」

「なんで俺が逃げなきゃならねえ。」

「あんたが昼間相手にした奴等、あんたより懸賞金が上なんだ!」

モンキー・D・ルフィ

懸賞金：1億ベリ

ロロノア・ゾロ

懸賞金：6000万ベリ

旋律のキラ

懸賞金：9000万ベリ

「ウソだろ・・・なんだよ・・・この手配書・・・」

「確かに・・・ルフィが一億とは・・・驚きだな。」

「ああ、あんたもおかしいと・・・いいいいいい!!?」

「うわああああ!せ、旋律のキラだああああああ!?」

「安心しろ。お前等に用はないよ。」

俺は、ベラミーとサーキースの方を見る。

「ウチの船長が外で待つてるよ。ベラミー。」  
「ふん。ご指名か。」

ベラミーが外に出て行く。

「サーキース。君は・・・俺が相手してやるよ。」

「へ、へへ・・・」

『断罪の大鎌』

鎌の先をサーキースへと向ける。

「こ、殺すのか？」

「殺しても構わないんだけど・・・どうする？」

ニコリと笑いサーキースを見つめる。

「い、いや・・・お、俺は・・・」

鎌の先で軽くサーキースの頬に傷をつけると腰を抜かして座り込む。

こいつ・・・弱い・・・殴る気も起きないな・・・

俺はサーキースを酒場に残しその場を後にした。

第四十六話 サウスバード（後書き）

感想をお願いします。

〽祝40万PV記念 匂い〽(前書き)

40万記念です。

ここまでくれたのもみなさんのおかげです！



「祝40万PV記念 匂い」

「メリー号デッキ」

「チヨ、チヨッパー・・・何してんだよ・・・?」

チヨッパーが俺の近くに来てクンクンと匂いをかいでいる。

なんだか・・・すごく嫌なんだが・・・

臭いものでも食べたかな?

俺は、自分の服の匂いを確かめる。

うん・・・臭くはないぞ・・・

「キラ。なんか甘い匂いするな!」

「えっ?別に甘いものなんか食ってないぞ?」

「でも、なんかアイスの匂いがするな。」

「ふん。自分の匂いなんてわからないからなあ。」

「何してるの?」

「ああ、ナミちゃん。今さチヨッパーに嗅いでもらってるんだよ。」

ナミが冷たい目でこちらを見ている。

「な、なんだよ・・・。」

「いや・・・別になんでもないわ・・・。」

「何？俺なんかした？」

「嗅いでもらってるって・・・あんた変よ・・・それ。」

「・・・チヨッパー。ナミちゃんも嗅いでやれ。」

「うん。わかった。」

「なっ・・・チヨッパーやめなさい！恥ずかしいから！」

チヨッパーがナミの匂いを嗅ぐ。

「みかんの匂いがするぞ！」

「ほう。お金の匂いは、しないか？」

「ちよつと何それ。私がお金に汚いとても！？」

「お金の匂いもするぞ。」

「チヨッパー！」

「アハハハハ！やっぱりな！」

「キラ・・・チヨッパー・・・覚悟できてるわね？」

「いつ！？ゴ、ゴメン！な、なんでもするから！」

狂気に満ちた表情から一遍して満面の笑みになる。

「そう？じゃあ、久しぶりにマッサージでもお願いしようかしら。」

「も、もちろん喜んで！」

ナミは船室へ向かおうとしたとき突然振り返り・・・

「そうだ。キラは、何の匂いがしたの？ チョッパー！」  
「キラはアイスの匂いだな。」

「アイス？・・・キラ嗅がせて。」  
「はい？」

「匂いを嗅がせて！」  
「ちよっ・・・やめ・・・」

ナミに羽交い絞めにされ嗅がれる俺・・・。

こんな姿誰かが見たらどんな誤解を・・・!?

「あなたたち仲いいのね。」

「ロ、ロビン！ 助けてくれ！ イタタタ・・・」

「助ける？ うれしそうよ。キラ。」 クスツと笑いながら答える。

「冗談言ってる場合じゃ・・・ぐふっ！ 首に入ってるって・・・」

だんだんと意識が遠のいていく・・・

俺・・・殺される・・・

「本当に死んじゃいそうよ。」

「ロビン・・・キラ、いい匂いがするわ！」

「なっ！ 甘い匂いがするだろ？」

「ええ、チョッパーの言うとおりだわ！」

「・・・キラ、泡吹いてるわよ。蟹さんみたいね。クスツ」

「ナミすわぁくん！ ロビンちゃん！ ってキラ！！！！！！」

サンジがナミの腕から俺を助け出す。

「ナミさん・・・泡吹いてるけど・・・」

「大丈夫よ！キラは強い！」

「それ、絞めてた言い訳にはならないわよ。」

「キラ！医者ーーーー！俺だあ！」

俺はうすれゆく意識の中で今まで感じたことない恐怖を感じていた。

・  
・

ナミちゃん・・・こえええ・・・

これから数日間。俺がナミちゃんに近づくないようにしていたことは

言うまでもないだろう・・・。

く祝40万PV記念 匂い く（後書き）

麦わら一味の匂いについては、ウィキとかにも載ってますよね。

なので今回、匂いを題材にさせていただきました。

## 第四十七話 ロマン（前書き）

サウスバードを捕まえて戻るとクリケットが何者かに襲われた後だった。

ルフィとキラはベラミー海賊団のマークを発見し犯人がベラミーだとわかる。

キラは、サーキースを圧倒したがルフィは・・・？

## 第四十七話 ロマン

「あつた。これこれ。」

俺は、クリケットさんの金塊を回収する。

「キラ。見つかったのか？」

「おう。ルフィ。これだろ？」

「そうそれ！」

「勝ったのか？」

「当たり前だ！」

「フフツ。よし！持って帰るぞ。」

ルフィと俺は金塊を持ちみんなの元へと続く海岸線を走った。

く聖地マリージョアく

今、この場所に七武海の内3人が集まっていた。

”ドンキホーテ・ドフラミンゴ”

”バーソロミュー・くま”

”ジュラキュール・ミホーク”

このほか海軍トップの人間が数人・・・その中には海軍総帥の姿もある。

彼等の話題は・・・クロコダイルの穴を誰に任せるのか？である。

そこへクロコダイル称号剥奪を受け現れた男がいた。

”黒ひげ海賊団ラフィット”

彼は、七武海へと自分達の船長である男を推薦しに来たのだ。

その男は”マーシャル・D・ティーチ”

ルフィ達がモックタウンの酒場で会った男。

彼がティーチだった。

この推薦に海軍総大将のセンゴク元帥が反論する。

「どこの馬の骨かもわからん奴では他の海賊への威嚇にならん。」

これにラフィットが反論した。

「じゃあ、誰かほかにいるんですか？」

「むう・・・。」



「あいつはどうなんだよ。」

ドフラミンゴが2人の話に横槍を入れる。

「死神のユダだよ。」

「ユダには、一度断られている。それに奴は今生きているのか？  
めっきり名前を聞かなくなったが・・・」

そう5年前に一度死神のユダを七武海へと勧誘したが断られてしまっていた。

もしそのときに七武海へと入っていたら。

15歳という最年少で三大勢力の一角を担うことになっていた。

ミホークがゆっくりと口を開く。

「強きものは・・・死なん・・・。」

「おい、鷹の目。あいつが生きてるなら嫌になるほど名前を  
聞くはずだぜ？」

「・・・。」

「ダンマリかよ・・・。仕方ねえからティーチって奴でいいだろ  
？」

「むう・・・。」

「大丈夫です。ちゃんと七武海に入るための計画は立ててあります。」

「フフフフ！おもしれえ！やらせてみよっぜ！センゴク！」  
「いいだろう。少し時間をやる。」  
「はい。我等が一味の名は黒ひげ海賊団。以後お見知りおきを。」

（メリー号前）

「なあ、ゾロ。あいつら間に合うのかよ。」

「ルフィはともかくとしてキラと一緒になんだ心配ねえよ。」

「そうよウソップ。ルフィはともかくとしてキラがいるんだから。」

「おめえらのとこの船長はどれだけ信用がねえんだ・・・」

クリケットが呆れてため息を吐く。

「お〜い！みんな〜！」

「お、ルフィが来たぞ！」

「これ！見る！」

「ヘラクレス！」

『何してやがったたてめえ！！！』全員からの突っ込みが入る。

「いや〜こいつ捕まえるの大変だったよな。キラ。」

「そうだな。結構見失ったもんな。」

「キラ！あんたがついていながら・・・」

ナミが拳を握り締めている。

「ちよ！？ゴメン！だってルフィが少年のような目で俺をみるか

らさ。」

「それでも止めるのがあんたの仕事でしょうが！」

「申し訳ないです。」

俺は涙目でナミを見つめた。

「うっ……もう！」

ナミは顔を赤くして船へと乗り込む。

「あれ？メリー号……羽生えてない？」

「ああ。メリー号フライングモデルだ。」

「飛べそー！ー！」

ルフィが大喜びで船へと走っていく。

俺はその光景をみてクスクス笑いながらクリケットさんの前に金塊を置く。

「どうぞ。これはあなたの物だ。」

「ふっ……。早く行け乗り遅れるぞ。」

「ええ。お元気で！色々ありがとう。」

船へと小走りで向かう。

「ばかやろっ……礼を言うのは俺のほうだ……。」

くメリー号く

「よし！みんな空島行くぞ！」

「キラ。お前、空島には否定的じゃなかったか？」

「まあ、ここまでしてもらって行かない訳にはいかないぞ。」

『お前等！』

クリケットさんが呼んでいる。

「どうしました？」

「黄金郷も空島も！無いと証明できた奴はいない！」

「バカげた理屈だと笑う奴がいるかもしれねえ！でも……」

『それでこそ！ロマンだ！』

「シシシシ。ロマンか！」

「そうだ！いいか空から落ちてくんじゃねえぞ！」

「ええ。大丈夫ですよ。」

「あなたのロマン！俺たちが受け継ぎました！だから……」

『絶対に落ちたりしません！』

「へへ……いうじゃねえか……キラ。がんばれよ。」

船は突き上げる海流に向かい出航した。

第四十七話 ロマン(後書き)

はい。四十七話書き終えました！

俺・・・お疲れ・・・。

感想・一言お願いします！

第四十八話 突き上げる海流（前書き）

目指せ突き上げる海流！

## 第四十八話 突き上げる海流

船が出航し3時間が経過した頃・・・

波が高くなり渦潮が発生する。

「さあ・・・空島だ。」

「キラ、なんかワクワクすんな！」

渦潮が収まり海が不気味なくらいに静かになった。

「さあ・・・来るぞ・・・突き上げる海流が！」

『待てー！ー！』

「あれは・・・モックタウンであった大男・・・？」

「麦わらのルフィ！てめえの1億の首をもらいに来た！」

「旋律のキラ！9000万！海賊狩りのゾロ！6000万！の首ももらうー！」

「おお！俺キラより額が上がったぞ！」

「おめでとう！だが海賊王になるならこれで満足するなよ。」

ルフィと話をしていると・・・

「・・・来る！海流が来るぞ！みんな船にしがみつけ！」

俺の掛け声で全員が船にしがみつく。

轟音とともに突き上げる海流が発生する。

「これは・・・すごい！俺も初めての経験だ！」

メリー号が空へと続く海流を登っていく。

俺はナミの近くへと移動する。

「さあ！あとは、君の航海術で空島へと導いてくれ。」

ナミが大きくうなずき全員に指示を出し始めた。

「やばいぞ！ナミさん落ちそうだ！」

「大丈夫よ！いける！」

「積帝雲に突っ込むぞ！」

雲を抜け突き進むとそこは・・・

「すげえ・・・ははっ・・・雲の上だ・・・」

生きていて一度でもあっただろうかここまで胸躍ることが・・・

「ウソップ行きマース！」

「何！？ちょ！？待て！ウソップ！」

ウソップが雲に飛び込む。

「バカヤロウ！なんで止めないんだ！」

「えっ？だって雲とはいえ海だろ？」



「雲に海底があんのかよ！」  
「ないな……!?ウソツプ！」

ルフィが手を伸ばしウソツプを捕まえる。

「ふう……まったく……いいか！海と同じだと思っな！」  
『ハイ！』ルフィとウソツプが返事をする。

チヨツパーが双眼鏡であたりを見回し……

「み、みんな！大変だ！船がやられた！」  
「……!?チヨツパーどういうことだ？船がいるのか？」

「キラ！船がいたけどいなくなって人が来るんだ！」  
「い、意味がわからん……ロロノア……わかるか？」  
「お前がわからないもんがわかる訳ないだろ。」

「お、おい！人が雲の上を走ってるぞ!?!」  
「サンジ……お前まで何言い出す……本当だ！」

仮面をつけた奴が船へと飛び乗ってきた。

「排除する……」  
「やる気らしいな……」  
「ああ、やっちまえ……お前等！」  
「てめえは、またかよ！」

ルフィ、ゾロ、サンジが身構えるがあっさりと蹴り飛ばされる。

「何してんだ！お前等！？」

「次は貴様だ……」

俺のほうへと向かってきた。

「くっ……野郎！」

仮面の蹴りをかわし拳を腹部に叩き込む。

「ふぐっ……ちっ！」

「なっ……まだ動けんのか！？」

確実に致命傷を負わせたつもりが起き上がり  
上空へと飛び去りこちらに武器を向ける。

「そこまでだ……！」

「!？」

どこからかもう一人が鳥に乗って現れ先ほどの仮面をつけた奴を吹  
き飛ばす。

「な、なんだ？」

「我輩、空の騎士。」

「空の騎士？」

「奴は、去ったようだな。」

「あ、ああ。助けていただきありがとうございます。」

「良い。これはサービスだ。」

「それにしてもなあ？ナミちゃん。」

「ええ、あんたたち3人何やってんのよ！」

「なんか体がうまくうごかねえんだよ。」

「きつと空気が薄いせいね。」

「ロロノアく普段トレーニングしてんだろ？」

「うるせえ。なんで、キラは平気なんだ？」

「俺か？ルインの時高山トレーニングとかしてたからなあ。」

「だから多少空気が薄くても苦にはならないな。」

「ちつ・・・お前は本当すげえよ。」

「おぬしら青海人か？」

「ええ。」

「ならば仕方ない。ここは青海より7000メートル上空。

通常の青海人ならば体が持つまい・・・」

「じゃあ、俺って通常の青海人じゃないんだな。」

「うむ。おぬしが動いていたのには驚いた。」

「でも、ウチの連中そろそろ慣れてきたみたいだぞ。」

俺がルフィたちを指差すと空の騎士は「ありえない」といった顔を  
する。

このほか色々な話があったがその辺は俺は聞かなかった。

だって・・・話ながいんだもん・・・眠くなるよ・・・

く天国の門く

俺達は・・・なんだかおかしなエビに乗り・・・進んでいく。

あっさりと通してはくれたが・・・何か腑に落ちない・・・

不安だ・・・

船は、神の国スカイピアへと到着する・・・。

そこは・・・あまりにも美しかった！

そう・・・人が足を踏み入れてはいけない。

そんな空気すら漂うほどに・・・

第四十八話 突き上げる海流（後書き）

すみません。だいぶ端折りました！

空島まできましたね〜

まだまだ先がながいなあ〜

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第三話」(前書き)

ロベルト編。第三話です

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第三話」～

～ソニック号医務室～

「ロバーツ……リリの容態は？」

「むう……風邪だな……あと栄養失調だ。」

「栄養失調……確かに……3日は食べてないかもな……」  
「何！？こんな小さな子が3日も何も食べてないのか！？」

「ああ……食料が尽きてしまっていたものでな……」  
「そうか……よし、ウチのコックに飯を作らせるから。待ってな。」

そついい残しロバーツは部屋から出て行く……

だが驚いた……ロバーツは船長兼船医らしい……

だからあの時リリの症状がすぐわかったわけか……

「ロベルト……ここどこ……？」

「リリ……ここは海賊船の医務室だ……」

「海賊船！？」

リリがおおきな声を出し飛び起きる。

「私達捕まっちゃったの！？」

「違う……助けられたんだ……」

「そんな訳ないでしょ！海賊ってお父さんを殺した奴等と一緒になのよ！」

「どうせみんな同じなのよ！」

「落ち着け……リリ……」

「落ち着け！？なんで落ち着いてられるの！？」

リリがかなり取り乱している……

やはりあの時の光景が脳裏に焼きついているらしい

「なんだか騒がしいな？」

「ロバーツ……すまない……」

「食事お前の分も持ってきた。ここに置いてくぞ。」

ロバーツが部屋を出ようとするとリリが呼び止める。

「待って！なんで優しくしてくれるの！海賊なんでしょ！？」

「お譲ちゃん。海賊ってのは確かに悪い奴が多いと思う。ただだな……」

ロバーツが自分の胸をドンドンと叩き……

『信念を持つてる奴はいい奴！って俺は思うぜ。』

「信念……？」

「ああ、信念。俺の信念は病人は善でも悪でも助ける。以上！」

リリに手を振り部屋を出て行く。



「変なの……」  
「ああ……おかしい奴だな……」

俺とリリは顔を見合わせクスツツと笑う。

くソニック号デッキ

「船長！あの男どこかで見たと思ったたら豪腕のロベルトです！」  
「知ってるよ。」

「へっ？知ってて乗せたんですか？」  
「仕方ねえだろ。病人がいたんだから。」  
「あんたは、本当にお人よしよね。」

「うるせえぞ。ローズ。」  
「ふふっ……でもそこが好きよ。」

ローズ

ロバーツ海賊団副船長。

容姿・特徴

赤いウェーブのかかったロングヘアー  
スリットの入ったロングスカート  
派手な服装を好む。

「お前な船員の前で余計なことを言つな！」

「もう怒っちゃってカワイイ。」

「取り込み中悪いね。」

ロバーツの船に何者かが飛び乗ってくる。

「おお！エースか！」

「よう！ロバーツ元気そうだな！」

「まあな。そうだエドワードの容態は？」

「さあ？最近会ってないんでな。」

「ん？家出か？」

「家出？いや、ある男を捜してる。」

「ほう。」

「それで、世界中を飛び回ってるあんたなら知ってるんじゃないかと」

「友人の息子が尋ねてきてくれたんだ。答えられることは答えるぜ。」

「黒ひげって男、知ってるか？」

「黒ひげ？」

「ああ、ティーチって男だ。」

「ああ。確かお前等の船に遊びに行ったときに見たことあるな。」  
「そいつが仲間を殺した。」

「何!？」

「俺は、あいつを許さねえ……」

エースは強く拳を握り締めた。

「すまないがティーチがどこにいるのかは知らない。」

「そうか。わかった。邪魔したな。」

話が終わりエースがストライカーに戻ろうとすると……

「エース、飯でも食ってけよ。」

「先を急いでるんでな。」

そう言ったエースのお腹から空腹を知らせる音が聞こえる。

「いただきます。」

「はい、どうぞ。」

エースは目の前に出されたご馳走にがつつく。

「エースちゃん。あいかかわらずすごい食べっぷりね。」

「ローズ。いい加減エースちゃんは、やめてくれよ。」

俺も結構強くなつたる?」

「ふふつ、ウチの旦那に勝つたらね。」

ローズがロバーツの肩に手を置く。

「旦那は、やめろ。」

「いいじゃない。そういう仲でしょ？」

「ほんと、仲いいよな。」

「ロバーツ……」

「おおっ！ロベルト！どうだリリちゃんの調子は？」

「ああ……おかげさまで……」

「そうか。よかったな。」

俺は飯を食いながら寝ている男に気がつく。

「この男は……？」

「火拳のエース。お前も聞いたことくらいあるだろ？」

「白ひげのよこの隊長か……。」

「あんた親父を知ってるのか？」

「エース。白ひげを知らない奴なんていないって。」

ロバーツがエースに突っ込む。

「ロバーツ……頼みがあるんだ……」

「あ？なんだ急に？」

「俺を……サクラ王国に連れて行ってくれないか……？」

「……理由は？」

「ドクトリーヌという人物にあって医術を学びたい……。」

「な！？医者志望なのか！？」

「ああ……世界中の苦しむ人たちを……助けたいんだ……」

「！」

「……………」

「いいじゃねえか。ロバーツ連れてってやれよ。」

「エースちゃんは、黙ってなさい。」

「……………いいだろう。」

「本当か!？」

「ただし!すぐすぐは、向かわない。」

「何……………?」

「俺にも助けなきゃいけない人たちがいる。だからお前の用事は最後だ。」

「それでもかまわないか?」

「……………しばらく考えさせてくれ。」

「ああ。しかし、お前が医者になりたいと言うなら俺と一緒にいることは

いい経験になると思うぞ。」

「……………そうなのか?」

「しばらく俺の助手として腕を磨けばいい。」

「それとも海賊船の船医の助手は嫌か?」

「リリと相談してみる……………」

「そうか……………わかった。」

〈医務室〉

「しばらくこの海賊船にいらってこと？」

リリが不安そうな表情で俺を見つめる。

「嫌だよな……」

嫌に決まっている……キーンは……海賊に……

「いいよ。ロベルトがそうしたいなら。」

「リリ……」

「私は、ロベルトと一緒に生きていくって決めたもん。

だからロベルトの思ったようにして？」

俺はリリを抱きしめてつぶやく「ありがとう……」

〈ソニック号デッキ〉

「ロバーツ……俺を助手として使ってくれ……」

「いいのか？」

「リリが了承してくれた……」

「そうか……強い子だな。」

絶対にすごい医者になる……世界中の困っている人々を助けるために

第四十九話 スカイピア上陸（前書き）

スカイピアへと足を踏み入れる。

## 第四十九話 スカイピア上陸

「ははっ・・・すげえ・・・雲の上に立ってる・・・!」

「ふふっ、キラ珍しくはしゃいでるわね。」

「ナミちゃん! だってさ、すごいよ! これ!」

笑顔ではしゃぐ俺をナミも笑顔で見つめている。

「キラもあんな顔するのね。カワイイ。」

ナミはクスクスと笑う。

そう俺達は神の国スカイピアへと上陸したのであった。

さっそく足を踏み入れたが

雲は思っているよりもフカフカで気持ちがいい。

見たことのない植物、果実・・・

「本当にあつたんだよな、空島・・・。」

俺は雲に横になり空を見上げる。

不思議だ・・・空島から空を眺めるなんて・・・。

クリケットさんは、正しかったんだ・・・。



あの人の想い、願いは、俺たちが叶えたはずだ・・・

どこからかハーブの音色が聞こえてくる・・・

「て、天使？」

羽の生えた女性がハーブを弾いていた。

彼女はこちらを振り向き「へそ！」

「へ、へそ？」

「青海からいらしたんですが？」

「え、ええ。あなたは？」

「コニスです。」

「コニスさん？あの色々と聞きたいことがあるんですが・・・」

「はい、何でも聞いてください。」

「じゃあ、まずは・・・」

「キラ、海からなんかこっちに来るぞ。」

「あれは、私の父です。」

「そうですか。ずいぶんとアクティブなお父さんですね。  
サーフボードか何かに乗ってるんですか？」

「あの乗り物はウェイバーです。」

「ウェイバー？」

「コニスさん。お友達ですか？」

「今、知り合っただんです、父上。青海からいらしたそうですよ。」

「そうでしたか！先ほどまで漁に出ていまして。いいロブスターが捕れたんですよ。家で食事でもどうですか？」

「えっ、そんな悪いですよ。今あつたばかりの方にそこまで・・・」

「何言っただキラ！ご馳走になろうぜ！」

「空島料理か俺も手伝うぜ！」

「ルフィ、サンジ・・・すみませんお邪魔してもよろしいですか？」

「ええ。どうぞ。家はこちらです。」

俺たちはコニスの方に招待されることになった。

ただの食事で済めばいいのだが・・・

第四十九話 スカイピア上陸（後書き）

短くてすみません！

第五十話 大罪（前書き）

アッパイヤードへ・・・

## 第五十話 大罪

「キラ、ちょっと私とデートしない？」

「デート？」

「そう。ウェイバーデート？」

ナミがこんなことを言い出したのには理由がある。

話が戻ること数分前・・・

ナミはウェイバーのことが気になったらしくコニスやコニスの父であるパガヤにウェイバーの原理や乗り方の説明を受けた。

説明を受けてすぐに試し乗りしていたのだが・・・

あるつことかナミはあっさりと乗りこなしてしまったのだ。

乗りこなしてしまった為には俺は今このような誘いを受けている。

空島料理・・・興味あったのにな・・・

かといって・・・一人で行かせるわけにはな・・・

「いいよ。行くうか。」

「うん。じゃあ、後ろに乗って。」

俺はナミの後ろに乗りスカイピアを出発する。

「ナミちゃん。運転上手だね。」

「うん。もうだいぶ慣れたわ。」

ナミと色々と話しながら進み続けると・・・

「な、何？ここ？」

「ああ、雲じゃなくて地面があるな・・・それに・・・森？」

森の奥のほうから轟音が聞こえた・・・

だが俺が気になっているのは・・・そんなことではない・・・

「まさか・・・ここは・・・俺ちよつと入ってみるわ。」

「へっ？キラ！あんた何言ってるの！？」

俺は森へと足を踏み入れる。

「ナミちゃん。20分以上たつても戻ってこない場合は先に戻ってくれ。」

あと自分で危険だと思ったら逃げてください。」

「なっ！？ちよつと！待ってよ！」

ナミの静止を無視して森を進んでいく。

「これは・・・ロロノアじゃなくても迷子になりそうだ・・・」

いたるところで銃撃音が聞こえる・・・

なんだ・・・どうなってんだ・・・

背後に気配を感じる・・・！

「誰だ？」

「不法侵入者発見だメ」

「・・・ヤギ？」

「違う！神兵だメ」

俺は神兵の横っ面にハイキックを叩き込む。

「メ・・・ぐふっ！？」

神兵は吹き飛び大木に叩きつけられ気を失う。

何で蹴ったかって？「メ」に腹がたつたから思わずね。

「さて・・・もう少し探してみますか・・・黄金を。」

そうここは俺の予想が確かならば・・・ジャヤ・・・

森にある木々、かなり大きくなってはいるがサウスバードを捕まえた森と

どこか似ている。

だがあくまで予想だ・・・確実にするものがあればいいんだが・・・

〔数時間後〕

広い・・・広すぎるよ・・・何もみつからん・・・

「だあ！クソ！どうなってるんだ！」

彷徨つてるとようやく開けた場所へとたどり着く。

やった・・・やっと出られ・・・ん？メリー号？

なぜか俺の目の前にメリー号がある。あいつら助けに来たのか？

いや・・・船が襲われてる・・・？

「チョッパー・・・！」

チョッパーがボロボロにやられ・・・空の騎士もだいぶ押されているようだ。

俺は急ぎ船に戻る。

「おい。ウチの船医が世話になったみたいだな。」

「おお、おぬしは・・・！」

「キラ・・・おで・・・船守れなかった・・・」

「チョッパー・・・空の騎士・・・あとは俺が・・・」

髪留めを外し・・・大鎌を造り出す・・・



長い髪の間から紫色の瞳が敵を捉える・・・

「不法侵入者の仲間か。俺はシユラ。貴様を・・・!?」

シユラの乗っていた鳥が真つ二つに切り裂かれ船に叩きつけられる。

「き、貴様！よくも！・・・!?」

一瞬の隙にシユラの後ろへと移動しシユラの後頭部を掴み持ち上げた・・・

「お前は・・・船と仲間を傷つけた・・・大罪だ・・・」

メシメシツつと音を立てシユラが被っていたヘルメットが碎ける。

「・・・。」

「ふふっ・・・体が動くまい・・・これは紐の・・・」

グシャつと音を立てシユラの頭部がリンゴのように潰れた・・・

「言っただはずだ・・・てめえは大罪・・・判決は死刑だ・・・」

俺は血だらけの手を洗い髪を縛り直しチョッパーの傷を診察し始めた。

（神）

「ばかな・・・シユラがやられた・・・」

「本当ですか！エネルギー様！」

「ヤハハハハ！おもしろくなりそうだ！」

エネルと呼ばれた男は、高らかに笑い出した。

まるでこれから起こる戦いを待ち望むかのように……

第五十話 大罪（後書き）

はい。シユラ殺しちゃった……

これからどうしよう……

感想・一言お願いします。

第五十一話 感覚(前書き)

シユラを圧倒し勝利したキラ。

これからどうする・・・？

## 第五十一話 感覚

俺がチョッパの看病をしていると空の騎士に声を掛けられる。

「おぬし何者だ？」

「はい？」

「神官をあなたにもあつさりと・・・」

「ふふつ、ただの青海人ですよ。」

「おぬしなら勝てるかもしれないな・・・エネルギーに。」

「エネルギー？」

「うむ。今このアッパーヤードを支配している神だ。」

「へえ・・・」

「チョッパ！いるの!？」

「ナミちゃんが帰ってきたみたいですね。いってきます。」

船室から出てデッキに顔を出す。

「おかえり。」

「キラ！よかった！生きてたのね!」

「もちろん。俺が死ぬわけないだろ？」

「キラーーーー!」

「おっ!ルフィ!」

これで全員がメリー号に集まった。

報告会もかねて湖畔でキャンプをする。

ここがジャヤだということ神官の能力、そして神の存在。

「これは骨が折れそうだね・・・」

「何をいう。おぬしの実力相当なものだ。」

「キラは強えぞ！ウチの副船長だからな！」

「へいへい。誉めても何もでないよ。」

その場から去り俺は物思いに耽りながら湖畔の近くを散歩する。

最近、俺の体に感覚が戻ってきてる気がする・・・

死神と呼ばれていた頃の感覚が・・・

自分で言うのもなんだが体のキレが半端ではない。

俺は大木に向かって手刀を切る。

大木がゆっくりと地面に倒れた。

うん・・・武器を造りだす速度も格段に早くなっている。

「・・・。」

「キラ！宴だぞ！」ルフィが俺を呼ぶ。

「ああ、今いく！」

俺は宴の席へと走って向かった。

（神の社）

「それは・・・本当ですか・・・!?」

「ああ、神官のサトリとシユラがやられた。」

「バカな・・・神官が2人も・・・シャンディアにそれほどの力が・・・」

「2人とも青海人にやられたようだ。」

「なっ!?!?」

「油断するなよ。とくに・・・キラという男にな・・・」

こんな会話が行われてるとも知らず俺たちは宴を楽しんでいたのだ。  
った。

第五十一話 感覚（後書き）

明日から3日ほど出張にでます。

続きは3日後までお待ちを！

過去の作品とか見直していただけたらうれしいなあ



第五十二話 サバイバル（前書き）

サバイバル開始です

## 第五十二話 サバイバル

「ふう〜暇だ・・・」

俺達は探索組と脱出組に別れて行動を開始した。

俺はナミちゃんに連れられ無理矢理、脱出組になったのだが

平和すぎるな・・・いや、でも戦いはめんどくさい・・・

だが・・・探索楽しそうだなあ・・・

「ナミちゃん。これさ、脱出できるんだよね？」

「出来るに決まってるでしょ？入ってきたんだから。」

「だよね。・・・俺、探索組行っていい？」

「はっ？もう進んじやってるし無理よ。」

「いや、問題ないよ。向こう岸に飛び移るから。」

「えっ！ちよっと！」

俺は岸に飛び移り森の中へと入っていく。

「キラ！もう！一緒にいてくれたっていいじゃないの・・・」

ナミは頬を膨らませながらキラの背中を見つめていた。

〜サバイバル〜

「さて、探索組を探して合流と行きますか！」

俺は闇雲に森を進む。

「発見だメ〜！」

「またですか・・・」

「斬撃員の威力ご覧頂くメ〜！」

話している途中の神兵の脳天に踵を落とす。

「メ!？」

神兵は白目を向いてうつぶせに倒れた。

「ごちゃごちゃづるせえよ。」

「おい! 貴様!」

「ん? 俺か。」

「俺は、シャンディアの者だ! 女! 怪我したくなければ去れ!」

「俺は・・・!」

一瞬にして背後に回りこむ。

「な!？」

「男だ!」

頭を掴み地面に叩きつける。

「かはっ……」

「ったく……次それ言ったら有罪な。」

しばらく闇雲に歩き続けると見知った人物が……

「ロビン！」

「キラ！あなた船にいたんじゃない？」

「意外と歴史好きでさ。」

「ふふっ。じゃあ、一緒に行きましょうか？」

「ご一緒させてもらいますよ。姉さん。」

ロビンとともに探索してまわる。

探し回っていると古文を見つけた。

「ロビン。見てくれ。」

「どうしたの？……これは。」

「どっ？」

「ええ。都心部へいけばもっとわかるかも！」

「ふふっ。」

「キラ？どうしたの？」

「いや……ロビンもそんな顔するんだって思ってたぞ。」

「なっ！？い、行きましょう。」

「はいはい。お供いたしますよ。」

「おや、かわいいお嬢さん達。何をしてらっしゃるんですか？」

「誰だ？あと俺は、男だ。」

「私は、新兵長ヤマ。侵入者は排除します。」

「俺を排除する？」

ヤマが蹴りを放つ前に足を踏みつける。

「あぐっ!?!？」

「右足の蹴り……違うか？」

「ま、まさか……心網!？」

「俺はお前の筋肉の動きを見てるだけだ。」

「左肩への手刀。」

ヤマの手刀を受け止め投げ飛ばす。

大木へと叩きつけられヤマが驚いた表情で俺を見る。

「わ、私を投げ飛ばすとは……なんという力……な、何者!？」

「旋律のキラ。」

「あ、あなたがキラ……」

「ロビン。俺、空でも有名人みたいだな。」

「ふふっ、そうね。」

「全力で行きますよ！」  
「最初からそうしろよ。」

『斬撃満点！！！』

ヤマが飛び上がり襲い掛かってきた。

「俺は、2割くらいの力で良さそうだな。」

『断罪の大鎌・・・DeathCut』

大鎌を思い切り振り下ろす。

斬撃貝が砕け散りヤマが真っ二つになり地面に倒れた。

「あなたの罪は・・・そうだな・・・俺を女と言ったことかな？」

「それだけでここまでされるのね・・・かわいそう・・・」

「・・・なんかごめんなさい。」

俺とロビンは、再び探索を開始した。

第五十二話 サバイバル（後書き）

ふう〜出張から戻ってまいりました。

く祝50万PV記念 船長にふさわしいのは？ く（前書き）

キラがいつも指示を出すのでルフィがいじけます。



「祝50万PV記念 船長にふさわしいのは？」

唐突にルフィが疑問を口にする。

「俺って船長なんだよな？」

「は？急に何を言い出した？」

俺は呆れた顔でルフィを見つめた。

「だってよくいつもキラが仕切るからよ〜」

「お前・・・いじけてるのか？」

「べつに〜」

「絶対いじけてる・・・」

「どうしたの？」

「ああ、ナミちゃん。ルフィがいじけちゃってさ。」

「ふ〜ん。何で？」

「俺がみんなに指示するのが気に食わないようだ。」

「まあ、船長ルフィだもんね。」

「でも、キラの方が冷静な判断できるし。しょうがないんじゃないかな  
い？」

「ええ〜！じゃあ、俺が船長じゃなくてキラが船長の方がいいの  
か！？」

ルフィが口を尖らせ俺を睨みつける。

「ナミちゃん・・・どうすんだよ・・・より一層いじけてるぞ。」

「説得はキラの仕事でしょ？がんばって？」

「ったく・・・勝手だよな・・・」

俺はルフィに近ずき諭すように話始めた。

「いいか？俺は、お前が船長じゃなきゃ船には乗らなかったし  
こんなに長く海賊船にいることもなかった。」

「・・・本当か？」

「ああ。それに俺はいつもお前に元気付けられてる。  
お前を見てるところこっちまで元気になってくるからな。」

「シシシシ！そっか！」

「ありがとな。生きがいのなかった俺に道を作ってくれて。  
「いや、俺のほうこそ！仲間になってくれてありがとな！」

ルフィと拳を合わせ笑いあう・・・

本当にこいつと・・・いやこいつらと出会えてよかった・・・

「ホント・・・男の友情っていいわね。」

「ええ、そうね。」

ナミとロビンが俺とルフィを見て微笑む。

そこへゾロが……

「キラ船長！風向き変わったけどどうすりゃいいんだ？」

「ロロノア……てめえ……」

「あ？どうした？」

ルフィがまた口を尖らせて俺を睨みつける。

「空気読め！この方向音痴マリモ！」

「キラ！てめえ今なんつった！」

「どうせ俺は船長にふさわしくねえんだ。」

「だあああああ！ルフィいい加減にしろ！」

「キラ！マリモつつたろ！」

「キラが船長やればいいじゃん。」

「ああ！もうどいつもこいつも！こんな船乗らなきゃよかった！」

ナミとロビンがクスクス笑いながらその光景を見つめていた。

く祝50万PV記念 船長にふさわしいのは？ く(後書き)

祝50万ということで書きました。

やっぱり船長はルフィじゃなきゃね！

第五十三話 神 vs 死神（前書き）

新兵長ヤマに圧倒的な力の差を見せつけ勝利したキラ。

ロビンとともに探索を続けていると神の姿が・・・

## 第五十三話 神 vs 死神

「これが・・・シャンドラ？」

「ええ。間違いないわ・・・ここが黄金都市シャンドラよ。」

俺とロビンはついにシャンドラまでたどり着いた。

ロビンは、早速壁に彫られた文字の解読を始める。

「ふう〜俺少し疲れたから休むな。」

「ええ。」

岩に腰を掛けしばし休憩・・・

ロビンの奴・・・がんばるなあ〜・・・

「キラとはお前か？」

「ん？俺だよ。あんたは？」

『神だ』

「あんたが神か。何か用？」

「私を前にしているというのにずいぶんと落ち着いているな。」

「顔に出ないだけかもな。」

「ヤハハハ！おもしろい気に入った！どうだ？仲間にならないか？」

「なに？」

「連れて行ってやろう！限らない大地へ！」  
「よくわからんが・・・断る。」

「なに？」

「どうしても裏切れない男がいてね。」

「そうか。」

「キラ？どうしたの？」

「ロビン！来るな！」

俺の声に反応してロビンの歩みが止まる。

「私と戦うつもりか？キラ。」

「ふふっ。どうかな？」

「いいだろう！せっかくだ！貴様の仲間も招待してやる！」

「はい？」

『稲妻！！！』

エネルギーが上空へと雷を放つ。

この男・・・自然系しかも雷か・・・やっかいだな・・・

俺の能力は血液だ・・・雷をよく通してしまう・・・

何かが空から落ちてくるあれは・・・

「ロロノア！」

「キラ！どうなってんだこれは！？」

「キラ！」

「おお！ナミちゃんまで！」

「大変なのよ！あの大蛇の中にルフィがいるのよ！」

「何！？あのバカ！どうするキラ！」

「ああ〜ほつときゃ勝手に出てくるだろ。」

『オイ！』ビシッ

「そんなことより・・・あいつだろ？」

エネルを指差しゾロの顔を見る。

「あいつが・・・神か？」

「ああ。お前を落としたのもあいつだ。」

「ほう。じゃあ、礼をしなきゃな。」

俺とゾロはエネルを睨みつける。

「私の予想では3時間後5人生き残るはずだった。」

「はい？」

「だがこの場に7人いる・・・残り3分、神が予言を外すわけには  
いかん。そちらで消しあうか？それとも私が手を下すか？」

「だってよ。ロロノアどうする？」

「断る。」



「そっか。ロビンは？」

「いやよ。」

「そちらのお2人は？」

「我輩も拒否だ。」

「おれもゴメンだな。」

「そっかじゃあ、答えは一つだな。」

全員でエネルギーを睨みつけ・・・

『お前が消えろ』

「ヤハハハ！神である私に消えろと？不届き者共め・・・」

「なあ。あんたの目的、限りない大地だったっけ？」

「そうだ。私の求める夢の世界！私にこそふさわしい大地！  
人には人の！神には神の還る場所がある！」

「だから？なんなんだ？」

「すべての人間をこの空から引きずり下ろす。」

「・・・。」

「思い上がるな！エネルギー！神という名は国の長に与えられる称号  
にすぎん！」

『人の生きる世界に神などおらぬ！！！！』

「空の騎士・・・」

「フン！そうだ、元神よ。貴様から預かっていた神隊650名だが・・・」

今朝ちようど私の頼んだ仕事を終えた。」

「・・・？」

『先ほど言ったとおり今この島にいるのは7人のみだ。残念だがな。』

「ま、まさか・・・神隊はエンジェル島に家族もいるのだぞ・・・！？」

「そうか。ならば早く家族も葬ってやらなければな。」

『貴様！！！！』

「待て！空の騎士！思う壺だ！」

『放電！！！！』

雷にやられた空の騎士が倒れこむ。

「この世に神はいるぞ。ガンフォール。」

『私だ』

「・・・死神もいるぞ」

エネルギーの横つ面に拳を叩き込む。

地面に叩きつけられたエネルギーが驚いた表情で俺を見つめる。

「な、何！？」

「どうした？当たることが不思議かい？」

「わ、私は雷のはず・・・なぜ・・・？」

「言ったはずだ・・・神はてめえだけじゃねえ・・・」

エネルギーが後ずさりする・・・

『死を運んできてやるよ・・・エネルギー!!!』

第五十三話 神VS死神（後書き）

感想をお願いします。

第五十四話 優しき死神（前書き）

エネルギー・・・勝敗は？

## 第五十四話 優しき死神

「……………死を運ぶ？神が死ぬわけな！？」

キラの姿はエネルの視界にはなかった……

「いや……お前は神じゃない……欲に溺れた一人の人間だ。」

《この男いつの間に私の後ろに……………！？》

「悪いが死んでもらうぞ。」

エネルの腹部に深く拳を突き刺す。

《バカな……………！？なぜ！？なぜこの男は……………！？》

悶絶しうずくまるエネルの頭を掴み持ち上げる。

「残念だったなエネル。相手が悪い。」

「ふふっ……………フフフ……………」

「キラ！あぶねえ！」

「もう遅い！」

『神の裁き！！！！』

大きな落雷が空から降り注ぎ地面に大穴をあけた。

キラがいた場所には……………何も残らない……………

「キ、キラ!?」

「う、うそでしょ・・・?」

「ヤハハハハ! 神には勝てん!」

「さあ。残るは、5人か。お前達は限りない大地に連れて行ってやるっ!」

「お断りよ・・・」

ナミが声をエネルの誘いを拒否する

「何・・・?」

「私は・・・絶対に嫌!」

「ならば・・・死ね!」

「死ぬのはてめえだ・・・!」

エネルは吹き飛ばされ大木へと叩きつけられた。

《バ、バカな・・・なぜ・・・!!?》

「驚いてるな。エネル。」

「キラ!」

「貴様! あの時確実に!」

「エネル・・・縮地って知ってるか?」

「しゅ、縮地?」

縮地

瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きなもの）

仙人の能力の1つで短時間で長距離を移動する（瞬間移動のようなもの）

「さあ、エネルギー。続けようか。」

「くっ……貴様……私を……ここまでコケにするとは……」

エネルギーが閃いたような顔をする。

「なんだ？」

「ヤハハハハ！貴様！仲間は大事か？」

ロビンへと腕を向け

『放電！！！』

「！？」

ロビンの前に立ち雷を体で受け止める。

「うわあああああ！！！！！」

「キラ！」

「ヤハハハハ！仲間を見捨てることも大事だぞ！死神！」

「まだ……倒れない……」

「フン……ならば……」



「ちよつと……キラはもう……」

「知らんな」

『雷鳥!!!』

雷の鳥がキラの体を通り抜けていく

ゆっくりと地面に倒れこむ俺をロビンが支える。

「キラ……あなた……なんで……」

「バカヤロウ……仲間を守るのも副船長の仕事なんだよ……」  
「ヤハハハハ! さあ……次は誰だ?」

『六輪咲き!』

「次は貴様か? 死神が守ってくれたのに命を無駄にするか……  
よかろう!」

『1000万放電!!!』

「ロビン!」

「おい、女だぞ。」

「見ればわかる。」

「てめえ……!」

『虎狩り!!!』

「ふむ、いい腕だ。殺すには惜しいが……」

エネルギーはゾロの刀を掴み放電する。

「ぐわあああああ!!!!」

「次は・・・ワイパー。貴様か？」

「なんのつもりだ？」

「海楼石って知ってるか？それが俺のシューターに仕込んである。」

「

「なるほど・・・力が入らん。」

「くたばれ！」

『排撃!!!!』

口から血を噴き出し倒れこむ。

「エ、エネルギーに勝ったの？」

《シャンドラの灯を・・・!!?》

「人は神を恐れるのではない・・・恐怖こそ・・・神だ！」

「そ、そんな・・・雷で心臓マッサージして・・・？」

「惜しかったな・・・戦士ワイパー。海楼石とは・・・

だが死神の言葉を借りるならば・・・相手が悪かったなどでも言うべきか？」

「覚悟するんだな。戦士ワイパー。」

『3000万雷鳥!!!!』

「青海の剣士。貴様も消える。」  
「!?!」

『雷獣!?!』

「がああああああ!?!」  
「ゾロ!」

ちよつと・・・残つたの・・・私だけ・・・?

ナミはキラの元へと歩み寄る。

「ねえ・・・起きて・・・大変よ・・・」

キラをゆすり続けるが一向に目が開かない

「ちよつと・・・キラ・・・キラってば!」

「あいつなら・・・ルフィなら・・・勝てる・・・」

「えっ・・・キラ!生きてるの!」

「とりあえず、しばらくは休む。だから逃げろ・・・」  
「何を話している?」

「ふふっ・・・この子が・・・あなたについていきたいってさ・・・」  
「ほぅ・・・。」

「なあ・・・この子一緒に連れて行ってやってくれ・・・」  
「いいだろう・・・死神の願い叶えてやる。」

エネルはナミを見つめ

「さあ、行くぞ。限りない大地へ。」

「は、はい……。」

「さらばだ！優しき死神！ヤハハハハ！」

俺は去っていく2人の姿を見送ることしか出来なかった。

絶対に助けに行くぞ……ナミ……

俺は薄れ行く意識の中でナミの救出を心に誓っていた。

## 第五十四話 優しき死神（後書き）

感想お願いします。

そうそう、縮地の説明はwiki抜粋です。

第五十五話 黄金の鐘（前書き）

連続投稿です。

## 第五十五話 黄金の鐘

「キ、キラ！」

ルフィがこちらに走ってくる・・・やっと出てきたか・・・

「キラ！お前がやられるなんてどうなってんだ！」

「おい・・・あんま騒ぐんじゃねえ・・・」

「大丈夫なのか！」

「俺がそう簡単にやられると思うか？」

「いや、おもわねえ！」

「だろ？ルフィ、聞け・・・」

「ナミが連れて行かれた・・・」

「え？」

「俺も後で行く。早くエネルの所に！」

「わかった！いくぞアイサ！」

「うん！」

2人が走り去っていく。

・・・なさけねえ。

何が・・・死神だ・・・クソツ！

俺は体にムチを打ち立ち上がり

「あああああ！！！！」

雄叫びが空島へ響き渡る。

「行くぞ……やるぞ……！」

「キラ？」

「ロビン……みんなを任せた。俺は……」

「ええ、いつてらっしやい。死神さん。」

「ああ。」

ルフィとアイサの後を追う。

体中がまだ痺れてる……

弱音を吐くな！痛みなど忘れる！

自分に言い聞かせ走り続けた。

「あ、お兄さん！」

「アイサちゃんか！ルフィは！」

「あの船の中よ！」

「OK！ありがとう！」

『血の翼！！！！！』



背中から赤い翼が生えてくる。

「おおおお！お兄さんどうなってんの！？」

飛び上がり船へと着地する・・・

「エネルギー・・・死神が戻ってきた・・・ってあれ？」

「キラ！大丈夫なの？」

「ああ、ナミちゃん・・・なんか、俺必要なかったかな？」  
「かもね。」

「じゃあ、ナミちゃん。安全な場所へ。」

「ああああー！ー！」

ルフィが船から落ちていく。

「・・・・・・・・何してんだあいつ。」

「ルフィー！ー！」

「ヤハハハハ！奴さえいなければ私の天下だ。」

「・・・・・・・・ウソップ。」

「キラ？何言ってるの？」

「気づいてたか。」

「ナミちゃんを連れて逃げろ。」

「わかった。」

「このクサレ神は、俺が始末する。」

「ヤハハハ！一度私に負けた貴様が何を・・・・・・・・！？」

「黙れ……」

エネルギーを鋭く睨みつける。

《な、なんだ……奴に睨まれるだけで足が……震え……!?!?》

「ナ、ナミ、逃げるぞ。」

「ちよつとウソツプ!キラは!?!」

「きつとこの場にいたら俺らも死んじまうぞ。」

ナミのウェイバーに乗り2人は船から飛び降りる。

「さて、邪魔するものは何もない。」

「!?!?」

エネルギーの脇腹へ回し蹴りを叩き込む。

「おぐう……」

「始めようか!エネルギー。」

背中へ肘を落としようつづぶせに倒れたところで頭を踏みつける。

「き、貴様!神を足蹴にするとは……不届き!」

『雷龍!?!?!』

「芸がないんだよてめえは。縮地!」

エネルギーの背後へと回り込み蹴り飛ばす。

「くっ……！なぜだ……なぜ心網が通じない！」

「もうやめようエネルギー……諦める……」

「嫌だ……」

「ん？」

「すべてを！破壊しつくす！」

「なっ！？イカれやがった！」

『万雷！！！！』

空島のいたるところに雷が降り注ぎ島を破壊していく……

「てめえは！一度死ななきゃならないようだな！」

『激！剛砲！！！！』

轟音と共にエネルギーが血を噴き出し倒れる。

「……クソ。久しぶりに腕がいてえ……。」

ピクリとも動かないエネルギー……

完全に死んだはずだ……これで生きてやがったら……

「ふう……つたく……」

俺は壁によしかかり、一息つく。

「とりあえず、この船を落とすか……」

『2億ボルト雷神!!!』

「なっ!?!しまった!?!」

まともに雷を浴びてしまう。

「が……は……」

「し、死神……詰めが甘かったな……」

油断した……そうだこいつ自分で自分を蘇生できるんだっけ……

エネルギーは、俺を掴み船から落とす。

「ヤハハハ……これで邪魔者はいない!ぐっ……」

《あの男、神である私より上?バカな能力者でもない男に負けるわけが……》

なんだ……俺は……死んだのか……?

歓声が聞こえる……ルフィの奴……やってくれたのか?

鐘の音……?

いい音だ……

黄金の鐘の音って……こんな音かな……

「キラ・・・起きてキラ！」

「あ、あれ？ロビン・・・？」

起き上がるうとするが体が悲鳴を上げる。

「がぁああああ！」

「キラ！まだ起きちゃダメだ！」

「チョッパ・・・エネルギーは・・・？」

「倒したぞ。」ルフィが俺の隣に腰掛ける。

「ルフィ・・・お前ボロボロじゃねえか・・・」

「キラもな。」

「クスッ・・・そうだな・・・」

俺はロビンに尋ねる。

「なあ・・・黄金の鐘の音・・・聞こえたよな・・・クリケット

さん。」

「ええ、きつと。」

黄金の鐘の音は・・・島中へと響き渡る・・・

まるで戦いの終わりを告げるようにいつまでも鳴り続けていた・・・

第五十五話 黄金の鐘（後書き）

感想をお願いします。

## 第五十六話 さらば空島

『宴だー！ー！』

ルフィの掛け声とともにシャンディアとの宴が始まった。

笑い声が島中に響き渡る・・・

長い間、神と戦っていた彼等の顔は・・・安堵の表情に満ちていた・・・

「ほんと・・・騒ぐの好きだよな・・・ウチの奴等は・・・」

「キラ、あんま動いちゃダメだぞ。」

「わかってるよ。チョッパ。」

俺はあまりにも雷に撃たれすぎたせいか、寝たきりの状態になっていた。

そうだよな・・・合計すると何ボルト体に流れたんだか・・・

テントでゆっくりと休んでいると・・・

「キラ？大丈夫？」

「ナミちゃん。ああ、大丈夫だよ。」

「食事持ってきたけど・・・食べる？」

「ありがとう。置いていて。」

ナミが俺の顔を覗き込んでいる。

「……………?どうした?」

「食べさせてあげようか?」

「は?いや、いいよ!恥ずかしいから!」  
「嫌……………食べさせるの!」

ナミが首を横にブンブンと振る。

「ふう……………じゃあ……………お願いします……………」

「うん!じゃあ、ア〜ン?」

ナミに食べさせてもらう。

は、恥ずかしい……………

「おいしい?」

「あ、ああ。」

「ふふつ?じゃあ、次ね?」

食事も終わり一息つく……………

「あいつらまだ騒いでんだ。」  
「元気よねあいつら。」



ナミと一緒に笑顔でルフィたちを見つめていると

手にピリピリと痛みを感じる・・・

「・・・ん？なんか・・・手が・・・？」

「手？」

「ああ・・・変な感じが・・・」

「え・・・？見た感じは普通みたいだけど？」

「そうか・・・」

「あ！そつだキラ！お願いがあるの・・・」

〜次の日〜

「船の準備をお願いね」って言われたが・・・

俺・・・病人なんだよな・・・人使い荒いぜ・・・

体にムチを打ち出航の準備を整える。

手はずどおりならそろそろ・・・

「おーい！キラ！見ろ！黄金がこんなに！」

ルフィの背中に金塊が輝いている。

これで・・・俺らも大金持ちか・・・

出航し全員で金塊の確認をしそれぞれが黄金の使い方に思いを馳せる。

「……夢のようだったな。」

俺はロビンの隣に立ちそうつぶやく……

「ええ……」

「もう、青海に帰るんだな。」

「帰りたくないの？」

「いや……そろそろ海も恋しいかもな。」

クスツツとロビンが笑う。

「みなさん、あれが出口……雲の果てです。」

「色々ありがとうございました。」

「は、はい！あの……！」

「何か？」

「落ちますので！お気をつけて！」

「そうですか……って……落ちる？」

船は一直線に青海へと落ちていく。

「これ……死ぬよな……きつと……」

俺は神に祈る……あ、神って倒したんだっけ？

「キラ！見て！」  
「ん？あれは・・・？」

大きなタコが船をゆっくりと落下させる。

「タコバルーン・・・か・・・」  
「え？知ってるの？」

「いや・・・コニスがそう言った。」  
「そう。」

「・・・！おい・・・この音・・・」  
「ああ・・・黄金の鐘だ・・・」  
「いい音ね・・・」

俺たちは美しい鐘の音とともに空島を後にする・・・

黄金の鐘の音は・・・とても幻想的で・・・

幼い頃の母の手のように・・・俺たちを包み込む・・・

黄金郷は確かにあった・・・そこは高く・・・遠く・・・

そして・・・夢のような場所だった・・・

第五十六話 さらば空島（後書き）

キラがうらやましいかも・・・

感想お願いします。

第五十七話 銀ギツネ（前書き）

空島から帰還後、俺たちはある島へと上陸した。

## 第五十七話 銀ギツネ

空島から数日後、俺たちは次の島へと到着した。

その島はすべてのものが長い。

木も果物も動物も・・・すべてが長いのだ。

「へえ〜おもしろい島だな。」

「キラ行こうぜ！」

ルフィが船から降りて俺を呼んでいる。

「ああ、行ってみるか。」

「キラ！安静にしてなきゃダメだ！」

「チョッパー少しくらい・・・いいだろ？」

「ダメだ！まだ体中が痺れてるって言ってたろ？」

「ふう・・・OK。安静にしていますよ。」

俺は船室へと戻り横になった。

ウチの船医は、きびしいねえ・・・

だが今だに体中が痺れているのは事実だ・・・

なんだ・・・体に電気が馴染んでいつている気が・・・

両手を近づけてみると・・・

「お、おいおい・・・どうなってる・・・?」

指先から微量ながら電気がほとばしっている・・・

こんなことがありえるのか・・・?

血液を武器へと変化させる俺だからなせる技?

「キラ！大変！」

「ナミちゃん、何かあったのか？」

「変な海賊船が！」

船室から外へと出てみると

「・・・フォクシー海賊団？」

「ええ。」

「・・・聞いたことないな。」

「俺様は、フォクシー海賊団船長の銀ギツネのフォクシーだ。」

「そうか。俺は、この船の副船長。旋律のキラだ。」

「お、おやびん！旋律のキラって言ったら9000万の賞金首だ  
！」

「ああ、ちゃんと調べてあるぜ。少数一味で総合賞金額2億50

00万。」

「へえ、よく調べたねえ。関心関心。」

「旋律のキラ！貴様等にデービーバックファイトを申し込む！」

「ふん、そっか。船長に聞いて。」

「フェツフェツ！許可なら取ってある。」

「そっか。じゃあ、やるか仲間奪い合い。」

「デービーバックファイトを知ってるのか。さすが話が早くて助かるぜ。」

ルフィが船へと戻ってくる。

「キラ！」

「おかえりルフィ。デービーバックファイト受けるんだって？」

「おう！あいつ馬を撃ちやがったんだ！」

「まあ、よくわかんねえけど・・・お前が決めたことだ。付き合  
うよ。」

「キラは、ダメだぞ！安静にしたほうがいい！」

「チョッパー。体ならもう大丈夫だから。」

「いや、ダメだ！」

「キラ。俺たちに任せて休んでろ。」

「ロロノア・・・ああ、わかった。任せるよ。」

「おう。」

「キラ、お前が出ないほうがちょうどいいハンデになるぞ。」



「サンジ・・・そうだな。ガンバレよ。お前等。」

「さあ、デービーバックファイト始めようぜフォクシー！」

第五十七話 銀ギツネ（後書き）

最近短くてすみません。

感想お願いします。

第五十八話 ドーナツレース(前書き)

デービーバックファイト一回戦

## 第五十八話 ドーナツレース

デービーバックファイト一回戦

### 【ドーナツレース】

参加者：ウソップ、ナミ、ロビン

手作りボートを使つての島一周レースらしい。

「優秀な船大工がいればすごいのが作れそうだが・・・」  
「そうね。船大工は、仲間にはいないし。」

「ウソップいい船作れそうか？」

「ああ、まあやってみるけどよ。」

「やっぱ！船大工仲間にほしいなキラ！」

「まあ、必要な人員ではあるよな。」

「デービーバックで勝利して船大工でも頂くか？」

「うん・・・」

「フェツフェツ！勝てるとも思つてるのか？」

「当然。」

「当たり前だろ。割れ頭！」

「わ、割れ頭・・・」

「さあ、こつちの準備は出来たみたいだぜ。フォクシー。」

「ふん！吠え面かくなよ！」

フォクシーが自分の仲間たちのほうへと戻っていった。

俺たちはスタートラインへと向かう。

『それではドーナツレース！レディ~~~~~イ！ドーナツ！』

スタートと同時にフォクシー海賊団の船員達がウソップの作ったタルタイガー号を

バズーカで攻撃する。

「フフツ・・・激しいじゃん。」

「キラ！笑ってる場合か！ナミさんに当たったらどうすんだ！」

サンジがフォクシー海賊団の船員を蹴り飛ばす。

「サンジ、ナイス。」

「おう！」

チョッパーが俺の方へと歩み寄り

「キラ、包帯取り替えような。」

「チョッパー・・・もう大丈夫だって。」

「ダメだ。しっかりと治さなきゃ。」

「優秀な船医が言うんじゃないや仕方ねえか。」

「う、うるせえなあ。黙って治療させるコノヤロ〜」

「ぶふっ、素直に喜べよ。」

上着を脱ぎチョッパーに包帯を交換してもらおう。

視線を感じる……

「な!？」

「え、ええ!？なんだ!？」

フォクシー海賊団の連中が俺の体をジロジロと見ていた。

フォクシーもニヤニヤしながら俺の姿を見つめている。

「な、なんですか……?」

『き、きれいな体してるなあ』

「は、はい？」

『白い透き通る雪のような肌……本当に男か?』

「見りゃわかるだろ……チョッパー船室に行こう。」

「う、うん。わかった。」

チョッパーと一緒にメリー号へ行きそこで治療の続きを開始した。

〈フォクシー side〉

「オヤビン、旋律のキラ……いいですね。」

「ああ、船医を頂こうかと思ってたんだが……」

「旋律のキラねえ……美しく強き男か……よし……」

「オヤビン……?」

「旋律のキラ。奴を頂くとしよう!」

銀ギツネの瞳は、死神を捉えた。

まさか自分が狙われるとは……夢にも思っていなかった。

第五十八話 ドーナツレース（後書き）

感想をお願いします。



第五十九話 グロッキーリング（前書き）

ドーナツレース・・・勝敗は？

## 第五十九話 グロッキーリング

（メリー号）

「外が騒がしいな・・・」

「決着がついたのかもな！キラ、見に行こう。」

チヨッパーに急かされナミたちの勝敗を確認しに行くと

暗い顔をしてウソップが座りこんでいた。

「お、おい・・・まさか・・・負けたのか？」

「キラ・・・すまねえ・・・」

暗い顔でウソップが俺に謝罪する。

「気にすることはない。まだ、2試合あるんだから。」

「キラ・・・おまえって奴は・・・」

ウソップの肩をポンポンと叩きフォクシーの元へと行く。

「で、誰がほしいんだ？フォクシー。」

「そうだなあゝ・・・お前だな。」

フォクシーが俺を指差す。

「えっ・・・俺・・・？」

「そう！旋律のキラ！お前だ！」

「そ、そんな！キラ！」

「ふふっ、俺かよ・・・ロロナア、とっとと俺を戻してくれよ。」  
「ああ・・・任せろ。絶対勝つゆっくり見物してろ。」

「了解・・・信じてる・・・」

俺はゆっくりと椅子に腰を掛け見物する。

「旋律のキラ・・・いい男ね？」

「ポルチエ・・・だったっけ？」

「そうよ？」

「悪いが俺はすぐ麦わらの元に戻ると思っぞ。」

「えっ？」

「お前等は大きなミスをした。」

「フェツフェツ！どんなミスだ聞かせてもらおうじゃねえか？」

「俺を選択したとき。次の試合にでるチョッパーを選択してお  
くべきだったな。」

「フン！グロッキーモンスターの強さを見たら驚くぞ。」

「ふふっ、楽しみだね。」

《なんだ？キラのこの余裕は・・・？》

くフオクシー海賊団く

「なあ。オヤビンは、なんで2回戦で出場する奴を引き入れなか

「つたんだ？」

「さあな・・・旋律のキラの魅力に負けたんだろ？」

「そこら辺の女より綺麗だったもんな」

「だけど・・・あのオヤビンが勝つための手段をとらないとはな  
〜。」

「まあ・・・以外だよなあ〜」

「フェツフェツ！いいんだよ！グロッキーモンスターズが負ける  
と思うか？」

「オ、オヤビン！まあ、確かに負けるわけねえか！

「なんたってグロッキーリングじゃ、無敗だからな！」

「そのとおり！負けるわけがねえ！」

デイベーバツクファイト二回戦

【グロッキーリング】

参加者：ゾロ、サンジ、チョッパー

ルールは簡単、フィールド上のゴールに球となる人間を入れるだけ。

まずは球となる人間を決める。

「球はチョッパーがやったほうがいい。」

「キラ・・・おう、わかった。俺が球やるよ。」

「ゾロ、サンジ・・・暴れてきな。」

「ああ。」

「待ってるキラ。囚われのお姫様を助けるのは騎士の役目だ。」

《囚われの姫って・・・俺のことってんのか・・・？》

「おいキラ。てめえはもうフォクシー海賊団なんだ。敵に指示だすんじゃない。」

「ああ、そうだったな。申し訳ない。」

「そうだ。キラ、次は誰を仲間になりたい？」

「ふふっ、フォクシー・・・次はロロノア達が勝つさ。」

「フェッフエツ！見せてもらおうじゃねえか。」

「ウチの戦闘員とコック・・・ハンパじゃないぜ・・・」

デービーバックファイト二回戦のゴングが鳴り響いた。

## 第五十九話 グロッキーリング（後書き）

きつとグロッキーリングはチョッパーがいれば圧勝だっただろうと思っ  
ています。

なんたって・・・ゾロとサンジが好き勝手暴れて、チョッパーは逃  
げる。

チョッパーは自由自在に姿も変えられるし逃げるといっ面では最高  
では？

感想お願いします。

第六十話 コンバット（前書き）

グロッキーリングの勝敗は？

## 第六十話 コンバット

俺は笑顔で席を立つ。

「グロッキーモンスターズが・・・」

「フォクシーだから言ったる？ウチの連中が勝つてさ。」

ゾロとサンジの元へと向かう。

「ありがとう。2人とも。」

「へっ、負けるとは思ってなかったんだろ？」

「当然。」

「じゃあ、あとはウチの船長が勝つだけだな。」

「ああ、あいつが負けることはないだろ。」

「フェッフェッ！俺はコンバット無敗だぜ！負けると思つか？」

「さっきのモンスターズも無敗だったのに負けたよな？」

「ぐっ・・・そ、それは・・・」

「悪いがルフィが勝つよ。あいつはこんなところで立ち止まっちゃいけない。」

「ふん！キラ！お前をかならずひざまづかせてやる！覚悟しとけ！」

フォクシーがフィールドへと向かっていく。



「ルフィ！」

俺はルフィに拳を突き出す。

ルフィが俺の拳に自分の拳を合わせる。

「シシシシ！行ってくる！」

「ああ。蹴散らして来い。」

フィールドへとルフィが向かっていく。

さあ……ルフィ。お前の力見せてやれ。

「キラ……」

「ん？ナミちゃん、どうした？」

「別に……ただ、その……おかえり……」

「ふふっ……ただいま。」

デービーバックファイト三回戦

## 【コンバット】

参加者：ルフィ

フィールド：フォクシー海賊船

直径100メートルの円から出たほうが負けて円内のすべての武器が使用可能。

「それにしても……」  
「何？キラ。」

「今回、俺の戦闘なしか……」  
「あんだ、戦いたくて仕方ないわけ？」

「いや……今回……楽だ！毎回これならいいんだが……」  
「あんだ副船長でしょ！先頭きつて戦いなさい！」

「ええ……それじゃなくても船での役割多いんですが……」  
「しょうがないでしょ？一番の頼りはキラなんだから。」

「おい！キラ！ポップコーン食うか？」  
「いや、俺少しこの島散歩するからいらないよ。」

「えっ？ルフィの見なくていいの？」  
「ああ、ルフィが勝つに決まってる。見なくても大丈夫。  
それにさ俺この島まだ見て周ってないんだわ。じゃ！」

俺は少し島を散歩することにした。

おお……長い……色んなものが長い……  
「ハハツ……すげえ……長い犬だ。」

犬の頭を撫でるとじゃれ付いてくる。

「かわいいな。お前、よしよし。」

「そんな顔するんだな。死神も。」

「……クリスカ。久しぶり。」

「ふふっ……ああ……」

クリス

元ルイン少尉

容姿・特徴

金色の短髪に赤いメッシュの髪

ワイシャツに黒いネクタイ

赤いベスト

「いつ以来だ？」

「あんたが俺の上司で暴れまわってたとき以来だ。」

「そっか。」

「ルイン……抜けたんだって？」

「ああ。」

「あんたほどの男なら抜けるの大変だったろ？」

「殺されかけたよ。」

「だろうなあ。ルインの大將だもんなあ。」

「クリスは……大丈夫か？」

「ん？ああ、問題ねえ……あんたのおかげだ。」

あんたが上に掛け合ってくれたおかげであっさりと抜けることができた。」

「そつか・・・よかった。今は、何やってるんだ？」

「ん？諜報部員つてやつさ。」

「ふん・・・」

「大丈夫。ルインのことは・・・」

「心配してないよ・・・お前は少尉だったんだから・・・ルインのことはあまりわかってなかったはずだ。」

「・・・だな。だからあっさり抜けたんだよな・・・きつと・・・」

「そういえば俺が抜けたこと誰から聞いたんだ？」

「ん？ロベルトから聞いたよ。あいつ今、医者目指してるんだって？」

「ロベルトに会ったのか!？」

「ああ、休暇中にな。」

「そつか・・・あいつ医者勉強ちゃんとしてんのかな？」

ロベルトが頑張ってるのかと思うと思わず笑顔になってしまう。

「ふふつ、ホントあんたいい顔するようになったよ。」

「えっ？」

「いや・・・昔じゃ考えられなかったからな。」

「そつかもな・・・。」

遠くから歓声が聞こえてくる・・・

きっとルフィが勝ったんだろう。

「じゃあ、俺行くわ。またな、クリス！」

「ああ！」

俺は船へ向かって走りだした。

## 第六十話 コンバット（後書き）

感想をお願いします。

ルインって何？って方は過去の説明をご覧ください（第27部）

第六十一話 青キジ（前書き）

昔の自分の部下であるクリスに再会したキラ。

今度は海軍大将青キジ・・・？

## 第六十一話 青キジ

「キラ遅かったじゃねえか。もうキツネ帰っちゃったぞ。」

「そっか、ルフィ勝ったんだな。」

「ああ！負けるわけにはいかないからな。」

「そうだな。海賊王になる男だもんな。」

「シシシシ！おう！」

ルフィが何かを手に持っている。

「ルフィ、それは？」

「これか？これは、あいつらの旗だ。」

「旗？そんなもん奪ってどうするつもりだ？」

「シシシシ！まあ、付いて来ればわかるさ！」

俺達はルフィの後を付いていく

「おっさん、キツネぶっ飛ばしてきたぞ。」

「へへッ・・・ありがとうよ。」

「撃たれた馬ってこの馬のことか？」

「うん。シエリーっていうんだ。」

「シエリーかいいい名前だ。俺とチョッパーに怪我診せてくれな。」

傷口を確認する



「キラ・・・どうかな？」

「うん・・・しばらくは満足に走れないだろうな。」

「やっぱりそうか・・・とりあえずは手当てし直そう。」

「そうだな。それがいい。」

チョッパーはシェリーに包帯を巻く

「ホント、何から何まで悪いな。」

「いえいえ、ウチの連中人助けが好きなんで気にしないで下さい。」

「

「せつかくだ家へ入ってくれ。もてなそう。」

「ホント、お気遣いなく・・・!？」

家の前に背の高い男が立っている・・・この男・・・

「ん？ニコ・ロビンいい女になったな。」

「・・・な、なんで!？」

ロビンが怯えている・・・怯えるはずだこの男は・・・

「海軍大将・・・青キジ・・・」

「キラこいつのこと知ってんのか？」

「海軍の3人しかいない大将の一人だ。」

「な、なんでそんな奴がここに!？」

「さあ？だが・・・捕まえに来た訳ではなさそうだな。」

「そのとおり、俺は散歩に来ただけだ。」

「本当にそれだけか？」

「いや、ニコ・ロビンの消息を確認しに来たってのもある。」

「確認してどうする……」

「本部には報告くらいはするな。賞金首がまた一人加わって……」

「

「総合賞金額は……まあボチボチくらいだな。」

「ちゃんと計算しろよ……」

「そうだ。青キジ、あんた海軍なら人助けしてくんねえか？」

「ん？」

「お、おい！キラ！お前何いつてんだ？」

「トンジットさんは3つ先の島へ行きたいらしいんだ。」

引き潮を待つて馬で移動する予定だったんだが馬が怪我しちや  
ってね。」

「……それで？」

「あんたのヒエヒエの実の力で道を作ってやってくれ。」

「……いいだろう。海岸まで移動しよう。」

「協力してくれるのか。ありがとう。」

俺たちは海岸まで移動をする。

移動中にも背中に鋭い視線を感じる……青キジか……

「じゃあ、待ってる。」

青キジが海に手を入れ・・・

『氷河時代』

海が一瞬にして凍りついていく

「一週間は持つだろう・・・のんびり歩いて村に合流するといい。」

「

俺の方へと青キジが歩いてくる。

「なあ・・・なんで俺の能力のことを知ってたんだ？」

《し、しまった・・・ユダが生きることがバレル・・・》

「えっ・・・いや・・・有名じゃないか？」

「・・・旋律のキラ。お前、俺と戦ったことあるか？」

「あ、あるわけないだろ・・・」

「・・・まあいい。今にわかることだ・・・」

「今・・・？」

ルフィ達がトンジットとの別れをすませこちらに向かってくる。

「やっぱ、お前等・・・死んどくか。」

「ちっ・・・やっぱそうなのか・・・」

「政府はまだお前等を軽視してるが……これだけの曲者がそろ  
うと」

後々めんどろくなことになる。」

「とくに危険なのは……ニコ・ロビン。お前だ。」

俺は殺気を感じ取り

「……ロビン。逃げろ。」

「キラ?」

「いいから!」

「旋律のキラ、わかってんのか?その女に関わった組織は全部壊  
滅している。」

お前等もその女と一緒にいると同じ運命をたどるぞ?」

「ハッ!知ったことか!」

「そうかい……そりゃ残念だ……忠告してやったのに……」

『アイスサーベル』

「ちっ!何してる!逃げろ!」

「よそ見してていいのか?」

「!?!?」

青キジの斬撃をゾロが受け止め

『切肉シユート!』

サンジが青キジの氷の剣を蹴り上げる。

「ロロノア！サンジ！早く離れろ！」

「もう遅い……」

掴まれたゾロの肩とサンジの足が凍っていく。

「なっ！？」

「ぐっ！？」

『ゴムゴムの銃弾！』

青キジの腹部を捉えたルフィの拳も凍っていく……

『ぐわああああああ！！！』

三人が地面を転げまわる。

「いい仲間にあつたなニコ・ロビンだが……お前はお前だ……」

「おい……一人忘れてるぞ……」

俺は青キジの顔へ拳を叩き込む。

「……へえ。覇気使えるのか……何者だ……？」

「さあ……？何者だろうな。」

「旋律のキラ……危険だな……」

「みんな……逃げてくれないか？」

「えっ……？キラ……お前何言っ……？」

「ルフィ……海賊王に絶対なれよ……」

「キラ……」

「青キジ……一騎打ちしようか……」

「ふ、ふざけんな！船長は俺だ！勝手に決め……！？」

ルフィの腹部に拳を突き刺す。

ガクツつとルフィの膝が崩れる。

「悪いな……。ロロノア……ルフィを……」

「キラ……絶対戻ってくる……死ぬなよ……」

ゾロとサンジがルフィを連れ船へと戻っていく。

「旋律のキラ……お前ほどの男がなんで今まで出てこなかった？」

「別に……ただ、ちょっとシャイなもんでね……」

「そうかい……覚悟できてるのか？」

「それは……こっちのセリフだ。」

俺は軽くステップを踏み一瞬にして青キジの懐に飛び込んでいった。

第六十一話 青キジ（後書き）

次回は、青キジvsキラです。

感想お願いします。

第六十二話 奥の手（前書き）

青キジ vs キラ・・・

どちらに軍配があがるのか・・・？



## 第六十二話 奥の手

懐に飛び込んだところに青キジが覆いかぶさってくる。

『アイスタイム』

「ちっ！縮地！」

脇の下を抜け背後を取った。

『剛砲！』

肝臓へ剛拳を突き刺す。

「うぐっ……やるねえ……だが！」

『アイス塊 両棘矛』

無数の氷塊の矛が俺を目掛け飛んでくる。

「芸がないな青キジ！」

「どうかな？」

「ん！？」

足が凍り付いて動かない。いつの間に……？

氷の矛が体中に突き刺さる。

「かはっ……！」

「まあ、ルーキーにしてはがんばったほうじゃない？」

「ふふふっ……」

「……？」

「いや……血液が氷の間に入り込んだ……」

「？」

『血の棘』

凍った足から無数の棘が飛び出し氷を破壊した。

「……血を使った能力……お前そつか生きてやがったのか。」

「生きてたよ……出来ることなら生きてることはばれたくなかつたけどな。」

「死神のユダ……3年前からパタツッと噂を聞かなくなって死んだと思っていたが

まさか名前を変えて生き延びているとはな。」

「……」

「せっかく生きながらえたのに。また賞金首とは……ついてないなお前も。」

「いいんだ。付いていきたい男を見つけた。そいつのためならこの命……」

『惜しくない！』

「へえ〜お前がそれほど思う男……一騎打ちを受けちまった

以上・・・

追うわけにはいかねえわけか・・・」

「逃したのは失敗だったな・・・あいつは・・・海賊王になる男だ。」

「危険だな・・・ニコ・ロビンもお前も・・・悪魔と死神が乗った船か・・・」

「ふふっ・・・海賊としては最高だろ！」

「ユダ・・・お前はここで殺す・・・」

「クザン、昔やりあったときは勝負つかなかったよな・・・」

「そうだな・・・あの時は大将3人が束になってようやくと互角だったな。」

「大袈裟な・・・あの時は死ぬかと思ったよ。」

「今のお前からはあの時のような恐怖は感じない・・・」

「そりゃそうだ・・・死神は死んだ・・・今の俺は旋律のキラだからな。」

「大丈夫すぐに目覚めさせてやる・・・」

『アイスサーベル』

『断罪の大鎌』

お互いに距離を取り武器を手にする。

「あいかわらず・・・エグイ武器だねえ・・・」

「ふふっ・・・じゃあ、始めようか？」

クザンが俺の懐に飛び込んでくる

このサイズでこの動きか……！あの頃より……断然動きにキレがある！？

鎌の柄で斬撃を受け止め睨み合う。

クザンの手が俺の体に伸びてくる。

俺は血をクザンへと飛ばす。

血液は形を変えナイフとなりクザンの腕へ突き刺さる。

「ちっ……！やっかいな能力だ！」

クザンが怯んだ隙に腹部を蹴り上げるが

パリイ！と音を立て氷が砕ける。

「覇気の込め方が足りないんじゃない？」

「ちっ！クソが！」

鎌を全力で振り下ろすがクザンは氷となり砕けるだけで手ごたえはない。

振り下ろした鎌により地面が抉れる。

「あぶねえなあ……」

「しまっ……！？」

割れた足元の氷からクザンが現れ俺の足を掴む。

「く……！」

「ユダ……勝負勘が落ちたか？」

「へへっ……てめえもな！」

「!？」

足の動かない状態から上半身だけでクザンの顔目掛け拳を振り切ると

後方へと吹き飛ばす。

口から血を流しながら立ち上がり俺を睨みつける。

「ちっ……しぶといな……」

「へへっ……お互いに……」

「……血の出すぎだ。つらそうだぞ？」

「うるせえ……大きなお世話だ……」

「そうかい……遠慮なくトドメささせてもらっよ。」

クザンがゆっくりと近寄ってくる……勝負はそこだ……

「じゃあ……死神……本当にサヨウナラだ。」

俺に覆いかぶさってくる。

『アイスタイム』

「お前も……油断したな……」

「ん？」

うまくいくかどうかはわからなかったが・・・

これしかなかった・・・全身に電気を巡らせる・・・

体がどんどん凍り付いていく・・・

「クザン・・・俺が生きてたこと内緒にしてくれな・・・」

「いいだろう・・・お前はもう死神じゃない・・・それにここで死ぬ・・・」

「へへっ・・・死なねえよ・・・なあ、電気ウナギって知ってるか？」

「何？」

「電気を発することが出来るウナギさ・・・俺も今似たような状態になっててね。」

俺の血液って武器を生成できるように出来てるだろ？普通の人間とは違う訳だ。」

「何いってんだ？」

「あまりにも雷に撃たれたせいかさ、血液中に多量の電気が残ってるんだ・・・」

「まさか・・・離せ！」

《こいつ・・・なんて力だ・・・引き剥がせない！？》

「俺を氷付けにしたいんだろ？だったら少しぐらい痺れるのを我

慢しな！」

『放電!!!!!』

「がああああああ!!!!!」

青キジが黒焦げになり倒れる。

ははっ……うまくいった……練習しといて正解だな……

あいつら……逃げ切れたかなあ……

キラは完全に凍りついた……氷像の表情は……笑っているように見えた。

第六十二話 奥の手（後書き）

迷ってます・・・このまま電気を使っていくかどうか・・・

みなさんは、どう思いますか？

感想お願いします！



第六十三話 仲間の暖かさ(前書き)

氷像となったキラ。

先に目覚めたのは青キジだった。

## 第六十三話 仲間の暖かさ

く青キジく

「くつ・・・まだ体が痺れてる・・・」

旋律のキラ、あんな隠し玉があるとはな・・・

眼前には笑顔で凍っているキラの姿がある。

「俺の勝ちだったな・・・旋律のキラ・・・」

足を振り上げ

「てめえを生かしておく危険すぎる・・・じゃあな。」

氷像を壊そうとしたそのとき・・・

「クザン大将、それはやめてくれないか？」

「クリス・・・」

「その人は、俺の命の恩人なんだよ。」

「・・・今殺さないと後悔するぞ。」

「大丈夫、これから麦わら一味が向かうのはウォーターセブンだ。」

「あららら・・・」

「CP9に動いてもらおうか？」

「ああ、手配しといてくれ。」

「了解。」

「じゃあ、帰るよ。クリス。」

「大将。俺もウォーターセブンに向かおうと思ってる。」  
「そうか。」

「ウォーターセブンで旋律のキラ、仕留めて見せるよ。」  
「無理するなよ。お前は俺の懐刀だ。死なれては困る。」

「ええ。わかってますよ。」

ユダ・・・ウォーターセブンで会おう・・・

次に会ったときは・・・敵同士だ・・・

くゾロ・サンジく

「おいゾロ！あれだ！」

「キラ！よし。砕かれてはいないみたいだな。」

「急いで運ぶぞー！」

「ああー！」

くメリー号く

「おい！ゾロとサンジが帰ってきたぞー！」

ウソップの一声でデッキに全員が集まる。

「キラ！キラは大丈夫なの！」

「ナミさん落ち着いて！今、チョッパーに診てもらってる！」

「じゃあ、生きてはいるんだな！ルフィ！生きてるってよ！」

「・・・ああ、そっか。」

「ウソップ。ルフィの奴、まだ怒ってんのか？」

「ああ。そうなんだよ。目覚めてからずっとあの調子なんだ。」

「まあ、ルフィとしては船員を守るのは船長の仕事ってのがあるしな。」

「キラはルフィを守りたかつたんだろ？」

「でもよルフィとしては・・・」

『みんな！キラが起きたぞ！』

ルフィの奴・・・きつと怒ってるよな・・・

俺は船室をでて謝罪する「みんな・・・ごめん・・・負けちゃった。」

ナミが俺にとびついてくる。

「バカ！心配したんだから！」

「ああ、ごめん・・・」

「ったく・・・あんまり無茶するなよ。」

ゾロが俺の頭を小突く

「ああ、船まで運んでくれたんだろ？ありがとな。」

「キラ。今、暖かいもの作ってきてやるからな。」

「ありがとつ、サンジ。」

「キラ！あんまり動くなって言ったろ？」

「チョッパー……うん……わかってる……」

「ホント……みんな……俺……」

「キラ？」

ナミが俺の顔を覗き込む。

「生きててよかった……もう……お前等に会えないと思ったから……」

瞳から雫が零れ落ちる……

あれ……？おかしい……俺……泣いてるのか……？

「キラ。」

「ルフィ……ごめんな……俺……」

「俺、強くなるよ……お前が無理しなくていいくらい強くなるから……」

「ル、ルフィ……？」

ルフィも瞳に涙を浮かべていた。

きつとくやしかったんだ……

俺はルフィの頭をポンポンと叩き

「ルフィ……ゴメンな……ホントにゴメン……」

「もういって！無事でよかった！」

「そうだな。」

「シシシシ！」

いい仲間に恵まれた……俺はうれしい反面一つ気になっていることがある……

青キジは……なぜ俺を殺さなかったのか……

サンジが作ってくれたスープを飲みながら一人考え込んでいた……

第六十三話 仲間の暖かさ(後書き)

仲間っていいなあ・・・とワンピースを見るとよく思います。

感想お願いします。

第六十四話 海列車（前書き）

仲間の暖かさを改めて確認したキラ。

次なる目的地は？



## 第六十四話 海列車

みんなは俺の体の安静のためにロングリングロングランドに  
停泊することにしたようだ。

何だか・・・悪いなあ・・・

「ナミちゃん別に俺大丈夫だから進んでいいよ。」

「何言ってるの。チョッパーがまだ安静にしてなきゃダメだって  
言ってたじゃない。」

「うん・・・ありがとう。」

笑顔でナミにお礼を言う。

ナミは顔を真っ赤にしながら

「べ、別に私だけで決定したわけじゃないわよ。みんなもそうす  
るべきだって

言うからよ。」

「うん。わかってるよ。みんなにもお礼言ってまわってるんだ。」

「ふふっ、あんたほんと律儀よね。」

クスクスっ顔を見合わせて笑う。

「ナミすわぁくん？」

「おや、ウチのステキ眉毛が呼びみたいだよ？」

「誰がステキ眉毛だ！」

「あれ？聞こえてた？」

「ったく……じゃがいものパイユ作ったんだ。

キラ船室にお前の分もあるから食ってこい。」

「ああ、ありがとう。頂くよ。」

俺は船室へと歩いていく

「キラ。」

「ロビン……。もう気持ちの整理ついたのか？」

「ええ。」

青キジの一件があつてから実はロビンから個人的に相談を受けていた。

『そうか……。本当にウォーターセブンで船を下りるんだな。』

「迷惑掛けられないから……。」

「……。気にすることは無いと思つが。」

「私と一緒にいると危険なの……。。」

「そうか……。みんなには？」

「言つてないわ。」

「何も言わずに去る気か？」

「……………」

「わかった・・・俺の心に留めておくよ。」

「ありがとう。キラ。」

「いいえ、どういたしまして。」

俺が船室に戻ろうとしたとき

「ねえ、キラ。」

「ん？」

「あの時・・・助けてくれてありがとう。」

「ああ、青キジのとき？」

「そう。まあ、それ以外にも色々あるんだけど・・・」

「・・・ロビン、一曲いかが？」

「え？」

「いや、悲しそうな顔してるからさ。」

「そう？」

「ああ、顔には出てないが・・・心が悲しそうだ。」

「ふふっ・・・クサイ台詞ね。」

「確かにクサイな。」

「一曲お願いできる？」

「もちろん。ロビンのために。」

船上にギターの音が鳴り響く。

青い空に響き渡るギターの音・・・波の音・・・

俺のギターで少しでもロビンの心が癒せるのだろうか・・・

ロビンをチラッと見てみると目を閉じて聞き入ってくれているようだ。

ここで空気をぶち壊す叫び声・・・

『カエルだ！カエルがクロールで海を渡ってる！』

この声はルフィか・・・

「ったく・・・ぶち壊しだな。」

「クスッ。そうね。また今度聞かせて。」

「ロビン・・・ああ、いつでも。」

また今度か・・・あいつ船を下りるのには何か大きな理由があるな・・・

何とか・・・解決してやりたいけど・・・

船の速度が急に上がる。

「うおっ！どうした!」

「キラ！あそこ灯台があるのよ。」

「ホントだ・・・でそこに向かっているの？」  
「ええ。とりあえずね。」

「キラ、カエルが弾かれたんだよ！あれに！」

ルフィが指差す方向には

「ああ、海列車か。」  
「う、海列車？」

「水面をよく見てみる。」  
「なんだあれ？」

「線路だよ。」  
「ほ、ほう。」

「・・・もういい。きつとわかってないだろうから。」  
「な、何を！わかってるぞ！」

「ああ、わかったわかった。」

暴れだすルフィをなだめ灯台に上陸する。

「海賊だ！」  
「うおっ！なんだ？」

どうやら人がいるらしいな。

「どうも。さっきのって蒸気機関車ですか？」  
「そうだよ。お兄さんよく知ってるね。」

女の子が俺の質問に答えてくれた。

「ええ。一度、新聞か何かで見たことがあるものですから。」

今度はお婆さんが質問を投げかけてくる。

「あんたら列車でどっか行きたいのかい？」

「いえ、気になったので寄ってみただけです。僕達は船がありませんから。」

「そうかい。どこに向かっているんだい？」

「え〜つとログは、北なので・・・ウォーターセブンですね。」

「えっ！キラ、あんた次の目的地知ってるの？」

「えっ？ああ、一度行ったことがある。」

「なら教えてくれればよかったじゃない！」

「だって聞かなかったじゃないか。」

「まあ・・・そうだけどさ・・・」

「じゃあ、すいません。先を急ぎますので。」

「ちよつと待ちな。」

「島の地図あげるから待ってな。」

「なんか、すいません。」

「お兄さん達の船・・・ボロボロだね。」

「えっ？あ、ホントだね。」

「じゃあ、ガレーラカンパニーへの紹介状も書いてあげるよ。」

「ガレーラカンパニー？」

「船大工の集まりさ。」

「船大工！やったなキラ！船大工仲間に来るぞ！」

「はい。紹介状と地図だよ。」

「ありがとうございます。」

「あたし達も近いうちウォーターセブンに帰るのよ。」

「また会ったら行きつけの店で一杯おごるからね」

「2人ともありがとう。では、また。」

メリー号は駅を後にしてウォーターセブンへと向かっていく……

第六十四話 海列車（後書き）

いよいよウォーターセブンに入れそうです。

感想をお願いします。



第六十五話 ウォーターセブン（前書き）

一路ウォーターセブンへ

## 第六十五話 ウォーターセブン

「ウォーターセブン」

俺は一人街中を歩き回る。

へえ、三年前に比べてずいぶんと発展したもんだな。

「ここが、造船所か・・・」

「何か用か？」

「ココロさんの紹介で来た。船を直してもらいたい。」

「船はどこにあるんじゃ？」

「岩場の岬にとめてる。」

「おい、キラ！」

「ルフィ。遅かったな。」

「換金してから来たのよ。ほら？」

「お、いくらになった？」

「3億ベリー？」

「船を直してもおつりがきそうだな。」

「ええ。キラなんかほしいものある？」

「そうだな、新しいギターとか？」

「話してるところ悪いんじやが・・・ワシは船の具合を見てくる。」

「走っていくのか？」  
「ああ。10分まっとな。」

その男は急に走り出し壁を駆け上がり屋根の上に飛び乗り進む。

「すごい脚力だな。」  
「奴は1番ドック大工職職長カク。」

「あなたは？」  
「おれはこの都市のボス。アイスバーグ。」

「俺は・・・」  
「知っている。旋律のキラだな。」

「良くご存知で。」  
「調査済みですから。」  
「こっちは、俺の秘書のカリファだ。」

「よろしくカリファさん。」

俺は笑顔でカリファにあいさつをする。

「は、はい。よろしくお願いします。」  
「ンマー。カクが船を査定しにいつてる間、工場を案内しよう。」  
「ええ。お願いします。」

『おい待てえ！』

ウソップが急に叫ぶ。

「どうした？ウソップ。」  
「キラ！金が！2億が！」

謎の男達が俺たちの金をもって逃げていく

「あれはフランキー一家！」  
「ちっ！」

逃げるフランキー一家のヤガラブルへと飛び乗る。

「金返してもらえる？」  
「な、なにい！？飛び乗った！？」

「この！落ちろ！」

フランキー一家の一人が殴りかかってきた。

俺はその拳を握り・・・

「泥棒はいけないな。」  
「は、離せ！痛ててて！千切れる！」

「大袈裟だな。返してくれるかな？」  
「わかった。わかったから離して！」

「なんてな！くらえ！」

手を離すと今度は蹴りを放ってくる。

「ちつ……仕方ない……」

蹴りを受け止め……

『放電!!!』

「ぎゃああああああ!!!」

黒焦げになりその場に倒れこむ。

「まだ、金ほしいか？」

「いいえ……入りません……」

「そうか。じゃあ、返してもらおうな。」

金を持ちウソップの所へ戻る。

「もう目を離すんじゃないぞ。」

「お、おう。キラすまねえ……」

「キラ、あの技はエネルギーの……?」

「さあ?雷に撃たれすぎたせいかな?」

「もう!真面目に答える気ないでしょ。」

「アイスバーグさん。フランキー一家って?」

「船の解体屋だ。」

「へえ、まともな奴等には見えなかったけど……?」

「副業に賞金稼ぎをやっているんだ。この街にきた海賊共を潰せば  
そいつらの乗ってきた船も手に入る。」

「なるほど。あとはそれを解体して使える木材は売り捌くって感じかな？」

「ンマー。そのとおりだ。」

「タチが悪いな・・・」

「ンマー。フランキー一家のことはもういい。付いたぞ」  
「ッ」

工場見学開始。

第六十五話 ウォーターセブン（後書き）

キラに電気的能力は必要との声を頂いたので

これからも使っていこうと思います。

第六十六話 竜骨（前書き）

メリー号の査定結果は？



## 第六十六話 竜骨

「造船所すごかったな！キラ。」

「ああ。そうだな。」

俺たちはガレーラカンパニーのドックを見学させてもらった後  
メリー号の査定結果を聞きに戻ってきていた。

早速、カクに尋ねる。

「査定結果を聞きたい。」

「率直に言うぞ。お前達の船は、わしらでも直せん。」

「・・・そうか。」

「あまり驚いてないようじゃな。」

「薄々感ずいてはいたんでな。」

「そうか・・・直せない理由としては竜骨がひどく損傷しておっ  
てな。」

随分と無理な旅をしてきたんじゃろ。」

「そつか・・・。メリーお疲れ様。」

メリー号の船体に手を触れ感謝の言葉を掛ける。

思えば色々あったもんな・・・

無理させてばっかでごめんな・・・

「ありがとうメリー……本当にありがとう……」  
「俺は納得できねえ！」

ルフィが突然叫びだす。

「ルフィ……」

「おめえら！すごい船大工なんだろ！金ならいくらでもある！」

「落ち着けルフィ。」

「キラ……だつてよ！」

「いいか、ルフィ。竜骨は船の中心だ。それがダメになってるってことは……」

「ただの死を待つ組木同然ってことだ。」

「あんたは？」

「1番ドック。マスト職、職長パウリーだ。」

「パウリー……その言い方はやめてくれ。一緒に旅してきた仲間なんだ。」

「……すまねえ。言い過ぎた。」

「だつたら……」

『だつたらもう一回。一からメリー号を作ってくれよ！』  
「似た船なら造ってやれるがまったく同じ船は造れない。  
この世にまったく同じ船は存在しない。」

「ルフィ……こればかりは、しょうがない……」

「キラ！お前さっき仲間だって言ったじゃねえかよ！」

「キラ、あんたのこの船長は呆れたもんだな。」

「なに!?!」

「沈むまで乗れば満足なのか? てめえそれでも一船の船長か」

「.....!」

「カリファ。キラに船のカタログを。」

俺はカリファからカタログを受け取った。

「ありがとう・・・アイスバーグさん、あとでまた相談に行きます。」

「ああ、わかった。待ってるよ。」

「き、キラ?」

「どうした? ナミちゃん?」

「2億ベリーが.....」

「?」

『なくなってるのよ!?!?!?!』

「ええええええええええ!?!?!?!?!?」

「いつ?いつからなの?」

「わかんないわよ!」

「ルフィ!なんか知らないのか!?!」

「俺もわかんねえよ!」

「そうか！ウソップ！ウソップが持つてるのか！？」  
「ウソップはどこ！？」

「パウリー！長い鼻した奴見なかったか？」

「えっ？うん・・・ルル見たか？」

「長い鼻・・・ああ、さっきフランキー一家に連れて行かれてた  
気が・・・」

「なっ！誘拐かよ！ルフィ！探すぞ！」

「おう！」

「ちよつと！2人とも探すつてどこ探すのよ！」

俺とルフィはとりあえずあてもないまま街中を探し始めた。

第六十六話 竜骨（後書き）

すみません。短いです。

感想お願いします。

第六十七話 アジト(前書き)

いざ、フランキーのアジトへ・・・

## 第六十七話 アジト

ウソップは無事なのか……？街中を駆け回りウソップを探す。

「ルフィ！いたか？」

「いや、いねえ！」

「ルフィ！キラ！」

「サンジ！どうした？見つかったのか？」

「行くぞ。」

「……？」

「フランキーのアジトだよ。」

「……OK。行くぞ、ルフィ。」

「おう。」

フランキーのアジトの前に人が倒れている。

あれは……

「ウソップ！」

俺たちはウソップに駆け寄る。

「チョッパー、息はあるか？」

「うん。大丈夫そうだ。死んではないよ。」

フランキーのアジトを覗みつけ

「…………ウソップ。待ってる。」

怒りのあまり俺の体からバチバチと電気が迸る……

「ルフィ、ゾロ、サンジ、チョッパー……アジトぶっ潰すぞ。」

「おう！」

俺たちはアジトのドアを破壊し中へと入った。

一斉に視線が集中する。

「む、麦わらのルフィだ！」

「金を取り戻しにきやがったぞ！」

「大丈夫たかが5人だ！何もできやしねえよ！」

「おい……ウソップをやったのは……どいつだ？」

「俺だよ、お嬢さん！」

「お前か……」

そいつの頭を掴み持ち上げ、腕に力を入れる。

メキメキと頭に指がめり込んでいく。

「ぎゃああああ！割れる！割れるって！」

「…………割れるのが嫌か？じゃあ、これはどつだ。」

『放電！！！！』



「ウギャアアアアアアアアアア!!!」

黒焦げになり倒れこむ。

「悪魔の实の能力者が・・・!?」

「次は・・・どいつだ?」

「ヒ、ヒイイイ!撃て!砲弾だ!」

「ロロノア。」

「ああ。」

ゾロが大砲を斬り割く。

「な・・・こいつ化物かよ!」

「に、逃げる!裏口だ!」

サンジが裏口に立ち塞がる。

「人にケンカ売つといて・・・締まらねえマネすんじゃねえ!」

『パーティーテーブルキックコース!』

「ギャアアアアア!!!」

「な、なんなんだよ!コイツら!裏口はダメだ!窓から逃げるぞ!」

「チョッパ!。そっち行つたぞ。」

「うん。わかつてる。」

『角強化・・・桜並木!!!』

「ゲアアアアアア!!!!」

「こいつら……マジでつえええ……!!」

「お前等……骨も残らねえと思え。」

「クスッ……ルフィ言っじゃねえか。」

「やべえ……やべえぞ……どうする!?!」

「馬鹿野郎! フランキー一家の恐ろしさを見せてやるっぜ! いくぞ!!」

フランキー一家が束になって襲い掛かってきた。

「諦めの悪い奴等だな……。な、船長?」

「ああ。」

『ゴムゴムの鞭!!!!』

まとめて敵を吹き飛ばす。

「さあ! この建物潰すぞ!」

『おっ!!』

「クソ! あいつらを止めろー!!」

↳その後

「チョッパ!。ウソップの容態は?」

「うん。大丈夫。良好だよ。」

「そっか。よかった。」

「なあ、キラ。」

「ん？なんだ、チヨッパー。」

「メリー号・・・治んないのか？」

「・・・・・・・・ああ。」

「俺・・・メリー号が好きだ。」

「わかってる・・・。俺もメリー号は好きだ。大切な仲間だと思  
ってる。」

「うん。」

「でも、仕方がないんだ・・・。こればかりはな・・・。」  
「・・・・・・・・そっか。」

「さあ、ウソップを船に運ぼう。」

「うん。おーい！みんなウソップを運ぶの手伝ってくれ！」

船へとウソップを運ぶ途中・・・

「キラ。」

「なんだ？ルフィ。」

「メリー号とは・・・ここで別れよう。」

ルフィの頭をポンポンと叩き

「よく決意したな・・・船長・・・。」

俺の言葉を聞きルフィは静かに頷いた。

第六十七話 アジト（後書き）

感想をお願いします。

## 第六十八話 ケンカ

「おい！ウソップが目を覚ましたぞ！」

「おっ！そうか！チョッパーご苦労様！」

俺たちはウソップのいる船室へと集まる。

「面目ねえ！大事な金を俺は・・・」

謝ろつとするウソップを制し

「気にするな・・・それよりも無事でよかった。」

「まだ、一億ベリあるし、気にすんなよ。」

「キラ、ルフィ・・・ありがとな・・・でもよ一億あれば直せんのか？」

「・・・・・・・・。」

「いや・・・船は乗り換えることにしたんだ。メリー号での航海はここまでだ。」

「・・・・・・・・ルフィ？な、何言ってるんだ？」

「カタログ見たらな中古でも今よりデカイ船が・・・」

「待てよ！修理代が足りなくなっただって事だろ？俺が2億取られちまったから・・・」

「違う！そうじゃねえよ！」

「じゃあ、なんだよ！はっきり言え！俺に気を使ってる！？」

2人が熱くなり始めている。

俺は2人のやり取りに口を挟む。

「直らないんだよ。ウソップ。」

「えっ……？」

「ルフィだつてこの船を捨てるのは苦しいことだ……。わかるだろ？」

「何言つてんだ……。」

「……？」

「今日、あつたばかりの他人に説得されて帰ってきたのか？」

『一流と呼ばれる船大工がダメだと言っただけで一緒に旅してきた大事な仲間を捨てるのか！？』

「……ウソップ。お前の言いたいことは……。」

「わかつてねえよ！キラは何もわかつてねえ！」

「いいよ……。今までどおり俺が修理する！木材が足りねえ買ってこなきゃな！」

『お前は船大工じゃねえだろウソップ！』

「ルフィ……。」

「俺はこの船を見捨てねえ！お前等船大工共の正論に担がれやがって！」

「ウソップ……落ち着けキズが開くぞ……。」

「キラ！お前なんでそんな商売口上に負けたんだよ！メリー号の強さを信じて……。」

ウソップの腕を掴み強く握り締める。

「ぐっ!?!」

「ウソップ……これは仕方がないことだったんだ……何故わからない……」

「ちよつと!キラ!」

「俺はメリー号を置き去りにして先には進めねえ!お前は死神つて言われてたんだろ!」

冷血な人間だからメリー号を置き去りにしても心が痛まねえんだ!」

「ちよつと!ウソップ!それは言い過ぎよ!」

「いいんだ!いいんだよ……ナミちゃん。確かに俺は冷血な人間かもしれない……」

『ウソップ!てめえ!』

ルフィがウソップへと掴みかかった。

『いい加減にしろよ!キラだつて……みんなだつて辛いんだ!』

「だったら乗り換えるなんて言わねえだろ!」

『……!そんなに気にくわねえなら!今すぐこの船から……』

『ルフィ!』

俺はルフィを怒鳴りつける。



「・・・ああ、悪かった。今は・・・」

「いや・・・今がお前の本心なんだろ・・・？」  
「ウソツプ！バカなこと言っんじゃない・・・」

「この船に見切りをつけるなら・・・俺にもそうしろよ！」

「・・・。何いって・・・」

「俺は・・・一味を辞める！」

「ダメよ！ウソツプ！」

「この船は船長であるお前のもんだ・・・ルフィ・・・だから・・・」

『俺と決闘しろ！勝ったらメリー号はもらって行く！』

「バカなこと言っない！お前・・・死ぬぞ！」

「キラ・・・さっきはゴメン・・・でも・・・俺引き下がれねえんだ！」

「ちっ！ルフィ！戦っんじゃない！」

「キラ・・・この船の船長は俺だ。俺はこの決闘を受けなきゃいけない。」

「なっ・・・」

「いいかルフィ！今夜10時決闘だ！」

「おう・・・わかった。」

連れ添った仲間が・・・ウソツプが去っていく・・・

ルフィの判断は間違っていない・・・ただ・・・

ただ・・・この船はあいつに・・・ウソップにとって大切な思い出・・・

俺は、2人の争いを止めることが出来なかった自分を憎らしく思っていた・・・

第六十八話 ケンカ（後書き）

感想をお願いします。

第六十九話 それぞれの想いと重い（前書き）

ルフィとウソップの決闘。

キラは止めるのか？止めないのか？

## 第六十九話 それぞれの想いと重い

「キラ！こんな決闘やめさせて！」

「そういわれましても……」

ナミは俺に決闘を止めるように言うが……

「ルフィがああ調子じゃ……無理だよ。」

「もう……なんでこんなことに……」

ルフィは船室に籠もり、ただただ決闘の時間を待っている。

「まいったなあ……」

みんなソワソワしている、俺だって落ち着かない。

決闘するのは仲間のウソップなんだから……それぞれ想うことがある。

チョッパーが船へと戻ってきた。

ウソップの治療にいったはずじゃ……？

「追い返された……」

「ん？チョッパー？」

「もう仲間じゃねえんだから船に帰れって」

「……そうか。」

「何だか・・・一味がバラバラになっていくみたい・・・」

「・・・そうだな。」

（10時）

ウソップが俺たちの前に姿を現す。

「お前等、船から下りてくんよ。」

ルフィとウソップが対峙する。

「・・・俺、船室にいるわ。終わったら教えて。」

「キラ・・・ああ、わかった。」

「見たくないよ・・・仲間同士の争いなんかさ・・・」

俺は船室へと入っていく。

2人の叫び声・・・みんなの悲鳴が聞こえる。

ギターを手に取り弾く・・・外の音が聞こえないように・・・力強く弾く・・・

しばらくすると船室のドアが開き

「おい、船空け渡すぞ。」

「ロロノア・・・ウチの船長どんな顔してる?」

「自分で確認しろよ。副船長。」

外へ出てルフィの顔を覗き込む。

「……ルフィ。後悔してんのか……？」

「しねえ……俺が迷ったら……ダメなんだ……船長だから……」

「……重いな。でも……それが上に行くってことだ。」

「わかってる……」

「安心しろ……俺がお前の背中押してやるよ……だから……」

『立ち止まるな。モンキー・D・ルフィ。』

ルフィは静かに頷き船を明け渡す準備をする。

俺たちはもう……この船には戻れない。

第六十九話 それぞれの想いと重い（後書き）

短いです。話の切れ目にここで区切りたかったもので

感想お願いします。



第七十話 暗殺（前書き）

ルフィとウソップの決闘後。

メリー号を明け渡しホテルへ……

## 第七十話 暗殺

あの後、俺たちはウォーターセブン裏町の宿屋に泊った。

ルフィはあれからほとんど口を開かないし、みんなにも元気がない。

仕方がないとはいえ・・・仲間が一人削れただけでこれか・・・

この海賊団の結束の強さを改めて認識させられた。

宿にいて時間を潰すのもよかったのだが気晴らしに俺は1番ドックを訪れていた。

すごい人ばかり・・・何かあったのか？

「号外！号外！」

俺は記事を手に取り唾然とした・・・

記事には・・・【アイスバーグに暗殺の魔の手】の文字。

無事なのか・・・？

「会えないかな・・・」

ポーツとドックの前に突っ立っている

「キラ。お前なにしてた？」

「えっ……あ、パウリー。いや、アイスバーグさん大丈夫かな？つてね。」

「俺も今から会いに行くところだ。お前も行くか？」

「え……？いいのか？俺、部外者だぞ？」

「いいんだ。アイスバーグさんがエラくお前のこと気に入っててな。」

「じゃあ、ご一緒させてもらおうよ。」

パウリーと共にアイスバーグさんの屋敷へと入る。

「パウリー！……キラ、なんでお前がおるんじゃ？」

「俺が連れてきたんだよ。ダメか？」

「今は部外者は入れんほうがいい。」

「いいじゃねえか。アイスバーグさんもキラを気に入ってんだか

ら。」

「すまない、言葉に甘えて入ってきてしまった。」

「まあ……いいじゃろう。」

「で、アイスバーグさんの容態は？」

「まだ、目覚めとらん。」

「………。一体誰が……。」

部屋のドアが開きカリファが出てきた。

「アイスバーグさんが……意識を取り戻しました。」

『よかった！』

俺たちは部屋へと入りアイスバーグさんのもとへ駆け寄る。

「アイスバーグさん。キラが心配して来てくれましたよ。」

「アイスバーグさん、大丈夫ですか？」

「・・・パウリー。キラを捕まえる。」

「えっ!？」

「アイスバーグさん!？何いつてんだ!？」

「昨夜、俺の部屋に侵入してきた犯人は2人・・・1人はニコ・ロビンだ。」

「なっ!？そ、そんなバカな!」

「キラは、ニコ・ロビンの仲間だ・・・そうだろ?カリファ。」

「はい。ニコ・ロビンは麦わらの一味です。政府に確認したので間違いありません。」

「てめえ・・・キラ!」

「ちよ、ちよっと待て!確かにロビンは仲間だが・・・」

『R・Aボーラインノット!!!!』

「!」

パウリーのロープが俺の両手首へ巻きつく。

「・・・。」

「キラ・・・大人しくしてれば・・・ヒドイことはしねえ。」

「大変だ!外で麦わらの海賊とフランキーがケンカはじめやがった!」

「このままじゃ一番ドックが・・・」

「あのバカ・・・！」

「キラ・・・今からてめえの仲間も捕まえてくる。じゃあな。」

「・・・アイスバーグさん。ロビンには何か訳があるはずだ。」  
「ンマー、そんなもん信じると思うか？」

「いや、あんたは信じないだろう・・・でも、俺は信じてる。」  
「・・・そうか。キラ・・・大人しくしてるよな？」

「ここで暴れたら自分が犯人って言うてるようなもんだ。暴れな  
いよ。」

「ふふっ・・・なあキラ、海賊辞めてウチで働かないか？」

「なんで急に・・・？」

「昨日の船の査定るとき、すぐ原因を言われて理解できていた。  
船の構造を理解している証拠だ。お前ならすぐに一流の船大工  
になれるぞ。」

「俺は・・・ルフィを海賊王にしなきゃならない・・・だから無  
理だな。」

「そうか残念だ・・・。」

俺が黙って椅子に腰を掛けるとカリファが俺の手首に巻きついた口  
ーブを取る。

「・・・いいのか？逃げるぞ？」

「逃げたら・・・捕まえるまでです。」

「ふふっ・・・そっか。」

『襲撃だ！麦わらのルフィが本社に侵入したぞ！』

部屋の外から叫び声が聞こえた。

あのバカ・・・何してんだか・・・

俺は頭を抱えアイスバーグをチラリと見る。

「・・・麦わらのルフィに会いたい。」

「・・・！？」

「アイスバーグさん！お体が！」

「キラが何も知らないなら船長のアイツに聞くまでだ。」

「たぶん、アイツも何も知らないはずだ。」

「あつて話してみないとわからん。」

「そつか・・・じゃあ、俺は御役ゴメンで帰ってもいいかな？」

「ダメだ。隣の部屋にでもいる。」

「ふう・・・了解。」

隣の部屋へと移動し、椅子に腰を掛け窓の外を眺める・・・

船大工達がいたところで武器を持ってウロウロしている。

どうやら俺達全員を捕まえる気らしいな・・・第一号が副船長の俺とは・・・

我ながらおもしろい・・・

俺はクスクスと笑いながらカリファの淹れてくれた紅茶を飲み

ルフィとアイスバーグの話が終わるのを待った。

第七十話 暗殺（後書き）

感想をお願いします。



第七十一話 本当の犯人は？（前書き）

ガレーラカンパニーに捕まったキラ。

その後は・・・？

## 第七十一話 本当の犯人は？

コンコンと部屋のドアをノックする音。

「はい。どうぞ。」

ドアが開きカリファが顔を出す。

「キラさん。アイスバーグさんがお呼びです。」

「ええ。わかりました。」

アイスバーグの部屋へと移動する。

「アイスバーグさん。キラさんをお連れしました。」

「ああ。」

「ウチの船長帰ったみたいですね。」

「窓から飛び降りて出てったよ。」

「そうですか・・・ロビンのことは？」

「話した。ンマー、あの目は信じてない目だな。」

「でしょうね。俺もあなたの話信じてませんよ。」

俺は笑顔でそう告げる。

「ふふっ・・・。そうか。」

「じゃあ、俺はあいつらの所に戻ります。」

「ダメだ。」

「……ですよね。」

「お前等一味は、全員捕らえる。」

「出来ますか？ウチの連中は、なかなか強い。」

「大丈夫だ。ウチの船大工も強いぞ。」

お互いに顔を見合わせクスツツと笑った。

アイスバーグとの会話が終わると俺は屋敷の一室に閉じ込められた。

窓から逃げることも出来るが……ここで逃げると本当に俺達の犯行だと

思われてしまう。

逃げるわけには行かないだろ……

それにもしかしたらまたロビンが来る可能性がある。

大人しく部屋に籠もり雷の扱いを練習する。

体から放電することは出来る……あとは狙った場所に向けて雷を放てるかだ。

部屋の隅にある花瓶に向け手を向け……

『稲妻！！！』

……何も起こらんぞ？

どういふことだ……あくまで放電のみなのか？

部屋のドアが勢いよく開きパウリーが入ってくる。

「どうした？パウリー。」

「おい。麦わらの奴等は今夜この屋敷に来るんだよな？」

「そんなのここから出てない俺がわかるわけないだろ。」

「昼日中からここに突っ込んできた野郎だからな。来るかなと・  
・どう思うっ？」

「さあ？もしロビンがここに来るとしたら・・・来るんじゃないか？」

「そうか。お前、仲間が危険な目に合うかもしれないのに余裕だな。」

「信じてるからな・・・みんなを。」

「・・・。」

パウリーが何も言わず部屋から出て行く。

↓アイスバーグの部屋の前↓

麦わらの一味がまたアイスバーグの命を狙うと予想し

1番ドックの職長たちがアイスバーグの部屋を警護する。

「何なんだよ・・・アイツ・・・」

パウリーはアイスバーグの部屋の前椅子へ腰掛け一息つく。

「キラの様子はどうじゃったパウリー。」

「あいつ……変だよ……妙に落ち着きすぎてるっていつか……」

「ふむ……怪しいのう……。」

「今回……本当に妻わらの一味の犯行なのか？」

パウリーの一言に他の職長達が睨みつける。

「何を言うんじゃ！アイスバーグさんがニコ・ロビンを見たと言  
つてたじゃろ！」

「そ、そうだよな……」

くキラsideく

さて、ロビンは来るのかな？

窓から外を眺める……

風が強くなってきた……

そつえばさつきアクアラグナが来るとか船大工達が騒いでたっけ。

アクアラグナっていうと、高潮のことだったよな。

屋敷の入り口から爆発音が聞こえた。

俺は部屋を飛び出し、アイスバーグの部屋へと向かった。

**第七十一話 本当の犯人は？（後書き）**

3日ぶり?くらいの更新です。

感想お願いします。

第七十二話 真犯人（前書き）

アイスバーグの部屋へと向かうキラ・・・

その後は・・・？

## 第七十二話 真犯人

アイスバーグさんの部屋は・・・こつちか？

俺はアイスバーグの部屋を目指し通路を突き進む。

船大工達がいる・・・数は・・・6人か。こちらに気付き声を上げる。

『おい！旋律のキラが逃げたぞ！アイスバーグさんの所に行く気だ！』

バタバタとこちらにたくさん足の音が向かってくる。

まずい・・・応援がきたか。

『おい！こつちだ！こつちにいるぞ！』

「少し黙ってもらうぞ！」

拳に雷を帯電させ船大工達の間を駆け抜ける。

『ぎゃあああああ！！！！』

悲鳴を上げ6人の船大工達が倒れこむ。

『剛拳・雷』

「安心しろ。雷は抑え目だ。」

俺はフツツと笑い倒れた船大工達の方を振り返ると・・・



『てめえ！旋律のキラ！よくも仲間を！』  
「げっ！ウソだろ！」

20人くらいが一斉に俺を追ってきている。

しかも仲間を倒したせいも、すごくキレてるぞ……まずい……

「付き合ってられるか！」

「てめえ！逃げるのか！待て！」

「待てと言われて待つか！」

「クソ！お前9000万の賞金首なんだろ！逃げんな！」

「きりがねえ……仕方ないな。縮地！」

一瞬にしてキラの姿が消えた。

「お、おい……どこいったんだ……？」

「わ、わかんねえ……」

……とりあえず振り切ったみたいだな。

「ったく……まさかあんなに追ってくるとは。」

俺はアイスバーグの部屋の前へとたどり着いた。

ドアを開け部屋の中へ入っていく……そこには……

「ロビン・・・何してる・・・？」

ロビンと1番ドック職長のルッチ・カク。秘書のカリファがいる。

あともう一人・・・きっとこの男がロビンと一緒にいたという男なのだろう。

アイスバーグは血を流し床に倒れている。

「おい・・・カク。どういうことだ？」

「やれやれ・・・困った奴じゃの。部屋でじっとしてると言ったじゃろ。」

「カリファ・・・あんたも・・・裏切ったのか？」

「裏切る？違います。」

「何が違う!？」

「俺たちはCP9。まあ、今から死ぬ貴様には関係ない話か。」

ルッチが鋭い視線で俺を睨む。

「死ぬ？俺が？フツ・・・」

「何がおかしい!」

「あまりにも甘く見られてるもんでね・・・」

「ここに入ってきたお前が悪いんじゃない・・・悪く思っな。」

『嵐脚!!!』

カクの鋭い蹴りが俺に向かってくる。

「カク！後ろだ！」ルッチが叫ぶ。

「いい蹴りだ。だが・・・遅いな。」

背後へと回りこんだ俺はCP9を無視してアイスバーグの元へと向かう。

「大丈夫ですか？アイスバーグさん。」

「キラ・・・すまない・・・お前を疑って・・・」

「気にしないでください。俺たちは海賊だ。疑われてもしょうがない。」

「そうか・・・」

アイスバーグをベットへと座らせ、ロビンの方を見る。

「船を下りるって言ったのは・・・この為だったのか・・・？」

「そうよ。だったら何？」

「そっか・・・」

・ 悲しい・・・彼女がこんな・・・こんなことで船を下りるなんて・・・

「キラ・・・そんな目をしないで・・・お願い・・・」

「ロビン・・・」

「あなたには・・・悲しんでほしくない・・・」

「おい！ニコ・ロビン！何を言っている！」

このとき確信した……ロビンは……

「……助ける」

「ん？何を言っておる？」

「ロビン……絶対に助けてやる！」

「キラ……」

ピシツツと壁と入り口の扉にヒビが入る。

『ロビンはどこだああああ！！！！』

壁を壊してルフィが入り口の扉を壊してゾロが殴りこんできた。

「ルフィ！ロロノア！」

「キラ！お前どこ行ってたんだよ！」

「色々あつてな。それよりも……」

「おう。ロビンやつと見つけたぞ！」

「……ルフィ。コックさんと船医さんに別れは告げたはずよ。」

「あんなんでわかるか！ちゃんと理由を言え！」

「理由なんてどうでもいいさ……」

「キラ……？」

『帰って来い……ロビン。』

「……！？」

「アツハツハツハ！変わんねえな！キラ！」

部屋の隅から俺の見知った顔が現れる。

「ク、クリス？」

「よっ！キラ！早速だが・・・ロビンのこと諦めてくれ。」

まさかクリスが・・・

俺は混乱して訳がわからなくなってしまった。

第七十二話 真犯人（後書き）

感想をお願いします。

第七十三話 クリスvsルフィ？キラ？（前書き）

キラの前に昔の部下でルイン少尉だったクリスが現れる。

敵なのか・・・？

## 第七十三話 クリスvsルフィ？キラ？

「クリス・・・海軍に入ったのか？」

「クザンに誘われてね。」

「青キジに？」

「ルインを抜けたのはいいが仕事がなくてね。」

「食うために賞金稼ぎをやった俺に声を掛けてくれた。」

「・・・なぜここに？」

「クザンとあんたを捕まえると約束したからな。」

「出来るか？」

「もちろん。」

お互いにクスツツと笑う。

「俺はクザンに鍛えられてる。昔の俺だと思つなよ。」

「見せてもらおうか。」

クリスと睨みあい。お互い目を逸らさないようにして距離をとった。

ルッチがクリスに声を掛ける。

「クリス・・・時間だ。」

「もうそんな時間か。」

「時間？」

時計を確認する・・・一体何の時間だ？



「キラ。この屋敷は炎に包まれる。」  
「な、何!?!」

「ニコ・ロビン先に行け。」  
「え、ええ。」

「ロビン!」

ロビンを追おうとするとブルーノという男が立ちふさがる。

「ちっ! 邪魔をするな!」  
「旋律のキラか・・・クリスが戦うまでもない!」

『剛砲!』  
『鉄塊!』  
「よせ! ブルーノ! まともに受けるな!」

クリスが叫ぶが・・・もう遅い・・・!

ドゴツッと鈍い音をたてブルーノの腹部に拳が突き刺さった。

「うぐう・・・バカな・・・鉄塊が・・・!?!」  
「ルフィ! ロビンを!」  
「おう!」  
「仕方ねえ・・・麦わらは俺が。」

ルフィの前にクリスが立ち塞がる。

「どげよ! お前!」

「さて・・・キラが認めた男の実力見せてもらおうか。」

『ゴムゴムの銃!』

「悪魔の実の能力者か。おもしろい!」

『剃!』

ルフィの拳をかわし背後を取る・・・

「なっ!消えた!?!」

どうやらルフィには動きが見えていない。

「麦わらのルフィ・・・ガープの孫か・・・確かにセンスはありそうだ。」

「うるせえ!じいちゃんの話はやめろ!」

『ゴムゴムの鞭!』

「無駄だよ。麦わら。」

『ミラーウォール』

クリスがそう言うのと鏡の壁がルフィとクリスの間に現れた。

ルフィが鏡を無視して攻撃するとパリン!と音をたて鏡の壁が割れ割れた鏡がルフィの体に突き刺さる。

「いてええええええ!」

体中から出血するルフィ。

「まだまだ、いくぞ。」

クリスは手のひらにガラスの破片を出現させ軽く息を吹きかけるとルフィに向かってガラスの破片が飛んでいく。

『鏡風』

「なっ！うわ！いっぱい飛んできた！」

ガラスがルフィの体を切りつける。

「いってええええええ！何なんだよアイツ！」

「ルフィ！」

「余所見してていいのか？」

「しまっ！？」

『指銃！』

ブルーノの指が俺の体に突き刺さった。

「あぐっ！？」

「人体を打ち抜くのに弾丸はいらない。」

「キラ！ロビンが！」

ナミが指差す方を見るとロビンがこちらをチラリと見て窓から飛び降りた。

「ロビン!!!」

俺が後を追おうとすると・・・

「また・・・余所見か・・・CP9もなめられたものだな。」

「キラ!後ろだ!八トの奴が来てるぞ!」

振り返るとそこには・・・

「ネコネコの実モデル・・・豹・・・」

「なっ・・・」

「油断した貴様が悪い・・・死んでもらうぞ・・・」

「・・・っ!?!?」

『六王銃!』

ズドン!と鈍い音とともに体が吹き飛ぶ・・・

こ、これは・・・利いたか・・・?

「貴様に敬意を表して六式の最終奥義だ・・・静かに眠れ。」

『キラーーーー!!!』

意識が遠のいていく中・・・誰かに抱えられる・・・

だ、誰だ・・・?

「ルッチ。後は任せるぞ。」

「ああ。わかった。」

「お前！キラを返せ！」

クリスはフツツと笑い窓から飛び降りた。

第七十三話 クリスvsルフィ？キラ？（後書き）

評価・感想お願いします。

クリスの能力については・・・まだ語りません！

第七十四話 予想（前書き）

あっさりとやられた？キラ。

その後は・・・

## 第七十四話 予想

俺はクリスに担がれ運ばれていた。

予想では・・・ロビンのところへと行けるはず・・・

みんな心配してるかもな・・・

それにしても・・・体がいてえ・・・当たるんじゃない・・・

「クリス。ここは？」

「海列車だ。目は覚めたか？」

「ああ、最高の目覚めだ。」

「それはよかった。ほら水だ。」

「・・・・・・・・。」

クリスからもらった水を口に含み周りを確認する。

「キラ・・・大丈夫？」

聞き慣れた声・・・

「ロビン。」

「体は？」

「心配ない。」



俺はニヤリと笑う。

体に痛みはまだあるが・・・大丈夫。暴れられそうだな。

「生きているのが不思議なくらいだな。旋律のキラ。」

ルッチが俺の前に立つ。

「俺の思ったとおりだよ。ルッチ。」

「なに？」

「お前等はやっぱりロビンと合流した。」

「貴様・・・」

『予想どおりだ。』

「もう一度眠ってもらっただけだ。六王銃！」

『縮地』

背後へと回り込みルッチを蹴り飛ばす。

「・・・っ！」

「ルッチ・・・体術じゃキラには勝てない。」

クリスがルッチとキラの間に割って入る。

「何？六式が負けるとでも？」

「違う。六式が負けるんじゃない。俺たちが負けるんだ。」

「どういっことだ・・・？」

「身体能力が違いすぎるってことぞ。」

俺はロビンの手を掴み

「行こう。逃げようロビン！」

「……ダメよ。」

「私がああ船にいと……」

「……わかった。」

ロビンの手を離し椅子に腰を掛ける。

『最後まで付き合おうよ。副船長だしな。』

「最後が死だとしても？」

「ああ……一人で死ぬのは嫌だろ？」

「逃げてよ……バカ……」

窓の外を見てロビンは肩を震わせながら言う。

「……ありがとう。」

「どういたしまして。」

「キラ……」

クリスが目に涙を浮かべゆっくりと近づいてくる。

「な、なんだよ……」

「お前等……ほんと……逃がしてやりてえくらいだ。」

「な、なにを言っておる！」

カクが思わず叫ぶ。

クリスはカリファアの肩に手を置き

「だってよ……今のやりとり……いい！仲間ってこれだよな！」

「セクハラで訴えますよ。」

「ええ！？今ので！？今のでセクハラ！？」

「お前は……ほんと変わんねえな。」

俺はクリスを見てクスクスと笑う。

『クリス到着までが任務だろ！』

ルッチがクリスを怒鳴りつける。

「コワ！ゴメンよ。おふざけが過ぎたな。」

ブルーノが口を挟む。

「おい、そろそろ出発するぞ。」

「ああ。」

「なあ、クリス。」

「なんだよ。キラ。」

「俺を殺さなくてもいいのか？」

「お前を生きて連れ帰るように言われてるからな。」

「暴れたら？」

「その時は・・・殺すかもな。」

「そっか。」

俺はしばらく状況を伺うことにした。

だが一体誰が俺を生きて連れ帰るようにと？

海列車は走り出す・・・あの場所に向かって・・・

第七十四話 予想（後書き）

感想をお願いします

第七十五話 死神の価値（前書き）

潜入に成功したキラ。

その後は・・・？

## 第七十五話 死神の価値

列車が進みしばらくすると車両の扉が開き海兵が報告をする。

「クリスさん！侵入者が！」

「ん？侵入者？」

「はい！」

「そつか・・・麦わらの一味か？」

俺は席を立ち第一車両へと向かう。

「ちよつとロビンと談笑してくる。」

「ダメだ。逃げるだろ？」

海兵が扉の前に立ちふさがる。

「ちつ・・・」

仕方なく椅子に座り時を待つ・・・

それにしても・・・俺は何を大人しくしてやがる・・・

死神の名を捨てたとはいえ、情けない・・・

でも助けた所でロビンがああ調子じゃなあ・・・

まあ・・・ロビンをなんとか説得して・・・

俺は脳内で色々としゅみレーションをし、確立の高い逃走方法を探す。

「……………これでいくか。これなら……………」

「ミツシヨンコンプリート……………なんてね。」

「ん？なんだ？キラ。」

「いや、なんでもないよ。クリス。」

ガシャーン！と扉が吹き飛び人が飛んできた。

「な、なんだ？」

ドン！という音とともに天井から人が落ちてくる。

「ん？ネ、ネロ！と……………こっちはワンゼだったか？」

扉が吹き飛んだ方を見ると見慣れた男が……………

「サンジ！」

「キラ！お前なにやってんだ？」

「まあ、色々……………。ん？そのはずかしいカツコの人は？」

「えっと……………こいつは……………」

「俺はフランキーってんだ嬢ちゃん。」

「フランキー……………。フランキーだと！？」

「お、落ち着けキラ！」



「な、なんだよ……もしかして金のことか？」

「それだけじゃない……。ウソップのことだ！」

全身から雷が迸り窓ガラスが割れる

「う、ウソップならいるだろ！」

「……え？」

第一車両の扉が開きロビンと変な仮面をしたウソップが現れた。

「ウソップ！よかった！俺達の所に戻ってきたのか！？」

「な、何いつてるんだ君は。私はそげキングだ！」

「はい？」

「キラ……察してやれ。」

ロビンが口を開く

「もう……放っておいて……」

「何？」

「もう！構わないでって言ってるのよ！」

突然ロビンが大声を出す。

「ロビン……」

「この女は死ななければならぬ女だ。」

「……何？」

「この女が死ねば人々が幸せになる・・・この女が死ぬことになつてよかった。」

俺は怒りを堪え逃げるための最善の策を考える

よし・・・これだ・・・

「・・・逃げるぞ！そげキング！煙星だ！サンジ！第3車両を切り離せ！」

「おうー！」

「えっ？お、おう！」

『煙星！』

辺り一面に煙幕が張られる、その間にロビンをそげキングに預ける。

「行け。逃げろ！」

そげキングは頷き走り出す。

『ニコ・ロビンは頂いた！』

そげキングがロビンを連れ逃げる。

「キラ！行くぞ！」

「・・・いや、お前等だけで逃げる。」

「おいおい！何言つてんだ讓ちゃん！」

『いいから・・・行け！』

「ちっ・・・後で助けに来る！死ぬな！」

サンジとフランキーもそげキングの後を追い切り離れた第3車両へ  
死なねえよ……バカヤロウ……

「まったく煙幕とはくだらないマネをしてくれたのう。」

「……で、旋律のキラ。てめえは逃げないのか？」

「もちろん……逃げるさ……でも……」

「てめえらがいるとまたロビンが危険な目に遭うんだろ？ だった  
ら……」

『ここで死んでもらう……』

ルッチを睨みつける。

気迫に押されルッチが2歩3歩と後退する。

「……っ！？ こいつをこの列車に乗せたのは……」

「すまん……失敗だったな。」

「ブルーノ！ カリファ！ あいつらを逃がすな！」

「おう！」

「ええ！」

ブルーノとカリファがカクの声で第3車両へと向かおうとするが

「誰も通さない……」

2人の腕を掴み

『放電!』

「ぐああああああ!!!」

「きゃああああああ!!!」

2人が黒焦げになり床に倒れる。

「さあ・・・次は？」

「ワシじゃ・・・」

背後からカクが蹴りを放つ。

『嵐脚!』

体を捻り高速で回転し嵐脚に蹴りをぶつける。

『剛・旋脚!』

カクの脚が弾き飛ばされバランスを崩す。

「なっ!?!」

バランスを崩しているカクの腹部に今度は回し蹴りを入れた。

ゴキッつという鈍い音とともにカクは壁に叩きつけられる。

「ガハッ・・・」

クリスとルツチを睨みつけ

「さあ・・・あと2人・・・」

「・・・バカな。クリス！なんなんだ！こいつは！」

「お前等（政府）が追い続けた男だよ・・・」

『こいつが・・・死神のユダだ。』

「し、死神のユダ・・・い、生きていたのか・・・」

「クリス・・・言わない約束だぞ・・・」

「クザンと約束したんだっただな・・・ルッチ忘れてくれ。」

「・・・そうか。この男が・・・死神・・・」

「・・・。」

『弱冠15歳にして懸賞金3億を超えた男・・・』

「ククツ・・・おもしろい・・・」

ルッチの姿が豹へと変わっていく・・・

「全力でいかせてもらう・・・」

俺はクスクスと笑い・・・ルッチを見つめる。

「おいで・・・完膚無きまでに叩きのめしてやるよ・・・」

このとき俺は気付いていなかった・・・ブルーノがいないことに・・・

・

そして・・・ブルーノという男の能力に・・・

第七十五話 死神の価値（後書き）

感想・評価お願いします

第七十六話 ドアドア(前書き)

キラ対ルツチ

勝敗は・・・

## 第七十六話 ドアドア

「ルッチ。」

「なんだ？クリス。」

「旋律のキラは……」

「生け捕りにしろ」だろ？」

「いや……殺らなきゃこっちが殺られる。キラを殺すこと……許可するよ。」

「……わかった。」

ルッチ（豹）がこちらに突っ込んでくる。

『指銃！』

俺は自分の指を軽く噛み血を滲ませ

『血の盾』

血液からソウゾウした盾を出現させる。

「無駄だ！そんなもの貫いてやる！」

ガン！という鈍い音が鳴り響く

ルッチの指は盾を貫通しなかった。

「貫く……？無駄だ。俺はソウゾウの能力。俺のソウゾウ次第



でどんなに強固な

物も造り上げることが出来る。」

ソウゾウの果実

能力者 キラ

物質（気体は除く）を武具または体の一部へと変化させることが出来る。

変化後の形・強度・大きさはすべてキラのソウゾウ次第。

（乗り物・生物等のソウゾウは不可能。）

微量の物質でも巨大なものを造ることができる。

---

「くっ！？悪魔の実か!？」

「……………まあ、そういうことにしておくよ。」

「ちっ…………キラの野郎…………《確実にユダの時の記憶が戻りかけてやがる…………》」

「ルッチ…………いつまでも盾に触ってていいのか？」

「……………」

『放電!』

盾へと雷を流す。

「ぐああああああ!?!」

黒焦げになり床へと倒れる。

「さて・・・あとは・・・クリスか。」

「違うぞ。ほら」

クリスが指さす方向をみると・・・

「ロ、ロビン・・・なんで・・・」

「俺は”ドアドアの実”の能力者。大気中にドアを作って移動することができる。」

ブルーノ、こいつ能力者だったのか・・・そこまでは読みきれなかったな・・・

「だから・・・放っておいてっていったじゃない・・・」

「・・・ふざけんな。」

『放っておけるか!仲間だろうが!』

「・・・!?!」

ロビンは口元を押さえ第一車両へと入っていく。

「あいつ・・・」

「ああ。嬢ちゃん言葉に……」

「列車に酔ったのかな？」

フランキーがすごい顔をしてこちらを見ている。

「な、なんだよ……」

「いや……お前アホだろ。」

「そんなバカみたいなカツコしてる奴に言われたくないな。」

「何を！」

「なんだよ！」

フランキーと俺はお互いに顔を見合わせクスクスと笑う。

「フランキー。絶対にロビン助けよう。」

「おう。乗りかかった船だ。任せろ。」

「話中悪いんだが……旋律のキラ……」

ルッチが俺の前に立つ。

「なんだよ……」

「下車していただく。」

「はい？」

「ブルーノ。」

「おう。」

大気中にドアを作り上げ

「まさか!？」

無理矢理ドアに押し込まれ大気中のドアが消える。

「や、やられた・・・油断しすぎだろ・・・俺・・・」

「キ、キラ?」

「えっ・・・サンジ!それに・・・そげキング!」

「キラ・・・お前・・・無事だったのか・・・」

「ああ。まあ、あれくらいじゃやられないさ。・・・ってっお!」  
「?」

サンジが俺に抱きつき頬ずりしてくる・・・

「や、やめろ!気色悪い!」

クソコックを蹴り飛ばし椅子に座る。

「キラ君。なにか作戦はないのかね。」

「さあ・・・どうするか・・・」

色々と考えを巡らす・・・いい案が浮かんでこない・・・

「もう少ししたらナミさん達が来るはずだ。少し待とう。」

「そうだな。もう少ししたら・・・って来るの?」

「ああ、キラは知らないのか。」

「早く言えよ・・・まったく・・・」

ここから先はエニエスロビーか・・・大丈夫かな・・・

俺の不安をよそに背後から列車が向かってくる。

決戦まであと少し・・・

## 第七十六話 ドアドア（後書き）

キラの能力の説明が七十六話にしてやっと出てきました。

感想・評価お願いします。

第七十七話 エニエスロビ―（前書き）

エニエスロビ―突入前

## 第七十七話 エニエスロビー

ルフィたちと合流しエニエスロビーを目指す。

「ごめん・・・ロビンを助けられなかった・・・」

俺は深々とみんなに頭を下げる。

「いいのよこれからみんなで助ければいいんだから。ね？ルフィ？」

「おう。キラが無事でよかった。」

「ルフィ、ナミちゃん。ありがとう。」

「そうだ。みんなロビンを助ける前に聞いて欲しい。」

全員目が俺に集中する。

「どうやらロビンは放っておいてほしいみたいなんだ。」

『何い！っ？』

「まあ、最後まで聞いてくれ。」

「まあ、最後まで聞いてくれ。」

「ロビンはCP9に何か過去の秘密を握られているようなんだ。

だから敵地に行ったからと言って俺たちに身を委ねてくれるかわからない。」

「それでも行くか？ルフィ。」



『当たり前だ!』

「フフツ・・・絶対助けような。」

笑いながらルフィ達を見つめていると

「キラ。ちょっといいか。」

「パウリー。ああ、いいよ。」

パウリーが床にエニエスロビーの地形図を広げた。

「これは・・・」

「前に一度線路の整備でここに来たことがあってな。」

俺は地形図を眺め

「パウリー・・・これって正門から行くしか・・・」

「そうだ。」

「・・・そうか。総力戦になりそうだな。」

「CP9に出くわして勝つことができるのは」

「わかってる。俺たちだけ・・・だろ?」

「悔しいけどな・・・一緒に列車に乗ってきてお前等の強さがわかった。」

「戦力差は?」

「こつちが60数人。敵は2千3千じゃおさまらないはずだ。」

「お前等はこのまま海で5分くらい待ってからロケットマシンで

本島まで

突っ込んでくれ。俺たちがその間に正門と本島前門をこじ開ける。」

「・・・犠牲が出そうだな。」

「いいんだ。出来るだけお前等は無駄な戦いを避けてCP9だけを追ってくれ。」

犠牲は避けられないか・・・いや・・・

「・・・ルフィ。」

「なんだ？キラ」

「ちよつと耳かせ。」

ルフィと俺は少し離れたところへ移動する。

「俺とお前で敵の数を減らそう。」

「ん？どついつことだ？」

「敵の中心に2人で先に突っ込もう。俺は少しでも犠牲を減らしたい。」

「シシシシ！いいぞ！付き合っ！」

「よし！やるぞ！」

前方に正義の門が見えてくる・・・

みんなせつかく色々考えてくれたのにゴメンな・・・

俺とルフィは正門へと飛び移った。

第七十七話 エニエスロビ―（後書き）

感想をお願いします。

第七十八話 エニエスロビー正門（前書き）

エニエスロビー本島前門を目指すルフィとキラ。

突き進めるのか・・・？

## 第七十八話 エニエスロビー正門

「あいつら・・・話聞いてなかったのか？」

「ルフィだけじゃなくキラまで・・・何してんのよ！もう！」

「ナミさん。キラのことだ。何か考えがあるんだろ？」

キラとルフィは正門からエニエスロビーを見渡す。

「・・・結構遠いんだな本島前門。」

「ああ、結構あるな・・・シシシシ！ワクワクするな！」

「無邪気だねえ・・・死ぬかもしれないんだぞ？」

「死なねえよ。海賊王になるまではな。」

顔を見合わせニヤツつと笑う。

『門の上に誰がいるぞ！』

『侵入者だ！打ち落とせ！』

「よし、行くか！」

「おう！」

正門から飛び降り本島前門へと走る。

『貴様ら止まれ！ここがどこだかわかってるのか！』

「死にたくなければ・・・どけ！」

海兵の数は・・・20人くらいか・・・

『お、おい……こいつら……麦わらのルフィと旋律のキラだ  
』！』

『け、懸賞金は……一億と9000万！』

『ゴムゴムの……』

『二ノ型……』

『『旋風鞭！……！』』

『ウゲエーーーーー！！！！』

20人の海兵が宙を舞いゆっくりと落ちてくる。

ルフィが麦わら帽子を拾い上げ埃をほろつ。

俺も乱れた髪を整えゆっくりと本島前門へと進む。

『お、おい……来たぞ……麦わらだ。』

やっぱり見張りはいるよな……さっきよりは多いな……30人  
くらいか。

「すみません。通してください。」

「ルフィ。丁寧に言っただって通してくれるわけないだろ。」

「そつか……じゃあ……」

「ああ。」

『力ずくだ！』

「くっ……と、止めるー！ー！」

海兵がサーベルを振り上げ襲い掛かってくる。

「動きが遅い。」

「……!?!?」

海兵の顔に拳を叩き込む。

ゴキツつと鈍い音とともに後方へと吹き飛んでいく。

「く、クソ！うあああああ！」

「右……袈裟切り……」

「えっ……?」

背後からの斬撃をかわし、上段回し蹴りを顔面に叩き込む。

「は、鼻がああああ!?!?!」

「ほらよ。」

海兵の鼻をつまみ曲げる。

「いってええええええ!!?!?!ってあれ?鼻が戻った!」

「よかったな。それじゃ……すこし眠っててくれ。」

今度は首に手刀を入れ気絶させる。

「ルフィ。そっちは終わったか?」



「おう。終わったぞ。」

「よし・・・じゃあ、本島前門越えますか。」

「シシシシ！行くか！」

キラとルフィは本島前門を軽々と飛び越えていった。

第七十八話 エニエスロビ―正門（後書き）

感想をお願いします。

第七十九話 エニエスロビ―長官室（前書き）

最近短めですいません。

## 第七十九話 エニエスロビー長官室

（エニエスロビー長官室）

リリリリ・・・部屋に電伝虫の音が鳴り響く。

顔にギプスをした男が電伝虫を取る。

「なんだ？」

『ちょ、長官！報告です！』

「どうした？」

『げ、現在の被害状況600です！』

「600・・・衛兵が600人やられたというのか!？」

『は、はい！麦わらのルフィ、旋律のキラ。この2人・・・つ、強すぎます!』

「ほ、本当に600もやられたのか？たかだかネズミ2匹だろ!？」

『えつと・・・正確には・・・8・・・グフツ!？』

「えっ？8人？たった8人の間違いか・・・ちゃんと報告しろ！」

そう言つて電伝虫の受話器を置く。

「8人が、たいしたことないな。どうせ本島を逃げ回ってるんだろ。」

『長官！ルッチ氏の一行が到着いたしました!』

「帰ったか！通せ！」

「はっ！」

ルッチ、カク、カリファ、ブルーノが長官室へと入る。

「よく帰った！長期任務ご苦労だったな。」

『8年前の政府役人暴行事件罪人カティ・フラム。20年前のオハラで起きた

海軍戦艦襲撃事件罪人ニコ・ロビン。連行完了しました。現在扉の向こうに。』

「そうか・・・それじゃあ・・・早速・・・」

『よお！スパングム！元気そうだな！』

ロビンとフランキーを連れニヤニヤしながらクリスが長官室へと入ってきた。

「なんで海軍本部大将の片腕がここにいるんだよ。」

「まあ、いいじゃん。暇つぶしだよ。」

「ちつ・・・あいかわらず食えない奴だ。」

「ヘッヘッヘッ。お前なんか俺のことはわからんよ。」

スパングムはクリスを無視してロビンとフランキーの方に向き直る。

「8年前のあの事故でよく生きていられたなカティフラム。」

「・・・・・・。」

「世界が危険視し、追い求め続けた女。ニコ・ロビン。」  
「……………」

「ククツ……ハハハハ！最高の気分だ！」

（本島）

『お、おい！麦わらのルフィは！？』

『バカ！そんなことより……逃げろ！』

衛兵達の目の前には巨大な鎌を持ちゆっくりと歩いてくる男がいた。

『うわあああああ！に、逃げろー！』

『鎌風！！！』

『ぎゃあああああああ！！！』

大鎌を一振りすると何十人も兵士が吹き飛んでいく。

『な、なんなんだ！？こいつ！？』

『旋律のキラ。こいつも悪魔の実の能力者なのか！？』

屋根の上を飛び回っていたルフィが俺のとなりに着地する。

「キリねえなあ。」

「確かに。だがルフィ後ろ見てみる。」

衛兵達が正門へと走っていく。

「キラ。これってあいつらが・・・」  
「ああ。」

『『来たってことだな!!』』

「じゃあ、船長。もうひと踏ん張りといきますか。」  
「おう!」

俺たちは敵の中心へと突っ込む。

『ゴムゴムの花火!』

『旋風・雷!』

敵を蹴散らし口口ノアたちとの合流を待つ・・・

第七十九話 エニエスロビ―長官室（後書き）

感想をお願いします。



## 第八十話 最低の男

「エニエスロビー長官室」

スパンダムがフランキーの頭を踏みつけ、

「カティフラム。もっと早くお前が設計図を持ってるって知ってるや。」

「こんなに苦労することもなかったのになあ。」

設計図……？

「なあ、スパンダム。カティフラムは一体何の設計図を持ってるんだ？」

「古代兵器プルトンだよ。」

「ふん。よくわからんがすごいものなのか？」

「ああ。とりあえずクリス。お前は黙っててくれるか？」

「ハイハイ。」

クリスは壁によしかかりスパンダムの話の続きを聞く。

「トムの死後……最初は貴様の兄弟子のアイスバーグがプルトンの設計図を

持っているものだと思っていた……。あの野郎は市長・そして世界政府御用達の

大会社を設立しやがった。そのせいで俺たちも下手に手出しできない存在となった。」

「痺れを切らして強攻策に出ようとしたそのときだ！」

「大将青キジより吉報が入った。ニコ・ロビンが海賊船に乗ってウォーターセブンへ

向かっているとな。」

「これで・・・これで古代兵器復活のカギが揃った！そう思った俺は

バスターコール許可を含む全ての状況を作戦に組み込んだ！」

『わかるか！？世界中の風は今俺に向かって吹いている！その気になればどんな大国も

支配できるほどの力が今俺の手中にあるんだ！』

ロビンがスパンダムに質問をする。

「なぜ青キジは、あなたにバスターコールの権限を？」

『この俺に質問をするな！』

スパンダムがロビンを殴り飛ばす。

「いいか！貴様の存在価値など俺が見出してやらなければ”無”に等しい！」

俺に感謝するんだな！」

「……………」

クリスは拳を握り絞める……

「ああ、そういえば……お前を取り返しに来た奴等がいたなあ。

「まさか……!?!」

「どうせ奴等も全員捕まっているところだろう。ちよつどいい！監獄への船を出すところだ！このままインペルダウンへ連行する！」

『な!?!待つて!約束が違つじゃない!』

『私があなた達に協力するかわりに彼らを無事に逃がすと言つたじゃない!』

ロビンが大声で叫ぶ

「何をいきり立ちやがって……ルツチ俺たちの出した条件を言つてみる。」

「ニコ・ロビンを除く7名が無事ウォーターセブンを出航する」と

「ほら……あいつらは無事ウォーターセブンを出航してここへ来たじゃねえか。」

「な!?!そんなこじつけで……」

「どうしようもねえクソだな……仁義の欠片も持つちやいなえ！」

「何だと……?」

スパンダムがゆっくりとロビンとフランキーへと近づく

『黙れ!クズ共!てめえら罪人との約束なんぞ俺たちが守る必要

ねえんだよ!』

2人を激しく踏みつけスパンダムは罵声を浴びせ続ける。

「おい。」

「ああ!?なんだよ!クリス!黙って……!?!」

『大概にしとけよ……てめえ見ると……イライラするんだよ……』

クリスは鋭い目つきでスパンダムを睨みつけている……

スパンダムは後ずさりし、ブルブルと震え尻餅をつく。

「ニコ・ロビン。きっとキラはここまで来る。それまで……耐えるよ。」

「え?」

「ク、クリスてめえ!何言つてやがる!」

無言のままクリスは長官室を出て行った。

〈キラ・ルフィ〉

「ったく……何人いるんだか……」

背後から近寄ってきた衛兵を裏拳で沈めキラは一息つく。

キラねえぞ……あれ……?ルフィは……?

とりあえず先に進みながら衛兵を吹き飛ばす。

ここは・・・？

『旋律のキラだ！いたぞ！裁判所前だ！』

「ちっ！めんどくせえ！」

俺は向かってくる敵を倒し続けた・・・

第八十話 最低の男（後書き）

感想をお願いします。

第八十一話 合流（前書き）

口口ノア達と合流できるか・・・？

## 第八十一話 合流

（裁判所前）

俺が敵を倒し続けていると・・・

「キラ！」

「ロロノア！みんな！遅かったじゃねえか！」

ナミが近ずいてきて頭を叩かれる。

「あんた達が作戦無視して突っ込むからでしょ！」

「ゴメンゴメン。少しでも数減らそうと思つてね。」

「もう！一言言ってくればよかったですよ！あれ？ルフィは？」

「さあ？たぶんCP9の誰かと戦つてんじゃないかな？」

「ああ、はぐれたつてことか・・・」

裁判所前にいた衛兵が俺たちの姿を視界に捉え身構えた。

『おい！麦わらの一味だ！』

『大丈夫！あの重い石扉は開けられねえはずだ！』

「造作もないね。ロロノア斬つちまいな。」

「はいよ。副船長。」

ゾロが大きな石扉を簡単に切り崩す。

「さすが大剣豪になる男は違うねえ。」



「へっ。誉めても何もでねえぞ！」

俺とロロノアが先頭を切って中へと入っていく

裁判所中央には首の3つある男。その両脇には階段がある。

「な、なんだあれ？」

「3つ首の人間って始めて見たな。」

『ここは神聖なる裁きの殿舎！覆すこと叶わぬ……』

「なんか始まったぞ。」

「ロロノア。気にするな無視して進もう。」

フランキー一家の一人が俺たちに声を掛ける。

「おめえらは、とにかく麦わらさんのいる屋上を目指せ！」

俺たちはお前等の後ろを守るからとにかく突き進め！」

「OK。お言葉に甘えさせてもらっよ。」

どうやら両側の階段で屋上へと迎えるようだ。

階段を登り屋上を目指し走り始めたときゾロの病気が発症した。

「キラ！大変だ！」

「どうしたチヨッパー！」

「目を放した隙にゾロがあらぬ方向に！」

「方向音痴とかって問題じゃねえぞ！ロロノア！こっちだ！」

「キラの説明が悪いからだろ！」

「あのなあ！階段って言うてんのに階段じゃない方向に行く奴に  
なんて

どう説明したってダメだろ！」

『裁判長を……』

「ん？」

『シカトするなあ！！！！』

裁判長が階段に飛び移り剣を振り下ろす。

体を少しだけずらして紙一重で斬撃をかわし腹部に拳を叩き込む。

「うぐう……貴様……！これは……大罪だぞ……！」

「大罪……ねえ……」

俺は大鎌を裁判長の首に向け

『裁判長……あんた死神を裁くのかい？』

「む……き、貴様……罪を重ねるか？」

「お前等、先行つてる……こいつ片付けていくわ。」

「ふん！生意気な海賊め……ワシの恐ろしさを見せて……」  
『引け……！！！！』

フランキー一家が裁判長の脚を引っ張り階段から引き摺り下ろす。

「お前等……」

「キラさん！ここは任せて先へ進みな！」

『さあ！ケルベロス！俺たちが相手だ！』

「キラ！ここはあいつらに任せて行くぞ！」

「……………」

俺は階段を飛び降り裁判長の前に立つ。

「なっ！？キラ！あんた何してるのよ！」

「……………」

『キラさん……俺らには任せられないってことかい？』

「バカヤロウ……そんなんじゃねえ……」

「じゃあ!？」

『こいつ一人倒すのに時間なんかいらねえってことだよ。』

ナミの方を見て微笑み

「すぐ追いつく。」

「うん……わかった信じてる。」

「チョッパー。ナミちゃんのこと頼むぞ。」

「うん！わかった。」

2人は階段を登っていく。

「さあ……時間もないみたいだ……始めようか。」

俺は大鎌をブンブンと振り回し切っ先を裁判長の首へと向けた。

第八十一話 合流（後書き）

外出先からの投稿です。

感想お願いします。

## 第八十二話 エニエスロビー 司法の塔

（司法の塔）

「カティフラムとニコ・ロビンをもつ”正義の門”へ!？」

「そうだ!言つとおりにしる!」

「しかし、まだ護送船の準備が・・・」

「いいんだ!門の向こうでいくらでも待つ!」

《クソツ・・・まさか・・・麦わらの一味がここまで・・・》

「焦ってるな。スパンダム。」

「クリス!貴様も早く麦わらの一味を止めに・・・」

「うるせえ・・・俺は俺でやる・・・指図すんじゃねえ。」

スパンダムはクリスに睨まれ息を呑む・・・

「じゃ・・・俺は倒さなきゃいけない男がいるんでこれで失礼。」

クリスが去つていきスパンダムは大きく息を吐く。

「クソツ・・・クリスの野郎・・・」

「ちよ、長官?」

「集める・・・」

「はい?」

「CP9を全員集める！」

「は、はっ！」

スパンダムはフランキーとロビンの方を向き

「さあ、お前等地獄へと早急に旅立とう！海賊達はその後じつくりと追い込んでやる。」

「……………」

『ロビーーーーン！迎えに来たぞーーーー！』

「長官！裁判所の屋上で”麦わら”を被った男が……………」

「ばかな……………」

「ちよ、長官？」

「なぜ…………なぜあそこにブルーノが…………！」

屋上で叫ぶルフィの後ろにはブルーノが倒れている。

「まさか…………負けたのか？CP9で能力者のブルーノが負けたっていいのか!?!」

『うおおおおおおお!?!!』

ルフィが雄叫びを上げるとスパンダムは尻餅をつく

「く、クソツ…………お、おい！ルッチ達を呼べ！全員ここに集める！」

『CP9に麦わらの一味…………完全抹殺指令”を言い渡す!』

「裁判長バスカビルへも伝える！万が一海賊共に・・・」  
『報告いたします！』

「どうした！今は取り込んで・・・」

『バスカビル様が・・・旋律のキラに敗れました！』

「な、なにに！？」

（裁判所内）

「お、おい・・・妻わらさんより強いんじゃないか・・・あの人

・・・」

「ば、バカ言つなよ・・・妻わらさんは一億の賞金首だぞ・・・」

「で、でもよ・・・本当に一瞬でけりついちまったじゃねえか・・・」

「・・・」

フランキー一家の前には気絶し白目をむいた裁判長バスカビルの姿があった。

（屋上）

「ここが屋上。意外と早くついたな。」

「キラ！」

「ルフィ！お前どこ行ってたんだ！？」

「あいつと戦ってた。」

ルフィの指さす先にはブルーノが倒れている。

「へえ・・・強くなったな。」

「俺は元から強いぞ！」

「そうだったな。ゴメンゴメン。」

俺はクスツツと笑い司法の塔を見つめた。

あそこにロビンがいるはずだ・・・そして・・・クリスマスも・・・

司法の塔に行く間違いないと・・・クリスマスと戦うことになる。

待ってるよ・・・ロビン・・・絶対助けるぞ！

ただ一つ問題がある・・・跳ね橋が途中までしか下りていない・・・

裁判長バスカビルが倒れる前に”迫撃砲”とやらで跳ね橋を止めた。

とりあえず屋上には来たが・・・どうする・・・？



第八十二話 エニエスロピ―司法の塔（後書き）

感想をお願いします。

## 第八十三話 生と死

（司法の塔）

「ニコ・ロビン。お前を今から麦わら達に会わせてやる。」

フランキーがロビンへ耳打ちする。

「私は……」

『何迷ってたんだ！お前が目を逸らしてたら。あいつらお前を救えねえんだぞ！』

「で、でも……」

「政府との協定はあのバカ長官に破られてんだ。大人しく捕まってもこの先誰が

助かるわけでもねえ……あいつらの助けに応じてここを脱出するしかねえはずだ！」

「……でも、どうするの？」

「任せとけ……いくぜ！」

フランキーの尻がどんと膨らんでいく。

『行くぜ！ニコ・ロビン！”風来噴射”……！』

ガシャーン！と大きな音を立てフランキーが俺たちから見える位置へと吹き飛んでくる。

「ルフィ、あそこ見てみる。」

「おお！ロビン！」

「ルフィ、キラ……どうして……」

「よし。キラ。俺向こうまで飛んでみる！」

「ああ。行って来い。」

『ゴムゴムの……』

「待って！」

ロビンがルフィを制止する。

『何度も言ったわ……私はあなた達の下へは戻らない！』

「ロビン……。」

『帰って！私はもうあなた達の顔も見たくないの！』

「……。」

『私はもう死にたいのよ！』

「それ……本気で言ってるのか？」

おもわず俺は声を出す。

『そうよ！だから……もう放っておいて！』

『そうかよ……じゃあ、俺がお前を殺してやる！』

「キラ！お前何言ってるんだ！」

「あつはつはつは！見ろ！麦わらの一味が内部崩壊を始めたぞ！」

『殺してやるから……俺たちの所に戻って来い！』

「!?!?」

『そうだぞロビン！死にてえとか言うならよ！俺たちのそばで言え！』

「ルフィ……キラ……」

ゾロがナミがチョッパーが……次々と仲間達が集まる。

「ハーツハハハハ！海賊共よく聞け！」

「誰だあいつ？」

「さあ？」

キラとサンジが顔を見合わせ首を傾げた。

『今のこの俺にはバスターコールをかける権限がある！』

「バスターコール……あのオハラを消し去ったというあれか？」

「やめてキラ！聞きたくない！」

ロビンが叫ぶがスパンダムが話を続ける。

「ほう。よく知ってるな。旋律のキラ。」

「まあな……あ、あんたさ……」

キラはスパンダムを指さす。

『押したらその時は……命亡き者と思え……』

スパンダムを睨みつけ威圧する。

「ば、バカめ……そ、そんな脅しに……」

《あ、足が震える……？な、なんだあの男の威圧感は……》

「バーカ。脅しじゃねえよ。」

クリスがスパンドムの前に姿を現す。

「ど、どうということだ！」

「ウチの大将青キジとキラが戦ったんだが、正直どっちが勝つてもおかしくなかったぜ。」

「た、大将青キジと互角！？あの男が!？」

スパンドムが驚きの表情でキラを見つめる。

「長官。」

ルツチが口を開き

「あの男……旋律のキラは……過去に死神のユダと呼ばれていた男です。」

真実を告げた。

「し、死神のユダ!?せ、政府が追い続けた男か!？」

「あっちゃんルツチ。それは言わない約束だぞ。」

「いずれはわかることだクリス。」

「バスターコールを……」

”バスターコール”という言葉聞いてから黙っていたロビンが口を開く。

「バスターコールをかければエニエスロビーと一緒にあなた達も吹き飛ばわよ。」

「何いつてんだ貴様は！見方の攻撃で消されてたまるか！」

「20年前・・・私から全てを奪った。大勢の人達の人生を狂わせた。”バスターコール”」

ロビンが涙ぐみながらも話を続ける。

「私と一緒にいたら・・・敵が・・・”世界”と”闇”があなた達にも襲い掛かる！」

「聞きたくない・・・」

「キラ？」

キラは下を向きロビンの言葉を聞き流す。

ロビンはなお話を続ける。

「これが永遠に続けばあなた達も嫌になる！」

「いつか私を重荷に思い私を裏切つて捨てるに決まってる！」

「裏切られるのが怖かった！だから助けに来て欲しくなかった！」

「！！」

「ワハハハハハハ！」

「！！」

スパンダムが笑い出す。

「成る程な！正論だ！お前を抱えて邪魔だとおもわねえバカはいねえよ！」

拳を握り締め雷が全身を迸る。

「あの象徴を見る！あのマークは四つの海と偉大なる航路にある！」

司法の塔の天辺にある旗を指差しスパンダムは話続ける。

「170国以上の加盟国の結束を示す！これが世界だ！この女がどれほど

巨大な組織に追われてきたかお前等がどれほどちっぽけな存在かわかったか！」

「ロビンの敵はわかった！そげキング。」

ルフィがそげキングを呼び旗を指差す。

「あの旗、撃ちぬけ。」

「了解！」

『必殺”火の鳥星”！！』

そげキングの放った火の鳥はまっすぐ旗へと飛びそして・・・打ち抜く・・・

「あゝあ・・・やっちゃった・・・」

俺はクスクスと笑いながら頭を抱える。

衛兵達が騒ぎ出す。

それもそのはず旗への攻撃はつまり・・・

『“世界政府”に宣戦布告しやがったあああああ！！！！！！！』

スパングラムもこちらへ向かって怒鳴る

『正気か！貴様等！全世界を敵に回して生きてられると思つなよ  
』！』

ルフィは大きく息を吸い込み

『望むところだあああああ！！！！』

声はエニエスロビーへ響き渡る。

俺はロビンの方を見てやさしく微笑み諭すように語りかける。

『ロビン。死ぬなんていうなよ。俺は君に生きてて欲しい。生きて  
たいって言うてくれ。』

ロビンは涙を流し俺の声に答えてくれた。

『生きたい！！！！私も一緒に海へ連れてって！！！！』

キラはニコツと笑イルフィへ声を掛ける。



「船長！助けていいってよ！」

「おう！よし・・・お前等！」

『行くぞ！！！！』

フランキーがプルトンの設計図を燃やしたり子分達と熱い再会をし  
てることなど

「どうでもいい！」

『おい！！』と全員に突っ込まれる。

だが本当にどうでもいい！

全力で助ける！

俺は跳ね橋が出来るのを待たずに司法の塔へと飛び移る。

「なっ！？化物かあいつ！？」

「さあ・・・シヨータイムだ！」

「ひ、ひいいいいいい！！？死神が来る！？？」

ロビンを目指し走り始めた、

第八十三話 生と死（後書き）

感想をお願いします。

正直最後は強引な感じで進みました。

第八十四話 キラvsクリス（前書き）

ロビンを救出できるか？

## 第八十四話 キラvsクリス

司法の塔へと飛び移り上の階を目指す。

上にはロビンがいるはずだ。

とりあえず上へ行かなければ・・・正義の門を越えられては救出が難しくなる！

「チャパパパパ！」

なんか気色悪い笑い声？が聞こえた気がするが・・・

「もうニコ・ロビンはいないぞ。」

キラが声のする方を振り向くと・・・人間？かどうかわからない奴がいる。

「もう正義の門へと向かったってことか？」

「そうだ。ルッチと長官が連れて行った。」

「あんたは？CP9か？」

「CP9”音なしのフクロウ”だ。チャパパ」

あのチャパってやつどうにかならないかな・・・

すげえ・・・耳障りなんだが・・・

「旋律のキラ。貴様の道力測らせてもらおう。チャパパ」

「道力？」

「武器を持った衛兵一人の強さが10道力だ。チャパパ」

「へえ……」

「行くぞ……六式遊戯、てあわせ手合」

「上等！」

全身を捻り全体重を拳に乗せフクロウを殴り飛ばす。

フクロウは壁に叩きつけられ床に落ちる。

《こ、この男……ルツチより上！？一瞬気を失いかけた。》

「どうだった？フクロウ。」

「ぬ……き、貴様の道力は……」

「キラ！」

「ルファイ！みんな！遅かったな。」

『『おめえが早すぎんだよ！』』そげキングとサンジに突っ込まれる。

「むっ……全員揃ってしまった。チャパパ」

フクロウが俺たちにカギを見せる。

『ニコ・ロビンを捕らえている海楼石の手錠の鍵だ。お前達がニコ・ロビンを

救い出したとしても海楼石はダイヤのように硬いので手錠は永遠に外れることはない。』

「じゃあ、よこせ！」

「慌てるな。まだこの鍵が本物だとも言っていないぞ。」

「!?!」

「俺を含めこの塔にはCP9が5人とクリスがいる。それぞれ一  
つ鍵を持っている。」

「なるほど・・・結局の所全員倒さなきゃダメってことか・・・」  
「くだらねえ時間稼ぎを・・・そうこうしているうちにロビンち  
やんを正義の門へ

連行しようとしている訳か・・・」

「でも、ロビンの方がことを急ぐわ！まずロビンを奪い返して鍵  
はその後でいい！」

あんなの放っておいて先に行くわよ。」

「チャパパパ。いいのか？そんなことしたら・・・こんな鍵なん  
か海に捨てちゃうぞ」

「にやろっ・・・」

「俺たちはチャンスをあけてるのだ！じゃあな」

「待て！このやろっ！」

飛び去るフクロウをルフィが追おうとする。

「ルフィ！追うな！」

キラの一声でルフィが止まる。

全員を見回しキラは口を開く。

「全員動きを確認しよう。」

「キラ！ハトは俺がやる！」

「ルッチってのは確かロビンちゃんと一緒にいるはずだ。ルフィ

を先にいかせよう。」

「よし、じゃあルフィ以外はCP9から5本の鍵を奪った後ルフィを追え。」

「クリスつて奴が持つ鍵は・・・？」

「俺がクリスを倒す。」

全員が目がキラへと集中する。

「いいか・・・負けは時間のロス。だからといって無理するな。危なくなったら・・・」

『俺を呼べ！今回ばかりは俺も全力で行く！』

みんながクスクスと笑い出す。

「お前等・・・緊張感ねえなあ・・・」

「お前が珍しくめんどくさからないからさ。」

「そうよ。いつも人任せなキラが珍しいわね。」

「うるせえ・・・今回はやらなきゃダメだと思ったただけ・・・」

「キラ。俺たちは死んでも勝つ。」

「ロロノア・・・死んだら・・・勝てないか・・・？」

「・・・。」

「まあ、いいや。お前等・・・行くぞ！」

『『おつー！』』

一斉に階段を駆け上がった。いった。

CP9が持っている鍵を手に入れるため途中で全員がバラバラの方へと進んでいく。

キラも階段を突き進む。あの男と決着をつけるために。

階段を登りきり部屋のドアを開けると

「待ってたぜキラ！」

「クリス。」

「今回は、お互い手加減なしだよな？」

「そうだな。俺は急いでるんだ。すぐ決着つけさせてもらっぞ。」

「おもしれえ！まさか死神と全力で戦えるときが来るとはな！」

『行くぞ！』

大鎌を出現させクリスの首を刎ね飛ばすが  
斬ったクリスは砕け散りガラスの破片と化する。

背後からクリスの声が聞こえる。

「キラ。それは鏡像だ。」

「ちっ！」

振り向きざま鎌を振り切るが・・・手ごたえがない。

こいつも鏡像か！？

「わかつたるキラ。俺を斬ることはおろか・・・」



攻撃を当てることすら不可能なんだよ。」

「うるせえ・・・不可能だろうなんだろうと・・・」

『勝たなきゃダメなんだよ!』

「・・・・。」

クリスがスツと腕を上げるとさきほど割れたガラスの破片がクリスの手のひらへと集まる。

『鏡雨』

さつき割ったガラスの破片が宙へ舞いキラ目掛けて飛んでいく。

鎌を振り回し風圧で破片を吹き飛ばす。

「勝負つかないそうだな。」

「・・・・・・どうかな?」

「何?」

「お前が鏡像を作るよりも早く攻撃すれば問題ないだろ?」

「は!? お前・・・そんなこと可能だともってるのか?」

「知ってるかクリス。稲妻って光の速度なんだ。」

「何いってんだ?」

ゆっくりとクリスへ右手を向ける。

そして・・・

『3000ボルト稲妻!!!!』

「があああああああ!!!!」

キラの手から放たれた稲妻はクリスを捉えた。

まさか、いくら練習してもうまくいかなかったものが・・・

本番でうまくいくとはな・・・

倒れているクリスへと近づき落ちていた鍵を拾い上げる。

「クリス。悪いな。」

「バカヤロウ・・・謝るんじゃないねえ・・・」

クリスが寝そべったままニヤリと笑い。

「絶対助けるよ。」

「言われなくてもわかってるよ。じゃあ、また会おう。」

キラは部屋を飛び出し走っていく。

「ったく・・・あの野郎。敵に向かって「また会おう」は、ねえだろ。」

クリスはクスクス笑いながらタバコを取り出し口に啣える。

手がブルブルと震えている・・・死神と対峙した恐怖なのかそれとも雷のせいなのか

色々なことを考えながらクリスは司法の塔を後にした・・・

第八十四話 キラvsクリス（後書き）

感想お願いします

第八十五話 アニマルズ（前書き）

クリスの次は・・・

## 第八十五話 アニマルズ

鍵を手に入れロビンのもとへと急ぐ

だいぶ時間がかかっちゃまったか・・・

『キラーーーーー!!!』

誰かが俺の名前を呼んでる。

”あの時” ああ言ったからには助けなきゃダメだよな。

さっきの声はそげキングか。

キラは声のするほうへと向かう。

そこにはキリンと狼に追われるゾロとそげキングの姿があった。

ゾロとそげキングが手錠で繋がっている・・・なぜそうなった・・・

とりあえず並走しながらそげキングの話を聞く

「呼んだか？そげキング。」

「おお！キラ君！2番の鍵を持ってないか？」

「えっ？なんだって？聞こえないぞ？」

「だ・か・ら！2番の鍵！手錠外すのに必要なんだよ！」

「はい？」

走りながら話していて何を言っているのか聞き取りにくい。

仕方ない・・・とりあえず・・・

「おい、キリンに狼。俺が相手してやるよ。」

「キラが相手か・・・ジャブラ気をつけるんじゃ。奴は強いぞ。」

「なんだカク。あんな優男に負けたのか。」

カク・・・？このキリン・・・カクなんだ・・・。

カクはどうやら動物系悪魔の実を食べたらしい。

でもキリンか。キリンの悪魔の実もあるんだ。おもしれえ。

「よしカク！てめえこいつに負けたんだろ？俺がこいつの相手してやるよ。」

「何を言う！奴の戦い方がわかっているワシが戦う！」

なんだ・・・？ケンカか？

「おめえじゃ勝てねえって言うから相手するんじゃねえか！」

「ワシで勝てないんだからお前が勝てるわけないじゃろ！」

『何だと！』

『本当のことじゃろ！』

はあ・・・まったく付き合ってらんねえわ・・・

「なあ、お2人さん。」

『何だ！』

狼とキリンに見つめられる。こんな状況滅多にないぞ。

「2人でかかって来いよ。勝つのは俺だから。」

『『なんて生意気な野郎だ!』』

「仕方ない!なめられたままじゃ気に食わんしろう!今は休戦じや!」

「おう!あの綺麗な顔をグシャグシャにしてやるぜ!」

2人がこちらへ向かってくる。

「さあ・・・来いよ・・・アニマルズ!」

『鼻銃!』

『重歩狼!』

ジャブラの拳よりも早くキリン状態のカクの鼻が岩へ突き刺さる。

カクの首を掴みジャブラの拳に叩きつけた。

「グフツ!何するんじゃ!ジャブラ!」

「今のは仕方ねえだろ!」

「拳を止められたはずじゃ!」

「違う!あいつは俺の拳をギリギリまで見極めてからお前をぶつけてきたんだよ!」

キラには見えていた。彼等の筋肉の動き一つ一つが。



今どこに力が入っていて次に何をしようとしているのか……

「仲間割れはその辺にしとけよ。今2人とも楽にしてやる。」

「くっ……」

「さすがは元3億越えの賞金首ってわけだ……。」

手の平に雷を溜める。

さて……もうクリスとの戦いでコツは掴んだ。

次は一発デカイの行って見ますか……

キラがニヤニヤと次の手を考えていると放送が入る。

『バスターコールをかけちまったあー！！！！！』

この声は……バカ長官か……？

余計なことが増えやがった……急がなきゃ行けないな。

ゾロが腕にウソップ持ちながら

「キラ。あとは俺に任せてロビンを追え！」

「ロロノア……あのなあ……」

「き、キラ君！いいから急いでロビン君を！」

「そげキング……わかった！任せるぞ！」

その場を後にしてロビンの元へと急ぐ。

第八十六話 巨大トナカイ（前書き）

ロビンの元へと急ぐが・・・

## 第八十六話 巨大トナカイ

ロビンは、まだ正義の門くぐってないよな。

通路を走り、階段を登り、少し休み。

って……うおい！俺！休んでる場合か！

自分に喝を入れ走り続ける。

『ブオオオオオオ！』

雄叫び？まだCP9には動物がいるってことか？

などと考えながら走っていると……

『ブオオオオオ！』

「……………」

目の前にチョッパーと似たような帽子を被った生き物が現れる。

トナカイのような角にあの帽子……まさか！

キラは巨大生物へと叫ぶ

『お前！まさかチョッパーなのか！』

『ブオオオオオオ！』

今のは……返事なんだよな……？

とりあえず・・・助けなければ！

「今元に戻してって・・・うお！」

巨大な拳が振り下ろされ地面が碎ける。

『ブオオオオオ！』

キラを踏みつけようと足を振り上げた・・・この男がそれを見逃すはずはない。

振り上げた足とは逆の軸足を蹴り上げチョッパーを転倒させる。

だがキラは気付いた・・・

「で・・・この後・・・どうすりゃいいんだ・・・？」

『ブオオオオオオオ！』

起き上がり巨大な拳を振り回す。

キラにとってはチョッパーの攻撃を避けるのは造作もなかった。

だが、どうしていいものなのか・・・？

大鎌で傷を負わせるわけにもいかず、雷を浴びせるわけにもいかない。

避けることしか出来ない俺にナミの声が聞こえた。

「海に落とすのよ！キラ！」

海に落とす・・・そうか！チョッパーは・・・

「OK！了解した！」

チョッパーが再び踏みつけようと足を上げた瞬間

軸足へと払い蹴りを食らわせ転倒させる。

フランキーがキラの視界へと入る。

「フランキー！そこ邪魔だ！こいつをブン投げる！」

「はっ！？お前正気か！？」

巨大な足を掴み・・・

『いいから・・・どけえー！』

下半身の力を上半身へと伝える・・・体に捻りを加え・・・そして・・・

『今元に戻してやるぞチョッパー！！』

フォン！という音とともにチョッパーが飛んでいく。

『ブオオオオオオオ・・・』

「・・・やべえ。投げすぎた・・・。」

『何してんだお前は！！！！』

ナミとフランキーに突っ込まれる・・・確かに俺が悪いが・・・

「力加減ができなくて・・・」

「はぁ・・・仕方ねえ・・・俺がトナカイ拾ってくるからお前は鍵もって先に行け！」

フランキーがキラに鍵を投げる。

鍵を受け取り走り出す。

「フランキー・・・すまない！」

「おう！いいってことよ！俺も後で行く！」

「ああ！わかった！」

また救出が遅れてる・・・急げ！

第八十七話 雷神（前書き）

スパンダムに制裁を・・・

## 第八十七話 雷神

クソッ！正義の門に行くにはどうしたらいい！

何度も通った道を行ったり来たりと一向に先へ進む気配がないキラ。

「だあー！どうやって行けばいいんだよ！」

「おーい！髪の毛長い兄ちゃん！」

あれは・・・たしか・・・チムニーちゃん！？

キラはチムニーへと駆け寄り

「こんな所で何してるんだ！危ないじゃないか！」

「大丈夫だよ。ここで正義の門の通路の案内役してるの！」

「そつか・・・って正義の門への通路わかるのかい！？」

「うん。あつちだよ！」

「ありがとう！」

チムニーの指差す方向へと走る。

ルフィはきつとルッチと戦ってるはずだ・・・勝てるのか・・・？

ルッチは強い。戦ってみて俺はあいつの強さはわかってる。

通路を突き進むと開けた場所に出た。



「キラ！」

「ルフィ！ やつと追いついた。」

「ロビンは！？」

「あの扉の向こうだ！」

ルフィが言う”あの扉”とはルッチの後ろにある正義の門へと続く扉。

「ハトの奴は俺が抑えるから……。キラ、ロビンを助けに行ってくれ！」

「OK。」

猛然とルッチへとルフィが突っ込むが

『指銃”黄蓮”』

ルフィが吹っ飛ばされるが俺は扉のみを指し走る。

「行かせると思っか？ 死神。」

「ああ。逃げるだけなら造作もないことだ。」

ルッチとキラはお互いにクスツツと笑い……

『指銃！』

先にルッチが仕掛けるが避けるだけというのはいくら相手がルッチだとしても

キラにとってはあまりにも単純で簡単だった。

『縮地』

ルツチの指銃をかわし扉の前へとたどり着く。

「Good Bye！ルツチ！」

「チツ！」

「キラ！ロビンを頼むぞ！」

ドアを開け階段を駆け上がる。

なんか・・・俺・・・走ってばかり・・・

自分で自分を誉めてやりたいよ！

キラが必死に走っているその頃・・・

ためらいの橋最後尾ではロビンをインペルダウンへ護送する準備も  
整い

後はスパンダムがロビンを連れてくるのを待つのみとなっていた。

スパンダムは笑う。勝利を確信した笑みを浮かべる。

もしも誰かがロビンを追って階段を登ってきたならばセットしてあ  
る地雷で

階段ごと吹き飛ばし仕組みとなっていたのだ。

だが・・・この男に地雷が読めていたのだろうか・・・？

読めるはずがない・・・爆発音とともに階段が爆発する。

キラが海へと落ちていく・・・

『キラ！キラー！いやあああああ！』

ロビンが橋から身を乗り出し海に落ちたキラに叫ぶ。

『助けるって・・・助けるって言ったじゃない！』

叫び続けるロビンはキラのことを思っただけの涙なのか・・・

これから訪れる死を恐れた涙なのか・・・

きっと・・・どちらも正しいのかもしれない。

死は誰もが怖い。死が怖くない人間など存在しないのだから・・・

死と同じく・・・友・仲間が傷つく姿も・・・悲しい・・・

「アハハハハ！やった！やったぞ！死神が落ちた！」

ロビンはスパンダムを睨みつける。

この男に人生を狂わされただけでなく・・・仲間まで・・・

悔しくて苦しくて・・・ただただ・・・泣くしかなかった・・・

「さあ！行くぞ！ニコ・ロビン！この一歩こそって……ええええええええええ！？」

「き、キラ……よかった……」

スパンダムとロビンの前には死神が立っていた。

ロビンを殺しに来たのではない……

キラはスパンダムに指を差す。

「さあ……地獄に連れてってやるよ……スパンダム！」

「ひ、ヒイイイイイイイイ！」

『てめえのような下衆野郎には手加減なんていらねえだろ！！』

『ま、待て！ゆるし……！？』

ゆっくりと上空に向かい手を上げるキラの後ろに

大きな槌を持った雷神の姿が現れる……

『2億ボルト……雷神槌！！！！』  
トール・ハンマー

キラの手が振り下ろされると同時に雷神の槌がスパンダム目掛けて振り下ろされた。

『ギヤアアアアアアア！！！！！！！！！！』

轟音とともにスパンダムは倒れる。

『今回、お前を裁いたのは雷神だったな……もし、裁いたのが死神だったら……』

お前・・・死んでたぞ？』

ロビンへと近づき微笑む。

「ゴメン。ちょっと遅れたかな？」

「ふふっ・・・」

ロビン救出は成功した・・・後はルフィが勝って・・・逃げるだけだ！

第八十七話 雷神（後書き）

自分的にはこの99部は中々よく出来たかな？と思ってます。

感想お願いします。

第八十八話 バスターコール（前書き）

ロビンの救出は完了した。

だが恐れていたことが起こってしまった・・・

## 第八十八話 バスターコール

ロビンの救出は完了。あとは手錠をはずせば……

「キラ！危ない！」

「チツ！」

ロビンを奪い返そうと海兵達が銃口をキラへと向け……何十発もの銃弾が放たれる。

瞬時に大鎌を造りだし銃弾に向け一振りした。

発砲したすべての銃弾が地面に転がる。

海兵達がざわめき、キラを驚きの表情で見つめた。

司法の塔のてっぺんにそげキングが立ちキラに新兵器カブトで照準を合わせ

『キラ君！受け取れ！』

そげキングが残りの手錠の鍵をキラに向けて狙撃する。

「距離感バツチリだな。さすが狙撃の王様。」

キラの手元に鍵が落ちる。

合計6本の鍵が手元に揃いひとつひとつ鍵をためす。



「外れた！」

正解の鍵を使ってロビンの手錠を外す。

ロビンがキラへと抱きつく。

「ありが……」

「ありがとう」は生きてエニエスロビーを出てからしよう。ロ  
ビン。」

「ええ。」

軍艦からの砲撃が始まった。

「……この音はまさか!？」

「いよいよ始まったか……」

「いよいよ”バスターコール”をかけたことによる砲撃が始まった。

急いでここから去らければ爆撃に巻き込まれてしまう。

キラが脱出ルートを探しているとフランキーがためらいの橋に現れる。

「フランキー! 脱出のルートを探してくれ！」

「おう! まかせろ！」

「そげキング、ゾロ、サンジ! 脱出ルートはこっちで用意する! とりあえず、ためらいの橋まで来てくれ！」

仲間たちへこちらに来るようには伝えた。後は・・・脱出ルートか・

フランキーとキラは脱出ルートがないか見回す。

ためらいの橋の最後尾に護送船が見える・・・

「フランキー。」

「ああ。キラ。おめえの言いたいことはわかってる。」

『『あの船頂くか!』』

キラは護送船目指し歩き出す。

海兵達が銃口をキラへと向けるが・・・

『六輪咲き(セイスフルール)！』

ロビンが海兵の銃を叩き落す。

銃を叩き落された海兵をフランキーが次々に殴り飛ばしていく。

キラは悠々と橋の真ん中を歩き護送船へと向かっていく。

「お、おい！キラ！待て！」

フランキーがキラを呼び止め。霧の向こうを指差す。

キラは目を凝らし霧の向こうを見つめる・・・

あれは……いよいよ……本格的に来るか……

軍艦の艦隊がこちらに向かってくる。

ロビンが膝をつき震えている。

「怖いのか？ロビン。」

キラの問いかけにも答えられない。

”過去の記憶”が彼女を縛り付けているのだろう。

彼女を救う方法は一つ……

「フランキー。ロビンを任せた。」

「お、おう……任せたっておめえ……どこ行く気だ？」

キラは海軍艦隊を見つめ……

「……沈めてくるよ。」

「な！？お前！正気か！？」

フランキーとロビンへ笑顔を見せ。そして……跳躍する。

（海軍船）

「た、大佐！せ、旋律のキラがこちらに向かってきます！」

「ふん！バカな奴だ！撃ち落とせ！」

大砲がキラに向けられるが空中では避けることはできない。

『撃て!』

掛け声と同時に砲弾が放たれるはずだったが

大砲は真っ二つに切り裂かれていた。

キラは甲板へと着地し大佐へ鎌を向ける。

「殺しはしない・・・ただ・・・沈めさせてもらっぞ。」

第八十八話 バスターコール（後書き）

感想をお願いします。

第八十九話 バスターコール 2 (前書き)

バスターコールを止められるか？

## 第八十九話 バスターコール 2

キラが飛び移った大型軍艦には海兵1000人が乗船している。

”バスターコール”により召集される大型軍艦は10隻。

1隻が1000人なので10隻で10000人の海兵が乗船している。

それに海軍本部中將が5人。

「ちつ……さすがに……多いな……」

キラは辺りを見渡し舌打ちををする。

大鎌で軍艦を破壊すればいいのかもしれないが……

振り切る前に撃ち殺される可能性がある。

「ちよつと……安易だったかな？」

大佐の命令で一斉に海兵が襲い掛かってくる。

向かってくる海兵を大鎌を振り回し次々に吹き飛ばす。

軍刀で防ごうとする兵もいたが軍刀ごと吹き飛ばされてしまう。

『……待て！接近戦ではダメだ！銃を持って！』

海兵達は統率の取れた動きでキラとの距離を取り銃を構える。

キラは臆することなく海兵の中へと飛び込んでいく。

海兵たちもキラの動きについてこれず発砲することができない。

何度も海兵たちの間を走り回り、何百人もの海兵が薙ぎ倒されていく。

キラにとって敵が多いことは不利ではない。

武器が伸縮自在な分まとめて海兵を倒すことも出来れば武器が邪魔となり移動が困難になることもない。

「お、おのれ・・・旋律のキラ！」

大佐がキラへと向かって行く。

キラは大佐の肩を踏み台にしマストへと飛び移り

今度は違う大型軍艦へと飛び移る。

「人を・・・バカにしてるのかあの男は！」

「た、大佐！」

「何だ！・・・な！？」



軍艦へと取り付けられていた重火器すべてが真つ二つになっている。

キラは海兵の間を縫って進みそして重火器を破壊していた。

倒された海兵たちはすべて気絶している・・・目的は最初から重火器。

”殺しはしない”キラの言葉どおりだった。

ただ”沈める”ことはしなかった。無理だったのか、それとも慈悲なのか・・・

それは本人でなければわからないことであった。

第八十九話 バスターコール 2 (後書き)

すいません。短いです。

感想お願いします。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第四話」(前書き)

ロベルト編。第四話です。

## サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第四話」～

ここはウィスキーピーク賞金稼ぎの町。

過去に麦わらの一味はここでBWと戦闘を繰り広げ、キラは昔の友人の

”ルイン”大将キリクと戦った場所。

～ロベルトside～

ロバーツの元にロベルトが身を置いてから2ヶ月が経とうとしていた。

ロベルトは2ヶ月の間にたくさんの患者を見てきた。

最初はロバーツの治療をみているだけだったが徐々にロベルトにも患者を預けるようになった。

初めての患者の時はどうしていいかもわからず、ローズに怒られたりもした。

軽症患者や重症患者。治せた人間もいたが手遅れになり死んでしまった人もいる。

患者を死なせてしまった時は自分の無力差を痛感した。

リリには何度も励まされ。ロバーツには医術を教えてもらった。

ローズには・・・怒られてばかりだった。

経験を積み医術も上達してきた。

今日も患者を診断し船で休んでいるときだった・・・ソニック号の電伝虫が鳴り響く。

ナース服姿のローズがバタバタと電伝虫へと走っていき受話器を取る。

「はい。こちらソニック号です。」

「もしもし！すみません！ロバーツDrは、いらっしゃいますか！？」

「ロバーツは診療中ですが・・・どういったご用件ですか？」

丁寧な電話対応をするローズ・・・いつもの姿とは違うな・・・などとロベルトが考えていると、ローズが鋭い視線で睨みつけている。

あの女・・・何故俺の考えが・・・

『あ、あの！つ、妻が！赤ちゃんが！』

「落ち着いてください。赤ん坊が生まれそうなんですわね？」

『そ、そうなんです！』

「場所はどちらです？」

『う、ウイスキーピークの港からすぐの家です！』

「わかりました。出来るだけ急いで向かいます。」

そう言っただけこちらを見るローズ。

今はウィスキーピークの裏の入り江に停泊していたから  
すぐ駆けつけることはできるが……

「ローズ……たしか港の方は……」

「ええ、海軍がいたはずね。」

BWの残党がいるかもしれないということで海軍がウィスキーピークの港に  
停泊していた。

ロベルトとローズは顔を見合わせたため息をつく。

あの男なら……ロバーツなら海軍がいようが海王類がいようが……

『患者の為なら死んだってかまわねえ！行くぞ！』というだろう……

船室のドアが開きロバーツが顔を出す。

シャワーを浴びていたようでバスタオルで頭を拭きながら出てきた。

「ふう〜今日も疲れたなロベルト。」

「あ、ああ。そうだなDr。」

ロベルトは医術を教えるもらうようになってからロバーツのことを

”Dr”と呼んでいた。

「ん？ローズ。電伝虫の受話器上がってるぞ。」

「げっ！」

「”げっ”ってなんだ？」

ロバーツがローズへと詰め寄り睨みつける。

「さては・・・患者からの連絡を俺に伝えないとかそんなことじゃないだろうな。」

この男の直感って・・・すごいな・・・

ロベルトは関心し思わず頷いてしまう。

「こ、コラ！ロベルト！頷くなってば！」

「あっ・・・悪い・・・」

「お前等・・・話聞かせる・・・」

ロベルトとローズが後ずさりし逃げ出そうとしたときナース服姿のリリが船へと上がってくる。

リリの着ている子供用ナース服はローズの手作りだ。

リリはロベルトが医者として頑張るなら「私は看護婦さんになる！」とローズと共に

ロベルトとロバーツの治療を手伝っていた。

ローズ曰く、リリはロベルトと違ってセンスがいいらしい。

それに・・・「かわいい看護婦さんになるわね!」ということだそ  
うだ。

リリは患者のアフターフォローが終わり戻ってきた所のようなのだ。

「ロベルト。どうしたの?」

「り、リリ・・・」

ロバーツが後ろで叫んでいる。

「リリ!そいつらを捕まえる!」

「えっ?あ、うん!」

リリもすっかりロバーツに懐いた。

海賊は今でも嫌いらしいが”ロバーツは別っ!”ということらしい。

だが今は懐いたことは失敗だな・・・

リリが道を塞ぎロベルトとローズの行く手を阻む。

大きな鷲がリリの隣に降り立つ。

鷲は姿を変えロバーツの姿に戻る。

「さあ・・・話・・・聞かせてもらおうか!」



ロベルトとローズは諦めて先ほどの電話の内容を話すことにした。

サイドストーリー ～ロベルト医者への道「第四話」(後書き)

久しぶりのロベルト編です。

本編ばかり書いていたので久しぶりに書きたくなりました。

感想おねがいします

第九十話 脱出(前書き)

あとは逃げるだけだが・・・

## 第九十話 脱出

2隻目の軍艦に飛び移りキラは一度橋の上に目をやる。

みんなは無事なんだろうか・・・

どうやら麦わらの一味はルフィ以外全員無事だが

橋の上で軍艦から攻撃を受けているようで凌ぐのがやっとといったところだろう。

脱出の準備は整ってるぞ・・・ルフィまだか・・・

「キラ！助けて！」

ナミがキラを呼んでいる。

キラはナミの方を見て頷き橋に飛び移ろうとした・・・

その時視界に人影が入り込んでくる。

『月歩！』

視界に入り込んできたのは海軍本部中将モモンガがだった。

この男も”六式”使いか？

モモンガの斬撃を空中で受け止めるが軍艦のデッキへと叩きつけられる。

「いつまでも好き勝手やらせると思ったのか？」旋律”。「  
海軍本部中将が相手か・・・5割くらいの力で十分かな？」

『ほざけ！』

強烈な突きが顔目掛けて飛んでくる。

突きを避けモモンガの空いた腹部に回し蹴りを叩き込む。

「ふぐ・・・！」

モモンガは一度間合いをとり呼吸を整える。

『剃！』

キラの視界からモモンガの姿が消える。

背後からモモンガが現れキラの首目掛け刀を振り切る。

「手ごたえが・・・ない・・・!?!？」

今度はモモンガの背後にキラが現れ・・・

『ヴァーリー  
放電！』

「ぐおおおおおおお!!!!」

モモンガが膝をつきキラを睨みつける。

このおっさん・・・雷を受けてもまだ倒れないのか・・・

「バスターコール”で軍艦が一隻戦闘不能になったのは・・・  
始めてだ・・・」

「・・・・・・」

『貴様はそれほど危険な男だということだ！”旋律のキラ”！』

キラはニコツと笑い、ナミたちのいる橋へと飛び移る。

もう完全に政府には俺が”死神のユダ”だとばれたかもしれない。

だが・・・もうそんなことはどうでもいい

仲間達とここを切り抜けることが最優先だ。

キラはウソツプの隣に着地し声を掛ける。

「ルフィは!？」

「あそこだ！」

ルフィとルッチ、2人とも倒れている。

ルッチは気を失っているようだ。

「ルフィは・・・勝ったのか？」

「ああ！勝ったんだ！」

「そうか・・・。ルフィ！はやくこっちに来い！」

ルフィが顔だけこちらに向け

「いや・・・それが・・・体が・・・動かねえんだ・・・」

「ちっ！世話の焼ける船長だ！」

「き、キラ！どうする！？」

「俺が助けに行つて来る！逃げる準備しとけ！」

「き、キラ！おい！どんだけ遠いと思つてんだ！」

キラは助走をつけ・・・

思い切り地面を蹴り上げ飛び上がる。

ルフィのいる塔へと着地しルフィを背負う。

「き、キラ！お前つて奴は・・・どこまで頼りになるバケモノなんだよ。」

キラは背中のルフィに声を掛ける。

「帰るぞ。ルフィ。」

「おう。なあキラ。」

「ん？」

「後任せていいか？」

『ああ。ゆっくり寝てな。』

もう一度橋に飛び移るため助走をつけ飛び上がるつとすると

爆撃音と共に脱出に使う計画だった護送船が沈んでいく

護送船を沈めたのは……

「モモンガの野郎！」

モモンガの軍艦が護送船を砲撃したようだ。

クソ……砲台だけでも破壊しとくんだった……

ルフィがキラへ声を掛ける。

「キラ……何か聞こえないか？」

「えっ？……」

キラは耳を澄ませルフィの言う”何か”を聞く……

その声は……こう言っている。

《下を見て！帰ろうみんな！》

下……？

キラは塔から海を見下ろす。

そこにはメリー号の姿があった。

”あの声”はメリーの声だったのか……？

『海へ飛べーーーーー！』



ウソップもメリーの姿を確認しみんなへ叫ぶ。

「ルフィ。飛ぶぞ。」

「おう。任せた。」

キラが仲間達が次々にメリー号へと飛び乗った。

また全員でこの船に乗れるとはな・・・

キラは心の中で呟く・・・

《ありがとう・・・メリー・・・》

「みんな・・・!」

ロビンがみんなに感謝の言葉を告げる。

『みんな・・・ありがとう!』

みんなが笑顔でロビンの帰りを祝福する。

キラはパンパンと手を2、3回叩き全員の注目を集めた。

『まだ終わってないぞ!ここから脱出して・・・そして・・・』

微笑みながら全員を見回し

『宴だ!』

『おう!野郎共帰って宴だ!』

キラは船首へと立ち周りを見渡す。

完全に八方塞がりか……どうする……

『撃てー！ー！』

砲撃が始まったが……

「あ、あれ？当たらない？」

正義の門が閉じていく……

どうやら門が閉じていつているおかげで渦潮が発生し照準がズレたようだ。

でも、なぜ門が？

サンジが自分の頭をトントンと指でつつく。

「根性だけで逃げきれぬ相手じゃねえだろ？」

「ふふっ、やるじゃん。」

「おっ、キラ。惚れ直したか？」

「気持ち悪いこと言っていないで飛んでくる砲弾でも防いで来い。」

「了解。副船長。」

キラはナミの方を向き声を掛ける。

「さあ。君の腕の見せ所だ。」

「ええ。今、渦の軌道を読んできるところよ……」

ナミは渦潮に目を凝らし軌道を確認する……そして……

「見えた！チョッパー！取舵いっぱい！」

「おう！おれも役に立つんだ！」

渦潮の流れに乗りグングンとメリー号は加速し、軍艦を突き放していく。

「さあ、最後の一押しだ！フランキー！」

「おう！行くぜ！」

『クー・ド・ウァン  
風来砲！……！』

さらに軍艦を突き放し……そして……

「お前等……ゲームクリアだ！」

『うおおおおおお！』

全員が雄叫びを上げ喜びを爆発させる。

「しかし……お前等……世界政府の旗打ち抜くなって……」

フランキーがあきれながら話を切り出す。

「なに……気にすることはないさ……そうだろ？船長。」

「おう！取られた仲間を取り返したただけだ！」

「そういうこと。わかったか？カティ？」  
「おまえら・・・本当にコトの重大さに気付いてんのか？」

くクリスsideく

クザンの自転車の後ろからクリスが戦場を見つめる。

「この一件は完全に俺たちの負けだな。ね？大将。」

「何が「ね？」だ。お前、俺にキラを捕まえるとか言ってたなかったか？」

「まあまあ。キラはやっぱ強かったよ。」

「ふん。そんなことはわかってる。」

間違いなくキラの懸賞金は上がる・・・

”死神”としてなのか・・・はたまた”旋律”としてなのか・・・

第九十一話 ゴーイング・メリー号（前書き）

”バスターコール”から逃れ・・・

ついにメリー号が・・・！？

## 第九十一話 ゴーイング・メリー号

「おい！キラ！大変だ！ウソップがいなくなった！」  
「…………へえ。」

「なんだよ！おどろかねえのか！急にいなくなったんだぞ！この船あいつのだし！」

「ふう〜ん…………。」

キラはそげキングを見つめる。

なんで…………なんで気付かないんだろうか…………

「なあ…………ウソップはどこいったんだよ。」

「あ、安心したまえ彼ならさつき小船で帰った。」

『『え……………！』』

ルフィ…………チョッパーまで…………なんでこんなにバカなんだ…………

ナミがキラに声を掛ける。

「ねえ、やっぱり誰も乗ってないみたいなのよ。」

「何が？」

「何がって”あの時”の声よ！確かに聞こえたんだけど…………」

キラはメリー号の船首を軽く撫で、ゆっくりと口を開く。

「あれは……メリーの声だよ……きつとね……」  
「キラ……お前まで何ルフィみてえなこと言ってたんだ？  
船がしゃべるわけないだろ。」

ゾロが呆れてため息を吐く。

「でも……私も……何だかそんな気がしたのよね……」

全員が無言になり考えを巡らす。

キラにはわかつている……あれは……メリーの声なんだと……

「ん？前から船が来るぞ。」

ルフィの一言でキラは我に返りルフィの指差す方向を見る

あれは……ガレーラの船……？

「アイスバーグさん。」

「キラ。無事だったのか。」

「こっく見えて意外と”タフ”なんですよ。俺。」

「ふふっ、そうか。ますます船大工向きだな。」

ガタン！という大きな音とともに船首部分が崩れる。

メリー号はやはり限界であった。

今までの旅を考えれば当然のことなのかもしれない。

ルフィがアイスバーグの方を見て叫ぶ。

『おっさん！メリーがやべえんだ！何とかしてくれ！』

「……やめるルフィ。」

キラが叫ぶルフィを止める。

「キラ！なんでだよ！ずっと一緒に旅してきた仲間だろ！

さつきも救われたばかりなんだ！修理すればきつと……」

『もう……休ませてやろう。』

「な！？で、でも！」

「やめるルフィ……」

サンジがルフィを静止してキラを見つめた。

キラの瞳から頬を伝い涙が流れ落ちる……

悲しいのはキラだけではない。麦わら一味全員が悲しいのだ。

「キラ……」

ロビンがキラへと近寄り頬の涙を指で掬う。

『俺だって……別れたくない……メリーと一緒に旅を続けた

い……』

「キラ……ごめん。俺だけじゃないよな……悲しいのは……」

「

ルフィがキラへと謝罪し、キラも瞳に涙を浮かべながら笑顔を見せ



る。

「いや……俺のほうこそ……泣くなんて男らしくないよな……」

「なにいつでんだよ……キラ……」

『男だつてないでいいとおもつぞー!』

フランキーが泣きながらそう告げる……

なんで……こいつが泣いてんだろう……

キラは涙を拭いアイスバーグの方を見る。

「もう……メリーを……休ませてやろうと思います。」

「ああ……わかった。それにしても俺も長年船大工やってるがこんなにあ愛されてる海賊船は……幸せものだな。」

キラは笑顔で頷き、崩れかけている船首をもう一度優しく撫でた。

「じゃ……いいか……みんな……」

ルフィがたいまつを持ち全員に確認をする。

キラは下を向き目を瞑っていた……

「キラ!最後は……見届けてやろう。」

「ルフィ……ああ、そうだな。」

前を向きメリーの姿を目に焼き付ける・・・

「メリー・・・海底は暗くて寂しいからな・・・俺たちが見届け  
る。」

ルフィがたいまつをゆっくりとメリー号へ移す。

火は燃え広がりメリー号を包んでいく・・・

「ウソップがいなくてよかったな・・・あいつこんなの耐えられ  
ないだろ・・・」

「そんなことないさ。決別の時は来る男の別れだ・・・彼にも覚  
悟は出来てる。」

ルフィがそつとつぶやく・・・

「長い間・・・俺たちを乗せてくれてありがとな・・・メリー号  
・・・」

メリー号が目の前で燃えていく・・・

空から何か降ってくる・・・雪？・・・違う・・・これはメリー号  
の灰・・・

灰が思い出となりキラ達を包み込む・・・

過去の冒険が走馬灯のように思い出され・・・自然と涙が頬を伝う・  
・

”あの時”の声が聞こえる・・・《ごめんね・・・》

「メリー・・・なんでお前が謝るんだ・・・」

キラは思わず口から言葉が出る。

《もっと・・・みんなを遠くに運んであげたかった・・・》

「メリー・・・」

チヨッパーが大事な仲間の名を口にする・・・

《ごめんね・・・ずっと一緒に・・・冒険したかった・・・》

「ごめんっつーなら、俺たちのほうだぞメリー！」

ナミはキラの腕を掴み涙を堪えている。

「俺！舵がヘタだからよ！お前を氷山にぶついたりよ！帆も破ったことあるし！」

ゾロもサンジもアホだから色んなモン壊すしよ！」

ルフィは涙を流しながらも言葉を続けた。

「そのたびウソップが治すんだけどよ・・・ヘタクソでよ！ゴメンっつーなら・・・」

《だけどぼくは幸せだった・・・今まで大切にしてくれて・・・》

もういい・・・何も言わないでくれ・・・メリー・・・

キラは手で顔を覆い唇を噛み締める。

《どうもありがとう・・・ぼくは本当に幸せだった・・・》

みんな・・・泣いている・・・

仲間との別れ・・・それは避けて通れないものなのかもしれない・・・

キラは燃えていくメリー号を見つめ感謝の言葉を掛ける・・・

「今までありがとう・・・メリー・・・生まれ変わったら・・・  
また会おう・・・」

第九十一話 ゴーイング・メリー号（後書き）

この話を書くため、もう一度見直したんですが・・・

思わず泣いてしまいました・・・

何度見ても感動します・・・

うまく書けてるかどうかわかりませんが・・・

感動した方・・・是非一言・・・感動した！とお願いします。

第九十二話 失いたくないもの（前書き）

メリー号との別れを乗り越え・・・

一歩一歩先へ・・・

## 第九十二話 失いたくないもの

エニエスロビー事件から2日後

麦わら一味は水の都”ウォーターセブン”にいた。

アクア・ラグナの影響もあり”ウォーターセブン”は壊滅的な大打撃を受けている。

自然の力とは驚異的なものだ。

キラはこの先戦うであろう”海軍本部三大将”のことを考えていた。

間違いなく4年前より一段と強くなっているはず・・・

いや・・・正確には強くなっていた。

クザンと戦ったとき確信した・・・今3人を相手にしたら確実に・・・

「強くならなきゃ・・・ダメだよな・・・”ジル”・・・」

自分を慕ってくれた・・・そして救ってくれた部下の為に・・・

強く生き続けなきゃ・・・

キラは地面に横たわり・・・瞼を閉じて思い切り深呼吸する。

海岸沿いにいるせいか風が冷たい。

「こんなところで寝たら風邪引くわよ。」

声が聞こえる。誰だ・・・？

ゆっくりと瞼を開き声の主を確認する。

「ロビン・・・」

「ふふっ、よっぽど疲れてるのね。」

ロビンはキラの隣に腰を下ろし風で乱れた髪を整える。

キラはロビンに言い忘れたことがあるのを思い出し体を起こす。

「ロビン。」

「何？」

『おかえり』

ロビンに笑顔を向けるとロビンも笑顔で返してくれた。

『ただいま・・・キラ。』

お互いにそれ以上言葉は発さず。ただ海を見つめていた。

「ロビン！どこいったんだよー！」

チヨッパーの音が聞こえる。



ロビンを探してるのか……ってあれ？

キラはロビンの方を見る。

「確かチョッパーが見張りに……！？」

ロビンが突然キラに抱きつく。

「なっ！？どうした！？」

「また……あなたが私の知らないところで無茶してるんじゃないかと……」

無茶……？一体なんの……？

「あなた”バスターコール”の時、どうして軍艦に飛び移ったの！？」

「あれは……ロビンが怖がってたから……」

「確かに”生きたい”と願ったけど……”失ってもいい”とは言っていない！」

ロビンにしては珍しく興奮しているのでキラもさすがに戸惑っている。

”バスターコール”の時、キラは危険を顧みず軍艦へと飛び移った。

どうやらロビンは”それ”が気に食わなかったようだ……

「お願いだから……自分の身も心配してよ……」

先ほどの怒りの表情とは一点して今度は瞳に涙を浮かべている。

こんなにコロコロ表情が変わるロビンを見るのは初めてだ。

「言っただでしょ・・・私のせいで仲間を失うのは・・・嫌なの・・・」

「ごめん。でも、もしかた同じことがあったら俺は同じことをすると思う。」

キラは真剣な眼差しでロビンにそう告げる。

言葉を聞いた途端ロビンの顔が赤くなり始め・・・

「あなたを失うのが嫌だって言ってるじゃない！」

キラたちを見つければ笑顔でこちらに走ってきていたチョッパーがオドオドし始める。

チョッパーのその動きを見てクスツツとキラが笑うと・・・

「何笑ってるの！？私の話聞いてた!?!」

ロビンがキラに怒声を浴びせる。

かなりヒステリックな状態のロビンの肩を掴みキラは諭すように話し始める。

「いいかい？俺は・・・絶対に仲間を見捨てたりしないし。仲間が恐れているものが

あるなら俺は全力でそれを叩き潰す。それはみんなもそうだと

思う。」

「だけど……!?!?」

「じゃあ、俺がロビンと同じように海軍に捕まって処刑されそうになっても

”助けにくるな!” って言ったら助けに来ないでくれるのか?」

「それは……」

キラは笑顔でロビンに「そういうことだよ」といい立ち上がり町の方へと歩いていく。

「そういうことって、どついうこと!?!?」

・  
・  
ロビンがまだ叫んでいる……まあ、確かに答えにはなってないな。

実はキラ自身もその”答え”が見つかっていないのかもしれない。

キラはチョッパーに「ロビンを頼むな」とだけ言い残し歩いていった。

第九十二話 失いたくないもの（後書き）

ヒステリックなロビンです。

原作じゃ滅多に見られない光景ですね。

感想お願いします。

第九十三話 宝樹アダム（前書き）

キラはロビンに”答え”を伝えることが出来なかった。

町を歩き何を思う・・・

## 第九十三話 宝樹アダム

キラが街中を歩いていると聞き覚えのある声が聞こえる。

『本業もあるんだ仕事の合間に裏町を1ヶ月で完全修復しちまえ  
！』

『了解！』

この声は・・・パウリーか。

声のする方向へと向かう。

「気合入ってるな。パウリー。」

「おお！キラ！お前も手伝いに来たのか？」

クスツツと笑いながら首を横に振る。

「わかってるよ。冗談だ。」

「それにしても・・・タフだな。船大工は。」

「船大工なめんなよ。」

2人で顔を見合わせ笑う。

「がんばれよ」とだけ言い残しキラは去っていく。

パウリーはキラに手を振り仕事へと戻っていった。

〈仮設本社特別海賊ルーム〉

ガレーラカンパニーが用意してくれた部屋へ戻ると

ルフィが寝ながら飯を食っていた。

キラはクスクス笑いながらルフィの向かいに座り”その光景”を眺める。

チラツとナミの方へと目をやるとグツタリとしている・・・

理由はわかっている。アクア・ラグナに全財産一億ベリー、衣服、家具、みかんの木、すべてが持っていかれてしまった。

グツタリするのも当たり前か・・・

キラはナミの肩をポンポンと叩き慰める。

「大丈夫。どうにかなるよ。」

「キラ・・・。」

「表に客が来てるみたいだけど、なんだろうねえ？」

扉の方を見てみるとココロさんが言うとおり2人の男性が立っている。

「何か？」

「いや・・・これを返しに来たんだ。」

男達が持ってきたものを確認し、ナミを呼ぶ。

「こ、これって！みかんの木！それにお金も荷物もある！」

みかんの木に抱きつき大喜びするナミ。

届けてくれた人達にキラが話を聞くと

アイスバーグ暗殺犯だと思い追い回していたとき海賊の持ち物と  
いうことで

全部没収していたらしい。

「ありがとうございます。荷物が無事でよかったです。」

「いや、こちらこそ疑って申し訳なかった。」

「いいですよ。気にしないでください。」

荷物を届けてくれた男達を見送り椅子に座る。

「今、帰ったぞー！」

チョッパーとロビンが帰ってきたようだ。

ロビンの方を見るがすぐに目を逸らされてしまう。

完全に嫌われたかな・・・？

「よう！スーパーか！？おめえらー！」

フランキーか・・・あいかかわらず元気だな。



キラはフランキーへと質問する。

「今日はどうした？」

「おう。全員揃っては・・・ねえか。まあ、キラがいるならいいか。」

「？」

「なあ、宝樹”アダム”って知ってるか？」

「ああ、戦争があっても倒れず人が死に町が死に廃墟と化そうが立ち続ける。」

「ゴールドロジャーの船にも使われてたっていう樹だろ？」

「そのとおり、よく知ってるな。」

「で、それがどうした？」

「その樹の一部がごく稀に裏のルートで売り出されることがある。」

「俺は”そいつ”がほしかった。そこへ・・・」

「俺たちが現れたってわけか・・・」

サンジがフランキーへと掴み掛かる。

「てめえ！俺たちの金でそんなモン買いやがったんじゃねえだろうな！」

「待て！最後まで話を聞け！」

「俺は昔、もう船はつくらねえと決めたことがある。だが！

やはり目標とする人に追いつきたくて気がつきや船の図面を引いてた。」

「・・・・・・・・。」

キラは腕を組み黙ってフランキーの話聞く。

『俺の夢は！宝樹でもう一度だけ！どんな海でも乗り越えていく

” 夢の船を造り上げることなんだ！”』

「夢の船を造るから俺たちに乗ってくれってことか？フランキー？」

ニヤリと笑いながらキラはフランキーに尋ねる。

「へへッ・・・お前は何でもお見通しだなキラ。」

「ふふっ、楽しみにしてるよ。フランキー。」

フランキーとキラはガッチリと握手をした。

次の島へと進む手筈は整いそうだ。

第九十三話 宝樹アダム（後書き）

ワンピースはついに新世界編スタートしましたね。

麦わら一味の2年後、それほど見た目に変化なかったかな？

そう思ったのは俺だけでしょうか？

新世界編になったらキラはどうなるのかも楽しみに。

この小説は予定として原作が終わるまで書き続ける予定です。

第九十四話 英雄（前書き）

フランキーの船が完成すれば先に進むことができる。

そんななかルフィにあの人の魔の手が迫っていた・・・

## 第九十四話 英雄

＼ゾロside＼

ゾロはルフィ達へ危険が迫っていることを知らせるために走っていた。

「まずいぞ・・・あいつらに知らせねえと・・・」

海岸線をひた走る・・・が・・・

「ん？ここはどこだ？」

一向にたどり着くことはない誰かが推測できるだろう・・・

ゾロが町で迷っている間にもルフィ達には”海軍”の魔の手？が迫っていた。

＼キラside＼

フランキーとしばらく新しい船について談笑していると・・・

「・・・何だか外が騒がしくないか？」

キラが外の騒がしさに気付きサンジの方を見る。

「確かにな・・・何かあったのか？」

サンジが入り口へと向かおうとすると突然扉が吹き飛ぶ。

キラの見覚えのある男が顔を覗かせる。

それはルフィの祖父であり海軍本部中将”モンキー・D・ガープ”。

ガープは部屋へと入ってきて話し始める。

「モンキー・D・ルフィに会わせたい男達がおるんじゃないが・・・」

『『海軍!』』』

サンジ・フランキー・チョッパーがルフィを守るためガープの前に立ち塞がる。

ルフィはこんな状況にあっても寝続けている・・・

キラは呆れて頭を抱えたため息を吐く。

『起きんか!!--!』

ガープは一瞬にして寝ているルフィの前まで移動し、額に拳骨を落とす。

ルフィが地面へとめり込み額を押さえて声を上げる。

『い!?!? 痛ええええええええ!!!--!』

「痛え!?!? 何言ってるんだ!パンチがゴムに効くわけ・・・」

サンジの言うとおり普通のパンチならルフィには効かないだろうだが・・・

「愛ある拳は防ぐ術なし！ずいぶん暴れてるようじゃの。ルフィ！」

「げえ！じいちゃん！！！」

『ええ！？じいちゃん！？』

部屋にいたキラを除く全員が声を上げ驚く。

キラはクスクス笑いながらその”光景”を眺める。

無理もない。海軍の孫が海賊なんて誰も思わないだろう。

「まさか、海軍の英雄が尋ねてくるとはね。」

「孫がわしに謝らなきゃならないがあると思っつてな。」

「俺はじいちゃんに謝らなきゃならないことなんてないぞ！」

ルフィが拳骨をくらった部分をさすりながらそう答える。

サンジが信じられないといった表情でルフィに尋ねた。

「ルフィ。本当にお前のじいちゃんなのか？」

「そうだ！絶対に手を出すなよ！殺されるぞ！」

キラは首を傾げながらガープの方を見た。

「殺される？」

「ああ。俺は昔じいちゃんに何度も殺されかけたんだ。」

「おいおい人聞きの悪いことを・・・いいかよく聞け！」

「わしが谷へ突き落としたのも夜の密林に放り込んだのも

風船にくくりつけどこかの空へ飛ばしたのも……!!」

『全ては貴様を強い男にする為じゃ!』

なるほど……ルフィの生命力はそこからきてたのか……

頷きながらキラは話の続きを聞く。

「最終的には友人にエースと共に託し修行させたが……

目を離して見ればこのザマだ……」

ガープはため息を吐いた後、大きく息を吸い込み

『わしはお前を強い海兵にする為に鍛えてやったんじゃぞ!』

『おれは海賊になりてえってずっと言ってたじゃねえかよ!』

『“赤髪”に毒されおつてくだらん!』

『シャンクスは命の恩人だ!悪くいな!』

拳を振り上げルフィの胸倉を掴む。

『じいちゃんに向かって”いな”とは何事じゃ!』

『ぎゃああああ!ごめんなさい!』

キラはとくに止めることもなく。椅子に座り紅茶を飲む。

「ちよつとキラ!少しは……」

「好きにやらせてあげなよ。家族の問題は俺たちの踏み込むところじゃない。」

「で、でもよキラ!ルフィの奴、完全に闘争心が折られてるぞ!



見ろ！」

サンジに言われるがままガープとルフィの方を確認してみると・・・

「・・・寝てるぞ。」

「そうだろ！寝てるだろ！・・・え？」

『ええええええええ！？寝たああああ！？』

「だから好きにやらせとけって言ったろ？」

ガープがルフィより先に目を覚まし、2発拳骨を落とす。

言葉遣いと話を聞く態度が悪いとのことらしいが・・・

ガープ・・・あんたも寝てたぞ・・・

「・・・痛え！」

ルフィの頭には3つのコブが出来ていた。

きつと昔からこんな感じで怒られてきたんだろうな。

幼少期のルフィを思い描きキラはクスクスと笑う。

「ルフィ。そもそも”赤髪”って男がどれ程の海賊なのか解つてるのか！？」

「ルフィに変わってそれは俺が答えても？」

ガープはキラの方を見て頷く。

赤髪は4人の大海賊の1人で偉大なる航路の後半の海に皇帝の如く君臨することから人は「四皇」と呼ぶ。この四皇を食い止める力として海軍本部、王下七武海が並ぶ。

キラは全員に聞こえるように説明し、ガープに声を掛ける。

「こんな感じでどうですか？」

「うむ。いいだろう。わかったのかルフィ！」

「ああ。よくわかんねえ！元氣そうならいいや。」

ルフィ・・・せつかく説明したのに・・・

ガープがキラに声を掛ける。

「お前・・・」旋律のキラ”だったか？

「ええ。副船長やらせていただいています。」

ジロジロとキラの顔を確認し

「どこかで・・・わしとあつたことないか？」

「えっと・・・手配書じゃないですか？」

「そうか・・・」

実は一度会ったことがある。

ガープはよく覚えていないようだがキラは覚えていた。

キラが”ルイン”に所属していた頃、ある海賊船に潜入したとき  
潜入した海賊船が海軍と戦闘になったことがあった。

その時戦ったのがガープの部隊。

あの時のガープの強さ・・・目に焼きついている。

是非手合わせしてみたかったのだが・・・  
標的はガープではなかったので戦闘はしなかった。

「そうじゃ！思い出した！」

ガープが突然叫ぶ。

キラはビクリとしてガープに背を向ける。

「あの時”の飲み屋のお姉ちゃんか！？」  
「は、はい？」

開いた口が塞がらないとはこういうことを言うのだろうか・・・

第九十四話 英雄（後書き）

感想をお願いします。

第九十五話 友との再会（前書き）

英雄ガープが尋ねてきた理由はある男達とあわせるため・・・

## 第九十五話 友との再会

「あの時”のお姉ちゃんじゃろ!?”」

ガープはキラに指を差し叫ぶ。

キラはため息を吐き頭を抱える・・・

本当に・・・これが・・・中将なのか・・・?

その時外から突然銃声が聞こえてきた。

「ん?何事じゃい!」

「賞金首の”海賊狩りのゾロ”がこちらに向かってきているようです。」

ガープはニヤリと笑い扉の近くに控えていた海兵2人に声を掛ける。

1人は爽やかな短髪の青年。もう1人は長い髪のククリ刀を腰に下げた男。

「ルフィの仲間か。威勢がいいのう。”お前ら”止めてみい。」

『はい!』

2人の海兵のうち1人はゾロへ。

もう1人はゾロを止めるため外に出たルフィへと向かっていく。

ゾロと戦っている男はククリ刀を使い多彩な攻撃を繰り返す。

ルフィと戦っている男はルフィの懐に一瞬にして入り込み顔面へと蹴りを放ち、

『剃』を使い距離を取った後、背後へと回り込む。

「なかなかやりますね。」あの2人」

ガープに声を掛けると満面の笑みで言葉を返す。

「いや！やはりまだまだ敵わんな！」

結果はガープの言うとおりルフィがマウントポジションを取り、ゾロが相手の首へ刀を向ける。

「やっぱり強い・・・さすがだ！参りました。」

ルフィの倒した男が軍服の埃を払いながら立ち上がり

「ルフィさん、キラさん、ゾロさん。お久しぶりです！僕がわかりますか？」

キラは顔をしばらく眺め・・・

「ま、まさか・・・コビー？」

「キラ。お前何言ってるんだ？コビーはもっと・・・」

「はい！コビーです！お久しぶりです！」

コビーへと近づき頭をグシャグシャと撫で回す。

「本当にコビーなんだ！ははっ！強くなったな！」

「キラさんも元気そうで何よりです！」

一緒にいた時間は短かったが久しぶりにあった友との再会を喜ぶ。

ルフィはいまだに目の前の爽やかな青年がコビーだと信じられないようだ。

ゾロも信じられないといった表情でコビーを見つめている。

無理もない”あの頃”は背も小さく戦いなんてもつてのほかだった男だ。

「まあ、立ち話もなんだし部屋に上がって。」

「事件の後でお疲れなのにすいません。」

「いいよ！久しぶりだ宴にしよう！」

ルフィはコビーの肩をバンバンと叩き部屋へと向かっていく。

あれ？そういえば……

”もう1人の男”の存在を思い出し目をやる。

「なあ……ルフィ。あの人は？」

「さあ？知らねえ。ゾロは？」

「知らん。」

「ルフィさん、ゾロさん。本当に覚えてないんですか？」

2人は首を傾げ”もう1人の男”を見つめるが……

『『誰だ？』』



『俺だ！俺！モーガン大佐の息子！ヘルメツポだ！』

ヘルメツポが何を言っても2人は首を傾げる。

いい加減・・・可哀想だ・・・

『あの時の！七光りのバカ息子だよ！覚えてないか！』

「あ・・・お前か。」

どうやら2人とも思い出したようだ。

キラはヘルメツポとは一度も面識がないので誰かわかってはいないが  
とりあえず頷く。

ヘルメツポは置いておきコビーの方へと向き直り会話を続ける。

「それにしても・・・コビー。曹長なんだな。」

「はい！お三方のおかげです！」

クスクスと笑いながらキラはコビーの肩を叩く。

「曹長になれたのはコビーの実力だよ。俺達は何もしてない。」

「いえ・・・みなさんに出会えなかったら・・・」

僕は今でもアルビダの船で雑用だったかもしれない。」

コビーと会話しながら部屋へと入る。

キラ達の後ろではガープが何やら海兵たちに命令を出していた。

「よし！おめえら！この壁直しとけ！」

『えっ！？そんな勝手な！』

『直すくらいなら何故壊したんですか！』

「そうやって入った方がかつこいいじゃろ！」

『そんな理由で壊さないで下さいよ！』

『じゃあ、我々も直すので中將も手伝ってくださいよ！？』

「えええええ！？いいよ。」

中將が海兵に怒られてる・・・まあ、でも自業自得か。

キラは紅茶を淹れコビーとヘルメツポの前へと置く。

「どうぞ。」

「ありがとうございます！」

ヘルメツポがキラの顔を見つめている。

何だろう・・・気持ち悪い・・・

「あんた・・・本当に海賊？」

「よく言われるよ。」

クスクス笑いながらカップを傾ける。

部屋には海軍のクギを打つ音が鳴り響いていた。

第九十五話 友との再会（後書き）

新世界編までがんばります！

感想お願いします。

第九十六話 父親（前書き）

ルフィの父とは・・・？

## 第九十六話 父親

壊れた扉を直しながらガーブはルフィと話始める。

海軍中将なのに・・・こういうこともするんだ・・・

「そうじゃルフィ。親父には会えたか？」

「え？父ちゃん？俺に父ちゃんなんかいるのか？」

「ルフィはドラゴンには会ってませんよ。」

キラが2人の会話に口を挟む。

ルフィが驚いた顔でキラを見つめている。

「どうした？」

「なんでキラが知ってたんだ？」

「なんでって・・・俺をローグタウンで助けてくれた。」

ローグタウンでキラはルフィ達を逃がすためスモーカーと戦った。

自分の身を犠牲にしてルフィ達を進めさせる予定だったキラを逃がしたのが

ルフィの父にして”革命家モンキー・D・ドラゴン”だった。

「何じゃい。会ってないのか」

「じいちゃん。俺の父ちゃんってどんなんだ？」

「お前の父は”モンキー・D・ドラゴン”革命家じゃ。」

「ガープさん！それ言っても大丈夫ですか！？」

ルフィの父のことは知られない方がいいと語らないようにしていたがキラは突然のガープの発言に思わず口を挟むが止めるのが遅かった……

海兵達は驚愕し大声を上げている。

麦わらの一味もルフィ、キラ、ゾロ以外の人間は目を丸くする。

「なあキラ。そんなに驚くことなのか？」

「まあ……そうだろうな……いいか、よく聞け。」

ルフィはキラの顔を見て頷く。

「今”世界政府”を直接倒そうとしている力がある。それが革命軍。」

ドラゴンはそのトップだ。素性は今まで全くとしてつかめない”謎の男”だった。」

「だった？」

「ああ。今、お前のじいさんが言っちゃったからな……」

キラはガープを睨みつけたため息を吐く。

ガープは申し訳なさそうにキラを見て

「やっぱコレ・・・言っちゃマズかったかのう？」  
「ええ。まずいですね。」

呆れた表情でガープを見る。

突然ガープは笑い出し言う・・・

「じゃあ、今のナシ！」

「なる訳ないでしょ・・・」ビシッ！

海兵達がガープの発言で驚く中、キラは冷静に突っ込みを入れるの  
だった。

第九十六話 父親（後書き）

短くて申し訳ないです。

感想お願いします。



## 第九十七話 死んだはずの男

ガープは扉の修理も終わったのでそろそろ帰るらしい。

「お前はわしの孫なのでこの島で捕らえるのはやめた！と軍にはうまく言い訳しておくので安心して滞在しろ」

「言い訳になってないんで「逃げられた」事にしてくださいね」

キラはガープにそう告げ笑顔で見送る。

「ワシは2人の付き添いなんだから……」こいつら”とはゆっくり話せ」

「ええ。わかりました」

ガープの言う”こいつら”とはコビーとヘルメツポのことである。

「ルフィ。わし帰るぞ」

「うん。じゃあな」

『軽すぎるわ！』

ガープが突然ルフィの顔へ鉄拳を叩き込む。

まったくもって意味がわからん……

『惜しめバカ者！久しぶりのじいちゃんだぞ！』

「どうしろってんだよ！俺は殴られただけじゃねえか！」

『それでもワシは孫に愛されたいんじゃないアホ！』

キラとナミは顔を見合わせ

「あの身勝手さ……すぐく血のつながりを感じるわね。」  
「ああ。そうだな……」

ガーブが去って部屋が途端に静かになった。

本当に嵐のような人だったな……

「どうしたの？キラ」

「いや……なんでもないよ」

キラはビーチチェアに座り空を眺める。

なぜビーチチェアに座っているのか……

それはナミに誘われガレールカンパニーの社員プールで息抜きをしているからだ。

ナミはコビー達とルフィの会話を盗聴しメモしている。

本当に勉強熱心だな……関心するよ……手帳を閉じ盗聴器を置く。

「盗聴終わったの？」

「ええ。一緒に泳ぐ？」

キラは首を振り横になる。目を瞑り眠りについた。

「なあキラ。水水肉焼けたぞ」

サンジがキラの肩を揺する。

目を覚まし辺りを見回すとガレーラカンパニーとフランキー一家も集まり宴となっていた。

完全に乗り遅れた……

キラが宴の輪に混ざろうと立ち上がると……

「キラ……こっちこっち」

誰かが呼んでいる……声のする方へ向かっていくと

「よっ！」

「く、クリス！？お前本部に帰ったんじゃ？」

「帰ろうかと思ったんだがウチの大将がロビンに話があるんだと」

「青キジが！？野郎まだあきらめてなかったのか！」

ロビンの元へと走ろうとするとクリスが腕を掴む。

「待て。別に今回は襲うとかそんなんじゃないんだ」

「どういうことだ？」

クリスの話によれば青キジはロビンに聞きたいことがあるらしい。

それは”宿り木が見つかったのか”ということ

「ロビンなら心配ないと思うんだがどうしてもウチの大将は本人の口から聞きたいらしい」  
「そうか」

クリスはタバコを口に啣え火を付ける。

「そうだ。キラ」

思いついたようにクリスがキラに声を掛けた。

「シャボンティ諸島で”死神のユダ”と名乗る男が発見されたらしいぞ」

「……へえ。捕まったのか？」

「捕まえられなかったらしい」

「海軍の下っ端じゃ厳しい相手ってことか？」

「担当したのは”黄猿”だ」  
「何？」

黄猿は青キジと同じ海軍本部大将だ。

その黄猿が捕まえられなかったのか……？

クリスが胸元から手配書を出す。

死神のユダ

懸賞金：5億ベリ

---

「なっ!？」

「驚いたろ? 5億だぜ」

「そこじゃない……写真だ……」

手配書の写真に写っていたのは……

「”ジル”……バカな……」

「お前の元部下か。大方上からの命令でお前を炙り出そうとしてるんだろ」

「違うんだ……”ジル”は死んだはずなんだよ……」

「な、何!？」

そう”ジル”はリトルガーデンでキラを庇い死んだはずだった。

第九十七話 死んだはずの男（後書き）

感想をお願いします。

## 第九十八話 亡霊

死んだはずの男が生き返った……普通に考えればありえないことである。

もし死んだ人間が生き返るならば海賊王も生き返らすことができてしまう。

「……ホラーだな」

クリスがぼそりと呟く。

ホラーどころではないキラは怒りに震えていた。

もし”偽死神のユダ”がジル本人だとしても生き返らせた人間がいる。

ジル本人じゃなかったとしても誰かがジルに扮してキラを誘き出そうとしている。

キラは拳を強く握り締め唇を噛みしめた。俯くキラを見てクリスが口を開く。

「キラ。俺は強くなるよ」

「お前……急に話の流れと関係ないほうに……」

昔からそうなのだがクリスは突然違うことを言い出すことがある。

海軍に入隊したなら”そういう所”も直ると思っていたが……ク

リスはそのまま話し続ける。

「強くなって俺が”偽ユダ”を捕まえる」

「……お前がやられたら敵は討つてやるよ」

顔を見合わせクスクスと笑う。

「クリス。何をしている？」

青キジがキラ達の前に姿を現す。

「おっ！大将！もういいのかい？」

「ああ。終わった。で……何故”コイツ”がいる」

キラを指差しクリスの顔を見た。

「まあ、色々と話がありました」

クリスが申し訳なさそうに青キジの顔色を確認する。

「クザン。俺の偽者が出たんだったって？」

青キジに”偽ユダ”のことを聞く。

「クリス……お前はおしゃべりが過ぎるぞ」

「すいやせん……」

溜息を吐きクリスを見つめる。

一呼吸置き青キジは口を開く。



「お前はもう」死神のユダ「じゃないだろ」  
「……クザン」

「死神のユダ」は3年前に死んだ。そうだろ？」  
「……そうだな。俺は」旋律のキラ」。死神じゃないよな」

キラは笑顔で青キジの質問に答えた。

3年前……キラが”ルイン”を抜けた時点で死神は死んだ。

青キジは踵を返し歩き出す。クリスマスも青キジの後を追う。

キラも宴の席へと向かおうと2人に背中を向ける……後ろで青キジの声が聞こえた。

「安心しろ。」死神の亡霊”は俺が始末しておいてやる」

振り返ると青キジが背中を向けたまま手を振っている。

青キジの背中が大きく見えた気がした……

第九十八話 亡霊（後書き）

感想をお願いします。

## 第九十九話 天の分目

くクリス side

《大将がキラを見逃すなんてな……意外だ……》

クリスは青キジの背中を見つめる。

青キジのモットーは「ダラけきつた正義」あの場で捕まえないというのもありえることかもしれない。

だがクリスはわかっている青キジという男はとても義理堅い男だ。

麦わらの一味はロビンを救った。それをどこかで感謝しているのかもしれない。

「クリス」

「うい。何でしょう」

「本当に”黄猿”が逃がしたのか？」

「正確には”戦桃丸”の野郎が逃がしちまったみたいですよ」

青キジはしばらく黙って歩く。

クリスも黙って後ろをついて行くと突然前を歩く青キジが振り返り

「シャボンティ諸島へ向かうぞ」

啜っていたタバコを地面に落として踏み消し満面の笑みでクリス

は答える。

「へへッ！俺やっぱ3大将の中であんたが一番好きだぜ！」

青キジの自転車の後ろに乗りシャボンティ諸島を目指し走り始めた。

〈キラside〉

《あら……かなり出来上がったってな……》

キラは辺りを見回しロビンの姿を探す。

ロビンは割り箸を鼻に突っ込んでいるルフィに捕まっている。

笑ってるみたいだな……よかった。

どうやら青キジにキツイことを言われたわけではなさそうだ。

安心して近くにある椅子へ座りギターを弾く。

宴に参加していた全ての人がキラのギターの音色に気付き耳を傾けた。

アイスバーグがギターの音色を聞きながら口を開く。

「なるほど……」 旋律のキラ”って呼ばれてるのはこいつのことか……」

ルフィは水水肉を口いっぱいに入れながらキラに注文をつける。

「海賊の歌がいい！海賊の歌を歌ってくれ！」

優しく静かな音色から陽気で楽しい音色へと変わりキラの歌声が響く。

ある者は一緒に歌い、またある者は歌を肴に酒を飲む。

楽しい宴はまだまだ続く。

（偉大なる航路・新世界）

『親父！親父！赤髪が親父に会わせると……』

「ああ、通してやれ。」

”親父”とは白ひげ海賊団船長”エドワード・ニューゲート”のことである。

白ひげは船員のことを愛を以って「息子」と呼び船員、傘下の海賊たちからは「親父」と呼ばれ絶大な尊奉の念と恩義を抱かれている。

”赤髪”とはルフィの尊敬する男”赤髪のシャンクス”

今、2人が”新世界”で直接接触を図ろうとしていた。

もしも”四皇”の2人が戦うようなことがあれば間違いなく世界を揺るがす大事件となるだろう。

「白ひげ海賊団海賊船」

「来るぞ……」赤髪”が……」

大柄の男が腕を組み赤髪の登場を待つ。

この大柄の男が白ひげ海賊団三番隊隊長ジヨズ。

「若エ衆は下がってるい身がもたねえぞい」

ジヨズの隣にいる顎髭を生やしている男が白ひげ海賊団一番隊隊長マルコ。

「身が持たねえってのは……?」

「いいから奥へ行ってろいっての」

マルコは船室を指差し若い船員達に告げるが……

船員達は次々に1人また1人と倒れていく。

「もう手遅れかい……」

赤髪が一步一步と進んでくる。他の隊長達が倒れた船員を揺すり

「お前等大丈夫か!？」

「騒ぐな気イ失ってるだけだ……」

マルコは赤髪を見つめる。

「ジヨズも赤髪の放つ”何か”を感じているようだ。」

「半端な覚悟じゃ……あの男の前で意識を保つことさえできねえ…

…」

「ああ。相変わらず……」

『スゲエ”覇気”だ』

赤髪はデカイ酒瓶を持ち白ひげの元へと歩いていく。

「失礼。敵船につき……少々威嚇した」

口元を少々緩め赤髪は白髭の前に立つ。

白髭はゆっくりと口を開き

「てめエの顔見てると……」あの野郎”から受けた傷が疼きやがる”療治の水を持参した戦闘の意志はない。話し合いたいことがある」

「”覇気”をむき出しにして現れる男の言い草かバカヤロウ」

マルコが赤髪の覇気で気絶した船員を見て大声を出す。

「オイ赤髪てめえ何してくれてんだい！」

「お！一番隊のマルコだな。お前ウチに入らないか？」

『うるせえよい！』

突然の赤髪の勧誘に驚きながらマルコは言い返す。

「どうやら2人の直接接触は何事もなく終わりそうであった。」

「親父、おれ達は……」

「ああ、戦争はしねえらしい。2人にしてくれ」

船員たちは下がり白髭と赤髪の2人だけが残った。

持参した酒を自分の杯に注ぎ白髭へと酒瓶を投げる。

「西の海”の酒だな……あまり上等じゃねえだろ」

赤髪は満面の笑みで答える。

「世界中の海を回ったが……肌にしみた。水から作った酒を越えるものはないおれの故郷の酒だ飲んでくれ。」

酒瓶に口を付け流し込み……ボソリと呟く。

「ああ……悪くねえ……」

ニヤツつと笑い赤髪も杯へと口を運ぶ。

白髭が先に口を開く。

「ロジャー、ガープ、センゴク……あの頃の海を知る者はもういぶん少なくなっただな」

「22年たった……当然だ」

「おめえもよく成り上がったモンだぜ……ゴール・D・ロジャーの



船のただの見習いだった小僧がよ……」

「ロジャーの船とはよく戦りあったせいで……妙な顔馴染になった。お前と一緒にいたあの赤っ鼻はもう死んだか」

「バギーか……懐かしいな」

昔の友人を懐かしみ赤髪は過去に「一緒に海賊をやるう」と誘った情景が頭によぎった。

「船長処刑の日。ローグタウンで別れてそれっきりだ……風の噂でまだ海賊やってると聞いた」

「”ロバーツ”には最近会ったぞ」

「ロバーツに！ははっ！懐かしいな」

「ロジャーの船で”船医見習い”だった奴が一丁前に医者だとよ」

ロバーツも赤髪やバギーと同じくゴール・D・ロジャーの船に乗っていた。

赤髪はロバーツも自分の海賊団に誘ったが「世界中の人を助ける」と断られた。

「そうか。ロバーツと最後に会ったのは……腕を失ってからだな」

「……どんな敵にくれてやったんだ。その左腕」

「これか……」新しい時代”に懸けて来た」

赤髪は左腕を押さえながら話しを続ける。

「白ひげ……俺は……色んな戦いを越えて数々のキズを負って来た」

が

左目の3本の傷を指差し白髭の方を見て

『今……！疼くのはこの傷だ！』

「こいつは冒険の痛手でもなければ”鷹の目”から受けたものでもない……この傷を負わせたのはお前のとこの”黒ひげ”ティーチだ  
！」

「……」

白ひげは黙って赤髭の言葉を聞く。

「油断などしていなかった。俺が言いたいことがわかるか！？あいつはじつと機を待ってた。隊長の座にもつかず名を上げず。自分を隠し”白髭”というデカイ名の陰に潜んでた！」

『力を得て最終的には頂点を狙ってくる。自分の意志でお前の座も奪いに来る！』

「……俺にどうしろってんだ？それが本題だろ？」

しばらく間を置き赤髭が口調を強めて言う

『エースを止めてくれ！』

「！？」

「若くも一団の2番隊長を任される男だ。エースは強い。だがその名声と信頼が話をこじらせる今はまだあの2人をぶつける時じゃない！」

『黒ひげ』 ティーチから手を引け！ たったそれだけの頼みだ』  
「…… グララララ！ ハナタレボーズが言うようになったな」

白髭の放つ圧迫感が強さを増していく

「あいつは海賊船で最もやつちやいけねえ」 仲間殺し”の罪。鉄の  
掟を破った。俺の船に乗せたからにはどんなバカでも俺の息子よ。  
殺された息子の魂はどこへ行くんだ！」  
「……」

『仁義を欠いちや人の世は渡れねえとティーチのバカに教えてやる  
のが俺の責任だろうがよ……！！』

鬼のような形相で赤髪を睨みつけるが赤髪も動じず睨み返す。

緊迫した空気が流れる中、白髭は酒を一気に飲み干す。

赤髪も杯の酒を一気に飲み干し腰の剣を抜く。

「おれに指図するなんざ100年早エ」

『誰にも止められなくなるぞ！ 暴走するこの時代を！』

薙刀を手に取り白髭が斬りかかる。

『恐れるに足らん！ 俺ア』 白ひげ”だ！』

2人の武器がぶつかり天が割れる。

これから先の時代に何が待つのか……それは誰も知らない……

第九十九話 天の分目（後書き）

感想をお願いします。

## 第百話 船と休暇と懸賞金？

「ガレーラカンパニー仮設本社」

部屋の床に座り新聞を広げゾロはエニエスロビー事件の記事に目を通す。

ゾロの隣に座りキラも新聞を覗き込む。

キラの長い髪がゾロの読みたい部分を隠す。

「キラ。髪が邪魔くせえ」

「あれ？フランキー一家のことがまったく載ってないぞ」

ゾロの言葉を無視しキラは記事を読み進める。

どうやら青キジが情報をイジってくれたみたいだな……

何にしてもよかった。彼等まで逃亡人生じゃさすがに可哀想だ。

キラは安堵の表情を浮かべゾロの側から離れる。

フランキー一家の情報はなかったことになっていたがそのかわり

……

世界政府に宣戦布告、島が燃えたことまで全て麦わら一味の仕業になっていた。

ゾロがうれしそうに呟く。

「こりやまた懸賞金上がりそうだな。」

「ロロノア……懸賞金上がるってことはこれまで以上に戦いが辛くなるってことだぞ？」

満面の笑みで「願ったり叶ったりだ」キラは呆れて溜息を吐く。

うれしそうな顔でチョッパーがサンジに尋ねる。

「おれも賞金首になれるかな！」

「まあ可能性はなくてもないが大変なのは俺だよ……」 巨星現る”だ。

喜ぶ2人にナミも呆れているようだ。

懸賞金上がるってというのは確かに有名になる海賊としてはとても良いことかもしれない。

だが有名になればなるほど政府からの目が厳しくなる。

その時は……覚悟しなければならぬ。さらなる強者との戦闘を

……

フランキーが船の完成まで5日欲しいということだ

ルフィー一行はウォーターセブンでしばしの休暇を過ごす。

各々が休暇を過ごす中……

「あれ？ロビン。キラは？」  
「さあ？さっきまでそこにいたんだけど……」

ナミとロビンは船に豪華な家具がほしいと言うナミの希望を叶えるため家具を見に来ていた。

物持ちの為キラも連れてきたはずだったが気付けばいなくなっている。

キラがどこにいったのか？彼は一人海岸に来ていた。

昔の自分を越えるため……創造を繰り返す行方。

創造を具現化するにはそれ相応の疲労がある。

それは……脳の疲労。

自分が創造するものを形にするのは難しいこと。

過去の自分との決別……それは己との戦い……

新しい船の完成を待つて3日目。

記録も溜まり後は新しい船を待つばかりとなった。

ログポースは下を指す。次の島は海底の楽園”魚人島”

サンジは美しい人魚を夢見て舞い上がっている。

「楽しそうなところ悪いんだが……」

キラが口を開く。全員の目が自分に集中したのを確認し話し始める。

「魔の三角地帯” 魚人島に到達するにはそこを通らなきゃ行けない。」

「何それ？」

新聞をテーブルの上に広げ記事を指差す。

ナミが新聞に目をやると「今月もまた14隻船が消えた」と書いてあった。

”魔の三角地帯”についてキラは全員に説明を始める。

「その海では毎年100隻以上の船が消息不明になる……そして後々船から船員だけが消えた船が見つかる……死者をのせて海をさ迷う”ゴースト船”の目撃情報が後を立たないって話だ」

「オバケ出んのか！こええええええ！」

口を大きく開けチョッパーは恐怖する。

対照的にルフィは「ガイコツに会えるのか！」と楽しみにしているようだ。

「やだ！絶対遭いたくも見たくもない！その海何が起きるの！？」



ナミが震えながらキラに尋ねる。

実はキラも深くは知らない。

なぜなら”何か”が起きた船は海から出てこないのだから

「ともかく、遭難が多く危険な場所だ。しっかりと準備して置こうな。」

キラは全員に呼びかけるが……

言わないほうが良かったのではないかと思っくらいナミの気分は落ちこんでいた。

頭を掻き「失敗したかな？」と言いながらロビンの方を見る。

「任せて」とキラの耳元で囁きロビンは話し始める。

「”ゴースト船”には「宝船」の伝説がつきものよね。」

なるほど……ナミの扱い方がわかってるな……キラは関心して頷く。

ロビンの予想どおりナミは「”ゴースト船”を探すのよ！」と一気に元気を取り戻したようだ。

クスクスとロビンとキラは顔を見合わせて笑う。

休暇らしくほのぼのとした時間を過ごしていた……その時

バタンと勢いよく部屋の扉が開きキウイとモズが息を切らしながら

『フランキーのアニキがみんなを呼んで来いって!』

『夢の船が完成したんだわいな!』

「すごい……もう出来たのか!」

5日ほしいとのことだったが……船大工5人で夜通し造ってくれたらしい。

急いで船を見に行こうと部屋を飛び出した。

こちらに向かってくる人影がある。

『麦わらさーーん!』

フランキー一家がこちらに向かってくる。

「あんた達どうしたんだわいな?息切らして。」

「実は……無理聞いて貰おうと……手配書見ましたか!?」

「手配書?」

「麦わらさん、とんでもねえ額ついてるぜ!他のみなさんも追加手配されちまつてる!」

嬉しそうな顔を見せるサンジとチョッパーとは対照的にナミは落胆の表情を見せる。

フランキー一家のザンバイは手配書をバサバサと地面に広げた。

「じ、これは……」

「あんたら8人全員の首に賞金が！」

キラは自分の懸賞金を見て微笑む。

旋律のキラ

懸賞金：2億5000万ベリ

---

”死神”の半分の額か……

彼の中で当面の目標が決まった。それは5億越え。

第百話 船と休暇と懸賞金？（後書き）

感想お願いします

## 第一百一話 総合賞金額

ルフィの懸賞金は3億ベリ、ゾロは1億2000万ベリと一味に億越えの賞金首が3人となった。

自分の額を楽しみにしていたサンジ、チョッパーは7700万ベリと50ベリ。

賞金首になることを恐れていたナミは1600万ベリ。

ロビン8000万ベリ。そげキングが3000万ベリ。

そしてキラが2億5000万。

これで一味の総合賞金額<sup>トータルバウンティ</sup>8億7350万。

「上がった！見るキラ！3億だとよ！」

大喜びでルフィはキラの肩を揺する。

キラにはルフィの金額よりも気になっていることがあった。

「だ、誰だ」

サンジの手配書にはなぜか写真がなく絵が描かれていた。

楽しみにしていたようなので可哀想なのだがこればかりは……

「キラ！何で！何で俺！50ベリなんだ！」

「さ、さあ、何でだろうな？」

理由はわかっている。

”わたあめ大好きチョコッパー”【ペット】

手配書にはペットの文字……たぶんこれのせいだろう……

あるものはショックを受け、またあるものは喜ぶ。

キラはそれぞれの反応の違いを見てクスクスと笑っていた。

「ま、まあ色々と言ってエ事はあるだろうが、俺達の頼みつてのはこつちなんだ！」

ザンバイがポケットから新たな手配書を出す、そこにはフランキーの姿が……額は4400万ベリー。

どうやらフランキーだけが指名手配されてしまったらしい。

このままウォーターセブンに居ては命が危ない。

だからこそザンバイはフランキーのことを思いルフィ達に無理矢理でもいいから海へつれだしてほしいと言うことだ。

こちらとしては船大工がほしかったこともあり願ったり叶ったりだが……

フランキーが素直についてくるだろうか……

この他にもう一つ問題がある……ウソツプのことだ……

あいつは戻ってきてくれるだろうか……

第一百一話 総合賞金額（後書き）

スリラーバーク編の前に何か盛り込めないだろうかと模索中なんです

が  
今の所考えているのが悪魔の実の能力者との戦いです。

これはオリジナルキャラクターを使おうと思ってます。

どんな実がいいだろうか……



## 第二百二話 新たな船

部屋に戻り出航の準備を整えているとゾロが話し始める。

「お前らウソップの事はちゃんとハラを括ったな？」

キラは俯きゾロの顔を確認する。

ゾロも厳しい顔つきをしていた。彼も軽い気持ちでは言っていないのがわかる。

「これが”筋”ってもんだ……」

「ああ。わかってる……」

手配書とにらみ合いながらサンジも険しい顔をしていた。

しばらくサンジを見ているとプルプルと震えだしキラの眼前に手配書突き出す。

『キラ！教えてくれ！これのどこが俺なんだ！何で俺だけ絵なんだよ！』

「さ、さあ？何でなんだろうな？」

キラは口元を押さえながら答える。口元を押さえているのは手配書を見るだけで

笑いがこみ上げてきて思わずにやけてしまうからだ。

もし、笑っているのが何を言われるかわかったものではない。

「笑われる……世界中のレディーから笑われる……」

「アツハツハツハ！もうダメ！堪えられねえ！」

サンジの手配書を指差しキラは大笑いし始めた。

「テメエ！キラ！笑いすぎだ！」

出航の準備は一向に整いそうにないルフィ達を見てキウイとモズが溜息を吐く。

一体いつになったら出発できるのか……

（ウォーターセブン廃船島）

徹夜で船を作ってくれたらしくアイスバーグとヨコヅナ、一番ドックの職長達は疲れきって眠っていた。

そこへ出航の準備が整った麦わら一味が現れる。

「おーい！フランキー！船くれー！」

キラが辺りを見回すがフランキーの姿がない。

フランキーは情に厚い男だ。大方別れがさびしいとかそういつことなのだろう。

「あいにくフランキーは外しててな。だが船は出来てる。俺が代わりに見せよう」

大きな布がアイスバーグの手によって外される。

船首がライオンで出来ている船が姿を現した。大きさはメリー号の2倍はあるだろう。

「ブリガンティンのスループ型か……」

船を見つめボソツツとキラが呟く。アイスバーグはキラの方を見て微笑む。

「よくわかったな。これは”ブリガンティンスル”。”スループ船”は人の創造の赴くままに帆走はんそうする船。」  
「活かすも殺すも航海士の腕次第ってことですか……」

ナミの方を見ると自分の胸をドンと叩く。本当に頼りになる航海士だ。

全員で船の中を見てまわる。キッチンにはサンジの欲しがっていた鍵つき冷蔵庫に巨大オーブン。

甲板は芝生で出来ていてルフィが走り回る。

本当にすばらしい船だ。これならどんな辛い航海にも耐えられるかもしれない。

「なあ、アイスのおっさん。フランキーにお礼がいてえ！」

「もうお前等に会う気はないらしい。あいつを”船大工”として誘う気なのか？」

「うん！よくわかったな！船大工はあいつに決めただ！」

「それを察したようだ」

キラはクスクス笑いながらフランキーハウスへと歩き始める。

フランキーハウスへ向かう理由は一つ。

”船大工”を無理矢理にでも船に乗せる為……

第百二話 新たな船（後書き）

短くて申し訳ないです。

感想お願いします。

### 第百三話 船大工

〔裏町フランキーハウス跡〕

フランキーは子分達の所へと戻ってきていた。

ルフィ達のことを心底気に入り”夢の船”まで託した。

本当は一緒に海へと出たいはずだ……だが彼にはこの島にいなきやいけないという”義務”を自分に課している。

”トム”の愛した”水の都”を守り抜くという”償い”。

”償い”が”義務”となり”夢の船”での出航の足枷あしかせとなっている。

だからこそ誰かが無理矢理にでも連れ出さなければならぬ。

「よお、フランキー。早速だがウチの船大工になってももらえるか？」

フランキーハウス跡を訪れたキラはフランキーの姿を見つけ勧誘する。その場にいた全員の目がキラに集中した。

「キラか……今回は世話になったな。誘いは嬉しいんだけどよ……」  
「行ってくれよ！アニキ！手配書も出てる！もう俺たちと一緒にいてもダメです！」

首を横に振りキラと一緒に行くことを拒む。

何か……フランキーをこの場から動かす方法はないのか……？

力づくしかないか……

俯いていたキラが視線を上げ歩き出した……ザンバイがキラの肩を掴み囁く。

「俺達に任せてください。絶対にアニキを船まで連れて行きます」  
「方法があるのか？」

ザンバイは頷きフランキー一家の1人に目で合図を送る……すると突然フランキーを押し倒しパンツを奪い取った。

『パンツ取ったー！』

「でかした！よし！キラさんに渡せ！」

パンツがキラのもとへと投げられるが……キラはパンツをかわす。

ザンバイが急いでパンツを拾い他の仲間へと渡した。

フランキー一家は一斉に廃船島まで走る。

「パンツ返せコラ！」

立ち上がりパンツを追いかけるフランキー。

ザンバイはキラの方を見る。

「何で受け取ってくれなかったんですか！」

キラは髪をかきあげザンバイを一睨みし……ゆっくりと口を開く

「汚そうで触れなかった……」

啞然とするザンバイをその場に残しフランキーの後を追った。

あれは……？

フランキーの後を追いついて走っていると海軍の船が目に入る。

ガープ中将……こちらには手を出さないと断言してなかったか？

『『キラ！』』

ゾロとサンジがこちらへと走ってくる。

「フランキーは？」

「もう廃船島に向かった！俺たちも急ぐぞ！」

「急ぎこの島から逃れなければ”英雄”に新しい船ごと沈められてしまっ。」

キラ達は廃船島へと走る。

フランキーの隣を通り過ぎキラは船へと飛び乗った。

「ルフィ。お前のじいちゃん。攻撃態勢でこっちに来てるぞ」

「えっ！？捕まえねえんじやなかったのか！？」



「さあ？気まぐれとかじゃないのか？急いで出航するぞ。フランキーにパンツ返してやりな」

ルフィは頷きフランキーへパンツを投げる。

「さあ、乗れよ！おれの船に！」

「へへっ……生意気言っくんじゃねえよ！ハリボテ修理しかできねえド素人共め」

クスクス笑いながらキラはフランキーに声を掛ける。

「こんな立派な船に大工が1人もいないと船が不憫だよな？フランキー？」

「仕方ねえ……世話してやるよ！お前等の船の船大工！俺が請け負った！」

また頼もしい仲間が増えた。あとはウソップが戻るだけで全員が揃う。

第百三話 船大工（後書き）

感想おねがいします

## 第四百話 一味とは……

ウソップが来ない……このままでは……

船が完成する前……ルフィ達はウソップについてこんな話をしていた。

「えっ？ウソップは戻ってくる！？」

ルフィが大声を出す。

それほど驚くことなのか……？ キラは首を傾げた。

「ああ。海岸で予行演習してたぞ」

サンジがそう告げるとルフィとチョッパーが今すぐにも迎えに行こうと出口へと向かう。

『待て！お前等！』

ウソップの元へと向かおうとする2人をゾロが怒鳴りつける。

腕を組み鋭い目つきでルフィ達を睨みつけた。

「誰一人こっちから迎えに行くことは俺が許さん」

何故迎えに行つては行けないのか……ルフィは困惑の表情でゾロを見つめる。

ゾロは言葉を続ける。

「間違つてもお前が下手に出るんじゃないやねえ。俺はアイツから頭を下げてくるまで認めねえぞ！」

「ちよつと！何であんたがそんなこと決めるのよ！」

ナミが思わず口を挟む。

『黙れ！』

黙つてやり取りを見続けているキラをロビンがヒジで小突く。目が「止めなくていいの？」と言っている気がするが……ゾロの考えにも一理ある。

一味を抜けるというのはそんなに簡単な話ではない。ましてや抜けた一味に戻ってくるなどありえないことだ。

ゾロが怒気を込めた口調で話し続ける。

「ルフィとウソップの口論にどんな想いがあるうがどっちが正しかろうが。男が”決闘”を決意してアイツは敗れて勝手に出て行ったんだ」

ルフィの頭を刀の柄の部分でガンガンと叩きながらゾロは話続けた。

「いいか？こんなバカでも”船長”だ。いざつて時にコイツを立てられないような奴は一味にいない方がいい！船長が”威厳”を失った一味は必ず崩壊する！」

一味の崩壊……キラは仲間達を見回す。

考えたくもない……俺は少しでも長くこいつらとバカしていたい……

「普段おちゃらけるのは勝手だが仮にもこの俺の上に立つ男がダラしねえマネしやがったら……今度は俺が一味を抜けてやるぞ！」

「え！それじゃ話がまとまらないじゃない！」

「あのアホが帰ってくる気になったのは結構な事だ。だが今回の件でケジメもつけず、うやむやにしようというなら俺は許さん！その時はウソップはこの島に置いて行く！」

ゾロなりに一味のことを考えての発言だ……文句はないが……厳しいな……

実際なら”副船長”であるキラが言うべきなのだろう……だがキラは仲間に対する想いが強すぎる。

それがわかっていているからゾロは自ら恨まれ役を買って出てくれているのかもしれない。

「でも……ゾロ。確かにあいつも悪いところはあったけど……それは帰ってきてから言いたいただけ言えば……」

「一味を抜けるってのはそんなに簡単なことなのか！？」

刀で強く地面を突き全員を睨む。

「こんな事を気まぐれでやる様な男を俺たちがこの先信頼できるはずもない。簡単な話だウソップの第一声が深い謝罪ならよし。それ以外ならもう奴に帰る場所はない」

『俺達がやってんのはガキの海賊ごっこじゃねえんだぞ！』

ゾロの言うとおり……命のやり取りをしてる以上、信頼は不可欠。

今まで黙っていたルフィが口を開く

「そうだな！一度は完全に別れたんだ！船の完成と出航までまだ何日もある！黙ってアイツを待とう！」

結局今だにウソップは姿を現さない……

このままではガープ中将に追いつかれてしまう……キラの頭に”出航”の文字がよぎった。

第一百四話 一味とは……（後書き）

感想をお願いします。

第五話 もう一度仲間に……

麦わら一味の新たな船”サウザントサニー号”が出航する。

ウソップの姿はサニー号にはない……仕方がない”船長”の決定だ。それにルフィ達は待った。

サンジから話を聞いてから船が完成するまでの間待ち続けた。だが……彼は来なかった。

「本当に本当に待たなくていいんだな？麦わら」

「待ってたさ。サンジから話を聞いてからずっと……」

ガレーラの部屋が留守にならない様ずっとルフィは待っていた。

これがウソップの出した答えならば文句を言う権利はこちらにはない。

「海賊はやめないだろうから……そのうち海で会えるといいな」

ルフィの肩を叩き笑顔を見せる。

「キラ……うん。そうだな」

砲弾の音がしてサニー号の船体が揺れた。ガープ中将……追いついてきたか……

ガープが拡声器を手にこちらへ呼びかけてくる。

『ルフィ。聞こえとるか！こちらじいちゃん！』



「じいちゃん！何だよ！俺たちの事ここでは捕まえねえって言ったじゃねえか！」

ルフィの言うとおり「逃がした」ことにしてくれと言っていたはずだ。

きつと気まぐれなんだろう……

『いや、まあ色々あってな。すまんが海のモクズとなれ。お詫びといつちや何じゃが……わし一人でお前らの相手をしよう！』

大砲の砲弾を手に取り投げる体勢を取る。

「な、何する気だ！？」

「投げるに決まってるだろ……みんな！船にしがみついとけ！」

『拳・骨……隕石<sup>メテオ</sup>！』

大砲よりも強く・速く砲弾が飛んでくる……数年前と変わってないな……

直撃はしなかったものの船が大きく揺れる。

『ぶわっはっはっは！年は取りたくないもんじゃ！最近パワーが落ちているわい！』

あれでパワーが落ちたのか……化物か……

新しい船を粉々にされる訳にはいかない……急ぎこの場から逃げなければ……

ガープは新たに砲弾を用意している……砲弾数は1000発  
舌打ちをしてキラはガープの船を睨む。

「船はこのまま前進だ！ルフィ！砲弾を叩き落すぞ！」  
「おう！ゴムゴムの風船！」

《くそ！本当に来ねえのか……あいつ……》

「サンジ！余計なことを考えるな！この場を切り抜けることだけ考  
えろ！」

「ああ。すまねえ！キラ！」

我に返り砲弾を蹴り落とす。

キラはふと気付く……アイツの声に……

「ウソップ……おい！ウソップが来たぞ！」

ウソップが船に向かって走ってくる。

だが……もう船は岸からだいぶ離れてしまっていた。

「よし。俺がウソップを連れてくる！」

『ダメだ！アイツの口から謝罪の言葉が聞こえねえ！』

ゾロがキラの腕を掴み離さない。

唇を噛み連れ戻しに行きたい気持ちを押さえ込む。

「キラ！ウソップが呼んでるよ！」

チョッパーが涙目でキラの腕を掴み揺するが……動くわけにはいかない。

ウソップが土下座し謝罪の言葉を叫ぶ。

『ごめん！意地はつてごめん！俺が悪かった！今更みつともねえけど……俺一味やめるって言ったけど……アレ取り消すわけにはいかねえかなあ！頼むからよ……もう一度！おれを仲間に入れてくれえ！』

待ちに待った言葉が聞こえた……キラがルフィの肩を叩き頷く。

『バカ野郎！早く掴まれ！』

手を伸ばしたルフィの顔は涙でいっぱいだった。

ルフィも我慢したのだろう……迎えに行きたい気持ちを抑え船長として務めた。

「ご苦労さん。よく我慢したな”船長”」

笑顔でルフィの頭を撫でキラは大声を上げる。

『よし！全員揃ったな！とつとと砲撃抜けて！先に進むぞ！』  
『おーーーーー！』

## 第六話 出航”水の都”

フランキーが帆をたたみ始める。

「何する気だ？」

「大丈夫！まあ、見てろって！」

この船を造った本人が言うのだから間違いはない……はず……キラはフランキーの笑顔を信じることにした。

「今の内にこの美しい”水の都”を見納めとけ！あつと言つ間に島のかげも見えなくなるぞ！」

”水の都”を見つめる……アクアラグナの影響を受けて街は壊滅的打撃を受けた……だが街の人々は明るい本当にいい街だった。

ルフィはガープに別れのあいさつをする。

「じいちゃん！それからコビーと……久しぶりに会えてよかった！俺達本気で逃げるからな！砲撃してもムダだぞ！またどこかでおう！」

「おのれ！わしの子供の子供のクセに生意気な！」

ヘルメツポが暴れるガープを押さえつけているが……長くは持たないだろう……今のウチにキラは船大工達に見えるよう大きく手を振り別れの挨拶をすませる。

「アイスバーグさん。キラの勧誘よかったですか？」

遠ざかっていくサニー号を見つめアイスバーグは笑う。

「ンマー勧誘したって無駄さ……」

「そうですか……まあ、あいつは海賊が好きみたいですからね……」

パウリーは笑顔で手を振っているキラに手を振り返す。

海軍船ではコビーが大声を上げ麦わら一味に呼びかける。

「みなさん逃げてください！殺されちゃいますよ！」

ガープは巨大な鉄球を持ち上げこちらに投げようとしている。あれが当たるといくらサニー号とはいえひとたまりもない。

「わしをナメとつたら……ケガするぞ！」

巨大鉄球がサニー号に迫ってくる……まだなのか……フランキーの方を見ると大きく頷いている。どうやら準備は出来たようだ。

『行くぜ！風来バースト！』

サニー号が海軍船から飛んで逃げていく。

ウォーターセブンの人々から歓声が上がリ……海兵達は目を丸くして驚いている。

「コーラ樽3つ消費しまうが1km飛べる！お前等の乗ってきたメリー号に出来てこの船に出来ないことは何一つない！全てにおいて上回る！だがあの船の勇敢な魂はこのサニー号が継いでいく！破損したら俺が完璧に直してやる！船や兵器のことは何でもおれを頼

れ！」

麦わらの一味に頼りになる船大工が出来た。

海軍船から見たサニー号は遙か遠く……さすがのガープも追いつくとをやめたようだ。

キラはサニー号の船体に触れ目を瞑る……これからはこいつが……新たな仲間……

《よろしく……サニー号……仲良くやろうな……》

ナミに肩を揺すられ目を開ける。

「どうしたの？」

「いや……なんでもないよ。さあ、ロビンとウソップの帰り。新しい仲間フランキーに乾杯しようか。」

笑顔でグラスを取り一味全員で乾杯する……これから目指すは海底にある楽園”魚人島”……エニエスロビー事件でより一層結束をかためた麦わら一味

これから先どんなことが起きても乗り越えることが出来る……キラはそんな気がしていた……

## 第一百七話 新たな武器は？

”水の都”を出航し”魚人島”を目指すルフィ一行。

甲板で日向ぼっこをしながら気持ちよさそうに昼寝をしているゾロを揺ると大きなアクビをして目を覚ます。

「何だよ……人が気持ちよく寝てんに……」  
「お願いがある」

キラは真剣な面持ちでゾロの顔に目をやった後……アメジスト色の瞳はゾロの腰にささっている刀を見つめる。

「俺に……剣を教えてくれ」  
「あ？何言ってるんだ？お前に剣は必要ないだろ？」

自分の偽者”死神のユダ”が現れたこと……過去の自分と決別して”旋律のキラ”として生きていきたい気持ちをゾロに伝えた。

過去の自分との決別の為”死神”の武器である”鎌”を捨てる……血液を武器にするスタイルを変える。それぐらいで”過去の自分を捨てられるとは思ってはいないが、昔と同じ戦い方をしているも”ルイン”の連中には通用しない。

「やめとけ。今さら昔の自分の戦い方を変えることは難しい」

ゾロの言つとおりかもしれないが……強くなるということに貪欲なこの男なら認めてくれるとおもっていた。

キラは俯き戸惑っていた。やはり……難しいか……わかっていたことだ……簡単に今までの戦い方は変えられない……

「死神としてのお前の力」が俺たちには必要だ。それに……剣を簡単に極められると思ってるのか？」

剣を極める……それは確かに難しいことかもしれない……かなりの使い手であるゾロでさえ”目標とする男”がいるほどに厳しいのだ。

だが……引き下がる訳にいかない……

「いいんだ……俺は……自分を越えたい……！」

しばらく黙って座っていたゾロが突然、刀を持って立ち上がる。鋭い眼光でキラを睨みつけ口を開く

「俺もまだ修行中の身だが……いいだろう。教えてやる」

「ああ。ありがとう」

「キラ……お前……剣は？」

「ない！」

「……仕方ねえ奴だな」

ゾロは刀をキラに放った。受け取った刀からは恐ろしいほどの狂気を感じる……

「妖刀か……」

「……三代鬼徹。妖刀だが切れ味は確かだ」



コイツ……妖刀を俺に？……使いこなせるわけないだろ……

キラの戸惑いに目もくれずゾロは戦闘体制に入る。

「強くなるためだもんな……行くぞ……ロロノア」

「ああ。全力で来い……中途半端なことしてたら殺しちまうぞ」

ゾロの首目掛け刀を振り切る……キラの攻撃をかわし腹部に鋭く突きを放つ。剣先が腹部を掠め……血が滲む。

《ロロノアの野郎……本当に殺しに来てやがる……》

《いきなり首を狙ってきやがった……本気が……？》

睨みあい……2人同時に地面を蹴る……スピードでは圧倒的にキラが上を行っていたが剣術ではゾロが上……

キラの一撃一撃は確実に急所を突くがゾロは軽く攻撃をいなし軽症を負わせていく。ゾロとの距離を取り自分の傷を確認する。

腹部、脚、腕か……

《やべえ……燃えてきた……》

キラの瞳は輝きを増し相手を睨みつける……ゾロは危険を感じ取り受けの体制を取る。

一気にゾロとの距離を詰め全力で刀を振り切る。攻撃をいなそうとするが……

《……！ダメだ……早すぎる！受けるしかねえ……！》

攻撃を受けとめるがゾロの体は刀ごと甲板に叩きつけられる。キラは刀を振り上げ微笑む。

《こ、こいつ……イカレてやがる……》

ゾロは背筋に冷たいものを感じていた……

「キラ！何してんだ！」

フランキーがキラを押さえつけ刀を手から叩き落とす。

我に振り返りロロノアを見つめる……

「ロロノア悪い……ちょっと楽しくなっちゃってさ……」

「絶対にお前に剣は教えねえ」

ゾロは怒っているだろうか……フランキーが止めなければ俺はゾロを殺していたかもしれない……最低だ……

後悔しているキラの眼前に島が見えてくる……無人島なのか人の姿は見えない……入り江には海賊船が停泊しているようだ。

その海賊船の旗はガイコツの後ろに鎖が描かれていた。

## 第一百八話 宝？密林？

見たことのない海賊旗……ルーキーだろうか……。下手に上陸して争う必要もないだろう、ここは上陸せずに先へ進むべきだ。キラはナミに上陸せずに進むべきだと告げる……が……

「でもよキラ。海賊船がいるって事はお宝があるんじゃないかねえか？」

このサンジの不用意な一言が麦わら海賊団”泥棒猫”のハートに火をつけた。

「よし！ゾロ！イカリを下ろして！あの海賊船の奴等よりも早くお宝を見つけるのよ！」

イカリを下ろし上陸の準備を始めた。

ルフィも目を輝かせ「冒険の二オイだ！」とはしゃぎまわっている。

「サンジ！海賊弁当！」

「おう。わかってるよ」

大きく溜息を吐き島に足を踏み入れる。見渡す限りの密林……こんなところに本当に宝があるのだろうか……だが何も無いのだとすればこの海賊船は一体……

「不安そうね」

ロビンがキラの顔を覗きこむ。

「まあ……無人島つてのは何があるかわからないからな」  
「何だよびびってんのか。俺が守ってやるつかお嬢さん？」

おどけてフランキーがキラに声を掛けるが華麗に流す。

「こんな所”に宝なんてあるのかな……」

「”こんな所”だからこそあるかもしれないわ」

2人は顔を見合わせクスツツと笑う。

『おい！出発するぞ！キラ！ロビン！』

「あいつに”不安”とかはないのかね……」

船長が呼んでいる。クスクス笑いながらロビンは進んでいく。キラも不安を感じながら黙って付いて行く。

自分でも思うがかなり”不安性”なのかもしれない。いや……こいつの行動を見てると不安をかき立てられるのかもしれない……

ルフィが先頭を歩き、キラが最後尾を歩く。密林はとても蒸し暑く肌にまとわりつくような感じがする。暑さだけではない。ぬかるんだ地面に足を取られ疲労も蓄積して行く……

「おで……ダメだ……」

暑さでチョッパーが座り込んでしまう。座り込んだチョッパーを背負いフランキーは歩き出す。頼りになる男だ。

かなりの距離を歩いてきたが……ゴールはどこなんだ……？ 汗を拭い辺りを見回すが見渡す限りの密林……

「何なの……お宝はどこ……？」

「ないんじゃないのか……宝なんて……」

ゾロは誰もが薄々感じていたことを口にする。それを言ってしまうと一気に疲れが吹き出てきそうと言わなかったのだが……。ナミはその場に座り込み大きく息を吐く。

「少し休むか……いいだろ？キラ」

ナミを気遣いサンジはキラに休憩の了承を取る。もう何時間も歩き続けている……ここで休憩を取るのもいいだろう。

「ああ。少し休もう」

一味全員がその場に座り込む。それにしても暑い……この湿気がどんだん体力を奪っていく……

「なあ、キラ。弁当食おう！海賊弁当！」

「もう少し綺麗な場所に移動してからな……」

ルフィが「じゃあ進もう！」というが……元気なのは”コイツ”くらいだ。

人の声が聞こえる……こちらへと向かってきている……入り江にいた海賊船の奴等か……

ゾロに合図をおくり迎撃の態勢を取らせる。徐々に茂みを掻き分ける音が近ずいて来る……姿を現した瞬間にゾロが相手の首元へ刀を向ける。

「きゃあああああ！」「じめんさい！」

「お、女！？」

第一百八話 宝？密林？（後書き）

現在オリジナルで進行中です。

## 第百九話 女の正体

「ロロノア！油断するな！」

気を抜き刀を下ろそうとするゾロを一喝し女に詰め寄る。顔を確認するが……見たことのない奴だ……女というよりも少女と言っべきかもしれない。

あの海賊船に捕らわれていて……逃げ出してきたのか？ それにしては衣服も綺麗だ……あの海賊船の船員か？

少女は怯えた表情でキラを見つめていた。サンジが少女の前に立ち声を掛ける。

「大丈夫かい？かわいいお嬢さん？」

「か、かわいくなんかありません！」

先ほどまでの怯えはどこへいったのか……手で顔を覆って真っ赤な顔を隠しサンジの言葉を否定する。ゾロもその姿を見て完全に刀を下ろしてしまった。

この子……本当に海賊なのか……？

「お嬢さん。名前は？」

「キツシュ……です……」

キツシュと名乗る少女は栗色のフェミニンボブの髪に緑色の瞳、雪のような白い肌、服装は黒いワンピースと海賊とは思えない容姿をしていた。まるで異国の姫のような姿。年齢は……14、5とい



ったところだろうか……

「君は……海賊なのか……？」

キラの質問に対してモジモジしまつたく答えがかえってこない。痺れを切らしナミが怒鳴りつける。

「もう！はつきりしなさい！」

「は、はい！ごめんなさい！すいません！申し訳ないですう！」

何度も何度もキツシュは頭を下げる……話が進まない……

「ウチのコックが迷惑掛けてるみてえだな」

木の上から男の声が聞こえた。ゾロが刀に手を掛け辺り見回すが……木々が生い茂っているせいか姿がまったく見えない。

首を傾げキツシュはキョロキョロと密林を見回す。

「船長？どこですか？」

「おう！ここだ！」

麦わら一味の目の前に褐色の肌をした男が現れる……この男があの海賊船の船長だろうか……

男はルフィの方を向き笑顔を見せる。

「麦わらのルフィ！3億の男！会いたかったぜ！」

「ん？誰だ？お前？」

「ジョン・リード！海賊王になる男だ！」

リードは白い歯を見せ笑う。ルフィに会いたかったということだが……狙いは……一体……

くクリスsideく

青キジとクリスはシャボンティ諸島へと向かっていた。

「大将……」偽ユダ” 本当にまだシャボンティ諸島にいるんですかね……」  
「さあ？どうなんだろうな」

自転車の後ろに腰を掛けクリスは大きく息を吐く。

海をぼんやりと眺めているとポロポロの船が波に流されている。  
スツ……と船上に人影が見えた気がした。

「大将……あそこの船に誰かいた気がするんですけど……」  
「……乗り込んでみるか」

船へと乗り込み人がいないか確認する……やはり無人のようだ……  
……気のせいだったのだろうか……

「だれもいないっぽいなあ」  
「クリス。本当に誰かいたのか？」

「いたように見えたんですけどねえ」

青キジが呆れてため息を吐き船から降りようと船縁に足を掛ける。仕方なくクリスも青キジの後を追い船から降りようとすると……後ろから声が聞こえた。

「お久しぶりですね……クリス少尉」

「ジル……その面……昔と変わらねえな……」

黒いフードの下の顔は優しく微笑んでいた。ジルは背中に背負っていた大鎌を手取る。

ジルの口から自分が”偽ユダ”とも取れる言葉が飛び出した。

「”死神”が死を運びに来ましたよ……」

第百九話 女の正体（後書き）

感想をお願いします

## 第一百十話 消えた死神

「クリス side」

「ジルのくせに生意気な〜」

クリスはおどけて見せるがジルに反応はない……彼はもう”死神”となつてしまったのか……。青キジも船縁へと掛けた足を下ろし”死神”を睨みつけた。

「海軍本部大将青キジですね……初めまして……」

微笑ながら挨拶をするが……青キジは不自然さを感じていた。この男からは……”生”を感じられない……もし目を逸らしてしまったら……きっとこの男がここに存在していることすらわからないだろう。

「死を運びに来たと言っていたな」

「ええ。言いました」

「おもしろい……やってみ……」

すべてを言い切る前にジルが青キジへと襲い掛かる。大鎌を振りかぶり一気に振り下ろす。

攻撃を避ける必要など青キジにはない。悪魔のみ自然系”ヒエヒエの実”は物理攻撃を透過することはできずとも身体を氷とし砕かれても破片を集結させ再生することができる。

突然クリスが声を上げた。

「…………あの武器！？クザン！避ける！」

大鎌が当たる瞬間に横へ飛び攻撃をかわすが…………軽く脚を霞める…………。傷口から血が滲む…………

「覇気か…………？」

「いや…………違う。ルインで作られている武器は能力者対策の為に海楼石が使われてるんだ」

「…………厄介だな」

ジルは口元を押さえ小刻みに震えていた。恐怖…………ではないようだ…………口元の手をゆっくりと下ろすと満面の笑みを浮かべていた。笑顔の意図は…………青キジに一太刀浴びせたことか…………強者との戦いを喜んでいるのか…………

「胸糞悪い奴になったもんだな…………ジル」

「少尉こそ…………完全に政府の犬ですね」

「ワンワン！なんてな」

鋭い視線がクリスに向けられていた。視線はどこから来るのか…………

「…………！た、大将…………なんで俺を睨んでるんですか？」

「ふざけてる場合か…………全力でやるぞ…………」

クリスは青キジの言葉に頷き手の平に出現させた鏡の破片を宙に投げる。破片はジルを取り囲み身体中に突き刺さった。ゆっくりと

前のめりに倒れていく。

「あらら。あっさりだねえ」

「死神”にしては手ごたえねえなあ」

2人はうつ伏せに倒れているジルを仰向けにし確認する……身体だけではなく顔にも鏡の破片が突き刺さっている。不自然なのは流血していないことだ……こいつの身体どうなってるんだ……？

「さて……帰ろうか……クリス」

「ですね。本部にはどうやって報告します？」

「しなくていいんじゃない。”死神”は再び姿を眩ましたってことで……何？」

鏡の破片を残して”死神”の遺体は消えていたかわりにその場所には泥の塊が残っていた……。

くキラsideく

ジョン・リード？ 聞いたことのない名前だ……。

握手を求めリードは笑顔でルフィに手を差し出す。ルフィは差し出された手を無視しているどうやら先ほどのリードの「海賊王になる」が気に入らなかったようだ。

「海賊王になるのは……俺だ！」

突然のルフィの発言にリードは眉をひそめる。お互いに海賊王は

譲れないらしい……

「……どっちが海賊王にふさわしいか……勝負でもするか？」

「望むところだ！」

お互いに睨みあい戦闘態勢を取る……。このリードと言う男……ルフィが3億の賞金首だと知っていても臆することなく向かってくるとは……。

『『うおおおおおお！』』

2人の拳がぶつかる瞬間……「何してんだ！バカリード！」大男が叫びながら走ってきてリードを殴る……木を2〜3本へし折りながら吹き飛んでいく……

「いってえじゃねえか！クソゴリラ！」

「誰がゴリラだ！」

啞然として2人のやり取りを見つめる麦わら一味に気付きキツシユが2人の間に入り言い争いを仲裁した。大男は「ゴホン」と咳払いをしてこちらを見る。

「すまん。ウチの船長が迷惑掛けたみたいだな。」

「いや、ルフィを止めなかった俺が悪かった。申し訳ない」

キラは頭を下げ大男に謝罪する。ルフィが再びリードとにらみ合いはじめたので頭を掴み謝らせる、それを見た大男もリードの頭を掴み謝罪させた。

「申し遅れた。俺は副船長の……」



「 ” 旋律のキラ” だろ？ 知ってるよ。俺はリード海賊団副船長” ゴリアテ” だ」

2人の副船長は固く握手する……お互いに困った船長を持つ身……  
…うまい酒が飲めそうだ。

第一百十話 消えた死神（後書き）

感想をお願いします。

第百十一話 上陸した目的は……

「お前等は何でこの島に？」

こちらが聞きたかったことを先にリードに聞かれてしまった……何と答えればいいのだろう……言葉につまり黙っているとナミがキラのかわりに答える。

「お宝よ。あんたたちもそうなんでしょ？」

リード達は唾然としていた……どうやら彼等は宝目的で停泊していたわけではないようだ。

「宝があんのか!？」

「えっ!？お宝目的で停泊してたんじゃないの!？」

ポカーンとした顔を浮かべるキツシュとゴリアテ。大笑いするリードにナミは顔を真っ赤にして詰め寄る。

「じゃあ……何で停泊してたのよ……!」

「ウチには海賊のくせに船酔いする奴がいてな。そいつの為に停泊してるだけ」

大きな溜息を吐きナミはサニー号へと歩き出す。宝がないと知って興醒めといったところだろうか……。確かに宝がないとわかった以上この島にいる必要もないだろう。

「ルフィ。帰るぞ」

「えっ? いいのか?」

「ああ。宝がないならもう島にいる必要はないよ」

それだけ言い残しリード達に別れを告げ船へと戻る。またあの長い道に戻るのには辛いがこれ以上先へ進んでも何も無いというなら進む必要はない。

サニー号へとたどり着くとナミがムスツとした表情でルフィ達を待っていた。

「先へ進むわよ！もう！時間の無駄だったわ！」

サニー号へと乗り込み出航の準備を始める。

「もう出航する？」

「ああ。そのつもりって……誰だ？」

知らない男が船に乗っていた。いつの前に……やはり船番がいなかったのがダメだったのかもしれない。この島に人なのか……それとも……

「き、君は？」

「クランド」

クランドと名乗る男は黒く長い髪、瞳の色は赤く、腰には野太刀を挿している。リードの所の船員に違いない……。

とりあえず自分の船に戻るよう話すが……

「ヤダ」

「はい？何か戻りたくない理由でもあるのか？」

真っ直ぐな瞳でゾロを見つめ刀に手を置く……そして……

「……ッ!？」

ゾロは見えない斬撃を刀で受け止め後方へ吹き飛び船縁にぶつかる。何が起こったのかキラにはわからなかった……男はその場からは、まったく動いていない……。

「テメエ……」

「さすが1億2000万の剣士は違うね」

「覚悟……出来てんだろっな……」

2本の刀を抜きゾロが戦闘態勢に入る、クランドも微笑みながら構えた。ゾロが自分の間合いを取る為距離を詰めた瞬間……クランドの手が一瞬だけ動いた。

「ぐふっ……」

「ろ、ロロノア!？」

膝を突きクランドを睨みつける。ナミは何が起こったのかと瞬きを繰り返す……それほどまでにクランドの斬撃は見えない。正確には早すぎて目で追いきれない。

「居合いか……あの長い刀であれほどの速度……すごいな……」

「ああ。かなりの使い手だ」

ゾロの腹部には青いアザが浮かび上がる……峰打ちのようだ。

「おい……飛ぶ斬撃をみたことあるか……」  
「飛ぶ斬撃？」

『二刀流……七十二煩惱鳳！』

斬撃をまともに受けクランドが腕から血を流す……ゾロは畳み掛けるように距離を詰め……刀を逆手に持ち替えた。

『二刀流……犀……！？』

一瞬だけ……クランドの瞳が光った。ゾロは相手との距離を離し大きく息を吐く……呼吸は荒く汗が額に光る。クランドの放つ殺気がゾロの手を止めたようだ。

クランドは腕の血を手で掬い自分の唇に塗り始めた。

「おもしろい……」

黒手拭を頭に巻きゾロは呼吸を整える。クランドも何かブツブツと呟いたと思うと……真っ直ぐにゾロを睨みつけた。先ほどまでの少年のような顔とは違い鬼の形相になっている。

3本の刀がないゾロはどうするのか……。残った2本の刀を鞘へと納め腰の両側に1本ずつ構える……。クランドは鞘に納めたままの野太刀を肩口に構えた……。

『二刀流……羅生門！』

『……霊峰！』

2人の刀がぶつかる瞬間……鎖が双方の刀を絡めとり弾き飛ばす

……

「……クランド。船酔いでダウンじゃなかったのか？」

「リード。せつかくいい所だったのに邪魔するな」

リードの腕からは鎖が垂れ下がっていた。2人の刀を弾き飛ばした鎖はリードの放った鎖のようだ。

「リード……お前は……」

「ジャラジャラの実”の鎖人間……かっこわりいだろ」

クスツツとリードは笑った。

第百十一話 上陸した目的は……（後書き）

リードの能力は鎖にしよう！と決めていましたが……どうでしょう  
……ありですかね

正直ネーミングセンスがないものでジャラジャラの実にしたんです  
が……

何かほかにいいネーミングがあればそちらにしたいと思います。

感想お願いします。



## 第一百十二話 ゴースト船

「悪魔の実の能力者だったのか……」

リードの顔を見つめキラが呟く。ゴリアテが現れクランドの首根っこを掴み持ち上げる。

「クランド……船酔いで動けないんじゃないのか？」

「だってさゴリちゃん……目の前に強い剣士がいたら戦いたくなるものだよ？」

船酔いが治った理由としてはかなり不十分なことを言い出すクランド。いつの間にかキツシュまでがサニー号へと乗船しクランドを叱り付けている……どうやら彼はリード海賊団の問題児のようだ。

「すまないな。ロロノア・ゾロ」

ゴリアテは大きな身体を屈めゾロに頭を下げる。

「いや……そいつの言う”強い剣士が現れたら戦いたくなる”ってのいうもわかる。気にするな」

自分の言っていたことが正しいと言うような顔をしてクランドはゴリアテを見つめていた。だれが考えても正しいのはゴリアテなんだが……何故かクランドはふんぞり返っていた。

リード達はサニー号から下船しルフィ達に別れの挨拶をする。

「俺たちはもう少しこの島にいる！またどこかで会おう！ルフィ！

どちらが先に海賊王になれるか勝負だ！」

「おう！負けねえぞ！俺が先に海賊王になる！」

海賊王には良い好敵手ライバルも必要かもしれない……リード達との出会いは麦わら一味のこれからにどう影響するのだろうか……

リード達と別れて数日後……魚人島を目指すルフィ一行の前に……

「おい！キラ！見てみる！あれってお宝か！」

ルフィの指差す先には……海神御宝前かいしんごほうぜんの文字が入ったタルが海に浮かんでいた。

「いや、酒と保存食だな」

「へえ〜何でわかるんだ？」

「海神御宝前かいしんごほうぜんっていうのは、誰かが航海の無事を祈って海の守護神に供え物をしたって事さ」

つまらなそうな顔をしてルフィは話を聞いている宝を期待していたのだから……。ルフィとは対照的にゾロは酒と聞いて早速タルに手を伸ばす。

「バカ！バチが当たるぞ！」

「俺は神には祈らねえ」

ゾロとウソップのやり取りを無視してキラはタルの蓋に手をかける。

「祈れば飲んでもいいんだよ。開けるぞ。……!?!」

タルを空けた途端……発光弾が上空に打ち上げられた……。この船は誰かに狙われているのかもしれない……

「みんな持ち場に！南南東に逃げるわよ！」

「大嵐来るぞ！ナミちゃん！進路は!?!」

「2時へまっすぐ！」

何とか嵐を越え進んだ先は……深い霧で夜と間違えるほど暗かった……そうこの海域は……

「入っちゃったか……」魔の三角地帯”……」

大騒ぎするウソップを尻目に船の背後から歌声が聞こえる……

『出たアーーーーー!』

ゴースト船が船の背後に現れる……歌は船の上から聞こえてくるようだ……

第一百十二話 ゴースト船（後書き）

本編へと戻りました。

感想お願いします。

## 第一百十三話 罖

「あいつら……大丈夫かな……」

キラは腕組みをしてゴースト船に乗り込んでいくルフィ、ナミ、サンジをサニー号から見つめる。幽霊なんてものはまったく信じていないがもしかすれば誰か人が乗っているかもしれない。

「キラ……あいつら幽霊に……」

「バーカ、幽霊なんているかよ」

ビビるウソップにそう言い、状況を見守る。

『『『ぎゃあああああああ！』』』

3人の悲鳴が聞こえた……どうやら”何か”いたらしい……

船から戻ってきた3人のほかにもう一つ人影があった。誰かを救出してきたのか？視界が徐々に鮮明となり人影の顔が見えてくる。

「マジかよ……ガイコツ……？」

「ガイコツではありませんよ。死んで骨だけブルックです！」

「……だからそれをガイコツって言うんだよ……」

「私、この度この船にご厄介になることになりました」

「面白れえだろ？仲間にした」

ルフィの一言を聞き唾然とした表情でキラは、ナミとサンジを見

つめていた……。やはり俺と一緒に行くべきだった……。そうすればこのルフィの暴走も止められたかもしれない……

まで……。冷静になるんだ……。普通に考えればガイコツが歩くわけがない……。悪魔の実か……

「みんな……。一度船内に入って冷静になろう……」

「それはいい案ですね。どうぞ船内へ！夕食にしましょう！」

ブルツクの発言を無視してキラは船内へと入っていく……。全員が船内に入ったのを確認し話し始める。

「まずはブルツク。お前は……。悪魔の実の能力者なんだろ？」

「よくお分かりで。ヨミヨミの実の能力者です」

予想通り……。あとは……。なぜコイツがゴースト船に乗っていたか……。だ……

次の質問を考えているとサンジが食事を運んでくるのでまずは食事を済ませることにした。食事をしながらブルツクを見るが不気味だ。ガイコツが食事をしている……

食事が終わるとブルツクみずから自分の話をしてくれた。

ブルツクが10年前に一度死んでいること……。ヨミヨミの実とは”ヨミがえる”復活人間で2度の人生を約束されていること……。あの船は昔の海賊仲間との船で他の仲間は戦闘で全滅してしまったこと……。

「つくづく……。悪魔の実ってのは……。何でもありだな……」

「しかし……白骨死体つてのは普通毛がのこらねえよな」

ゾロの言うとおりだ。何故かブルツクの頭にはガイコツなのにアフロが……。ブルツク曰く「毛根強かつたんです！」とのことだが……今までそんな白骨死体見たことないぞ……

「キラ。つ、つまりはコイツはオバケじゃないってことなんだよな？」

「当たり前だ。そんなもん存在してたまるか」

「そうですね。それに私オバケ大嫌いですから！そんなもの見たら泣き叫びますよ」

自分の容姿を見たことがないのだろうか？どうみても”オバケ”に近いと思うのだが……。ナミが鏡をブルツクへ向ける。

「あなた……鏡見たことある？」

ナミが向けた手鏡にブルツクの姿は映っていなかったそれだけではないよく見ればブルツクには影もないのだ……。キラには一つ心当たりがあった。

「影は奪われたんだろ？」

「ご存知でしたか……あの男のことを……」

「まあ……な……」

「……影を奪われるということは……光ある場所で存在できなくなるといふ事で直射日光を浴びると私の体は消滅してしまう。光で地面に移るハズの影がないように鏡や写真にも写ることがありません」

この男……かなりの苦勞をしてきただろう……仲間達が死んだ船

でただ一人行き続ける……孤独、不安、光への恐怖……考えただけでも恐ろしい……

「今日は、なんてステキな日なのでしょう！人に会えた！今日か明日か日の変わり目もわからない霧深いこの暗い海でたった一人舵のきかない大きな船に揺られさ迷い数十年……」

ブルックは小刻みに震えていた……それほどまでに孤独とは恐ろしいものなのか……

「私、本当に寂しかったんです！寂しくて……怖くて……死にたかった！」

しばらく間を置きブルックは再び話し始める……彼の口から発せられたのはこれから先……仲間として付いてこられるのかどうかだが……直射日光を浴びられないブルックと一緒に旅は出来ない……

「……仲間の件ですが断らなければなりません……先ほども話したように太陽の下では生きていけない……私はここに残って影を取り返せる奇跡の日を待つことにします」

「何言つてんだよ！水くせえ！だったら俺が取り返してやるよ！どこにいるんだ！」

ルフィは影を奪った相手はわかっていない……相手は七武海……。簡単に奪える相手ではない……

「言えません……会ったばかりのあなた達に”私のために死んでくれ”とは言えません」

「敵は……七武海……」ゲッコー・モリア」



キラの一言を聞き全員に緊張の糸が走る……無理もない……相手は七武海簡単な相手ではない……

「キラ何で知ってたんだ？」

「風の噂で”そういう能力”だつて聞いたことがあつただけだ」

何故全員の前でモリアの名前を出したのか……。なぜならどうせ言っても言わなくてもルフィは……

「ゲッコモリアつて奴をぶつ飛ばせばいいんだろ？」

「言つと思つてたよ」

微笑みながらルフィの方を見る……。肩をグルグルと回しやる気マンマンといった感じだろうか。

「ギャアアアアアアア！」

ブルツクが突然大声を上げ座り込む。視線の先には……

「ゴースト……？」

大きな音が外から聞こえ船が大きく揺れる。ブルツクは船の外へと走り出し眼前に広がる光景に……驚いた。

「この船は……監視下にあつたのか……」

「……あの時拾つた”流し樽”か……」

「拾ってしまったのですか！？それは罠です！この島……」ゴースト島スリラーパーク”へ導くための！」

どろぢぢら……ゲッコー・モリアは俺たちをがお待ちかねのようだ  
……

## 第一百十三話 罨（後書き）

最近、リアルが忙しくなってきたまして誠に勝手ながら更新を不定期とさせて頂きます。

見ていただいている方には本当に申し訳ありません。

ただ打ち切りではありませんのでまた生活が安定してくれば更新間隔も

早くなってくると思います。

## 第百十四話 ゴースト島上陸

「島……？ ログポースに反応はなかったようなのだが……」

キラはナミのログポースを覗き込み首を傾げる。

「この島はさ迷う島。遠い”西の海”からやって来たのです。しかし何と言う幸運……人に会えただけでなく私の念願まで叶うとは！」

西の海から島がやって来る……？ ブルツクの話が本当ならば……この島は大きな船みたいなものなのだろうか？

スリラーバークを見つめていた（目がないのでよくわからないが）ブルツクが船首へと軽々飛び移る……骨なのでとても身軽なようだ。「絶対に海岸で錨を下ろしてはいけません！ あなた方は後ろの門を突き破り何とか脱出をしてください！ 私は、あなた達に出会えて嬉しかった！ おいしい食事！ 一生忘れません！」

影を奪った憎き相手……王下七武海ゲッコー・モリア。一人じゃ無理だ……相手が悪すぎる……。

「ではまた！ ご縁があればどこかの海で！」

「おい！ 待てブルツク！」

ルフィの制止も聞かず悪魔の実の能力者であるブルツクが海へと飛び込む……普通の能力者であれば海へと沈む……だが……彼は……

「海の上を走ってる……！？」

一人でスリラーパークへと向かって行ってしまった……こんな時……間違いなくルフィなら……

「ルフィ！」 あいつ”の言うとおりにこの島を出しましょう！」

ナミの言葉を聞き振り返ったルフィは満面の笑みだった……この男あきらかに……

「ん？なんか言ったか？」

ルフィの表情を見たナミ、ウソップ、チョッパーが声を揃えて叫んだ。

『『『行く気満々だぁー！』』』

「なあキラ！さっきのゴーストはどこいった！？まだ船にいるのか！？」

「いや、島の方に飛んでいった見たいだぞ」

キラはゴーストをキョロキョロと探し回るチョッパーの質問に答えながら手早く上陸の準備を整えルフィに声を掛ける。

「ルフィ。俺ちよつと先にゴースト島見てくるな」

「おう！後で俺たちも行くからな！」

「ちよつと！キラ！単独行動は危険よ！」

ナミの制止を無視してキラは流木の上を飛び移りながら島へと向

かった。

「これはまた……いかにもって感じだな……」

深い霧に包まれた森の中を歩き出すといくつもの墓標が見えてくる……。キラは墓標を一つ一つ眺めながら歩く……。

特に死んだ人間の名前に興味があるわけではないのだが……細かい文字を見ると読みたくなってしまふ性分だ。

「……こいつらはどうやって死んでいったんだろうな……」

墓標へと手をかざそうとすると……突然地面から手が飛び出しキラの服の袖を掴む……

「アーーーーー!!」

ゾンビが地面から這い出しキラに襲い掛かるうとするが……

「テメエ……服が……汚れんだろうが……!!」

「えっ! あっ……すいません……」

鋭くゾンビを睨みつけると手を離し地面へと戻り始める……。

何故服如きでこれほどまでイラつくのか……今着ている服はナミに買ってもらったものだ……汚れると俺が殺される……汚すわけにはいかない……。

服の泥を軽く払い大きく息を吐く。

「ちっ…………ゾンビって実在するのか…………驚いたじゃねえか…………クソ…………」

キラが歩き続けていると馬車が目に入る…………。馬車は屋敷へと向かっていった…………。

「…………屋敷入ってみるか…………」

屋敷の主は…………天才外科医ドクトル・ホグバツク…………。

天才外科医と呼ばれていた男は今…………

第百十四話 ゴースト島上陸（後書き）

何だか……自信のない文章です。

まだまだレベルアップしなければ……

あとは時間がほしい……



## 第百十五話 ホグバツクの屋敷にて

ホグバツクの屋敷は近くによると自分が思っている以上に大きかった。霧深い場所に立っているせいか不気味さが一層際立っている。屋敷の真ん中はトンネルになっており、トンネルの向こうには明かりが見えた。

「……行ってみるか」

キラがとりあえず明かりを目指しトンネルを進んでいくと扉が見えてくる……。中へ入ろうとドアノブに手を掛けようとしたそのとき……。扉が勝手に開き女性のゾンビが入り口に立っていた。

「いらつしゃい」

「……君……この屋敷の人？」

反応がない……。ブルツクのことを聞こうと思ったんだが……。ゾンビに聞くだけ無駄か……？

「俺の屋敷に何か用かな？」

背後から声が聞こえる……。声の主は天才外科医ドクトル・ホグバツク……

「初めましてホグバツクさん。早速だが質問。アフロでノツポながイコツ知らないか？」

「い、いや知らねえ……。《こいつも……アイツを探してんのか……》さっきも同じこと聞かれたが……。あれはお前の仲間か？」

先に一味の誰かが来ているのか……ルフィか？

「ああ。たぶんな。その連中はどこに？」

「今、屋敷の中で休んでる。外は危険だ泊まっていくといい」

ホグバツクの屋敷を調べられるのか……きっと”コイツ”はモリアの幹部か何かだろう……。スリラーバークのことを調べるにはちよつどいいか……

「ああ。お言葉に甘えて」

キラは屋敷に入る寸前までホグバツクを見つめる……。 ”泊まっていけ”だと……何を考えている……？

「ふん……まあ、易々と影はやらないぜ……モリア……」

〈ナミside〉

「透明人間なんているわけねえよ！」

ホグバツクの屋敷内にウソップの声が響き渡る……

なぜウソップが屋敷にいるのか……。キラがホグバツクの屋敷の近くでみた馬車……それにウソップ、ナミ、チョッパーが乗っていたのだ。

彼等はキラがゴースト島を見に船を飛び出した後、ミニメリー2号というフランキーの造った蒸気機関外輪船に乗り偵察のつもりで島に近づいたのだが岸に乗り上げ6メートルはあるつかという島の

堀の底に落ちてしまった。

不本意で島への上陸をしましてから彼等はケルベロスに追いかけられ森へと逃げ込みヒルドンというゾンビの案内でホグバツクの屋敷まで来たのだった。

そして……現在は……

「確かに人がいたのよ！私が体を抑えられてるの見たでしょ！？」

ナミが今、ウソップやチョッパーと話しているのはホグバツクの屋敷内にある風呂場であった出来事だ。彼女は入浴中確実に”見えない何か”に襲われた。

その現場をナミの異変に気づき風呂場へと入ったウソップが見たはずだったが……彼は認めない。

「イヤ、見てねえ！それは誘導尋問だ！俺に裸を見たといわせて金を請求する気だ！」

「どこまで亡者だ！私は！」

「とにかく！俺はこの島で見たものは一つも信じねえ！透明人間は”気のせい”ゴーストは”変な鳥”ゾンビは”地底人”だ。死者が蘇るなんてあり得ねえ！」

ウソップの意見を聞いたチョッパーが医学の観点から発言する。

「医学から考えたら全部あり得ない。ウソップの言ってることが正しいと思う。でもDrホグバツクが栄光の人生をなげうって研究するほどのことだからそれ程の奇跡がこの島で起きてるのかも」

「あんだ、あの男信用しすぎじゃない？」

「Drホグバックは偉大な男なんだぞ！俺は尊敬してる！失礼なのはナミだ！何も証拠がないのにDrとゾンビが仲間だなんて！」

凄惨な権幕でチョッパーがナミに食って掛かる……チョッパーはホグバックを心から尊敬していた。同じ医師としてすばらしいと……。

「うーん……確かに勘でしかないけど……不気味なのよね……何もかも……」

大広間へと移動したナミ達は部屋の異変に気付く……

「何で部屋が真っ暗なんだ……？」

ウソップがガタガタと震えながら辺りを見回す……。壁には不気味な肖像画・剥製がいくつも並んでいる……。この絵が部屋の不気味さをより一層に引き立てていた。

「し、シンドリーちゃん。お風呂頂きました」

シンドリーとはホグバックに遣えている使用人でキラを最初に出迎えた女性ゾンビのことだ。

「お2人はもうお休みになられましたでし……」

天井の燭台から声が聞こえた……そこにはこの屋敷へ連れてこようとしたホグバックの執事であるヒルドンの姿があった。

両腕がコウモリのようになっているため飛ぶことが出来るようだ。

「ぎゃあ！……ヒルドン！さっきはよくも墓場に置き去りにしやがったな！」

ウソツプ達は彼の案内のもとホグバックの屋敷を目指していたのだが道のりの途中、不安になったナミが船に戻る意志を伝えると墓場の真ん中で置き去りに去れた。

「面目ないでし馬達と用を足しに行き目を放した隙に……」

「ウソばかり！あんた達島中どいつもこいつもグルなんですよ！？」

「そんな人聞きの悪いこと言わず……こちらへどうぞ寝室へご案内致しまし……」

それだけ言いヒルドンは入り口の扉の前へ立つ……。怪しい……と誰もが気付いてしまうだろう……。

「また性懲りもなく”ご案内”だと！？そこが本当の冥界の入り口か？ここで帰らせてもらうからな！」

「え！？ちよっと待ってくれ！もう少しDrと話させてくれよ」

どうやらチョッパーはまだホグバックを信じたいようだ。

「ホホホホ、フラれたわねヒルドン」

この部屋にはナミの他に女性はいない……何故……女性の声が聞こえるのか。

「放つといて欲しいでし。ちゃんと部屋へお連れしまし」

「もういいんじゃない？この「達色々」と気付き始めてるわよ……>マヤって逃げられる前に……」

そう……声の主は……

「な、何で……絵が……？」

チョッパーは2歩3歩と後ずさりするが……

『帰さないわよボーヤ達イイイ！！！！』

『ギヤアアアアアア！！！！』

絵の中からゾンビが現れチョッパーを捕まえ放さない……。

ウソップの足元には後方から剣が飛んでくる……この部屋にある全ての絵・剥製が……ゾンビなのだ。それだけではない……

「……！？床の敷き皮が……動いてる！？」

「誰だ俺の背中に剣を刺すのは！」

敷き熊が立ち上がりナミ達を振り落とす……ウソップは燭台にぶら下がり落下は防いだようだ。

『オイ！燭台に一人ぶら下がってるぞ！叩き落せ敷きグマ！』

壁のゾンビ達が一斉に声を上げる……異様な光景だ……

「くらえこの敷き物グマ！」

ウソップがロウソクを投げるとゾンビ達は再び一斉に騒ぎ出す。

「うわああああ！火だ！コエー！消せ！」

ゾンビたちが慌てているうちにナミ達は扉へと移動する……だが扉は開かない。完全に閉じ込められていた。

「別の部屋へ！他の扉から逃げるぞ！」

ウソツプの一声で3人は他の扉を探すが……逃げ回っているうちに気付けば……

「ここ暖炉の中じゃねえか！ダメだ！もう逃げ場が……！？」

敷き熊がものすごい勢いで吹き飛んでいき壁に叩きつけられる……吹き飛んだ敷き熊のいた場所には……

「逃げ場？そんなもん……俺が作ってやるよ」

『『『キラ！！！！』』』

3人は安堵の表情を浮かべ隠し通路に消えていった……残されたキラは……

「……あいつら……これじゃ俺が来た意味ないだろ。まあ、いい……隠し通路の向こうに何かがあるのか……聞かせてもらおうか！」

ゾンビ達はキラに襲いかかろうとはしなかった。最大級のびっくりゾンビである敷き熊が簡単に吹き飛ばされ完全にのびている……

「張り合い……ないねえ……」

キヲは大きく息を吐き隠し通路の向こうに何があるのか聞きもせず暖炉の下に消えていた。



## 第一百十六話 死者蘇生？

「へえ……隠し通路はこんな感じになってるのか……」

隠し通路を確認するが……3人の姿が見当たらない……どうやら恐怖でキラを待っていていられず先に進んだようだ。

「まったく……世話の焼ける……また探さなきゃいけないだろうが……」

髪をかきあげ大きく溜息を吐き3人が向かったであろう方向へと進み始める……。3人が向かう方向など大方見当がつく。

「絵のない場所。ゾンビがいない場所だな」

その頃……ウソップ達は……ひたすらに絵のない場所目指して走っていた……。

「お、おい！ナミ！キラを待たなくて良かったのか!？」

「仕方ないでしょ！あそこで待ってたらまた襲われちゃうじゃない！それにキラならすぐ私達を見つけてくれるわ！」

ひたすらに通路を走る3人の前に扉が見えてくる……

「このまま廊下にいたらダメよ！あの部屋に入りましょ！」

3人は部屋に駆け込み勢い良く扉を閉める。荒い呼吸を整えウソップが顔を上げると……

「うわ！また絵！……いや写真か……よかったゾンビじゃねえ……」  
部屋には美しい女性の写真が複数貼られていた……。写真に写る人物にナミは見覚えがあった。

「これ……シンドリーちゃん……よね……。何？この部屋？」

3人は部屋の壁中に飾られた写真を見回り自分達が見たゾンビのシンドリーと写真に写る美しいシンドリーを比較する。

ゾンビのシンドリーには顔にも体にも縫い傷がありとても同一人物とは思えなかった。ナミはテーブルの上に広げてあった新聞を手に取り記事に目を通す。

「ビクトリア・シンドリー。有名な舞台女優だったみたいね」

「舞台女優？ホグバツクは確か以前にどこかで使用人してたって言っ  
てなかったか？ほら、皿割って主人に追い出されたとか」

「記事を見る分には考えられないわね。元々貴族の家の生まれみたいだし……子供の頃から人気者で……。え？」

記事を見ていたナミが突然驚きの声を上げた……。

「彼女……10年前に事故で舞台から転落して……死んでる……」  
「な！？何言ってるんだ！生きてたじゃねえかよ！死んでやしねえよ  
！」

ウソップは信じたくないのだろう……必死に転落死したという記事を否定する。

「で、でもその死亡記事が本物なら……あいつは一度死んで生き返ったことになるぞ。この島にいるのは本物のゾンビなんだ。俺達が見たのは蘇った死者なんだ！」

チョッパーの発言を聞きウソップは恐怖に震え後ずさりする……。ナミが突然目を\$に変え声を上げた。

「ちょっと！ウソップ！あんたの後ろにあるのそれ宝箱じゃない！？開けてみてその箱！」

恐る恐るウソップが宝箱を開くと……

『残念！財宝置き場はココじゃねえよ！』  
「ぎゃー！びっくり箱！」

宝箱から出てきたゾンビに驚き部屋の外へと飛び出すとウソップたちを絵画ゾンビが待ち構えていた。

ゾンビ達から逃げながらナミは宝箱から出てきたゾンビの言葉を思い出していた……

《財宝置き場はココじゃない……あのゾンビ確かにそう言った……ココじゃないどこかにあるってことね……》

く忘れていた祝100万PV記念 ファミリー く

麦わら一味はまるで家族のようである。知り合いでも友達でもない……家族。では……キラは家族に例えると……

「家族に例えると……年齢的には……フランキーが父親か？」

全員で食事をしているとボソツツとキラが呟く……。啞然とした表情でキラの顔を見つめるフランキーに笑顔を見せ「なんでもないといい食事続ける。」

「年齢的には……俺が……親父……。じゃあ、母親は？」

キラはロビンを指差し紅茶を口に含む。

そういえば……一味の年齢に触れたことってあまりなかったな……ロビンっていくつだったけ？

「そうね。じゃあ、次に年齢が上なのは？」

しばらく考えキラはサンジを見つめる。

「俺よりキラのほうが年上だろ？」

「え？サンジって十代？」

「ああ。お前は……20歳だったっけ？」

自分では20歳だと思っているが……正直あまり昔の記憶はない……。自分がいつ頃、生を受けたのか……。もの心が付いたときに

は”ルイン”の諜報員として色々な船に乗っていた……。自分の年齢などほとんど考えたこともなかった……。ただ……。きつと……。20歳だろうと……。

「そうだな。20歳」

「ていうことはキラが長男ね。私は長女かな？」

首を傾げながらナミが自分を指差しキラに尋ねる。

「そうだね。で、ロロノアが次男」

「俺がお前の弟かよ……」

キラが兄と聞き嫌そうな顔をするゾロをヒジで小突く。タバコをふかしながらサンジはしばらく何かを考えていたかと思うと突然何かに気付きキラに詰め寄る。

「ちょ！ちょっと待てキラ！マリモが次男ってことは俺はコイツの弟ってことか！？」

ヘラヘラ笑いながらゾロがサンジに声を掛ける。

「仕方ねえだろ？俺の方が実力が上なんだからよ」

『ああ！？やんのかコラ！』

ケンカを始めた二人は放っておき、チョッパーの「俺はキラの弟でうれしいぞ！」という発言を聞きあまりのかわいさに頭を撫でる。

……どっちかというところチョッパーはペットだけだな。

「おい！息子達！何か困ったことがあったら俺に……」

「フランキー。勘違いするなよ」「家族に例えるなら」「だからな」

調子に乗り出したフランキーにキラが釘を刺していると……ロビンがキラの肩を叩く。

「どうした？」

「いいんじゃない？勘違いしても……」

ロビンはクスクスと笑いながら大騒ぎしている子供たちを見つめていた。

「家族って……こんな感じなのかな……」

家族の温かみ……キラはそれを感じたことがない……だが一緒にいるだけで心が安らぐ……それが家族なのだろうと……そう感じていた……。

く忘れていた祝100万PV記念 ファミリー く（後書き）

100万PV記念忘れてたんで書いてみました。

他にもネタが見つかったら小ネタを書きたいと思っています。

## 第一百七話 影の世界

「あいつら……どこまで逃げやがった……」

キラは屋敷の隠し通路を3人を探し歩き回っていた。ゾンビのいない方へいない方へと進んでいたのだが……

「おかしい……なぜだ……なぜ見つからない……」  
「アーーーーー!!」

通路を歩き続けているとゾンビたちが襲い掛かってくる……数は……5体……。

一体目の頭を掌底で吹き飛ばし、2体目、3対目をミドルキックで壁に叩きつけた。残りの2体は恐怖に震え逃げ出す。

「ったく……雑魚が束になったって無駄だよ……もつと骨のある……」

「ヨホホホ！私が相手になりましょうか？」

「ブルック……！では、ないようだな……」

確かにブルックと同じくガイコツではあるのだが着物を着て丁髷姿をしていた。

「ヨホホホ！私はリユーマ！あなたもすぐにお仲間のところへ行かせてあげましょう」

「へえ〜。どこへ連れてってくれるんだ？」



「影の世界」

「ふふっ……楽しみだ！」

大業物21工の秋水抜き放ちリユーマはキラとの距離を詰める……キラは接近してきたリユーマの顔に飛び膝蹴りを叩き込む。

「おぐっ!？」

「頭が碎けると思ったんだけど……案外と硬いんだな」

リユーマは距離を取り鋭い突きを放つがキラは華麗に突きを避ける。突きで伸びきったリユーマの腕を掴み自分の下へと引きつけ腹部に深く拳を突き刺す。

「うぐっ……や、やりますね……次は……!？」

身を翻しリユーマへと背を向け先へと進みだす。

「な!?!どういっつもりですか!?!まだ勝負は……」

「リユーマ……お前はウチの剣士より弱い。そいつに勝つたら……相手になってやるよ」

今の言葉をゾロが聞いたら怒るだろう……。だがリユーマはゾロが倒すべきだ、大剣豪になる為にすこしでも強敵と戦う必要がある。

「その剣士の名は？」

「ロロノア・ゾロ。大剣豪になる男だ」

リユーマと別れ3人の無事を祈りながらキラが先を急いでいると

……前方にルフィ達の姿が見えた……

「苦戦してんのか？……ゾンビごときにやられてんじゃねえよ！」

ルフィの背後に現れたゾンビの頭を掴み壁に叩きつける。

「キラ！」

「ルフィ、無事か？」

襲い掛かってくるゾンビをキラは次々に叩き潰していく……。武器がなくても自分はやれる……。キラはそう感じ始めていた……

『一刀流 三十六煩惱鳳！』

飛んできた斬撃をかわし、鋭く敵を睨む。

「ゾロの技……あの野郎……影を……！」

「キラ！こつちを手伝ってくれ！」

ロビンとフランキーがゾンビに囲まれている……。あの2人が手を焼いている……。こいつら、ただのゾンビじゃないのか？

出口を塞いでいるゾンビを蹴散らし道を造る。

「こつちだ！早く来い！」

2人を連れ部屋を出る……。キラはこの時まだ船長がいないことに気付いていなかった……

第一百七七話 影の世界（後書き）

すいません短いです。

疲労が溜まると文章はグダグダになるし長文は書けないしボロボロです。

## 第一百十八話 不死身は不幸？

「キラ！待ってルフィがいないわ！」

ロビンに言われ辺りを見回すが確かにルフィの姿はなかった。逃げ道を作ることばかり考えてルフィの影が狙われている事を忘れていた。

「クソ！戻って探してくる！」

「お、おい！キラ！見ろ！棺桶が流れてくるぞ！」

フランキーの指差す方向を見ると屋敷から鎖が出て……棺桶はその鎖を伝いどこかへ運ばれていくようだ。棺桶から声が聞こえてくる……声の主は

「ルフィだ……ルフィの声が聞こえた！」

「何！？じゃああの棺桶に麦わらが入ってんのか！？」

「追っぞー！フランキー、ロビン！」

棺桶からはルフィの叫び声が響いていた。早く助けなければ影を奪われてしまう。

「追わせねえ……あっあっ……」

巨大グモが渡り廊下を塞いでいる

「巷で噂のスパイダーモンキーとは、おれの事だ！」

「どけ……邪魔をするな……！」

「ふふっ」「どけ」だと？一つ言っておくが追い込まれるのは貴様等だ」

後ろを振り返るとヨロイの騎士、前方には巨大グモ。確かに追い込まれてるのは麦わら一味だった。

「これで一味も全滅だな」

キラは微笑み巨大グモを真っ直ぐに見つめる……

「何がおかしい。お前等も直にあの壁に吸い込まれ他の奴等と同じ目に合わせてやる。前も後ろも不死身のゾンビだ観念しろ！」

「よく喋る……虫だな……」

渡り廊下を強く蹴り距離を詰めキラは、巨大グモの脳天に踵を落とす。渡り廊下が砕けヨロイの騎士と巨大グモは地面へと叩きつけられる。

何も考えず怒りのみで巨大グモを攻撃したためキラもスパイダーモンキーと共に地面に叩きつけられた。ロビンとフランキーは

『シエンフルール  
百花繚乱ウイング』

腕を翼としてロビンがフランキーを掴み空を飛ぶ。

キラは巨大グモとともに地面に着地した後、巨大グモの脳天に何度も追撃を啜える。

「ちよっ……と……待ってくれ……た、確かに不死身だと言った

が……」

「不死身なんだろ？これぐらいどうってことないだろ！」

鈍い音が何度も鳴り響きスパイダーモンキーの顔面に無数のくぼみが出来上がっていた。

仲間がやられて黙っている男ではない　攻撃は留まるところを知らない。

「不死身の体を持ったこと後悔させてやる……」

「く……も、もう……ん？」

スパイダーモンキーの視線の先を見ると……空から何かが降ってきている……

あれは……まさか……

「ボオーン！骨だけに！」

空から降ってきたのは間違いなくブルックだった。何故、空から……？

第一百十八話 不死身は不幸？（後書き）

なかなか書く暇がなく更新が出来ていませんでした。

申し訳ないです。

第一百十九話 モリアの元へ……

ブルツクのこととは放っておきスパイダーモンキーの始末にかかる  
だが、どうやったら殺せる……？

「き、キラさん……これを……ヤツの口に……」

倒れたままのブルツクがキラに何かを渡す。

「ふ〜ん……まあ、やってみるよ」

グツタリしているスパイダーモンキーの顔を蹴り上げ口にブルツクから渡されたものを投げ込む。

スパイダーモンキーの口に投げ入れたものは 塩。

塩を口に入れられたスパイダーモンキーは黒い塊を口から吐き出し動きが固まる。

「ブルツク。今のは？」

「魂です。ゾンビにも弱点はあるんです」

「それが……塩か……」

ロビンとフランキーがこちらへ走ってくる。どうやら彼等の影は無事のようにだ。

「影が残ってるのは……もしかしたらここにいる3人だけかもしれない」



「え……では……もう他の方々は……」

「捕まった……と思う。きっとあいつらの影はすでに切り取られるはずだ」

黙って話を聞いていたフランキーが信じられないというような顔をしてキラを見つめている。

「どうした？」

「影を……切り取る……？」

「そのことについてはキラさんよりも私の方が詳しいでしょう」

ブルックは俺たちに語り始める　ゲッコーモリアはカゲカゲの実の能力者。ブルックの話では切り取った影をホグバックが作った強力なゾンビに入れ強いゾンビ兵を作っているということらしい。

話を聞けば聞くほどこのままでは危険だ。ルフィの戦闘能力を持ったゾンビなど作られたものならばこちらとしても苦しい戦闘を強いられてしまう。

「モリアは……どこにいるんだ？」

「えっ？わ、わかりません……」

キラはスリラーバークの中央に聳え立つマストに向かって歩き出す。

「あ、あの！キラさん！どこへ？」

「どこって……モリアの所」

「待て！一人で行くのは……！」

フランキーが止めようとした時にはすでにキラの姿はなかった。

「いつも……そう……キラは一人ですべてを解決しようとする……」

ロビンは悲しそうな顔でキラが向かったであろうマストを見つめた……。

「間に合うか……いや……間に合わせる！」

キラは襲い掛かってくるゾンビを次々に蹴散らし階段を駆け上がりモリアを指す。突き進んでいくと大きな扉が目の前に現れる。

「ルフィ！無事か！」

部屋の中には「モリア！ルフィを返しな！」ルフィの影を持つゲッコウモリアの姿があった。

「お、おおおお！死神のユダ！久しぶりだな！最近ではテメエの偽者が出回ってるらしいじゃねえか」

「そんなことはどうでもいい！ウチの船長……返してもらおうか！」

ルフィを見つめモリアは声を上げて笑う。

「キシキシキシ！七武海の誘いも断り、白ひげの誘いも断ったお前がこんな小僧に従ってるのか」

「いいから……ルフィを……返せ！」

「ガルルル！」

ライオンの顎をした男が襲い掛かってくるがキラは拳をかわし相手の頭を地面に叩きつける。

「やめるアブサロム。お前じゃこの男には勝てない」

「じゃあ、てめえが俺と戦るのかい？モリア」

不敵な笑みを浮かべモリアはキラを見つめていた。

モリアの視線はキラに向けられたものではなかった 背後から突然背中を切りつけられる。

「な！？お前は……どうして……！？」

背後には西洋の剣を持つ男が立っていた……その男とは過去に何度か言葉を交わしたことがあった。

「ユダ。総帥の命令で貴様を消しに来た」

「リシャル！モリアと手を組んだか！」

リシャル

ルイン少佐

容姿・特徴

栗色の髪の毛

青い軍服を着用

左目に大きな傷がある

リシャルは大きく息を吐き剣を振り上げる。

「手を組む？違うな……利害が一致した……それだけだ」

こいつは任務を達成するためならば手段を選ばない男だ……誰かを利用していても不思議はないか……

「さらばだ！ユダ！」

剣が真っ直ぐにキラ目掛けて振り下ろされた……

## 第二百十話 血に染まる死神

振り下ろされた剣は地面へと突き刺さる……。リシャルルの手にはキラを切りつけた手ごたえはない。

「ど、どこへ……？」

目の前から突然キラの姿は消えていた。

「おい、リシャルル。どこ見てんだ？」

リシャルルの背後にキラが現れる。キラは消えたのではなく当たる寸前で攻撃をかわした。

《なんとというスピード……。スピードだけなら昔より上ということか……》

「驚いてる場合か？今度は……こっちの番だ！」

高速の拳がリシャルルに放たれる。剣で防御するが 剣は弾き飛ばされ後方の壁へと突き刺さった。

額には大粒の汗を掻き手には剣を弾き飛ばされた痛みが走る。リシャルルはこの時恐怖を覚えていた。ルインを抜け”死神のユダ”の名を捨てたこの男はもう自分の相手にはならないと思っていたからだ。

だが真実は違った……身体能力だけならば昔よりも格段に上がっている。

「くっ……貴様……！」  
「さあ、お仕置きだ」

キラが笑みを浮かべリシャールへと詰め寄っていく。笑みからは余裕が見て取れた。リシャールはキラの余裕に齒軋りをし怒りを露にする。

怒りに震えるリシャールの眼に影を奪われグッタリと横たわるルフィの姿が映る　《そうだ……確か……今のコイツは……》

リシャールは壁に突き刺さった剣を抜きルフィの首へと向けた  
そう、彼の取った作戦は……

「リシャール……人質とは……情けないな」

「黙れ！俺は……勝つためならば手段は選ばん！」

大きく舌打をしたキラの体から力が抜けていく……もう抵抗はない、その意志表示なのだろう。

勝利の笑みを浮かべたリシャールはルフィをアブサロムに預けキラへと近づく……そして

「俺は貴様が憎かった。総帥からの全幅の信頼を寄せられていながら……我々を裏切った貴様を殺したいほど憎んでいた」

リシャールは話しをしながら剣をキラの腹部へと突き刺していく……床が血で赤く染まっていく。叫びたいほどの痛みがキラを襲うが……声は上げない。苦痛に顔を歪めながらもリシャールを睨み続ける。

「痛いだろ？泣いてもいいぞ？そして俺に殺さないで下さいと頭を下げる」

「下げたら……殺さないのか？」

キラの質問に笑みを浮かべながら答える。

「そつだな……麦わらのルフィを貴様の手で殺すというならば……考えてやってもいいぞ」

クスクスと笑いキラはリシャルの顔に唾を吐きかける　「ゲス野郎が、クソ喰らえ」

顔を真っ赤にしたリシャルがキラの腹部の剣を抜き　全力でキラの体を斬りつける……一度ではなく何度も……斬りつけるたびに体からは血が飛び散った。

その光景を見つめる仲間の姿があった。それはナミ、ウソップ、チヨップ。

彼等はスリラーバーク四怪人の一人ペローナの部下であるクマシの背中にいた。クマシの背中にはチャックがありその中に三人が入っていたのだ。ゾンビたちからなんとか逃げ延び、安全だと思いついたのがクマシの背中だったようだ。

クマシとペローナもモリアの屋敷にいたためキラの傷つく姿、ルフィの影を奪われる瞬間を3人は見るようになってしまった。

ナミがキラを助けようと何度も飛び出そうとしたがウソップがナミを止めていた。出て行けばキラの足手まといになるだけではなく下手をすれば全滅。

だが今ウソップは悔いている……あそこで助けていれば……この  
ような状態にはならなかったかもしれない。

キラが血だらけで横たわる……そんな状態には……



第二百二十話 血に染まる死神（後書き）

人質作戦ってやり方が汚くて大好きです（笑）

感想お願いします。

第二百一十一話 死がせまる……

体中に力が入らない……出血が多すぎる……

「ユダ……貴様もここまでだな」

リシャルルが笑みを浮かべキラを見下している。キラがこの場で出来ることはもう何もない……。

ルフィの影も取り返すことが出来なかった。

「死神のユダの影もほしかったが……もう虫の息か」

それだけ言うとモリアはルフィの影を持って部屋の奥へと歩いていく。ルフィの影を使って強いゾンビを作るつもりなのだろう。

「モリア……ルフィの影を……」

キラがいくら手を伸ばしてもモリアはどんどん遠ざかっていく……。リシャルルはキラの手を踏みつけ大笑いしている。

クマシートの背中に隠れているウソップは歯を食いしばって悔しがっていた己の無力さを……

「そうだ！ユダ！貴様の体をゾンビとして使ってもらおうじゃないか！」

大笑いしているリシャルルに雷を落としてやりたいが……出来なかった……。キラは雷の力を失っていた……。もしかするとエニエ

スロビーで雷の力を使いすぎたのかもしれない。

それにソウゾウの果実はあくまで物質を変化させる力……雷など”創造”出来るわけがない。

では何故雷を使ったのか？

今の自分にはその理由はわからない……もしかすれば”創造”ではなく”想像”の力もあるのかもしれない。

「ユダ。そろそろ死んでもらう！」

剣が振り下ろされる……。確実な”死”……一度だけ似たような感覚に襲われたことがある。

死が自分にせまる感覚……それはルインを逃げ出し海に飛び込んだとき……同じ感覚だった……。

剣が迫ってくる……ゆつくりと眼を閉じ死を受け入れる……

振り下ろされた剣はキラの体に突き刺さることはなかった。

「何あきらめてんだよキラ！」

リシャルルの剣を受け止めたのは 「フランキー……すまない……」フランキーだった。

いきなり現れたフランキーに動揺したのかリシャルルの動きが止まる。その瞬間を逃すことなく

「クイ・ド・ヴァン  
風来砲！！」

至近距離から風来砲を受けたりシャルルが屋敷の外へと吹き飛ばされる。

「キラ！」

ロビンがキラに駆け寄り声を掛けるが返事が帰って来ない……。

今、彼は生死の境にいる……。

## 第二百二十二話 瀕死

「キラ！しっかりして！眼を覚まして！」

ロビンがキラに声を掛け続けるが反応がない……。キラの胸に耳を当てて……。僅かだが心臓の鼓動が聞こえる……

キラの状態などお構い無しにゾンビ達は襲い掛かってくる……

「近寄るんじゃねえ！ゾンビ共！」

フランキーがゾンビ達を一蹴するが……。次から次にゾンビ達は現れる。

「ニコ・ロビン！キリがねえぞ！どうする！？」

「……チョッパーを取り戻さなきゃ……。キラは……。このまま死んでしまう！」

ゾンビの口に塩を放り込み次々に浄化しながらフランキーはロビンの言葉に頷く。

「チョッパー！どこだ！」

フランキーの声にチョッパーが反応する……

「ニコ・ロビン！近いぞ！」

「ええ……。あそこよ！」

ウソップとチョッパーはゾンビたちに囲まれていた。

ナミがいない……どうやらすでに連れ去られた後のようだ。とりあえずは2人を助けサニー号へと向かう。

サニー号へと到着しフランキーはすぐにキラを医務室へと運ぶ。

「キラ！ごめんな！助けてやれなくて本当にゴメン！」

「ウソツプ！治療の邪魔だからどいてくれ！急いで治療しなきゃ助からないかもしれない！」

チヨッパーは急いで治療を始める……が……出血が多すぎる……。

「がんばれ……キラ……絶対に治すからな……」

瞳に溜まった涙を拭いチヨッパーは手術を続けた。

一方影を奪われたルフィは同じく影を奪われたゾロ、サンジと共にサニー号のダイニングで眠っていた。

どうやら影を奪われ気絶しゾンビたちの手によってサニー号まで運ばれたようだ。

3人は目を覚まし自分の置かれている状況を確認する……

「影がねえ……夢じゃなかったか……」

ゾロは自分の足元を確認し改めて影を奪われたのが現実だと気付く。

「おい！大変だ！一大事だ！食い物がなんもねえぞ！」

ルフィが冷蔵庫を確認するが……大量に積んだ食料が保存食を残り全て持ち出されていた。

「キラも影を奪われたのか……ってキラは？」

サンジが部屋を見回すがキラの姿はない。

「ん？キラがいねえぞ？ウソップ。キラどこいった？」

「キラは……今……治療してる……」

「何でだ？アイツ強えはずなのに……」

ウソップはルフィの質問に答えられなかった。ルフィを人質に取られ、殺しにされ、今生死の境を彷徨っているとは言えない……

「そんなにひどいのか？」

「ええ、瀕死の重傷なの」

ロビンの言葉を聞き、3人の目つきが鋭くなる……。ゾロがロビンに質問する。

「誰にやられたんだ？」

「ルインの人間だと思っ……」

「どんなヤツだ？」

麦わら帽子を深く被り直しルフィはロビンに尋ねる……

「左目に大きな傷があって青い軍服を着てた」

「もしかして……アイツか？」

ルフィがダイニングの小窓から外を見る……。サニー号の下にリ  
シャルが立っていた。

「ええ……あの男よ……」

拳を強く握り締めルフィはサニー号を飛び出していった。



## 第二百二十三話 絶命

サニー号から飛び降りリシャルルの前に立つ。

「お前か……キラをやったのは？」

ルフィの言葉に笑みを浮かべリシャルルは頷く。

「麦わらのルフィ。お前も今回の任務で殺すように命じられている」

リシャルルは剣を抜きルフィに向けたルフィは拳をバキバキと鳴らしリシャルルを睨みつける。

『ゴムゴムの銃ヒストル！』

拳をかわしたりリシャルルはルフィの懐に潜り込み剣を振り上げる……剣はルフィの頬を霞めた。

一瞬だがルフィの全身から力が抜ける。

「うわ！な、何だ！？」

「ルインの戦士の武器には海楼石が使われている」

「だから当たった瞬間に力が抜けたのか……だけど当たらなきゃどうってことねえ！」

果敢にリシャルルへの攻撃を繰り返すが海楼石で作られた武器でルフィの攻撃を防ぎ、力が抜けたところに一撃を加える。

苦戦を強いられるがルフィもスピードでかく乱し攻撃を加える…  
…一進一退の攻防が続く。

「ハハハハ！ユダが従う船長とはこの程度の男なのか？」

「……やつと体が暖まってきた」

ルフィの体から蒸気が立ち上る……。リシャールがルフィに斬りかかるが「き、消えた!？」リシャールの目の前から突然ルフィの姿が消える。

『ゴムゴムのJET銃！』  
ジェットピストル

拳は顔面を捉えリシャールの体は岩に叩きつけられる、顔を抑えルフィを驚愕の表情で見つめた。

破壊力・スピードは格段に上がり攻撃を防ぐことが出来なかった。

「貴様……こんなもので……この俺を……!？」

剃でリシャールとの距離を詰め両腕を後方に伸ばし「ゴムゴムの……」

「ま、待て！待ってくれ！そ、組織には死んだと伝えておく！そうすればお前も狙われることは……!？」

『JETバズーカ!!』

鈍い音とともにリシャールの口から血が噴き出し力なく前のめりに倒れる。倒れたリシャールにルフィが声を掛ける。

「ルインの連中に伝える。俺の仲間に出す奴は絶対に許さねえ

「！」

「サニー号へと戻ったルフィに医務室から飛び出してきたチョッパーが叫ぶ。

「ル、ルフィ！キラが……キラが……」

大粒の涙を流し泣き喚くチョッパーにルフィは血の気が引いていく……

「キラが……どうしたんだ……チョッパー……」

「心臓が……動かねえんだ……おで……助けられねえ……」

急いで医務室へと向かうと攫われたナミを除き全員が集まっていた。全員暗い顔をしている……

「お、おい……キラは……？」

ゾロは何も言わず下を向く……。チョッパーが医務室へと戻りベットに横たわるキラの前へとルフィを連れて行く。

キラが死んだと信じたくないルフィはベットに横たわるキラの胸倉を掴み激しく揺する。

「おい！キラ！起きろよ！一緒に海賊王になるんだろ！そうだ！ナミが攫われてるらしいんだ！早く助けに行くぞ！だから起きろって！」

「やめろルフィ！もう……キラは……」

フランキーが涙を堪えルフィを押さえつける……

「だってよ……俺の一番最初の仲間なんだ……相棒なんだよ！」

ルフィの悲痛な叫びが……スリラーバークに木霊した……

## 第二百二十四話 果実

ゾロが医務室の扉に手を掛ける。サンジがゾロの動きに気付き声を掛けた。

「おい、ゾロ。どこいくんだ？」

「いつまでも悲しんでられねえだろ……。影を取り戻す」

涙を拭きルフィが顔を上げる……。ゾロの言っていることは正しかった影を取り戻さなければ航海を続けることは出来ない。もう一つやらなければならぬことがあるそれは

「ナミを取り返さなきゃな……。あとメシも」

「そうだな。ナミさんを取り返さなきゃキラに怒られちゃう」

キラを残し仲間達は医務室を後にする。ルフィは部屋から出る前にキラに声を掛けた。

「俺達ナミと影を取り返しに行つて来る。絶対にもう一度海を見ような……。相棒……」

ウソップがゾンビの弱点、ナミのおかれている状況を全員に説明した。

そして……。麦わら一味の反撃が始まる。

くサニー号デッキ

ルフィ達が去った後の船によるよると歩く人影があった。その人影は扉を開け船室へと入っていく……

いくつもの部屋の扉を開けては中を確認し閉める……どうやら何かを探しているようだった……

「ここか……」

医務室の前で立ち止まると扉を開け中に入っていく……。ベットの上にはキラが横たわっている。

「見つけたぞ……ユダ……」

人影の正体はリシャールだった……彼にはやり残していることがあった。それは

「取りに来たぞ……貴様の”ソウゾウの果实”を！」

そう言つとキラの心臓に剣を向け微笑む。

「貴様の”ソウゾウの果实”……俺がうまく使ってやる安心しな！」

剣を突き刺そうとした瞬間……リシャールの腹部に激痛が走った……。

なぜかリシャールの腹部には自身の剣が突き刺さっていた……剣の形状が変化し腹部に刺さったのだ。

「……ユダ……貴様の仕業か……俺の腹部に突き刺さるようになんか剣を造り替えた”のだから？」

キラはゆつくりと瞳を開きベットから起き上がった……。リシャルは傷口を押さえ話し続ける。

「おかしいと思っていたんだ……。貴様は”造られた人間”。」果実を貫かなければ殺せない……。死んだフリだったのか？」

何も言わずキラはリシャルの持っている剣に手を触れる……。すると剣は生き物のように形を変えリシャルの喉に突き刺さった

……

リシャルの首から血が噴き出しキラの全身を赤く染めていく……。

「残念だったな……。果実を突きさせなくて……」

自分の胸に手を触れキラは微笑む……。瞳は暗い船内でキラキラと輝いていた……

第二百二十四話 果実（後書き）

迷走しまくりでとんでもないことになってます。

もう途中で投げ出したい気分です。



## 第二百二十五話 国引きのオーズ

キラは上着を羽織、医務室の扉に手を掛けた。扉に触れている手とは逆の腕にはリシャルルの亡骸と彼の武器を抱える。

サニー号のデッキからリシャルルの亡骸を海へと放り込む……そして剣は

「リシャルル……剣は俺が使わせてもらう」

もし、剣にリシャルルの意志が籠もっているならば間違いなくキラに使われるなど最大の屈辱だろう。

それにキラにとってルインの戦士の武器は願ってもいないことであつた。これから先の航海で間違いなく強力な悪魔の実の力を持つ敵が現れる。ならば海楼石が使われているこの武器は確実に力になるはずだ。

「武器が出来たのはうれしいんだが……」

剣は重量があり持ち運びがめんどろつた。キラは剣に触れ”ある物”を創造する……。剣は形を変え大きさを換えキラの指に収まつた。

銀色の指輪がキラの人差し指に光る……。そう、剣は指輪へと形を変えたのだ。

ソウゾウの果実は物質をキラの思ったとおりの形・重量へと変化させることができる。

薄っすらと微笑みキラはモリアの屋敷に向かってゆっくりと歩き始めた。

麦わら一味それぞれが目的を果たすため行動していたが………ついにルフィの影の入ったゾンビ”オーズ”が動き出してしまった。

「あれが……ルフィの影が入ったゾンビなのか？ チョッパー」

「う、うん。間違いない」

チョッパーはナミ、ウソップと共にルフィの影がオーズに入れられるのを見ていたため間違いはない。

オーズと対峙している人影がある……それはサンジだった。

ナミを助けたサンジだったがスケスケの実の能力者であるアブサロムに再びナミを奪われてしまい取り替えそうとした所でオーズが建物を壊したため地面へと落下し不運にもオーズと対峙する破目になってしまったのである。

「出て来ーい！ 麦わらの一味！」

オーズが腕に貼り付けられた麦わら一味の手配書を見て叫ぶ。どうやらオーズに一味抹殺の命令が下ったようである。

「おい！そこをどきやがれ！ ナミさんを助けなきゃいけないんだ！ だいたいてめえが俺たちの邪魔してどうすんだよ！ ルフィ！」

「ルフィ？ そいつは俺の敵だ。俺の名前はオーズ！ よろしく！」

サンジがオーズを怒鳴りつけるが何を言っても無駄。オーズにはルフィの影の自覚などはない。

オーズはサンジの顔を確認した後、腕に貼つてある手配書を見る。

「おめえも海賊の一人だな。手配書とそっくりだ」

そういうとオーズは腕を振り上げ 『ゴムゴムの鎌！』腕は伸びなかったが周りの建物を軽々と破壊していく……

サンジはオーズの攻撃をかわすと懐へと潜り込み強烈な蹴りを放つがまったくダメージがない……。地面に着地したサンジに強烈な張り手が入る。

張り手を受け吹き飛んだサンジを掴みオーズは握りつぶそうとする

『火の鳥星！』

ウソツプの攻撃がオーズの頭に当たり煙が上がる……。オーズは掴んでいたサンジを放り投げウソツプを睨みつけた。鋭い眼光にウソツプは尻餅をつく。

「まずい！フランキー！あいつをこっちにおびき寄せろ！」

「よし！まかせときな！」

ゾロの言葉でフランキーがオーズを狙撃するが 「あの野郎！あの巨体でなんてスピードだ！」オーズは銃弾をかわしゾロ、フランキー、ブルックのいる塔を蹴り壊す。

「フランキー！ブルック！下の屋根に降りてろ！」

オーズへとゾロが向かっていく　『三刀流……二剛力斬！』

にじりかき

顔面近くにゾロは斬撃を放つがオーズは体を仰け反らせかわし

『ゴムゴムの火山！』ゾロは空高く蹴り上げられた。

口から血を吐きゾロが上空を舞う……あの高さから落ちてはひとたまりもないだろう。

『ウエポンス左！』

フランキーが隙を付き狙撃するがオーズはあっさりとかわす……。塔をもぎ取りフランキーとブルックのいる場所へと塔を叩きつける。

2人はまともに攻撃を受け力なく倒れた。上空から落ちてくるゾロはロビンが腕でネットをつくり受け止めるが……オーズはすでに次の攻撃態勢に入っていた。

大きな瞳が残った一味を捉える……

『必殺！塩星！』

ウソップの放った塩がオーズの口に入るが……巨体には少量すぎたようだ。

オーズは振り上げた拳でウソップ、ロビン、チョッパーを渡り廊下ごと叩き落す。

麦わらの一味は力なくオーズの前に倒れた……そう……あの男を  
除いては……

「ルフィのゾンビってのはあれだな……船長を止めるのは……」

キラがオーズの前に立ち塞がった。

「副船長の役目だよなあ？ルフィ」

「あ？手配書の奴見つけた」

指輪は光輝き白銀の剣へと変化していく形はリシャルルの持っていたものとは違う新たな創造の剣……。

ルフィ対キラの戦いが始まるうとしていた……。

第二百二十五話 国引きのオース（後書き）

200万PVを記念して何か書こうとは思ってるんですが……

何を書こう……一味が高校生だったらとか書いてみようかな……

## 第二百二十六話 新たな武器

俺は夢でも見ているのだろうか……死んだはずの仲間が……キラが俺たちの目の前にいる……

ゾロは傷ついた体を起こしキラの腕を掴む。

「お前……生きてたのか……」

「ロロノア。少し休んでろ。この化物の相手は俺が引き受けた」

掴んだ腕を下ろしゾロは地面に寝そべる……キラは微笑みオーズの足元に突っ込んでいく。

背後へと回り込んだキラへオーズが大きな拳を振り下ろす地面が砕け砂埃が舞う。拳を持ち上げオーズが砕けた地面を確認するが……

「いねえぞ？どこいった？」

オーズの背後にキラが現れた次の瞬間大きな右足から血が噴き出す。大きな体はバランスを崩し尻餅をつく。

「何だ？脚に力がはいらねえぞ？」

「ゾンビだから痛みがないのか……かわいそうに……。今、楽にしてやる……!!」

キラは一気に体を駆け上がりながらつま先から頭のとっぺんまで一気に切り裂いていく。

大きな音を立てオーズが仰向けに倒れた……が……息はある……

「……そうか……死なないのか」  
「もう怒ったぞ」

オーズは起き上がり手に持った瓦礫をキラへと投げつける。”縮地”で瓦礫をかわし再びオーズの足元へと移動する、キラの剣が鞭のようにしなつたかと思うとまるで蛇のようにオーズの脚へ巻きつき切り裂く。

切り裂かれた右足から地面に崩れ落ちる……。

「おめえの武器おもしれえな」

「……これは蛇腹剣”白蛇”。ソウゾウの力を持つ俺ならではの武器だ」

キラは離れた距離にある瓦礫へ白蛇を振り切る……剣は鞭のようにしなり瓦礫を真つ二つにする。

「すつげえ！」

《本当にルフィのような反応だ……そうか性格も似てしまつんだっけ……》

オーズが再び立ち上がりこちらへ向かってくる……キラは白蛇をユラユラと揺らし強く地面をなぎ払う。

『ウッパミ  
大蛇！』

白蛇は本物の蛇のように地を這いそしてオーズに襲い掛かる  
剣がオーズの全身を切りつけキラの元へと戻っていく。



手も足もでないオーズだが……キラもオーズのあまりのタフさに驚いていた。これだけの斬撃を与えてもまだ動けるとは……

「おい！キラ！手貸してやるよ」

声のする方を振り向くと一味全員が立ち上がり戦闘態勢に入っていた。

「もう休憩はいいのか？ロロノア」  
「十分だ」

ゾロはキラの言葉に笑みを浮かべる。キラは全員の表情を確認し叫ぶ。

「ルフィの影に俺たちの強さ見せてやるぞ！」  
『おっ！』

キラは白蛇をまっすぐにオーズの首へと向けた……

## 第二百二十七話 巨大ロボ戦士

「しかし、このデカさでルフィの動きとは恐れ入る」

「そうか？ルフィの動きってことは……次にどう動くか俺には手に取るようにわかるが……。それともビビッてんのか？ロロノア」

「てめえ……生き返って自信過剰になつたんじゃないのか？」

オーズがゾロとの話の途中に襲い掛かってくる 『ゴムゴムの尻モチ！』……ルフィにそんな技はなかった気が……オーズのオリジナルか？

麦わら一味は一箇所には固まらず散りじりになり攻撃をかわす。

キラはオーズが立ち上がった瞬間、白蛇で斬りつけ続けたキズだらけの足に強烈な蹴りを放つ。オーズがバランスを崩し倒れる。

「よし！キラが時間を稼いでくれる！お前等！『戦略の15（タクティクス・フォーメーション）』だ！」

フランキーがウソップとチョッパーに声を掛ける。

大きな拳を振り回しキラへとオーズが迫る……が当たらない……。キラにはオーズの動きがわかる……ルフィの戦いは今まで何度も見てきた。

「何だ？何であたんねえんだ？」

「さあ？なんでだろう？」

避けては斬りつけ、避けては斬りつけと何度も同じ動きを繰り返す……だんだんとオーズの動きが鈍くなっていく……

「よし！もういいぞキラ！あとは俺たちに任せろ！」

「おう！わかつ……」

キラの動きが止まる……視線の先にはフランキーが胴体部分、チヨッパが頭、ウソツブが右手、ゾロが右足、サンジが左足  
「巨大ロボ戦士！『パイレーツドッキング6！』」

……パイレーツドッキング6ってなんだ……？

「うおおおお！すごい！」

何故……オーズまで……こんなわけのわからん合体……って中身がルフィだからか……。

疑問に思っていることがあるのでフランキー聞いてみた。

「おいフランキー。そのロボ……左腕は？」

「何！？本当だ！左腕がドッキングしてねえ！ニコ・ロビン早く左腕にドッキングしろ！」

キラはロビンを見つめる……ロビンは嫌そうな顔をし口を開く。

「人として恥ずかしいわ」

「ああ、ロビンが正しい。ロロノアお前まで何してんだよ」

「う、うるせえ！勢いだ！勢い！」

ロビンがドッキングを断ったことで巨大ロボの完成はなくなった

……。オーズはロボの完成を楽しみにしていたのかドッキングをやめるとショックを受けていた。

「やれよ！ドッキング！」

強烈な張り手がロボを襲う……。ゾロとサンジは張り手をかわすがウソップ、フランキー、チョッパーはまともに食らい吹き飛ばす。

改めて攻撃を開始する一味、まずはサンジが岩を蹴り飛ばしオーズの眼を自分に向ける。サンジはニヤリと笑い 「おふざけはここまでだ！俺達の底力みせてやるよ！ルフィ！」

麦わら一味対国引きオーズの戦いが始まる……

## 第二百二十八話 秋水

オーズの注意がサンジに向いている間にゾロがオーズの左腕を弾きロビンが関節技を決める。さらに追い討ちを掛けるようにフランクとチョッパーの拳がオーズの顎にヒットし脳を揺らす。

完全にバランスを崩したオーズだが、まだ倒れていない脚一本で体を支えていた。

『アンチマナー反行儀キックコース！』

体を支えていた一本の脚をサンジが蹴り上げるとオーズはバランスを崩し 「1ダウン」 サンジが笑顔で頭から転倒したオーズに告げる。

「あつはつはつは！やるじゃないか！お前達！俺はうれしいぞ！」  
「キラ……おまえなあ……俺達の力見せてやるうぜ」とか言っ  
てなかったか？」

瓦礫に腰掛けキラはゾロたちの戦いを眺めていた。表情からは緊張感が伝わって来ず、余裕さえ感じられる。

「おめえら……覚悟しろよ……骨も残らねえと思え！」

オーズの迫力に一味は一瞬たじろいだだが……襲ってくる気配はない……どうやら逆さまに倒れツノが地面に突き刺さって動けないようだ。

「ロロノア。オーズの奴……動けねえみたいだな」

キラの言葉を聞いた一味の瞳は怪しく光っていた……その瞳には仲間であるキラさえ恐怖を覚えた……

「あああああああああ！！！」

悲鳴がスリラーバークに響き渡る……他のゾンビ達は悲鳴を聞き恐怖した……なぜ、オーズの悲鳴が聞こえてくるのか……ありえない……と……

麦わら一味の容赦のない攻撃がキラの目の前で繰り広げられている……まさに鬼……

「いい加減にしろおおおおおお！」

オーズが立ち上がり叫び声を上げる。キラは少しだけオーズに同情していた。

「オーズ。相手が悪かったな」

「……鬼みたいな奴らだな……お前等……」

苦笑いするキラの横でウソップが叫ぶ。

「うお！見る！あそこに大量の肉が！」

もちろん”ウソ”なのだが……オーズの瞳は完全にウソップの指差す方へと向いていた。

それを見逃さずゾロとフランキーがオーズの膝にダメージを与え膝をつかせる。

膝を地についたままオーズは怒りに震える……肉があるとウソを吐かれただけではなく膝もつかされた……。

「うはははは！負けてねえぞ！麦わらがモリアをぶっ飛ばすまでの辛抱だ！」

フランキーが声を上げて笑う。

「フランキー。お前、それを待つのか？」

「は？何言っただキラ？俺達はこの化物が麦わらの邪魔をしねえ様に足止めしてればいいんだろ？」

黙ってフランキーの話を聞いていたキラがゾロへと目を向ける。

「フランキーの意見は”足止め”らしいが……。ロロノア、お前は どうする？」

「わかってること聞くんじゃねえ……。俺は……。売られたケンカは買うまでだ」

ゾロは腰に帯刀していた一本の刀を抜き放つ……。抜き放った刀は黒く光り輝く……。刀の名は”大業物「秋水」”。

「ロロノア……。その黒刀は……。リユーマの……」

「ああ……。そうだキラてめえ、リユーマに”ウチの剣士に勝ったら相手になってやるよ”とか言ったらしいな」

キラはリユーマと戦ったときのことをしばらく考え……

「確か……。そんなこと言っただかも……」

「お前なあ……それじゃ俺がためえより弱いことになるだろうが！」  
「悪い悪い。まあ、過ぎたことは忘れて刀の威力でも試したらどうだ？」

大きく舌打をしてゾロはオーズと対峙する……恐竜が踏んでも1ミリも曲がらないという”黒刀”硬さこそが黒刀の特性だという。

黒刀”秋水”をオーズへと向け「来い！俺が相手だ！」と叫ぶ。オーズもゾロの叫びに答えるように全力で豪腕を振るう。

ゾロが黒刀で拳を受け止めると数メートル体が吹き飛ばされる。

「……先代”雪走”よりずいぶん重いな」

”秋水”を見つめゾロがボソリと呟く。

先代”雪走”はエニエスロビーで海軍のシユウ大佐によって修復不可能なほどボロボロになってしまっていた。

吹き飛ばされたゾロにオーズが拳を振り下ろす……黒刀を使い力で拳を逸らし

『三刀流……百八煩惱鳳！』

飛ぶ斬撃がオーズに襲いかかる……”雪走”を使用した時の三刀流の煩惱鳳とは違い”秋水”の斬撃が他の2本の斬撃を飲み込み巨大な一本の斬撃を作り上げた。

オーズが斬撃をかわすと背後にあった建物に大きな穴が出来る。



ゾロがその威力に驚き刀を見つめると”秋水”は怪しく輝いた……

「破壊力は数段増しているが……切り口に無駄な破壊が多すぎる…

…俺がまだ使いこなせてない証拠か……」

「こんにやろっ……踏み潰してやる！」

オーズが一味を踏みつけようと何度も地団駄を行うがゾロは敢然と立ち向かう。

「ゾロ！無理すんな！万が一コイツを倒しても戻ってくるのはルフィの影だけだ！ルフィがモリアを倒せば全員の影が帰ってくる！死にもしない巨体ゾンビにケガさせられることはねえ！」

ウソップの言いたいことはわかる……ルフィを信じて足止めに徹しろと言いたいのだろうが

「ウソップ。ロロノアだつてルフィを信じてるさ。」

「キラ！じゃあ！足止めに……」

「ルフィにも苦手なものがあるだろ！ダメシだ！」

ロロノアの言うとおりルフィは人を”嘲る”ような能力に弱い……まさにモリアの能力である”影”は苦手な相手だろう。

モリアが正々堂々とルフィと戦うのかどうかさえ疑問だ。

「ルフィがスカされて朝がきたら……ルフィもコックも俺も3人もまともに戦えなくなる……そうなるとまともに戦えるのはキラだけになっちゃう」

「……ロロノアの意見に賛成だ。ルフィ一人だけでも正常に戻そう。

モリアに他にも何か秘策があったなら俺一人では厳しい」

全員がゾロの意見に賛成し頷く。夜明けまで時間がない……あと30分といった所だろうか……

「霧が深いのが唯一の救いだな……夜明け前にして消滅への危機感も出てきた……」

サンジの言うとおり霧が深いおかげで朝日の届く場所は限られている……

「……！？なんだ、この揺れは！？」

スリラーバークが大きく揺れる……これは何かが起こる序章なのか……？

## 第二百二十九話 2人の七武海

「ぎゃああああ！な、何だあ！？」

「きつとオーズの奴がでたらめに舵をきつたから”魔の三角地帯”を出ちまっただんだ！」

「あの野郎！余計なことを！」

大きな揺れとスリラーバークが霧の海域を出たことにゾンビ達は取り乱していた。

この事態に焦った何人かのゾンビ達はモリアへ報告しようと屋敷の階段を駆け上がり部屋の扉を開ける……

扉を開けるとモリアに來客が来ているようだった。

その來客とは

「七武海にして唯一政府の言いなりに動く男”暴君くま”俺に何のようだ？」

モリアへの來客は同じ七武海の一人”バーソロミュー・くま”であつた。

”くま”がゆっくりと話し始める。

「報告事項がある。王下七武海クロコダイル降任の後、後釜が決まった」

「キシシシ！一体どこの海のどいつがなつた？海賊はごまんといひぜ」

「後継者の名は”マーシャル・D・ティーチ。通称”黒ひげ”という男だ」

黒ひげには一度麦わらの一味は接触している。接触した場所はモックタウン。

酒場でルフィが食事の味について言い争った大柄の男……それが”黒ひげ”だった。後に”黒ひげ”はルフィの最大の敵となるがそれはもう少し先の話である。

”黒ひげ”の元の懸賞金は……0なのだが仲間殺しで”白ひげ”の一団から追われていたが逃亡し政府に実力を示して七武海に加盟したようだ。

そして”くま”はもう一つ政府が危惧していることをモリアに伝えると

「この俺があんな少数の経験も浅い海賊団に負けるかもしれねえだと!?!」

政府が危惧していることそれは……また一人”七武海”が麦わらの手で落とされるのではないかということであった。それを聞いたモリアが黙っている訳もなく”くま”の胸倉を掴み怒鳴り散らす。

「勝負に100パーセントはない。エニエスロビーでのロブ・ルツチの敗北など誰が予想した……必要ならば俺が貴様に加勢しても構わない」

”くま”の冷静な一言がモリアの怒りにより一層火をつける。

「おい……政府のバカ共に伝えろ……てめえらを出し抜いた” 麦わらの一味” はいとも簡単にゲッコー・モリアのゾンビ兵となったとな！」

キラは霧が晴れた空を見つめる……このままでは朝日がストレートに射ってきてしまう……

「キシシシ！清々しい夜空だな。グズグズしてていいのか？貴様ら先ほどまで屋敷で”くま”と話していたはずのモリアが今オーズの腹の中にいる……どうやらルフィはモリアに出し抜かれてしまったようだ。」

「さあ、俺と戦うチャンスをやろう！俺を倒せば全ての影を解放できる。ただオーズを倒さなければこの俺を引きずり出せねえがな！」

ゲッコー・モリア……やはり汚い男だ……。

「モリア……今、引きずり出してやる！」

「おおおお！ユダ！生きていやがったのか！キシシシ！てめえの影……頂くぜ……」

キラは背後へと回し蹴りを放つ 「……な、何い！？」 回し蹴りが背後に現れたモリアの顔面にめり込む。

「汚ねえお前なら影を移動して俺の影を取りに来る……。勘が当たったな」

「き、貴様……」

背後にいたはずのモリアはすでにオーズの腹へと戻っていた。カゲカゲの能力……やっかいだな……

「ウソップ！まずはオーズの浄化だ！山ほど塩を持って来い！」  
「よし！わかった！確か最初の屋敷に厨房があったはずだ！」

キラの指示を受けウソップは厨房へと走り出す……が……

「塩か……よしオーズ！厨房へ行けなくしてやれ。長つ鼻ごと屋敷の通路を潰せ！」

オーズはモリアの指示を受け通路ごとウソップを殴りつける……  
通路は破壊され通路にいたはずのウソップは……

モリアが加わることでオーズに頭脳がついた……これほど厄介なことはない……一味はどう戦っていくのか……

## 第三百三十話 影革命

「モリア……貴様……！」

キラは怒りに震え”白蛇”を振るう……刀身がまるで本物の蛇のように蛇行しオースの脚に突き刺さった。

「痛てえ！なんなんだよ！あいつの武器！」

モリアは怪しげな笑みを浮かべキラを見つめている……キラの影をどのゾンビに使うかなどと考えているのかもしれない……

麦わらの一味の背後にブルックが現れる……腕には大量の塩とウソップを抱えていた。

ウソップは攻撃の当たる寸前にブルックに助けられていたようだ。

「遅くなって申し訳ありません！大量に塩が必要かと思いついてきました！」

「すまない！ブルック！恩にきる！」

ブルックにキラは頭を下げお礼を言う……大量の塩は手に入った、あとは朝が来る前にオースを塩で浄化しモリアを倒すだけ……

だが、仮にもモリアは王家七武海……簡単な相手ではない……

オースよりも先に動いたのは一味だった。

『必殺！特用油星！』

ウソップが放った弾丸にフランキーが火を吹きかける……。火を纏った弾丸は形を変え　『スーパーサイズ火の鳥星!』　巨大な火の鳥となりオーズへと襲い掛かる。

「うお!あちちち!」

「みつともねえ!怯むなオーズ!てめえらゾンビの熱い痛いのは人間時代の思い込みだ!落ち着いて火を払え!」

オーズが火を払っている間にゾロはチョッパーに空高く放り投げてもらおう　『三刀流……大・仏・斬り!』　塔を輪切りにする。

今度はサンジがゾロの斬った塔へと向かっていき　『ジエンガ砲!』　塔をオーズへ蹴り飛ばす。

火を払うことに集中していたオーズの横っ腹に塔が突き刺さる。

「痛!こんにやろう!」

飛んできた塔をオーズは麦わらの一味に向けて大きな拳で殴り飛ばす……が一味に到達する前に塔は細切れになり地に落ちる……

「みんな……ケガはないか?」

飛んできた塔は”白蛇”によって斬りおとされた。モリアは舌打ちをしてキラを睨みつける。

「オーズ……あの長髪の男から始末しろ《恐ろしい奴だ……他の奴等と比べてユダだけキズがない……》」

「はい。ご主人様」



注意は完全にキラに向いていた……その間にウソップが巨大なパチンコでフランキーをオーズへ向けて打ち出す。

「覚悟しやがれモリア！」 迫撃砲”！」

完全にオーズの注意はキラに向いているはずだった……

「何！？よけやがった!？」

砲撃をかわしたオーズは強烈な蹴りをフランキーに浴びせる……塔に叩きつけられたフランキーが地に落ちる。

「まだわずかだが息がある。オーズとどめを刺せ！」

舌打をしてキラがフランキーの元へと走る……オーズが脚を振り上げとどめを刺そうとした瞬間 『サンダーボルトテンポ!』 オーズに雷が落ちた。

「今のは……ナミちゃんか！」

辺りを見回しオーズの視界にナミの姿が映る…… 『ゴムゴムの……』 オーズが拳を構える。

「何やってんだ？届かねえだろ？」

「いや……まずい！」

確かにチョッパーの言うとおり今までは届かなかった……だが今はモリアがいる……

『銃！』  
ジストル

オーズの腕が伸びナミのいる建物を破壊する……

「キラ！ありがとう！」

「どういたしまして」

拳が到達するよりも先にキラがナミを助けていた。

「あいつの腕なんで伸びるんだ！？ゴム人間はこの世に一人だろ！？」

「モリアの能力さ」

キラの言葉を聞き全員の視線が集中する。

「キシキシ！それについては俺が説明してやる！これがカゲカゲの能力”影革命”」

今オーズの影にはモリアの影が潜り込み支配している、そのモリアの影がオーズの影の形を変えていた。

そして影は実体と同じ形でなくてはいけないが”影革命”の能力により実体に影があわせるのではなく影に実体があわせて変化する。

その能力によりモリアの影がオーズの手足の影を伸ばしたから実体がそれにあわせて伸びたのだ。

「厄介だな……」

モリアの能力により体が伸びるようになったオーズはまるで本物

のルフィを相手にしているようだった。

モリアとオーズを倒すことは出来るのだろうか……？

## 第三百一十一話 凍死

「オーズボール！」

モリアの”影革命”の能力でオーズの体をボールのように丸め一味へ向けて突進させる。

「おい！ご主人様！俺のケンカだ！邪魔するなよ！」

「キシシシ、ああ悪かった。俺はあくまで補助に徹する。さあ一人ずつ確実に潰していけオーズ！」

自分の戦いを邪魔され怒鳴るオーズだったがモリアの言葉を聞き冷静さを取り戻す。

うまく攻撃をかわした一味だったがフランキーだけは先ほどのオーズの蹴りで完全に気を失っていた。ゾロは倒れたフランキーを見つめ歯をくいしばりオーズへと向かっていく。

「ロロノア！近寄ると危険だ！」

「俺は……仲間がやられたのに黙って見ていることは出来できねえ……！」

オーズへと向かっていくゾロを止めることは出来なかった。キラもゾロと同じ気持ちだからだ。だが今自分がみんなの側を離れると全滅もありえるかもしれない。

「すみません！お願いを一つ聞いてください！」

ブルックが突然頭を下げ 「お前……正気か？」

キラの言葉にブルックは大きく頷く。彼のお願いとはフランキーと同じようにウソップの巨大パチンコ”クワガタ”でオーズに向かい打ち出してもらいたいという。

だがそれではフランキーとなんら変わりはない、ブルックはそこにロビンのハナハナの実の能力で回転を加えてもらいさらにナミのサンダーボルトで雷を纏うというのだ。

「お前の体がもたねえぞ」

「恩を返せぬ無念以上に痛いものなどありません」

ブルックの背中を2回ほど叩き微笑みながらキラは「行って来いと声を掛けた。

”クワガタ”にブルックがセットされる……彼の体にはロビンの腕が巻きつき前方にはナミの作り上げた雷を纏った黒雲がたちこめている。

「骨身を惜しまず！」

黒雲へ向けて真っ直ぐにブルックが飛んでいく……『回転蔓！』ロビンがブルックに回転を加える……。

前方の黒雲へとブルックは突っ込み雷を纏って雲から飛び出す。

「さあ行きますよ！雷の矢の如く！」雷骨剣……革命舞曲ボンナバン”！」

オーズが悲鳴を上げる……ブルックはオーズの肩を打ち抜き風穴

を空けたのだ。この大きなスキを逃さず一味は攻撃を繋げる。

『二刀流式斬り……”登楼”！』

足元からゾロが巨体を斬り上げるがオースの標的は……「このガ  
イコツにとどめだ！」

『ゴムゴムの戦斧！』

建物に突き刺さり力尽きていたブルックにオースの一撃が放たれ  
た……。ブルックは瓦礫と共に力なく地面へと落ちていく……

『必殺！アトラス彗星！』

ウソップの放った攻撃はあっさりと叩き落とされ……「次はお前  
だ！鼻の奴！」次なる標的となる。

『蛇腹剣……大蛇！』

地を這う剣はオースの足元付近へと行くと突然腹部に向かい伸び  
上がり上半身を切り裂く……

「クソ！俺あいつキライだ！」

「オース！あいつは気にするな！他の奴から……」

モリアの命令を無視しキラへと向かっていく完全にオースの眼に  
はキラしか映っていない……。鞭の形状だった剣はキラの手元へと  
戻り刀となる……

「鬼さん……こちら……《このままじゃラチがあかねえ……何か……

…」

「キラー！右腕を狙えー！」

チョッパーがオーズの肩の上で叫ぶ……右腕……？

「右腕がどうした？何かわかったのか？」

「オーズの死因がわかったんだ！」

オーズの死因は……”凍死”。チョッパーの診断によればオーズの右腕は元々のオーズの腕ではないらしい。ホグバツクの手で天才的に復元されているが継ぎ目にひどい凍傷の跡があるとのことだ。

そして”凍死”の原因は……500年前、氷の国をさ迷っているときも裸だったから……

「ロロノア、サンジ。そんな奴に負けてもいいのか？」

『『そんなアホに負けられるか！』』

キラの質問に2人は声を合わせて答える。弱点はわかった、後はどう攻略するかだ……

## 第三百二十二話 作戦

「やるぞ……痛みを感じないだけでダメージは蓄積しているはずだ」  
サンジとゾロはキラの言葉に頷く。オーズは拳を振り上げ肩に乗っていたチョッパーへと振り下ろす。

チョッパーは小さい体を活かしオーズの振り下ろした拳の隙間へと入り込み攻撃をかわしていた。

攻撃をかわしたチョッパーはランブルボールを口に放り込み……  
「噛み砕き”ジャンピングボイント飛力強化”で高々と跳躍する。

チョッパーに手を貸すためサンジがオーズの腕を駆け上がっている……。そしてサンジの脚の上に腕力強化したチョッパーが乗るとオーズの右肩へ蹴り飛ばす。

『アルメ・ド・レール空軍刻蹄桜シユート！』

サンジの蹴り出しにより加速の勢いを上乗せした一撃にオーズの腕に大きな跡が残る……。

巨体がよるめく……が……。「何度も同じところ攻撃しやがって効かねえもんは効かねえぞ！」

オーズが高々と飛び上がり攻撃態勢をとる。

「マズイぞ2人共逃げろ！」



ゾロの注意もむなしく……攻撃後の2人はまだ宙を舞っていた。その2人が攻撃をかわせる筈がない……

『ゴムゴムの銃乱打！』  
ガトリング

無数の巨大な拳がサンジとチョッパーに降り注ぐ……2人は地面へと叩きつけられ口から血を流し倒れる……

「キシシシ……あと5人！」

キラが鋭い眼光でモリアを睨みつける……。刀を抜きオーズへ向かおうとすると……ゾロがキラの肩を掴む。

「俺に考えがある……」

それだけ言うとゾロはウソップに何かを耳打ちし……攻撃を開始する。

『夜叉鴉！』  
やしやがらす

自分の目の前で2本の刀をクロスしオーズの右腕に突き刺し高速で前転しながら肩口まで登っていく……ゾロが通過した後には鳥の足跡のような傷が残る……

「また右腕か！ 効かねえって言うてるのに何度も何度も……」

オーズの大きな眼が肩まで登ってきたゾロを捉えると……体から振り落とし強烈な膝蹴りを放つ。

建物に叩きつけられ瓦礫とともに地へとゾロが落ちていく……

「おい！ こっち向けオーズ！」

声のする方をオーズが振り向くと……大きな口に何かが飛び込む

……

「な、何したんだ？ ウソップ」

「く、食わせてやったんだ……。塩を食わせてやった！」

ゾロの言っていた作戦とは自分が囷となりオーズの注意を引いているうちにウソップが塩を準備し食べさせることだったのだ。

オーズの口に黒い影が見える……。しかし出てきた影の形は……。どう見てもルフィの物ではなかった……

### 第三百三十三話 ナイトメア・ルフィ

塩を放り込まれたオーズ口から出てきたのはルフィの影ではなく……モリアの影だった。モリアの影はオーズの口に放り込んだはずの塩のかたまりを持っている。

「キシキシ！ 残念だったな体内からガードさせてもらったぜ」

モリアの影は手に持っていた影をウソップに投げつける……大きな袋が破れウソップが塩まみれになった。

ブルツクの集めてきた塩は……無駄となってしまう……

「キシキシ！ 弱点とわかってるものに対策を打たないと思ったのか？」

オーズの瞳はウソップを捉えている……次はウソップを狙ってくる……ならば……

キラはオーズの注意を自分に向けるため背後に回りこみ背中を切り裂き距離を取る。

「痛てえ！ コンニャロウ！」

「待て！ 追うなオーズ！ ユダは相手にしなくていい！ 確実に一人一人だ！」

モリアの命令を受けたオーズが逃げ惑うウソップに脚を振り下ろし踏み潰す。一度ではなく何度も何度も踏み潰す……

「…………モリアー！」

怒りに身をまかせキラはオーズに斬りかかり右腕を斬りおとす。

「ぎゃああああ！ ご主人様！ 俺の腕が！？」

「うるせえ取り乱すな！ 痛みはねえだろ！ てめえ……………！ ユダ

……………！ バケモノが……………！」

キラはオーズの中に入るモリアを指差し挑発する……………「てめえは  
……………俺が殺す……………」

モリアの瞳が恐怖に震える……………これは覇気……………なのか……………？

「キラ……………あとは俺が引き受けるぜ」

声のする方を振り向くと大男が立っていた……………ウソップを助けて  
くれたらしく腕に抱えている。

その大男にどこかあいつの面影を感じた……………だが……………なぜこんな  
姿に……………？

「ルフィか？」

「ああ。モンキー・D・ルフィだぜ！」

屈強な体つきと元の身長のおよそ2倍はあるのかという巨体、背中に背  
負った刀。本当にルフィなのだろうか……………。半信半疑ながらキラは  
ナミとロビンを連れルフィの元へと行く。

「待ってたぞ船長」

口元を緩め微笑しルフィはオーズへと向かっていく……。オーズは右腕をキラに斬りおとされた為うまく攻撃を防ぐことが出来ない。オーズとルフィの戦闘を黙って眺めていたキラの横でウソップが突然声を上げキラの肩を揺する。

「ん？ キラ！ 見てみるアイツらゾロたちに何かする気だ！」

ウソップの指差す先には一味が倒れているのだがそこに大勢の海賊達が群がっている。何をやる気だ……。？ その中にリーダーと思わしき女性がいる……。彼女に話を聞いてみよう。

「俺の仲間をどうするつもりだ？」

「うわ！ いつの間に!？」

急に目の前に現れたキラに海賊達は驚いている。

「治療するのよ。あんた達は私たちの希望の星だから！」

リーダーと思われる巨体の女性が今までの経緯を話し始める。

彼女達もモリアに影を奪われこの島に閉じ込められているという。

そしてモリアを倒すため彼に勝てる希望を探していた所ルフィに出会った。ルフィの体にモリアを倒すために溜め込んだ100人分の影を詰め込んだということだ。

影を体に入れば強さは何倍にも膨れ上がるらしい。

疑問に思ったことはどうやって影を集めたのか……。影を集める方

法は塩をゾンビに食べさせ飛び出た影を捕まえる。

影を体に取り込む人間の精神力が弱いと気を失ってしまったりいのだが……ルフィの気力が強かつたらしく100体分入ったということだ。

だがその強さももって10分……残り時間は……

「残り2〜3分で決着つけろということか……」

「もう夜明けも近いわ！ 頼むわよ……ナイトメア・ルフィ！」

もう決着の時は近い……巨体の女性は願うようにルフィを見つめていた……。

## 第三百三十四話 一味vsオーズ

ナイトメア・ルフィは軽々とオーズを投げ飛ばす。

地に叩きつけられたオーズが勢い良く立ち上がり反撃に出るがオーズの拳が届くよりも先にナイトメア・ルフィの刀が巨体を切り裂く。

「クソッ！ 一旦コクピットを離れて……！？」

このままでは巻き添えをくらうと思ったのかモリアがオーズの体から一度離れようとするが……『ゴムゴムの暴風雨！』ルフィの攻撃がコクピット内にいるモリアにも炸裂する。

巨体が宙に浮かび上がり吹き飛んでいく……モリアはコクピットから逃げる事ができずまともに攻撃をくらってしまった。

オーズを吹き飛ばしたルフィの体からたくさんの影が出ていき体が縮んでいく……どうやら時間切れのようだ。

巨体が地に落ちた瞬間、歓声が爆発する。島中に響き渡るほどの大声を出し喜んでいた……無理もないこれで彼等はスリラーバークの呪縛から解放されるのだから。

キラはルフィに駆け寄る……かなり疲労が溜まったのだらうグツタリとしている。笑顔でルフィにねぎらいの言葉を掛けるキラだったが……倒したと思われたオーズの体が僅かに動いた。

「まだ終わってないか……」

「えっ？ キラどういうこと？」

安全な位置にルフィを移動させるようキラはナミに指示をする……。キラの視線の先ではオーズが立ち上がりこちらを睨みつけている。

「痛くもカユくもねえ……！」

まずい……。もうすぐ夜が明けてしまう……。刀を抜き放ちオーズに向かっていく。

オーズへと諦めずに立ち向かっていったのはキラだけではなかった。

「お、おい……。コイツら……。誰一人として諦めてねえ……！」

一味全員がオーズへと向かっていていた。ルフィもボロボロの体に鞭を打ち戦闘準備を整える。

ロビンが『脚場咲き（ピエルナフルール）』でマストに足場を作りブルックがルフィを抱え駆け上っていく。

「待てえ！ どこに……！」

『レイン＝テンポ！』

ルフィ達を追おうとしているオーズの体が雨が降り注ぐ……。その間にフランキーが配管の工事を完了させる。

フランキーが修理した配管から冷気が発射されオーズの脚が凍っていく……



「クソツ！ 動けねえ！」

もかくオーズにサンジが舵の鎖を掛ける前屈みだった姿勢を強制的に真っ直ぐにしようとする。

「キラ！ ソロ！ オーズの腹を引かせて！」

チョッパーの指示の受け、ソロとキラがタイミングを合わせ……

『三刀流奥義………さんぜんせかい三千世界！』

『蛇腹剣………ウラバミ大蛇！』

2人の斬撃を受けオーズの顎が上がる……

「よし！ 今、オーズの背骨は真っ直ぐだ！」

背骨を真っ直ぐにすることに何の意味があるのか……。

チョッパーの説明によると人間の背骨は本来S字に曲がることで衝撃や重さを和らげる構造になっているがそれが真っ直ぐに伸びきった場合、衝撃の逃げ場がなくなり全てのダメージを受け止めることになるそうだ。

オーズの真上から”ギア3”で腕を巨大化させたルフィが勢い良く落下してくる。

『ゴムゴムの巨人ギガントバズーカ！』

ルフィの渾身の一撃が顔面に炸裂した……骨の碎ける音が聞こえ

オーズは力なく地面に崩れ落ちた……

第三百三十五話 影1000体

勝敗は決まった。オーズの意識はまだあるようだがまったく体が動かないようだ。

オーズを倒したルフィはギア3の影響で体が縮んでいた。

朝日が昇るまでもう時間がないオーズは倒したのだがまだ影が戻ってきていない。

「早くモリアを叩き起こして影を返してもらおうのよ！」  
「起こすにゃ及ばねえ……」

巨体の女性が叫ぶのと同時にモリアがゆっくりと立ち上がる。モリアが立ち上がった瞬間、ゾンビ達から歓喜の声上がる。

「モリア……すべての影を開放しろ」  
「ユダ……てめえが何故麦わらの下にいるのかはわからねえが……これ以上そいつらと航海を続けても無駄だ」

荒い息を整えモリアが話を続けた。

「お前を含め麦わらには筋のいい部下が揃っている様だがてめえらの力量じゃ”新世界”には遠く及ばねえ……全てを失う！なぜだかわかるか!？」

王家七武海の男ですら何かに怯えている……”新世界”とは……  
一体……?」

「俺は体験から答えを出した。有能な部下達をなぜ失ったのか……。仲間なんざ生きてるから失う！ 全員が死んでいるゾンビなら失うものはない！」

モリアからいくつもの影が延びていく……。モリアはゾンビたちから影を奪い自分の体に取り込んでいく……

「俺はこの死者の軍団で再び海賊王の座を狙う！ てめえらは影で俺の部下になることを幸せに思え！」

ルフィの取り込んだ影が1000ならばモリアの取り込んだ影は……

「キシキシ！俺は……影1000体だ！」

拳を振り上げ地面を殴りつける……。地が裂け船全体が大きく揺れる。

影を多く取り込みすぎた影響なのか……。完全にモリアは暴走している……。敵味方の区別なく攻撃を始めた。

朝日が昇り始める時間はもう残り少ない……。キラは刀を抜きモリアへと視線を移す。

ルフィ同様モリアも影を取り込み巨大化していた。その姿は醜い……。力を欲するあまり己の姿などどうでもいいのかもしれない。

ギア3の影響で体が縮んでいたルフィも元に戻っていた。

「もう体はいいのか？ 船長」

「キラ。お前こそ大丈夫なのか？ ボロボロだったじゃねえか？」

2人で顔を見合わせお互いの拳を軽く合わせる。

「ルフィ……時間がない……全力で行くぞ！」

「当たり前だ！」

キラは一瞬にしてモリアの目前へと移動し腹部を切り裂いた。モリアの口から複数の影が出て行き持ち主の下へと帰っていく……

「ユダ……貴様……！」

「ユダ？ 違うな」

刀を振り切った反動を使いモリアの傷口に回し蹴りを叩き込む。

痛みで呻くモリアの口から再び影が出て行く。

「俺は、麦わら海賊団副船長”旋律のキラ”だ」

ルフィはギアを一つ上げる……体から蒸気が立ち込めたと思うとキラの横へと並びモリアに渾身の一撃を叩き込む。

モリアが反撃に転じようとするとキラが背後へと回り込み鋭く斬りつける。2人の攻撃を受けたモリアの口から次々に影が吐き出されていく。

「キラ！ あとは俺がやる！」

「了解。船長」

勝利を信じ体が消えかけても仲間達はルフィの戦いを見つめていた。

キラはモリアとの距離を取りルフィに全てを託す。

ルフィがもう一つギアを上げる……次の一撃が勝敗を決める……

## 第三百三十六話 抹殺指令

『ゴムゴムの巨人のJ・E・T砲弾！』<sup>シエル</sup>

ギア3を使った渾身の一撃がモリアの腹部に突き刺さり影が口から噴き出す。

口から噴き出す影をモリアは絶対に逃がさんと口を押さえた。

「帰ってきなさい！ 私の影！」

巨体の女性が自らの影に呼びかけると他の者達も一緒になって影に呼びかけ始める。

影は彼等の呼びかけに反応しているのだろうか生まれたときから共に人生を歩んできたもう一人の自分……

「ルフィ！ まだ攻撃が足りてないぞ！」

キラの呼びかけにルフィは頷きもう一度モリアの腹部に一撃を加える……だが……

「あの野郎……まだ粘る気がよ……」

サンジが驚くのも無理はない……ルフィの強力な一撃を食らってもまだ耐えている。口を押さえ絶対に影を返すまいとしている……。

彼を支えているのは……偉大なる航路に出てきたばかりルーキーに負けられないという自尊心なのだろうか……

ルフィの体は小さくなってしまっている。これ以上ルフィに戦闘は不可能だ……このままでは……ゾロたちが消えてしまう。

モリアの背後のマストがキラの視界に入った……あれを斬り倒して下敷きにしてやれば……。完全にルフィの一撃に怯んでいるモリアの脇を通り抜けマストへと駆け寄り根元を切り落とす。

「ぎゃああああああ！ 麦わら……キラ……貴様ら……」

マストの下敷きとなったモリアの口から何人もの影が飛び出していくのと同時に朝日が差し込む。

このままでは影がゾロたちの元へ戻って来るまでに実体が消滅してしまう……

朝日が彼等を包むが……ゾロたちの体は消えていなかった。朝日ではなく影が彼等を包み込んでいた。

「めんどろかけさせんなよ……」

「ふ……いいじゃねえか。たまには副船長らしいことしろよ」

白銀の壁が朝日を遮っていた。キラが自らの刀を壁へと”創造”したのだ。

影が奪われたもの達の下へと戻っていく……

「生きててよかったな。ロロノア」

「まあ、いつかこの借りは返すぜ。キラ」



全員の影が戻ったこれで再び航海に出ることが出来る。

「あんた達……ありがとう！ この恩は決して忘れないわ！」

助かった者達がお礼を言う……あの巨体の女性はローラと言うそう  
うだ。彼女達も海賊らしい。

みんなが笑顔でお互いの無事を喜んでいたがキラだけは厳しい表情をしていた。

「……おい、お前等逃げろ」

キラの突然の発言に全員が辺りを見回す。まさか……まだモリアが  
生きているのか……全員が不安に満ちた表情を浮かべる。

希望はもう動けない……だがもしまだモリアが動けるなら……悪  
夢は再び始まってしまっ……

「久しぶりだな。くま」

「”本物”の死神のユダか……まさか生きていたとはな……」

全員の不安が的中することはなかったが……まだ傷を負ったモリア  
の方が良かったのかもしれない……。キラの視線の先には”王下  
七武海”暴君くまの姿があった。

くまは電伝虫を使い世界政府とモリアが敗れた場合の話をしてい  
た。内容はクロコダイルの後任が決まった所にまた七武海に穴を空  
けるのはまずい、次々に七武海がやられてしまっっては威厳を失っ  
てしまっ。

なのでこの情報を世間に流すべきではない、モリア敗北の目撃者と妻わらの一味を抹殺せよ。

これが”くま”に与えられた任務であった。

「俺が奴の相手をする……その間に逃げる……」

キラはくまの前に立ち仲間達にそう告げた……。七武海との連戦……ほぼダメージのない自分が戦うのが得策だろうとキラは考えていた。

だが彼は気付いていなかった……。 ”創造” は自分の予想以上に体力を奪っているということを……

## 第三百三十七話 肉球人間

「ルフィを連れて早く逃げろ！ 狙いはルフィの首だ！ ……ぐっ  
！？」

体に衝撃が走ると同時にキラは後方へと吹き飛ばされる……

何が起きたのか……くまを睨みつけるとキラに手のひらを向けていた。

「何？ 何があつたの！？」

突然吹き飛ばされたキラを見つめナミは目を大きく見開く。

何度かくまとは戦ったことがある……何が起きたのかはおおよそ見当はついていた。

「奴は超人系”ニキュニキュの実”の肉球人間だ」

「に、肉球人間？ そいつ実はたいしたことないんじゃない？ ……！？」

フランキー体が軽々と吹き飛ばされる。

「そんな……普通の大砲はフランキーには通じないはず……」  
「バッドほつ圧力砲光速で弾かれた大気は衝撃波を生む」

キラが軽く指輪に触れると指輪が消え”刀”が現れた。

くまへ斬りかかろうとした直後……ゾロがキラの肩を掴む。

「キラ……手貸すぜ……」  
「ロロノア……無理するなよ」

目でお互いに合図をすると先にゾロがくまに斬りかかる……が刀を手のひらの肉球で受け止められ軽々と吹き飛ばされる。

「ロロノア・ゾロ。無駄だ俺に斬撃は……!？」

ゾロの背後に隠れ接近していたキラがくまの首目掛け刀を振り切る……が一瞬早くくまの手がキラの腹部に触れた。

腹部に激痛が走り後方へとキラの体が吹き飛ぶ……と同時にくまの体からも一気に力が抜ける……

「クソツ……もうちょいだったな……」  
「その刀……」

くまの頬を血がつたう……キラの刀の先が頬を掠めていたのだ……だがくまは表情一つ変えずこちらに向かってくる。

手のひらをキラへと向け圧力砲を放つ……ギリギリのところで圧力砲をかわし……鋭い突きをくまの首へ放つ。

再び当たる寸前でくまは刀をかわし……拳を振り下ろす。

キラの姿が視界から消え……拳は空を切る……

「勝負つかないそうだな」

「……いや……おれにはお前が辛そうに見えるんだが？」

大粒の汗が頬を伝い……視界が歪む……キラの能力は脳に大きな負担を掛けてしまう。キラは七武海2人を連戦で相手にしているため疲労がピークに達していた。

「おれは貴様が弱つていようと……手を抜いたりはしないぞ……」  
「黙ってる……誰が手を抜いてくれって言ったんだよ……。それよりもいいのかよ……お前……死ぬぞ？」

くまが背後を振り向く……『三刀流 百八煩惱鳳！』

巨大な斬撃が至近距離で放たれる……が……「無駄だと言わなかったか？」手のひらの肉球で斬撃を弾き飛ばす。

あつさりと斬撃を弾かれたゾロが……キラを見つめ微笑む……「いいところ取りかよ……」

キラの刀が蛇のようにうねる……『蛇腹剣……修陀<sup>しゅうた</sup>！』6mを超える長身のくまを巨大な斬撃が飲み込んでいった。

## 第三百三十八話 犠牲

「仕留めたのか……？」

おそろおそろゾロがキラに尋ねる……キラの表情は曇っていた。

その表情からは生気も感じられない……

「おしかったな……ユダ。もう少し貴様に余力が残っていれば……俺は立っていないかっただろう」

「余力って……キラ……お前……」

ゾロがキラの体を揺るとその場に崩れ落ちる。

「麦わらの首を渡せば……お前達の命は助けてやろう……。政府もその首さえあれば文句は言うまい。どうする？」

『断る！』

麦わらの一味とローラ海賊団の声が合わさった。

全員の意見を聞いた”くま”は「残念だ」とだけいい手に溜めていた圧力を一気に爆発させる……

スリラーバークが崩壊していく……。

崩壊した後に残るのは……瓦礫と倒れた仲間達……くまは瓦礫の中を歩きルフィの姿を探す……と……

『獅子歌歌ー！』

ゾロの一撃で衣服で隠れていたくまの腕が露になる……。くまの腕は人間のものではなく明らかに機械であった。

「てめえ……フランキーと同じ改造人間か……!?」

くまの口が開きレーザーが放たれる……。

当たる寸前でゾロはレーザーをかわす……が爆風で体は軽々と吹き飛ばされてしまう。

背後で溶けた鉄がくまの口から放たれたレーザーの威力を物語っていた……

「改造人間……確かにそうだが”サイボーグ”フランキーとはずいぶん違う……おれは人間兵器”パシフィスタ”」

パシフィスタ……政府未完成の人間兵器で開発者は天才科学者Dr・ベガパンク。

Dr・ベガパンクの科学力はこれから人類が500年をかけて到達する域に在るといわれ世界最大の頭脳を持つ男と呼ばれている。

「どうしても……ルフィの首を取っていくのか？」

「それが最大の譲歩だ」

歯を食いしばりゾロは地面に手をつく……

「首はやる……ただし身代わりの俺の命一つで勘弁して貰いてえ！今はまだたいして名のある首とは言えねえが……やがて世界一の

剣豪になる男の首となれば取って不足はねえはずだ」

ルフィの代わりに自分の命を差し出すというゾロの発言にもくまは表情を変えることなく話を続ける。

「そんな野心がありながら……この男に変わって死ねると言うのか」  
「そうするほか一味を救う手立てがねえ……船長一人守れねえでてめえの野心もねえだろう」

大きく息を吐きゾロは倒れているルフィを見つめた……

「ルフィは……海賊王になる男だ！」

「……待て待てクソヤロー」

瓦礫を押しつけサンジがゾロとくまの間に立つ……サンジもまたルフィ、ゾロではなく自分の命を犠牲にするつもりであった。

「さあ……取れ……こちらいつでも身代わりの覚悟はある……！」

腹部に刀の柄が突き刺さりサンジは気を失う……ゾロはあくまでも自分を犠牲にするつもりのようにだ。

「後生の頼みだ……ルフィの命は助けてくれ……」

腰の刀を地面に突き刺しゾロは深く頭を下げる。

「これで麦わらに手を出せば恥をかくのは俺だな……。俺がやる事を信じる約束は守る……そのかわりお前には地獄を見せる……！」



## 第三百二十九話 苦痛

くまはルフィの体を持ち上げ手のひらで軽く触れると大きな大気のかたまりが出来上がる。

「今……こいつの体から弾き飛ばしたものは”痛み”と”疲労”だ」  
ニキュニキュの実の能力でくまはルフィの体から”苦痛”をはじき出した。

モリアとの戦いのダメージ、ギアを何度も使ったことによる疲労、その2つの苦痛をゾロにルフィの身代わりとなり受けるとくまは言うのだ。

ゾロの体も戦闘によってかなりのダメージを受けている……この苦痛に耐え切ることにはほぼ不可能。

耐え切ることが出来なければ待っているのは……死……。

くまがその巨大な苦痛のひとかけらをゾロへと放る……。苦痛がゾロの胸へと入った瞬間……鼓動激しくなり体中に激痛が走った……。

「ぐあああああああああ！」

叫び声がスリラーバークに響き渡る……

仲間たちが倒れているこの場所では誰かが自分の叫び声で起きてしまつかもしれない……そう考えたゾロはくまに場所を変えたいと

告げた。

何も言わずくまは頷き仲間たちとは遠く離れた場所へと移動する。

「……いい……」

ゾロは目の前にある苦痛の塊を見つめる……そして大きく息を吐き……手を……そして全身を苦痛へと埋めていった。

くまは海沿いまで移動し一人ボソツツと呟く……

「良い仲間を持つてる……さすがはあんたの息子だな……ドラゴン……」

なぜか彼の口からルフィの父親の名前が出てきた……彼とドラゴンの関係とは……

「ほら見る！ 体が軽いんだよ！ 何でだ？」

ルフィが仲間たちの前で元気良く動いてみせる。

全員が不思議そうな顔をしてルフィを見つめる……一番ダメージがあつたはずだと。

ただ一人を除いては……

「何もかも無事なわけねえ……あの野郎どこだ？」

サンジは辺りを見回しゾロの姿を探す……彼は仲間たちとは離れたところにいた……

自分の目を疑った……サンジの目の前には血だらけで立っているゾロの姿があったからだ。

「おい！　ここで何があった！？　アイツはどこに……！？」

仲間に心配かけまいとゾロが搾り出した言葉は……

「……なにも……なかつた……！」

血だらけで何も無いことなどありえないが……サンジはそれ以上何も聞かなかった……

## 第四百十話 後日

モリア撃破から一日が経過していた……寝ずに夜通し戦った結果なのだろう全員疲れて中庭で丸一日寝てしまったのだ。

生き残った者たちと一味は中庭の屋敷で休息をとっていた。

一味の何人かはサニー号へと戻り食料を中庭にいる者たちへと運ぶ。

「ゾロ大丈夫か？」

ルフィは屋敷のベッドでゾロの看病をしているチョッパーに尋ねる。

「……こんなにダメージを残したゾロは初めてだよ……しばらくは安静にしてなきゃダメだ。命だつて危なかったんだ」

「何かあったのかもしれないわ……あの男があのまま帰ったとは考えづらいものね」

「そうロビン言うとおりの何か」があった。サンジはその「何か」を知っているもそれを口にしようとはしない……

だが実は他にもゾロとくまとのやり取りを見ていた者達がいた。

「実は俺たち何が起きたか一部始終見てたんだよね」教えてやろうあの時何が……」

あの時のことを話そうとする2人の海賊をサンジが外へと連れ出

す。

その背中を見ていたルフィが突然話を変える。

「そういえば……キラってどこ行った？」

ルフィはキラがないことに気付き辺りを見回しながら全員に質問する。

「キラさんでしたら先ほどお目覚めになられて出て行かれましたが……？」

ブルックがルフィの質問に答える……彼の言ったとおりキラもまた先ほどまではゾロの隣で寝ていたのだ。

だがゾロとは違い体に外傷がなく……なぜキラがしばらく目覚めなかったのかロビンは疑問に感じていた。

ロビンの疑問とは別にルフィには気になっていることがあった……それは……

「あのよお……チョッパー。キラって一回死んだんだよな？」

「はあ？ ルフィ、あんた何いってんのよ。死んだ人が生き返るなんて……」

ナミは途中まで言いかげブルックが視線に入る……もしもキラがルフィの言つとおり一回死んだのだとしたら……ブルックと同じ何かの能力……？

「……でも確かに俺が診たときキラの心臓は止まってたんだ」

「で……俺が気を失ってから何が起こったんだ？」

サンジが連れ出した2人の海賊に質問をする。

「実はよ……」

2人が話し始めようと口を開いた瞬間……

「ロロノア・ゾロはくまの能力で妻わらのルフィのダメージをすべて請け負ったのよ」

金色の髪の少女が現れサンジに”あの時”あったことを告げた。

「君は……？」

サンジの質問に少女は微笑を浮かべた……。

少女の笑顔にサンジの視線は釘付けとなる……心を鷲掴みにされたような感覚……。

それほど少女は清く、美しく、どこか妖艶であった……

少女の桃色の唇がゆっくりと開く……

「リア……よろしくね」

見つめ合う少女とサンジの後ろで2人の海賊は自分達が言いたく

てしょうがなかったことを言われてしまい残念そうな顔をしていた  
……

## 第四百一十一話 少女

「かわいいー！ー！」

サンジが突然大声を出したためリアが驚いた表情を浮かべている。

「いやいや！ そこじゃないでしょ！ こんな子ここで見たことないぜ！？」

2人の海賊が大声で呼びかけるが完全にサンジの瞳は妖艶な少女リアに釘付けになっていた。

海賊達の言うとおり影を奪われた者たちの中に少女の姿はなかった……では……彼女は……？

「さあ、この屋敷で一緒に食事をしようかカワイイお嬢さん」

少女の手を引きサンジが屋敷の中へとエスコートしようとする……  
……が2人の海賊が行く手を遮った。

「何のつもりだ？」

海賊達をサンジが睨みつける……鋭い眼光に2人は後ずさりするがもしも少女が敵ならばそう易々とみんながいる屋敷に入れるわけにはいかない

「その女の子は……怪しすぎる……モリアの手下かもしれないねえ……」

少女はエメラルド色の瞳を潤ませ海賊達を見つめていた。



「……ま、まあ……こんなカワイイお嬢さんがモリアの手下な訳ないよな」

その場にいた3人は少女の持つ魅力に引き込まれていく……

少女は敵なのか……味方なのか……

「ちよつとサンジ君！ その子どこから連れてきたのよ！」

知らない少女をつれて屋敷へと戻ってきたサンジにナミが声を上げる。

「い、いや別にさらって来たわけじゃないよ！　そこで偶然あったんで……」

「そこで偶然って……女の子なんて一度も……」

少女は屋敷の中を見渡し一人一人の顔を確認すると突然表情が暗くなった。

サンジは少女の異変に気付き声を掛けるが……どうやら声は耳に入っていないようだ。

「どうしたんだお前？　誰か探してんのか？」

「えっ？」

ルフィの質問にリアは我に返る。

「さっきまわり見渡してたろ？」

「うん……お兄ちゃんを探してるの……」

ナミは少女の答えに心を痛めていた……きっと彼女の兄はモリアの手によりこの島に捉えられている……そう考えたからだ。

屋敷の扉が開きキラが姿を現すと少女の表情が一気に明るくなる。

「お兄ちゃん！」

リアはキラに抱きつき涙を流すが……なぜかキラの表情は曇っていた。

まるで妹との再会を望んでいなかったかのように……

第四百一十一話 少女（後書き）

すみません……短いです……

ちょっと本業がいそがしいもので……

## 第四百二十二話 ピンクスの酒

モリアの屋敷では宴が始まっていた。

長い呪縛から解き放たれた人々は喜びを爆発させ騒ぎまわる。

サンジが腕によりをかけて作った料理が次々にテーブルへ運ばれてくる……久しぶりのまともな食事に歓喜の声があがった。

リアもロビンの隣に座り食事をしている……ナミが笑顔で食事を楽しむ少女を見てキラに話しかける。

「まさかキラにあんなにカワイイ妹がいるなんてね」

ナミが隣に座るキラの顔を見つめながら言う。キラ何も言わずただコップになみなみと注がれた酒を口に含む。

全員が喜びを爆発させ騒ぐ中……ゾロはまだ目覚めていない。

彼の傷は深く包帯が全身に巻かれた姿はとても痛々しかった……

「そんな状態のゾロにルフィが強引に酒を飲まそうとしている……酒が好きだから元気になるだろ」だそうだ。

「それは無理だろルフィ」

「そうかあ？ 治ると思うんだけどなあ」

チョッパーとキラは顔を見合わせ呆れた表情を浮かべる……なぜなら医学の世界じゃそのような奇跡は知っている限りないからだ。

屋敷の隅にひっそりとあったピアノにブルックが軽く触れる。鍵盤をひとつふたつとならしうつつすらと微笑む。

「さて…… BGMでも……弾きましようか」

「お前バイオリン弾きじゃなかったのか？」

サンジがブルックに尋ねる。

「楽器全般いけますよ」

そういつてブルックはピアノを弾き始める……曲は”ピンクスの酒”

”ピンクスの酒”は海賊達がよく歌う曲であった。ルフィもこの曲には覚えがある赤髪達がよく歌っていた曲だ。

BGMも相まって海賊達の宴はより一層盛り上がりを見せた。

「お兄さんとは仲が良いの？」

隣で食事をしているリアにロビンが質問する。

「うん。キラは優しいから大好き」

2人から離れた席でキラは鋭い眼光でリアを睨みつけていた。

その瞳は妹を見つめる優しい兄ではなく……敵を威嚇する死神そ

のものだった……

第四百十二話 ピンクスの酒（後書き）

短いです

## 第四百十三話 鼻唄

「お前さ、俺達の仲間になるんだろ？」

屋敷に置いてあったピアノを奏でているブルックにルフィが尋ねる。

だがブルックには心残りがあった……それは……

「仲間」との約束を果たさなければ……私は……」

その”仲間”とは麦わら一味が双子岬で出会った”ラブーン”というクジラである。

ブルックは昔、ルンバー海賊団という一味にいたのだが航海の途中で幼いクジラに出会ったのだそれがラブーンだった。

だが幼いラブーンを連れ旅をすることは出来ない……

双子岬のクロッカスにラブーンを預け、世界を一周してもう一度再会すると約束し別れた……

ルフィが双子岬でラブーンに会ったと告げるとブルックのピアノのテンポが落ちる……

「で、では……ラブーンは50年私たちを待ち続けていると……？」

両手で顔を覆いブルックは大粒の涙を流す……瞳を閉じれば頭に浮かぶ幼きラブーンの姿……音楽好きで人懐っこい大切な仲間……



「そうですか……彼は……元気ですか……！」

胸元からブルックは”音貝”を取り出す……録音してあるのは……仲間たちの生前の歌声……これを……ラブーンへ……

「ラブーンが元気で待っていてくれる……私……生きててよかった！ 本当によかった！」

ブルックは何か気付いたような顔をシルフィを見つめ……

「あ、私仲間になってもいいですか？」

「おう、いいぞ！」

麦わら一味に新たな仲間が増えた……”鼻唄”のブルック……懸賞金3300万……

「あ、副船長のキラさんにもあいさつしなきゃダメですね……ってキラさんは？」

「さつき、妹さんと一緒に出て行ったわよ」

キラはみんなが盛り上がっている内にリアの手を掴み外へと連れ出していた。

ある程度屋敷から離れると”白蛇”を抜きリアの首へと向ける……

「何をしにきた……俺を殺しに来たのか……？」

リアは怪しく微笑みキラを見つめる……その目は先ほどまでの少

女の瞳とは違い……氷のような眼差しをしていた。

口を少しだけ開き……リアは咳く……

「そつだよ……殺しにきたの……ねえ……死んで……？」

2人の冷たい瞳が辺りの空気を一気に重くしていった……

第一百四十四話 喜びは赤く染まる……（前書き）

長期的に休んでいたグリムです。

別に書くのを辞めたわけではないんですけど……

一時的にね……休みたくなつた訳です。

とりあえずこれからは不定期に書いて行きます。

## 第四百四十四話 喜びは赤く染まる……

キラは地面を強く蹴り少女の懐へと飛び込み鋭く首筋へと刀を振り上げる。

少女は何にも抵抗をせず静かに目を瞑むった……

白い透き通った肌に刀が当たる瞬間……少女の抵抗がないことに気付くキラは刀の具現化を解除する。

「何のつもりだ？リア」

「……どうせ殺されるなら……あなたのほうが……」

少女の頬を涙が伝う……。

理由は聞く必要もない……何度もリアのような人を見てきた……

ルインという組織を抜けることへの恐怖、不安……

「……その為に……殺される為だけに……俺の所に？」

少女は黙って首を振り涙を拭う……

……キラにはわからなかった……少女が何故……自分の所に来たのか……ただ殺されるなら自分である必要がない。

……少女は仲間たちに自分のことを兄だと言っていたが……もちろん嘘だ。

ルインにいる頃も特段仲が良かったわけでもなければ同じ部隊に所属していたわけでもない。

「何故……俺なんだ……？」

「……楽しそうだったから」

少女の口から出てきた言葉を聞きキラは思わず笑ってしまった。

リアの言っていることはとても的を射ている……俺はあいつらといるのが楽しくて仕方がない。

「楽しそうだから仲間に入れてもらおうって訳か」

キラの質問に少女は顔を赤らめて頷く。

微笑み少女の肩を抱く……

「ウチの船長に聞いてみるよ。俺の妹仲間に入ってもいいかな？つてさ」

少女は笑顔を見せキラに感謝する……ありがとう……と……

キラは微笑み気にするなと首を振った。

「おい〜せっかくブルックがピアノ弾いてんのにキラの奴どこいったんだよ〜」

ルフィはピアノをバンバンと叩き声を上げる。

ナミは呆れた表情を浮かべながら答えた。

「久しぶりに兄妹が会ったんだから色々話すことだってあるでしょう？いいじゃないの別に」

「だってよく俺はデュエットって奴を聞きたかったんだよ」

ブルックはピアノを弾き歌を歌う……ここにキラのギターが混ざり合えばすばらしい二重奏になるだろう……

心地よい音楽・豪勢な食事・アルコール……今、屋敷の一角は幸せに満ちていた……

キラは自分の目を疑っていた……先ほどまで明るく笑っていた少女の腹部には刃が刺さり血に染まっている……

呼びかけても揺すっても……少女は痙攣をするだけ……

何より不思議だったのは……少女を……リアを刺したのは……

「隊長……お元気でしたか？」

「……お前……どうして……？」

キラの部下でリトルガーデンでキラをかばって死んだ……ジルだった……

第四百四十四話 喜びは赤く染まる……（後書き）

ジル久々の登場ですね。

って覚えてる人（見てる人）いるかな？

第四百四十五話 狂乱の泥人形（前書き）

最近は少し書きたいという気持ちに戻ってきた気がします。



## 第四百十五話 狂乱の泥人形

自分の腕の中で弱っていく少女と目の前にいるかつて自分を守り死んだはずの元部下……

突然の出来事に頭が混乱しているが……まずは少女を手当てしなければ死んでしまう……早くチョッパーに……

キラは少女を抱え上げ屋敷へ足を向ける……本当はジルを問い詰めたいが今は手当てが優先だ。

背中を向け屋敷へと向かうキラの横を風が吹きぬけた。

「どこへ？せつかくの再会じゃないですか」

ジルが行く手を阻む……

「見ればわかるだろ。彼女の手当てだ……どけ」

鋭くキラが睨みつけるがジルは嘲るように笑う。

「この男は……ジルではない……彼とは長い付き合いだったからわかる……」

彼はもっと優しい目をしていた……だが今はどうだ……底なしの沼といった所だろうか……

「おまえ……誰だ……？」

「あなたの忠実な部下ですよ……」

これは完全に死者への冒瀆だ……キラの体を怒りが支配する……少女を木陰へと移動させ刀を具現化する……白き刃をジルの首へと向けた。

「覚悟出来てんだろうな……！」

「死神の姿を捨てたあなたなど……怖くもなんともない」

ジルは大鎌を振り上げキラへと襲い掛かる……

リーチの長い大鎌を振り回す……当たれば上半身と下半身がバラバラになってしまうような鋭い一振り。

キラが胸元へと走りこむ、大鎌はリーチは長いが懐に入られては対処は出来ない。

腹部へと深く刀を突き刺すが……

「手ごたえが……ない……？」

「ひやははははははははははははははは……！」

声に驚き顔を上げるとそこには天を仰ぎ白目をむき歯をむき出しにして大笑いするジルの姿があった。

体中に寒気が走る……こいつは……人じゃない……

刀を引き抜き距離を取ろうとするが……刀が抜けぬ……ジルの大笑いが止まり白目を向いたまま顔がキラの方を見る……

「つゝかまゝえた……」

キラの首筋にジルの歯が突き刺さった……

「くっ……！？」

首筋からは血が噴き出す。

痛みを堪え……キラは腕に力を入れ突き刺さったままの刀を切り上げる。

鈍い音とともに頭部まで刀が到達しそこから一気に引き抜く……ジルの首からは血ではなく泥が噴射された……

泥を噴射し続けたジルはそのまま姿を消した、いや正確には泥を噴射し続け小さくなっていき消えた。

「泥人形……？」

自分がルインにいた頃……泥を使う人間などいただろうか……

キラは失った昔の記憶を思い返しながらリアを抱きかかえ仲間たちにいる館へと向かっていった。

第四百十五話 狂乱の泥人形（後書き）

ちょっとジルが気持ち悪すぎましたね。

感想お待ちします。

## 第四百十六話 血液

少女を抱きかかえたキラが館の扉を開ける……全員の先程までの喜びに満ちた空気が一瞬にして変わった。

館にいた全ての人間が自らの目を疑った……館を出ていくまで兄との再会を喜んでいた少女は腹部から血を流しキラの腕の中でグッタリとしていたのだ。チョッパーがキラへと駆け寄り少女を預かりベッドの上に寝かせる。

「お、おい……キラ！ 何があつたんだよ!？」

少女の血で染まったキラの袖を掴みウソップが尋ねる……キラは俯きながら答えた。

「……リアは……組織を裏切つてここに来たんだ……組織は裏切り者を許さない」

ベッドに横たわる少女へと歩み寄り状態を確認する……出血が多くリアはかなり弱っていた……どんな名医でも厳しいかもしれない……  
弱っていくリアをただ黙ってキラは見つめていた。チョッパーは手当てをしながらキラに話しかける。

「キラ……お前諦めてるだろ!」

……諦める？ 俺は今……そんな顔をしているのか……

「……チョッパーいくらお前でも無理だ」

ルフィは暗い顔をしながら屋敷の出口へと向かっていくキラの胸倉を掴み屋敷の壁に叩きつける。

2人の鋭い眼差しがぶつかり合う……

「あきらめんなよ！ 俺達の船医を信じろ！」

「信じているさ……だが無理なものは無理なんだよ」

キラはルフィの手を掴み全員に聞こえるよう声のボリュームを上げた。

「出血が多すぎる……見たところ彼女には輸血が必要だ」

「そんなもん俺達の血を使えば……」

ルフィがそう言った途端……館にいる全員が自分の血液を使えと声を上げる……

嬉しいはずなのだがキラの表情は曇ったままだった……ナミがキラの表情を見て声を掛ける……

「……どうしたの？」

「……みんなの気持ちは嬉しいが……リアの血液は……特殊なんだ……」

珍しい血液の人間が極まれにいる……RH（-）という血液型だ。輸血できる対象があまりにも少ないと言われている。

だが彼女の血液型はRH（-）とも違った……

「ルインで育った人間にはルインで育った人間の血しか輸血できな

い……」

キラの言葉に全員の視線が集まる……つまりはリアに輸血出来るのはキラの血液のみだった……だが彼女の出血量から見てもキラ一人の血液では足りないだろう。

それにキラも今は大丈夫とはいえ一時は瀕死の重症を負った後だ。

「……俺の血液を出来る限り輸血してやってくれ」

腕を捲くりキラはチョツパーの前に差し出す……なぜ少女の命を諦めていたはずの自分が急にこんなことを言い出したのかはわからない。

……チョツパーは躊躇していた……医者として一時は瀕死状態になったキラから血液を抜いても大丈夫なのか……

「頼む……」

キラがそう言うとチョツパーは「少しでも具合が悪くなったりしたら言うんだぞ」と言い注射器をキラの腕に刺した。

血を抜かれてる間もキラは少女の笑顔を思い出していた……仲間になれると決まったわけでもないのにあれほどまで喜んでいた少女の笑顔を……

第四百四十六話 血液（後書き）

感想をお願いします



百四十七話 輸血の代償（前書き）

お久です……

時間があつたら書きますよ……時間があつたらね……

## 百四十七話 輸血の代償

「目……覚めた……？」

ナミが心配そうな表情でリアに声を掛けると少女は2回ほど瞬きを繰り返して体を起こす。リアは自分の置かれている状況を確認めるように辺りを見回した。

広い館のベットの上に自分は寝かされていた……確かあの時……キラと館に戻る途中に……

「……！ 見つかった……！？ に、逃げなくちゃ！」

少女はベットから飛び起き瞳に恐怖を宿らせ叫ぶ。

「ねえ！？ どうしたの大丈夫！？」

リアの肩を掴みナミが彼女の体を揺すってやると状況を理解したのか少し安心した表情を浮かべベットに腰を下ろした。

ナミは少女の異常なまでの反応を見て敵が近くまで来ていることを感じ取っていた……

《一刻も早くこの島を出なきゃ……》

「ルフィ！ 出航の準備をするわよ！」

「おう！ わかった！ 野郎共出航の準備だ！」

ルフィも状況を察し文句を言わず出航の準備を整え始める。

いつもならば宴が終わってもいないのに出航の準備を進めるなんてことはまずないのだが……

船員がそれぞれ準備を出航の準備を進める中一人だけ……出航に納得していない男がいた船医であるトニー・トニー・チョッパーだ。

彼は船医である……だから今出航することが倒れたキラにとってどれほど負担がかかるのかわかっていた。

「今キラを船に乗せたらダメだ！ 容態が安定してない状態で出航なんかしたら……」

「ちよっと！ チョッパー！」

ナミがリアを指差し首を横に振る。チョッパーも慌てて口を押さえるが間に合わなかった。

「キラが……どうしたの……？」

「……目を覚まさないんだ」

リアの輸血は成功したが代償としてキラが昏睡状態に陥っていた。手術には大量の血液が必要だった為……輸血にはキラの血が使われた。必要な限り輸血する……それが彼の……キラの意思であった。

話を聞いたリアは両手で顔を覆うと床に膝から崩れ落ちる。

「そんな……どうしよう……私のせいだ……」

「リアのせいじゃないわ。落ち着いて」

ロビンが泣きじゃくるリアの肩を抱き頭をそつと撫でる……

「……っ！」

チョッパーは唇を噛んだ……助けられない自分に苛立ちを覚えた。キラのいう特別な血液……それが本当ならば例えばルフィの血を輸血してもリアは助けられなかっただろう。

ならば医師として最善の策は……キラの意見を信じること意思を尊重することしかなかった。

「ごめんよ……俺にもっと知識があれば……！」

「……っ！？ 悲しんでる暇はないみたいだぞ」

ゾロが刀を抜き辺りを警戒する……仲間たちもそれに気づき身構え動きを待つ……

外は恐ろしいほど静かだった……風の音すらも聞こえないほどに

……

「……ん？ あれは……？」

ドアの隙間からドロドロとした液体が流れ込んできている……サングが液体へと近づくとうすると……それはタイルの隙間へと流れ込んでいった……

「なんだっ たんだ……あれ……」

「おい素敵マユゲ集中しろ」

「ああー！？ 誰が素敵マユゲだゴルア！？」

サンジとゾロの掛け合いを見てリアはクスクスと笑う……《この人たち緊張感ないなあ……キラもこの人たちと一緒にだから……優しくなれたのかなあ……》

少女がボーツと2人を見つめているとナミが下がるように指示を出す。

「リアは下がってて。……えっ!？」

少女の方を振り返ったナミの背中に冷たいものが流れた……少女の後ろにはすでに鎌を持ち不敵に笑う少年の姿があったのだ。

全員がリアとキラを囲むようにしていたため全員が背後を取られていた……。

警戒していたはずだった……自分はまだしもルフィやゾロ、サンジが敵の気配に気づかないことがあるとは……

「驚いてるね……麦わらさん」

「誰だ……お前! リアから離れる!」

ルフィが少年へ拳を振り切る……拳が顔を捉えるが手ごたえなどまるでない……

「避けた……のか?」

サンジが声を上げ不思議そうな顔を浮かべる……それもそのはず少年は一步も動いていなかったはずだ……何故……?」

少年は不敵な笑顔を浮かべながら何事もなかったかのように話を

し始める。

「僕の名前はジル……今回君たちには用はないんだ。あくまで目的は裏切り者リアの抹殺……だから邪魔しないでくれる……？」

背筋が凍りつくようなうすら笑いと真っ赤な瞳……不気味という言葉がなによりも少年にはぴったりだろう。

「うるせえ。俺たちはこれから出航の準備があるんだ。邪魔すんな」

「お、おイルフィ……あんまり相手にしないほうがいいって……」

少年の持つ独特な空気にウソップはガクガクと震える……

「君は物分りが良さそうだね」

「ひ、ヒイヒイ!?」

気がつくとも少年はウソップの後ろへと移動していた。

おかしい……自分は一度も目を逸らしていないはずだ……ウソップは目をこすりながら少年を見つめる……

ウソップは確かめるようにルフィの方を振り返る……と……

「ど、どうなってんだよ!? なあ、ルフィ……ってエエエエエエ!?」

「お前……双子なのか？ それともお前の兄ちゃんか？」

少年はリアの後ろとウソップの後ろ……そう彼はこの空間に2人存在していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4684m/>

---

ONE PIECE ~ 海賊王への導き手 ~

2011年10月2日18時49分発行